

2014 年度

内モンゴルにおけるモンゴル民族教育に関する社会学的研究

千葉大学大学院  
人文社会科学研究科  
博士後期課程

ボルジギン・ムンクバト  
(孟克巴图)

# 目次

目次	i
図表写真リスト	v
凡例	viii
はしがき	1
第一章 序論	4
第1節 研究目的	4
第2節 先行研究	6
2.1 民族教育と言語政策を対象とした研究	6
2.2 エスニシティに関する研究	7
2.3 モンゴル語の実態を対象とした研究	7
2.4 内モンゴルの教育関連の博士論文	7
第3節 議論の射程—モンゴル語の多様な運命	9
3.1 ロシアにおけるモンゴル語	9
3.2 モンゴル国におけるモンゴル語	10
3.3 中国におけるモンゴル語	12
3.3.1 内モンゴルでは	14
3.3.2 新疆では	15
3.4 アイデンティティと言語	16
まとめ	19
第二章 牧畜地域におけるモンゴル民族学校の状況	20
第1節 内モンゴルにおけるモンゴル民族学校の実態	20
1.1 内モンゴルの概要及び人口推移	20
1.2 内モンゴル全土における教育の変化	21
1.3 シリンゴルにおける学校統廃合	24
第2節 牧畜地域ウジムチンにおける学校統廃合の事例	29
2.1 西ウジムチンについて	29

2.2	学校統廃合についての聞き取り調査	31
2.2.1	牧畜地域における学校統廃合の波	31
2.2.2	民族学校の統廃合に対する人々の発言	33
2.3	考察	34
<b>第3節</b>	<b>モンゴル人学生による学校選択の実態</b>	<b>35</b>
3.1	モンゴル人児童生徒の学校選択について	35
3.2	西ウジムチンにおける民族学生の学校選択	36
3.3	学校選択に関するアンケート調査から	38
3.4	学校選択の今日的意味	40
3.5	考察	42
<b>第4節</b>	<b>内モンゴルにおける子どもたちとその生活環境</b>	<b>44</b>
4.1	牧畜民たちの生活環境	44
4.1.1	牧畜民の年間行事の変容	44
4.1.2	馬の搾乳	46
4.1.3	羊の冬季出産	47
4.2	子どもたちの生活の実態	48
4.2.1	家庭の状況	48
4.2.2	幼稚園の状況	50
4.2.3	小学生たちの住居状況	51
4.2.4	子どもが描写による生活の実態	52
4.3	アイデンティティの変容	53
4.4	考察	55
	まとめ	55
<b>第三章</b>	<b>教科科目としての「言語」</b>	<b>57</b>
<b>第1節</b>	<b>二言語教育の実態</b>	<b>57</b>
1.1	中国における「二言語教育」	57
1.2	内モンゴルにおける「二言語教育」の実態	60
<b>第2節</b>	<b>カリキュラムにみる「母語教育」</b>	<b>63</b>
2.1	民族学校と漢族学校の母語教育	63
2.2	日本の小学校における母語教育との比較	65
2.3	考察	67
<b>第3節</b>	<b>教科科目としての「モンゴル語」</b>	<b>69</b>

3.1	モンゴル民族学校の甲乙式学級について	69
3.2	甲乙式用『モンゴル語』教科書の比較	72
3.2.1	教科書の書誌情報から	72
3.2.2	教科書の目次から	74
3.2.3	各課ジャンルから	76
3.2.4	練習問題の内容から	77
3.3	『モンゴル語科目の学習指導要領』の比較	79
3.3.1	学習指導要領について	79
3.3.2	指導要領内容の比較	80
3.4	考察	82
	まとめ	84
<b>第四章</b>	<b>内モンゴルにおけるモンゴル語・文字使用の実態</b>	<b>86</b>
<b>第1節</b>	<b>モンゴル人学生の日常生活における言語使用</b>	<b>86</b>
1.1	モンゴル人学生の言語使用	86
1.2	調査概要等	87
1.3	アンケート調査にみる言語使用	88
1.3.1	学生たちの家庭背景	88
1.3.2	生活の中の言語使用	89
1.3.3	学校における言語使用の事例	91
1.4	考察	93
<b>第2節</b>	<b>モンゴル人学生の文化生活における言語使用</b>	<b>94</b>
2.1	文化生活と言語使用に関する調査について	94
2.2	文化生活におけるモンゴル語使用の実態	95
2.3	インターネット利用と言語使用	97
2.4	考察	100
<b>第3節</b>	<b>モンゴル文字使用に関する法律</b>	<b>102</b>
3.1	モンゴル文字使用について	102
3.2	「モンゴル語・文字使用条例」とは	102
3.3	社会におけるモンゴル文字使用の事例から	103
3.4	考察	108
	まとめ	108

終章 結論	110
1  牧畜地域における学校形態	110
2  言語使用の実態	111
3  アイデンティティの変容	113
参考文献	115
資料編	126
資料 1：一部アンケート調査の単純集計	126
資料 2：聞き取り調査資料	134
資料 3：モンゴル語・文字に関する重要出来事記	160
資料 4：「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」和訳	170
資料 5：甲式「モンゴル語科目学習指導要領」和訳	175
資料 6：乙式「モンゴル語科目学習指導要領」和訳	180
資料 7：モンゴル民族の小中学校の『語文指導要領』 と『モンゴル語文指導要領』公布通知	184
謝辞	185

## 図表写真リスト

表 0-1: 内モンゴルにおける行政区分について	viii
表 1-1: 現地調査について	5
表 1-2: モンゴル民族の教育に関する博士論文	8
表 1-3: モンゴル世界と文字使用の変化	11
表 1-4: 母語の定義	17
表 2-1: シリングルにおける牧畜地域学校配置調整 2004 年~2006 年	25
表 2-2: ウジムチン地域における民族学校建設の芽生え	31
表 2-3: 西ウジムチンにおける学校の変遷歴	32
表 2-4: 2007~2008 年度西ウジムチンにおける学生統計	36
表 2-5: 民族的偏見全般に関する対立的項目	43
表 2-6: 牧畜民の家畜にかかわる年間行事	45
表 2-7: 馬乳とチェゲーの買収金額と収入	47
表 2-8: 売り出した子羊に対する補助金と時期の対応	48
表 2-9: 子羊一頭当たりの収入 E 家の場合	48
表 3-1: カナダにおける小学校のバイリンガル教育	57
表 3-2: 民族語と漢語の授業開始時期	58
表 3-3: モンゴル民族小学校の教育言語	60
表 3-4: 民族学校と漢族学校の一週間の授業科目比較	63
表 3-5: モンゴル族学校と漢族学校の言語科目と算数科目の比較	64
表 3-6: カリキュラムにみる母語教育	65
表 3-7: モンゴル民族学校と漢族学校の教育言語と学習言語	69
表 3-8: 甲・乙式学級のモンゴル語と漢語授業時間数の差異	70
表 3-9: 甲乙学級の比較	71
表 3-10: フフホト市の H1 小学校の甲乙式学級の割合	72
表 3-11: 甲乙式用「モンゴル語」教科書の比較	73
表 3-12: 「甲式」学級用教科書の目次	74
表 3-13: 「乙式 1」学級用教科書の目次	75
表 3-14: 「乙式 2」学級用教科書の目次	75
表 3-15: 甲乙式学級用「モンゴル語科目の学習指導要領」の目次	79
表 3-16: 学年別にみる授業目標	81
表 3-17: 民族語の教育その役割	83
表 4-1: アンケート用紙の内容	88

表 4-2: 生活環境と言語使用	89
表 4-3: 場面別と学校種別における言語使用のクロス表	90
表 4-4: アンケート回答者の年齢別内訳	95
表 4-5: 家庭内言語とメディア使用言語のクロス表	96
表 4-6: 小中高校生のよくアクセスする漢語のサイト	97
表 4-7: 小中高校生のよくアクセスするモンゴル語のサイト	98
表 4-8: 小中高校生のインターネット利用目的別の集計	99
表 5-1: 聞き取り調査協力人物リスト	134
表 5-2: 聞き取り調査内容の分類	135
図 2-1: 内モンゴルの人口推移 1947 年~2005 年	21
図 2-2: 小学校の学校数推移 1976 年~2010 年	22
図 2-3: 中学校と高校の学校数推移 1976 年~2010 年	23
図 2-4: モンゴル民族学校数推移 1980 年~2010 年	23
図 2-5: モンゴル人学生及びモンゴル語教育を受ける学生推移 1980 年~2010 年	24
図 2-6: 西ウジムチンにおける総人口と非都市人口の変化	30
図 2-7: 西ウジムチンの行政区分変化と小学校数の変化: 90 年代と 2009 年	30
図 2-8: 漢族学校で教育を受ける各民族学生数の割合	37
図 2-9: 西ウジムチンの A 高校のモンゴル人学生の推移	38
図 2-10: モンゴル人学生の親の職種	39
図 2-11: 今通う学校を選択した理由	40
図 2-12: 小学生の居住状況	51
図 3-1: 3 種教科書の語彙リストの比較	74
図 3-2: 3 種教科書の各課をジャンル別の比較	76
図 3-3: 教科書練習問題の比較	77
図 4-1: エレンホト市 E1 小学校の在籍学生の状況	92
図 4-2: 小中高校生のインターネット検索目的別	100
地図 2-1: 内モンゴルのシリングル・アイマグ	25
写真 2-1: 資源開発が進む山と羊の群	29
写真 2-2: 牧草地へ向かう馬の群	29
写真 2-3: 馬の搾乳	46
写真 2-4: 真冬に双子をもつウジムチン羊	47
写真 2-5: 家畜小屋で生まれたばかりの子羊	47

写真 2-6: 子馬に乗る牧童 .....	49
写真 2-7: 毛皮の民族衣装を身にまとう牧童 .....	49
写真 4-1: 校内看板 .....	91
写真 4-2: 博物館の看板 .....	106
例 3-1: モンゴル文字を節に分ける .....	78
例 3-2: ガリグ文字を読んでモンゴル文字を書く .....	78



## 凡例

- (1) 文字表記について、モンゴル語の固有名詞の表記はモンゴル語 (mongyol kele) などと括弧内にラテン文字表記し、漢語の固有名詞には漢語 (*hanyu*) などと漢語の声調を付けず括弧内に斜体で読み方をつけた。
- (2) 内モンゴルにおける行政区分は自治区レベルでは市、盟からなる。その下位区分として県・鎮・村の各レベルの行政区分があり、それと同じレベルのモンゴル語固有の名称もある。表 0-1 でそれらを対象に、モンゴル語、漢語、カタカナで示した。本論文ではカタカナ表記を使う。また、「町」ということばも多く登場する。これは、ホシヨーの政府所在地で中心部の小型都市のことである。

表 0-1：内モンゴルにおける行政区分

自治区レベル	市	aimay (盟、アイマグ)
県レベル	県・区・州	qošiyu (旗、ホシヨー)
鎮レベル	鎮	sumu (苏木、ソム)・balyasu (鎮、バラガス)
村レベル	村	yačay_a (嘎查、ガチャ)

(出典：調査資料；オンドロナ 2007:27；高 2004:59 に基づいて作成。)

- (3) 学校表記で「モンゴル民族学校」、「漢族学校」とあり、通常は少数民族学校を表記するときは「〇〇民族学校」と民族名を付ける。そのほかは一般学校で、「第〇〇学校」と番号で表す。モンゴル語では、「民族学校」に対して、「漢族学校 (kitad suryayuli)」と呼ぶので、本論文では漢族学校と表記する。言語の場合も「モンゴル語」と「漢語」と表現する。
- (4) 聞き取り調査資料の引用した部分には「A-01-001」などと表記している。最初の A は聞き取り調査内容の分類記号で、次の二桁番号の「01」はその内容分類の中での配列順の番号である。最後の三桁の「001」は聞き取り調査相手の整理番号である。また本文には話し手の情報を「40 代、教師、男性」などと記載する。聞き取り調査内容は、資料編の資料 2 に記載する。人名、学校名などは匿名とする。

## はしがき

21 世紀に入りグローバル化が進む中で、かつては発展途上国であった中華人民共和国（以下中国）の経済成長は軌道に乗り、国際社会の中で高い期待を集めていることは周知の通りである。しかし、対外的に近隣諸国と、政治経済的な対立が絶えない現状である。他方で国内の少数民族が居住する地域での経済成長は、東部の沿岸地域と比べると様々な面で格差を抱えていることも事実である。2000 年からその格差を埋めるべく、「西部大開発」<sup>1</sup>というプロジェクトが国家政策として実行され、少数民族地域での資源開発が急速に進められている。しかし、少数民族地域では、「開発」という大義名分のもとで環境破壊が進み、これにより少数民族地域における生態系の破壊や伝統文化の消滅が著しくなり、さらに「行政機関体制改革」<sup>2</sup>により、遠隔地方における行政機関の大幅な統廃合が行われた。また、少数民族地域での資源開発に伴う内陸からの労働力投入で人口の激増を生じている。「生態移民」<sup>3</sup>、「禁耕還林・禁牧還草」<sup>4</sup>などの環境保全を名目の政策による、牧畜民たちの開発地域への移動、都市化の実行などによる町への移住は、当該地域の人口構成や社会形態に様々な影響をもたらすものだと考えられる。

人間が生まれてから、言語を習得し、教育を受け、職に就くという各プロセスは近代社会においてどれ一つとして欠かすことができない。例えば、「言語の衰退」、「就職難」などという言葉は目新しいものではなく、世界中の至るところで発生している現実がある。そのような状況のもとでは、言語的・民族的な少数者が不利な立場に陥ることは当然想定される。当該国や地域、社会背景や地域事情によって現状は多種多様であろう。自民族の言語を失い、民族的には存続しているにもかかわらず、自らの民族語とは別の言語を使っている、というような過酷な現状を生きる民族ないし小集団は世界中に多々存在する。中国の領内では満州族がその一例である。

内モンゴル自治区（以下内モンゴル）におけるモンゴル民族も、実情を見ると数々の課題を抱えている。近代化に伴う施設としての学校の普及や言語教育の多様化は、果たして民族言語と文化の保護発展につながるのか疑問である。中央政府から様々な政策が打ち出されるものの、地方に十分に行き届いていないことが想定される。モンゴル語の状況は、使用範囲も利用者数も縮小しつつある。グローバル化という今日状況の中で、民族のアイデンティティを保持し、発展させることは重要度を増している。内モンゴルで「モンゴ

---

<sup>1</sup> 「西部大開発」は中国中央政府の政策の一つで、中国の東部沿岸地域の余剰経済力を使い、西部地域の経済、社会環境を発展させ、国防を強化する、というものである。2000 年 3 月から施行された

<sup>2</sup> 体制改革 (*tizhi gaige*) と総称し、それには経済体制改革、行政体制改革がある。

<sup>3</sup> 生態移民 (*shentai yimin*) とは、ある地域が特殊な生態の保護（自然保護地域）や修復（砂漠化などによる自然環境の悪化による）を受けざるを得ない場合、その地域から移動させられる人々のことである。

<sup>4</sup> 「禁耕還林 (*jingeng huanlin*) ・禁牧還草 (*jinmu huancao*)」とは、農村地域では農耕を禁じて植林を行い、牧畜地域では牧畜を禁じて、草原の生態を守ることである。

ル人児童の場合、習う言語が漢（＝漢語）、教科書が漢（＝漢文）、友達が漢（＝漢族）という状況では、考え方や文化、風習も変わっていく」（Erdemtü 2005:125）との指摘もある。モンゴル民族の子どもが漢語で教育を受けている状態は、理想と反するものである。各民族や少数集団は、グローバル化という大きな波に対応するにあたり、それぞれの民族や小集団特有の文化を保持し、他者と異なる特徴をもつことによって独自の位置を獲得すると考えられる。その特徴となるものは、民族語や文字や文化などが、いわゆるアイデンティティの源泉になると考えられる。

内モンゴルにおけるモンゴル語による教育とモンゴル語の使用の現状についていい加減に見ることはできない。まず、モンゴル人児童の母語学習や教育をより一層充実させる必要を確認しなければならないだろう。中国領内におけるモンゴル語が絶滅を危惧されているという認識は薄い。なぜなら、幼稚園から大学、大学院までモンゴル語を用いた学習や教育ができる環境が整っていると見なされているからである。しかし、そういった状況がいつまで維持されるかは疑問である。モンゴル民族のみならず、中国の少数民族言語の将来を予想するなら、それは極めて不透明な状況にあるといわざるを得ない（庄司 2003:716）。その裏には、「融合政策」と呼ばれる動きに密かに浸食を受けていることは、留意すべきである。「中国における民族融合は遙か遠い将来のこととし、それまでの非常に長い期間を各民族の発展、繁栄の時期で、漢民族と他の民族との間の社会的、経済的格差が消滅した後に、現実的な意味で融合という結果が予測されてはいても、それは政策の結果として考えているのではなく、必然の結果としての事態と考えられている。また、中国は非常に長い期間にわたり、様々な民族の発展、繁栄を保障する努力を自ら課す国家としてあり続けようとしている」（中島 1993:308）という認識がある。多民族が混住する社会において弱い立場に置かれた少数民族の言語・文化は、子どもの教育や就職などの場面で、緩やかな融合という波に飲み込まれていく。Erdemtü (2005) は、内モンゴルでは「民族学校の高校で理科系の授業を漢語で教えるという、漢化への試みを実施されている。少数民族にとって漢化は発展や革新にはならず、漢化は一民族の発展にとっては後退、迷走である」（Erdemtü 2005:185）と強く批判し、民族語による教育の維持を訴える。一方、アスコン（2001）は、「中国において、経済活動が全国規模化される潮流にモンゴル族がとりこまれるとき、大きな役割を果たすのは少数民族文化ではなく、多数民族である漢族の文化であることは明らかで、モンゴル語はいったんその民族の文化圏から出てしまえば、すぐにその役目を喪失してしまうということになるのである。小学校から高校にかけてせっかく勉強したものは、全体社会に対して想像以上役に立たないのである」（アスコン 2001:16）といい、民族語があたかも役目を終焉させたかのような議論を展開する。民族語による教育はその民族のアイデンティティの確立に直接的に関連される要素だと考えられるから、アスコンの意見に素直に賛同することはできない。このように民族語による教育に関しては賛否両論がある。モンゴル語の使用範囲が次第に狭まっていることは事実で

はあるが、民族語の教育や使用を直ちに停止させ、漢語へ転換し、漢化を促進することは極めて難しい。

以上のような状況の具体的な考察を行う本論文は5章からなる。

第一章は序論であり、本研究の目的、先行研究と議論の射程について述べる。

第二章では、内モンゴルにおけるモンゴル民族教育の現状を概観する。内モンゴルにおいて、モンゴル語の使用状況は、牧民、農民と都市といった環境の違いにより、それぞれの地域で異なる変貌を遂げている。改革・開放政策<sup>5</sup>が実施され始めて以来、漢語の需要はさらに広がり、民族語が軽視されつつある。モンゴル語の使用範囲と使用率は低下しつつあることが予測できる。建国後の内モンゴルにおける人口の推移と、モンゴル民族教育の発展に関連する公的データを取り上げて考察する。また、モンゴル民族の教育の現状を、西ウジムチンの事例を通して分析する。識者への聞き取り調査を交え概括する。さらに、モンゴル人学生の学校選択の実態を内モンゴル全体の状況を考慮しつつ、先行研究に挙げられた事例を補助線として分析する。そこで、子どもたちの家庭環境と学校生活の状況についての実態分析を行う。

第三章では、内モンゴルにおけるモンゴル人に対する「モンゴル語」の教育について、地域差や教育言語の違いなど、いくつかの視点から概観する。まず、中国における二言語教育について概観し、視野を広げて東アジア文化圏という観点から母語の教育の実態について内モンゴルのその状況と比較する。モンゴル民族学校における甲乙式学級制度は、教育言語の違いから教育過程において様々な相異点を生む。そこで両学級に教えられる『モンゴル語』科目の教科書の内容にどのような違いがあるかを確認する。さらに、両方の「モンゴル語学習指導要領」の比較を行い、それぞれで教えられるモンゴル語について考察を行う。

第四章では、内モンゴルにおける牧畜地域から町に移動させられた子どもたちの言語使用状況に関して、アンケート調査を通して分析する。まずは、学生たちの日常生活における言語使用状況について、「学校」、「家庭」、「友人間」、「買い物」と4つの場面におけるモンゴル語と漢語の使用状況を見る。さらに、文化生活においてメディアなどに接するときの言語選択について分析を行う。また、モンゴル語文字使用やその伝承に強い信念と愛着を持つ少数の篤志家の地道な努力によって、言語文化が守られている現状について、事例を示しつつ確認する。

終章は結論を述べ、今後の課題を提示する。

---

<sup>5</sup> 改革開放(*gaige kaifang*)は、中国で1970年代末から実行された改革経済政策・対外開放政策である。改革開放は対内改革と対外開放の両方を含む。対内改革は農村から開始された。対外開放は中国の国策の一つである。

# 第一章 序論

## 第1節 研究目的

本論文では、内モンゴルにおけるモンゴル民族に対する教育の実状について、牧畜地域を中心にモンゴル民族学校の実態、モンゴル語の教育実態とモンゴル語・文字の使用実態について現地調査、アンケート調査、聞き取り調査を実施してその結果を分析する。多民族が混住する地域における学校教育の実態を明らかにすることは急務であると考えられる。特に、2000年以後に行われた牧畜民たちと彼らの子弟の教育機関である民族学校の統廃合後の実態を明確にする。さらに、モンゴル人学生の言語使用状況に関してアンケート調査を実施し、モンゴル語がどこで主に使われているかを明らかにする。モンゴル語そのものの学習や教育について、都市部と牧畜地域の実態を比較しながら、モンゴル人が学ぶ『モンゴル語』とは何であるかを考察し、どのような問題がおきているのかを解明することが本論文の目的である。

筆者は、牧畜地域での民族学校の状況と民族学校における言語教育は多くの問題を孕んでいると想定し、2009年9月から2013年9月にかけて、計6回にわたって現地調査を実施した(表1-1)。内モンゴルのフフホト市、シリングル・アイマグ(以下シリングル)の各市やホショーの中から調査対象地を選定した。先行研究においては、内モンゴルの都市部、農村地域と半牧半農地域を対象にした研究が中心的に見られる。本論文で牧畜地域におけるその実態を明らかにすることが焦点になる。調査対象地のウジムチン地域はシリングルにおいてもっとも典型的な牧畜地域として知られている。同時にウジムチン地域では資源開発が急速に進められている。牧畜地域と開発の狭間に生きる牧畜民たちと彼らの子弟の教育の実態を探る。

モンゴル民族に対する教育の実態、つまり民族語による教育、民族学校の普及が「少数民族教育政策」のもとでいかに変化してきたのか、果たして民族教育が発展したと言い得るかなど、危機意識を持って問題を抽出し分析する。少数民族に対する言語教育、または教育事情が、今日の中国の経済環境や背景のもとで示した変化、問題の所在を指摘し、モンゴル民族教育の現状を分析する。そうした学校教育のみならず、子どもたちを取り巻く生活空間である遊牧民の生活実態についても考察する。漢族が圧倒的多数を成す社会的環境において、果たして牧畜地域における教育は十分に機能していると言えるだろうか。また、どのような変化がおきているかを考察する。

現地調査データと先行研究に基づき、内モンゴルにおけるモンゴル民族の教育と言語使用状況を分析し、その上で問題点を指摘し、今後の研究課題を提示する。調査方法として

聞き取り調査、アンケート調査を実施した。聞き取り調査には回答者の深い思いを聞き出すための調査、テーマに関する会話により回答者の熟考した意見を求めようとする調査まで多様なものがある。本論文に関連するキーワードに沿って、回答者の経験や現状を聞き出すことに重点を置いて調査を実施した。

表 1-1：現地調査について

回数・時期	調査場所	調査内容
第 1 回： 2009/9～10	西ウジムチン	A. 公的データ、資料の入手。B. 民族学校に対する現地の遊牧民、学校関係者を対象に聞き取り調査実施。C. 民族教育関連の最新研究、科学雑誌などの収集。
第 2 回： 2009/12 ～ 2010/1	フフホト市	A. 公的データ、資料の入手。B. 都市部におけるモンゴル民族学校の実態調査。C. 甲乙式学級に関する資料データの入手。D. 学校関係者を対象に聞き取り調査の実施。
第 3 回： 2011/9～10	西ウジムチン	A. 「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」に関する資料の入手。B. モンゴル語文字使用に関する聞き取り調査の実施。C. 「二言語教育」状況の観察。
第 4 回： 2011/12 ～ 2012/2	フフホト市、シ ョローン・フフ	A. 都市部と牧畜地域それぞれにおける小学校の一年次から六年次の各学年に使用されている「モンゴル語」科目の教科書と学習指導要領の入手。B. モンゴル語・漢語・英語学習教育に関する実態調査の実施。
第 5 回： 2012/11	フフホト市、エ レンホト市、西 スニド、東スニ ド、アバガ、シ リンホト市	A. 学生たちの日常生活の中で「学校」、「家庭」、「買い物」、「友人間」という 4 つの場面における言語使用に関するアンケート調査の実施。B. 牧畜民と彼らの子弟に関する生活状況の調査、聞き取り調査の実施。C. 民族教育関連の最新研究、科学雑誌などの収集。D. 学校関係者を対象に聞き取り調査の実施。
第 6 回： 2013/7～9	西ウジムチン	A. 学生たちの生活におけるテレビ、ラジオ、インターネットなどメディアに接するときの言語使用に関するアンケート調査の実施。B. 牧畜民と彼らの子弟に関する生活状況の調査、聞き取り調査の実施。C. 学校関係者を対象に聞き取り調査の実施。

## 第2節 先行研究

中国における少数民族に関する研究は進んでいない、という言説は多く存在する。とはいえ、その研究領域や分野は幅広く行われていると感じられる。少数民族の研究者は、中国領内の研究者と海外の研究者とに大きく分けることができる。前者には少数民族出身の研究者と漢族の研究者とがあり、後者には海外に拠点を置いた中国（または少数民族）出身の研究者と、海外出身の研究者とがおり、教育のみならず、少数民族に関わる様々な問題について、多方面にわたり、多角的な研究が行われている。本研究は、モンゴル民族の教育にまつわる問題について考察するもので、中国領内の、主にモンゴル民族に関連して言及された論考の代表的なものを先行研究として取り上げる。それらのアプローチは、現代中国における少数民族ないしモンゴル民族の変容を把握するために重要な示唆を含んでいると考えられる。

### 2.1 民族教育と言語政策を対象とした研究

岡本（1999）は、中国の少数民族に関する法的規定、政策方針、民族学校に対する政策について、公的立場やハード面の情報のみならず、現場での政策方針の実施状況や具体的な反響、成果、当事者たちの意識など、ソフト面まで詳細な分析を行った研究である。同書は、少数民族言語の使用や民族文化・歴史の継承を目指す民族教育を、少数民族の権利保障の重要な要素として捉え、この点を中心に、中国の少数民族が置かれている状況と少数民族の権利保障の実態を明らかにしたものである。具体的には、少数民族の言語、教育をめぐる実況を、19世紀末頃から1990年代までの時代にかけての民族・地域ごとにとらえ、民族語による教育や、漢語との二言語教育の実施に焦点をあてている。ここで、法律の具体的な機能と効果、二言語教育のための教育課程の編成と教科書、あるいは教授法について、行政指導者の思想、子どもや両親、教師の意識などについて、綿密に検証している。「実は、中国領内でもこうして少数民族教育の実状を細部と全体の両方から検証し、体系的かつ詳細にまとめ上げた本は存在しない」、「各種資料の中に断片的に散在する情報を組み合わせ、つなぎ合わせることで、有機的な全体像をつかもうと試みた」（岡本1999:6）と著者は述べる。そのような点では、中国における少数民族問題の研究にとっては参照価値が高い。同書の第2部「中国各地、各民族の民族教育」では、幾つかの少数民族の教育について分析し、データを提示している。しかし、内モンゴルにおけるモンゴル民族については、20世紀前半からのモンゴル民族の教育およびその発展過程が示されているものの、牧畜地域や牧畜民という視点からの言及は少ない。

## 2.2 エスニシティに関する研究

オンドルナ（2007）は、内モンゴルの牧畜地域と農耕地域と都市部の人口が雑居するという特徴を持つ、赤峰市におけるモンゴル民族と漢族間の、いわゆる族際婚姻についての調査研究において、血統的民族、法的民族、文化的民族と社会的民族という4つの要素が相互作用しながら「民族（ミンズウ）意識」を形成していると論じている。「モンゴル族と漢族の族際婚姻の実態にかかわる文化的、社会的、意識的背景をもとで形成された社会的産物であり、家族文化や親族関係、民族の構成要素などの変化に浸透している社会現象でもある」（オンドルナ 2007:298）とする。ここでは家庭や職場によって民族の名称が異なるという驚異的な現象が報告されている。民族の呼称の変化は、社会階級性の明らかな反映といえるだろう。モンゴル族と漢族が混住する地域における両民族間の婚姻関係から発生した新たな民族の呼称は、社会的様相と相乗し新たな「民族」の概念へと編成されている。しかし、モンゴル語と漢語の使用実態については触れられていない。

## 2.3 モンゴル語の実態を対象とした研究

フレルバートル（2009）は、モンゴル語がどのように変化したか、その要因、そして、いかなる政策をとるべきかについて、提言する著作である。同書では、モンゴル語の実態を①モンゴル語の漢化と退化；②モンゴル語の規則と計画；③民族教育；④社会・モンゴル語および使用、の4項目にわたり、主に内モンゴルにおけるモンゴル語の変容、民族教育の現状、モンゴル語の使用状況について報告している。民族教育に関しては、「モンゴル語を取り巻く社会的、経済的要因からモンゴル語がその社会に与える機能が低下したことが、モンゴル語による教育の低下を引き起こしている」という。また「今、モンゴル語に関わって起きている諸問題を解決するには教育の立て直しから着手しなければならない」（フレルバートル 2009:140）と提言する。民族教育は、その民族の発展において重要であることが強調されている。同論では、内モンゴルにおいて都市部やその近辺を対象に実施された調査など、都市化した地域の現状を分析した議論が多く見られるが、牧畜地域の現状についてのデータは少ない。

## 2.4 内モンゴルの教育関連の博士論文

内モンゴルにおけるモンゴル民族の言語や教育について日本で様々な視点からの研究がある。表1-2は、日本の大学において、内モンゴルにけるモンゴル民族の教育に関する研究をテーマに2009年度から2013年度にかけて執筆された博士の学位論文である。モンゴル民族の教育について、モンゴル人のアイデンティティ（トクタホ 2011）、民族



教育（ボラガ 2011；アラタン・バートル 2009）、人類学的視点からみた民族教育（アラタ 2011）、二言語教育と三言語教育（ハスゲレル 2013）、英語教育（ゴヨハン 2012）、近代文化と教育政策（ナヒヤ 2012）といった、多方面からの内モンゴルにおけるモンゴル民族教育を中心に研究が行われている。

全般に内モンゴルにおける経済、教育など様々な問題を取り上げて分析する際に、都市部の現状だけを述べるに留まるケースが多い。実際には、都市部・農村部・牧畜地域間の格差は著しい。牧畜地域における教育の現状分析することはモンゴル民族の今後の発展に欠かせない重要な課題であると考えられる。牧畜地域におけるその実態に着眼するのが本論文の特徴である。

表 1-2：モンゴル民族の教育に関する博士論文

著者	タイトル	所属学校
アルタン・バートル 2009	『多言語社会における少数民族の変容—現代中国のモンゴル族の中心に—』	神戸大学
トクタホ（套図格） 2011	『中国籍モンゴル人留学生の民族的アイデンティティの変容に関する研究』	首都大学 東京
ボラガ（宝力嘎） 2011	『モンゴル民族の教育についての研究：中国内モンゴル自治区シリングル盟中心に』	関西学院 大学
アラタ（阿拉塔） 2011	『中国・内モンゴル地域における民族教育に関する人類学的研究』	広島大学
ナヒヤー（娜荷芽） 2012	『近代内モンゴルにおける文化・教育政策研究：1932—1945』	東京大学
ゴイハン（高友晗） 2012	『中国の英語教育必修化に伴う民族教育の変容：内モンゴル自治区の分析中心として』	お茶の水 女子大学
ハスゲレル（哈斯格日樂） 2013	『中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の現状と課題：バイリンガル教育と英語教育の導入に伴う変容を中心に』	首都大学 東京

（出典：国立国会図書館、<http://iss.ndl.go.jp/>に参考で作成。最終アクセス 2014 年 7 月 29 日。）

## 第3節 議論の射程—モンゴル語の多様な運命

### 3.1 ロシアにおけるモンゴル語

中国はロシアからの影響を強く受けている。岡本（1999）は、中国における少数民族政策について、ソ連の影響の強さに着眼する。「中国における民族の承認において、民族とは、言語、地域、経済生活、及び文化の共通性のうちにあられる心理状態の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体というスターリンの民族定義が与えた影響が大きかったのは言うまでもない」（岡本 1999:37）と指摘する。その意味では、ソ連における言語政策および言語教育について検討の必要がある。

ロシアにおいて「先住民族の子どもたちが強制的に母語習得期に家族、すなわち伝統的で最も有効な母語習得環境から切り放された。寄宿学校では共同生活を前提にし、子どもたちの共通語は自然にロシア語になり、母語習得環境からの断絶とロシア語への埋没が同時に起きている」（金子 1999:155）や「ロシア語の勉強は学校生活の最初から最終点まで強制されている」（カレール 1990:316）などといったソ連における言語政策についての言説がある。渋谷（2012）は、言語計画を言語シフトと言語維持とに分類する。ソ連の文脈では、言語シフトは例えばロシア共和国での一定の少数派が、ロシア語を第一言語として身につけていくケースに見られ、言語維持はソ連内の多くの諸民族の民族語の維持率が高いことを指し、両者は共存し得るといふ（渋谷 2012:196）。言語と文化を結びつけて考えるとき、母語の認識はとりわけ重要である。ロシアにおける国勢調査では「母語」を、生まれながら身に付けた言語、現に家庭などで話している言語という意味のみならず、自分の属する民族の言語という意味で回答する市民が少なからずいたと言われる。自分の属する民族の言語をうまく話せなくても、アイデンティティゆえに民族語を「母語」と回答する場合も多かったと言われている（渋谷 2012:207）という。ソ連解体後のロシアは、依然として広大な領土と多民族住民を包摂しているが、民族政策の推移を見てみると、「多民族帝国」から「国民国家」へと脱皮しようとしているかのようである。こうした動向も、諸民族の間で根強い「母語」イデオロギーとの緊張関係をもたらさざるを得ないだろう（渋谷 2007:203）と指摘する。

ブリヤートモンゴルについて、渡邊（2012）によれば、1935年、ロシア語とキリル文字の使用が決定された。特にブリヤート語は、標準文章語の基盤が一度セレンガ方言に置かれながらも、モンゴルと近すぎるといふ汎モンゴル主義<sup>6</sup>などの批判のため、より東方の

---

<sup>6</sup> 汎モンゴル主義（パンモンゴリズム）は、「異なる国・地域にすむモンゴル人が、モンゴル人としてのアイデンティティを確認しあう行動」で、政治的結合から文化的結合にいたるまで、さまざまな形態を含む（二木 2004:47）。

ホリ変種へと変更になったので、言語建設の過程は複雑であった。1938年、その教育が非ロシア系学校に於いて義務とされた時、決定的なものとなった。民族語の教育が完全になくなった訳ではなかったが、質量ともに学校教育体系の中での位置が低落した。1958年、フルシチョフ統治下の新教育法により、児童が学校でどの言語を学ぶかは両親の選択に委ねられることになった。しかし、自分の子どものキャリアパスを考えて、ロシア語の教育を選択する両親の数を増やしたただけであった（渡邊 2012:217-218）のである。

その様な背景下での、ブリヤートにおけるモンゴル文字使用について、田中（1993）によれば、1930年代に入るとモンゴル文字の使用が禁じられキリル文字表記となり、100近くあった仏教寺院と小廟が破壊され、モンゴル色の一掃と全面的なロシア化が進められた。その総仕上げとして、1958年に、ついに国名、民族名、言語名のすべてから「モンゴル」が削りとられ、単に「ブリヤート」とされたのである。1970年代には、母語は学校で教えられない言語になってしまった。失われた「ブリヤートモンゴル」の名の復権の試みはあったものの失敗に終わる（田中 1993:22-24）。カルムイクの場合も同様に、トド文字を使用していて、1924年からカルムイク方言にあわせてつくられたキリル文字を使っている（Sečinbayatur 2005:96）。

### 3.2 モンゴル国におけるモンゴル語

内モンゴルにおけるモンゴル語文字について言及するに当たり、政治的区切りである国境を省いて考えることが重要だと考える。ユーラシアの大地において、モンゴル系の諸部族は「ハルハモンゴル」、「ブリヤートモンゴル」、「内モンゴル」、「オイラドモンゴル」などと呼ばれているように、「モンゴル」という名前がその強い絆を明示している。表 1-3 は、モンゴル国、内モンゴルと新疆における文字使用の変容をまとめたものである。各地域ではモンゴル語の方言であるハルハ方言、チャハル方言とオイラド方言がそれぞれの地域で標準語になっている。文字として、キリル文字、伝統モンゴル文字（以下モンゴル文字）、トド文字<sup>7</sup>が使われている。ではそれぞれの国と地域における文字改革について概観する。

モンゴル国の場合は1945年からモンゴル文字を廃止してキリル文字を採用している（田中 1992:191；フレルバートル 2009:76）。モンゴル国で当時キリル文字の教師を任された D, Ambacelmaa 氏は「1946年に私はキリル文字の教師でした。45日間の中で、キリル文字の35の字を覚えさせることは大変なことで、学生たちの年齢幅も広がった。」<sup>8</sup>と振り返る。東京農業大学モンゴル100の素顔編集委員会（1998）によれば、「1942年以来約50

<sup>7</sup> ホドム文字 (qudum üsüg) は、内モンゴルで使われているモンゴル文字である。新疆で使われているモンゴル文字をトド文字 (todu üsüg) という。トド文字は、ホドム文字をもとに1648年にオイラド方言に合わせてつくられた文字（岡本 1999；テグス 2009；フフバートル 2012）である。

<sup>8</sup> モンゴル国の「モンゴルの100人の貴重人物」という番組を参照（最終アクセス 2014年7月27日）。

年間、モンゴルではロシアのキリル文字が公用文字とされてきた。民主化とともに伝統のモンゴル文字を復活させようという気運が高まり、将来モンゴル文字を公用文字としようとする動きもある。一般の人の中にはモンゴル文字の書けない人も多いなど、当初混乱もあったようだが、民族文化を誇りに思うモンゴルの人々は、企業内で勉強会を開くなどして、モンゴル文字の定着が徐々に進んできている。」（東京農業大学モンゴル 100 の素顔編集委員会 1998:79）という。実は、1990 年にモンゴル文字導入の試みが始まっていた。「こうして、よみがえるモンゴル文字は、内外二つのモンゴルを言語的・文化的に統一する、じつに貴重な土台にしたのである」（田中 1992:195）と期待されていた。しかし、その試みは 1994 年に頓挫する。それから約 20 年後、2011 年からモンゴル国でのモンゴル文字再々導入の動きが始めている（表 1-3）。

表 1-3：モンゴル世界と文字使用の変化

地域	モンゴル国	内モンゴル	新疆
標準方言	ハルハ方言	チャハル方言	オイラド方言
文字	キリル文字	モンゴル文字	トド文字
1940 年代	41 年にモンゴル文字廃止、キリル文字導入。		
1950 年代		55 年からキリル文字転換の動き、58 年に停止。	
1980 年代			1982 年からモンゴル文字へ転換。
1990 年代	90 年にモンゴル文字導入の試み、94 年に挫折。		
2010 年代	2011 年から政府レベルでモンゴル文字を導入。	2011 年 9 月から「キリル文字専攻」が内モンゴル大学で創立。	

（出典：フフバートル 1999；2012；田中 1992；1993；岡本 1999；二木 2004；テグス 2009；筆者の聞き取り調査に基づき作成。）

モンゴル国における教育状況について Sečinčoytu (2005) は、「モンゴル国のドルノト・アイマグ<sup>9</sup>の中心都市であるチョイバラサン市の「第五中学」は、2000 人くらいの学生、70 人の教師、21 人の職人を有する 10 年制学校<sup>10</sup>である。当校は小学 1 年次からキリル文

<sup>9</sup> モンゴル国は、ウランバートル市と 21 のアイマグからなる。ドルノド・アイマグ (Dornod Aimag) はモンゴル国の最東部に位置する。アイマグの中心地はチョイバルサン市である。

<sup>10</sup> モンゴル国の学校制度は基本的に 10 年制で小学が 4 年、中学が 4 年、高校が 2 年制である。

字を教え、3年次からモンゴル文字、5年次から英語、7年次からロシア語が教えられている。「三つの言語、四つの文字」の教育がモンゴル国ならではの特徴である。ウランバートル市や他のアイマグでは、漢語、日本語、ドイツ語を学習している」(Sečinčoytu 2005:5)という。また、「ウランバートル市内の私立学校であるホビー学校は350人の学生、40人以上教師がいる。当校のモンゴル語の試験問題は75%がキリル文字に関する知識、25%がモンゴル文字に関する知識で構成されている」(Sečinčoytu 2005:6)という。モンゴル国における教育を検討するに当り、モンゴル語と文字の学習時には、モンゴル語はハラハ方言で、文字はキリル文字とモンゴル文字となり、内モンゴルの状況に比べて背景は異なる。モンゴル国では世代によって、モンゴル文字の識字率が大きく異なる。学校現場でも教科としての採用実態が異なる。それも、モンゴル文字の導入廃止が頻繁に行われた余波といえよう。モンゴル国の国会議員であるオヨンゲレル大臣<sup>11</sup>は、モンゴル国の「100の質問、100の答」というラジオ放送で、「2014年にはモンゴル文字の読み書きができることで、読書は継続的にやっているが、書くほうに力を入れたい」といい、これが私の今年の目標だと答えていた<sup>12</sup>。その様に、個人によってモンゴル文字への関心に差があることが指摘できよう。近年のモンゴル国におけるモンゴル文字の導入は、内モンゴルにおけるモンゴル語文字使用に大きな影響を与えるという見方をすることができる。モンゴル国がモンゴル文字を再々採用することになれば、モンゴル文字の使用範囲が一段と大きく広がることになる。モンゴル国では政治、経済、教育、一般使用など、いつ、どのレベルから本格的に導入し使用し始めるかが、モンゴル文字のこれからの発展における新たな機縁になると考えることができる。

### 3.3 中国におけるモンゴル語

中国における少数民族について各民族の分布を地理的に見た場合、漢民族が大陸の中部から東部沿海にかけて居住しているのに対して、少数民族の多くは西南・西北・東北・北部という辺境地域に集中しており、国境線を巡るかたちで居住している。少数民族の居住する地域は全国土の64%を占め、民族自治地方として五つの自治区、三十の自治州、百二十の自治県・旗が置かれている。

中国は、「統一した多民族国家」と憲法に規定し、それまでの中国の歴史になかった国家観を提示した(周 2001:262)。現在の中国は、漢族と55の少数民族で構成されている。中国歴代人口調査による少数民族の人口と全国人口の割合は、どの調査時期においても、

<sup>11</sup> オヨンゲレル大臣(OYUNGEREL Tsedevdamba、女性)は、2012年からモンゴル国の文化、スポーツ、観光大臣を務める(<http://www.oyungerel.org/myprofile.html> 個人のオフィシャルサイトを参考。最終アクセスは2014年7月7日)。

<sup>12</sup> MGL ラジオ([www.mglradio.com](http://www.mglradio.com))の2014年7月5日の放送から引用。

少数民族の人口は全国総人口の 1 割にも至っていなかった。2000 年の調査では過去最高の割合である 8.41%に上昇している。中国では、「弱小民族」「小民族」「異種民族」などということばで少数民族を表現していた。1924 年 1 月の「中国国民党第一回代表大会宣言」において、初めて「少数民族」ということばが公的に使われ、1926 年 11 月から中国共産党が「少数民族」を使用し始める。「弱小民族」「小民族」「異種民族」が「少数民族」に統一されるのは、中華人民共和国建国後のことである（岡本 1999:34）。

中華民国成立当時は、孫文が「五族（漢・満州・モンゴル・回・チベット）共和」を訴え、中国で初めて複数の民族の共和が指針として打ち出された。孫文から国民党を引き続いた蒋介石の時代には、「民族」を「宗族」と言い換え、私達の各宗族は、実際には同じ一つの民族をなし、同じ体系に属する一つの種族である（岡本 1999:35）として、種族同化主義をさらに強めた。一方、中国共産党は「中国の四億五千万の人口のうち 90%が漢人で、その他は数十の少数民族がいる」との認識を示していた。中華人民共和国の成立当時に至っても、民族グループの数は、正確には把握されていなかった。その後、「少数民族識別工作」により、55 の少数民族が認定されることになる。

中国の成立後初めて行われた全国人口センサス（1953 年）では、自己申告に基づいて登録された「民族名」が 400 以上にのぼっていた。中国政府は、同年からこの 400 数種の集団に対する民族識別を開始し、分別・統合する措置を取った。毛利（1998）や岡本（1999）は、少数民族識別工作について分析している。

55 の少数民族すべてが民族識別工作を経て公認されたものではない。モンゴル、ウイグル、チベット、回、朝鮮、満州、ミャオ、ヤオ、イの 9 つの民族は建国前から認識されており、また、ロシア族や朝鮮族のように、国籍変更によって中国内の少数民族となったものもある（岡本 1999:36）。

識別工作の第一期は 1950～1954 年で、中央政府は 1950 年から西南・中南・東北・内モンゴル等の地域へ訪問団を派遣し、少数民族の社会調査を行った。1953 年の第一回人口センサスまでに、「民族名はその持ち主に従う」方針に基づいて、民族としての承認を申請したグループは 400 余りにのぼり、そこでは 29 のグループが新たに民族として認定された。建国以前から認定されていた 9 民族と合わせ、少数民族は計 38 となった。第二期は 1954～1964 年で、中央民族事務委員会が雲南、広東、湖南、貴州の各地に調査団を派遣し、民族識別調査を進めた。1964 年の第二次人口センサスと第三回全人代までに 15 の少数民族が認定された。1965 年にロツパ族が認定され、少数民族は 54 となった。第三期は 1978～1986 年で、1982 年の全国第三次人口調査までにギノ一族が認定され、中国には漢族以外に 55 の少数民族がいることになった。この民族識別調査の結果、3500 万人以上の人間が新たな少数民族になったが、その内 2000 万人はそれまで漢族として申告されていた（毛利 1998:61-62）という。このように、中国における民族・少数民族とは、極めて人為的かつ政治的な概念である。

民族識別工作は、辺境の原住民を中華人民共和国の「人民」として統合することに主な目的があり、その過程で「民族が上から作られていった」のである。当初、民族識別調査工作は、当人たちが民族意識を明確に持つようにし、民族的出自を明らかにしながら、民族籍の回復をはかることが目的であった。しかし、現地の幹部や行政機関などが少数民族として認めなかったために漢族と報告される者もいれば、民族差別や迫害を恐れて、自分の民族的出自を偽っていた者もいたため、1981年11月28日には「民族的出自の回復あるいは改正の処理原則に関する通知」が打ち出されたのである（岡本1999:48）。少数民族と漢族との夫婦の間に新たに生まれた子どもが、少数民族の籍を選ぶことが多いことは、少数民族人口増加の一因ともなった。こうした民族的出自の回復は、1986年2月8日の「民族的出自の回復あるいは変更問題に関する補充通知」によりほぼ完了する。この間、民族籍の回復と変更を行った者は260万人と報告されている。しかし、1978年から1990年にかけて民族的出自を少数民族に変更したものは2000万人にのぼり、内モンゴルでは1982年の上半期だけで、30万9000人が民族的出自をモンゴル族に変更したという（岡本1999:45；毛利1998:128）。

中国における少数民族の属性は非常に曖昧である。上から作られた部分もあれば、少数民族という立場に向けられた様々な優遇政策を期待し、民族属性を変更する者もいるのではないかとされている。そのような時代と背景のもとに、中国領内のモンゴル民族は置かれている。地域として内モンゴル以外にも、新疆、青海省、甘肅省、遼寧省、吉林省、黒龍江省、河北省にもモンゴル民族が居住している。これらの地域におけるモンゴル語文字使用を「八省・自治区小中学校モンゴル語教材協作組」<sup>13</sup>（以下「八協」と称する）から統一的に監視指導をしている。「八協」からの規定により、これらのモンゴル人居住域では、内モンゴルで使われているモンゴル語と文字がスタンダードとされている。また、これらの地域におけるモンゴル語文字使用などに関する「八協」側の主催の会議が頻繁に行われていることが確認できる（資料編:資料3）。では、内モンゴルと新疆における文字使用についてみてみよう。

### 3.3.1 内モンゴルでは

内モンゴルにおける文字使用は、1954年に内モンゴル全土にキリル文字を使う試みがあり、1957年に中国政府から停止を命じられている（資料編:資料3）。その後は、モンゴル文字を継続して使うことになった。モンゴル国のモンゴル文字の再々導入とほぼ同時期、2011年9月から内モンゴルの首府フフホト市にある内モンゴル大学でキリル文字専攻と

---

<sup>13</sup> 「八省・自治区小中学校モンゴル語教材協作グループ（八省区中小学蒙古文教才協作組）」は、1973年7月に、八省・自治区小中学校モンゴル語文教材出版事業座談会議がフフホト市でひらかれ、八省・自治区小中学校モンゴル語教材協力グループをつくることになった（岡本1999:239）。

いう講座が開設された。「従来はキリル文字のクラスは、北京大学や大連大学で設けられていた。内モンゴル大学では数回にわたりキリル文字をやっていると思う。しかし、継続的に開講されていなかった。今回は、国家教育部からの許可があり、毎年学生募集することになった。2011年から始まり、すでに3年間続いている。毎年30人の学生が入学してくる。今はモンゴル人学生のみを受け入れている。また、モンゴル国で1年間の実習もあり、今年は25人の学生がモンゴル国に行った。モンゴル国からも専門の先生を招いて、講義をやってもらっている。キリル文字の読み書きはもちろん、文学作品の講読、研究などの専門的な授業もある。また、学生たちを雑誌の編集などにも積極的に参加してもらい、読書、翻訳、転写などのキリル文字使用の基本スキルが磨かれている。モンゴル国に留学してきた学生たちもとても満足している。これらの学生は就職には苦労しないと思う」（50代、研究者、男性：資料 2-K-09-042）。大学において一専攻として、キリル文字の勉強が始められ、本格的に進んでいることがわかる。さらにモンゴル国との関係が深まるにつれて、キリル文字ができる人材を補えると思う。

### 3.3.2 新疆では

続いて、新疆ウイグル自治区（以下は新疆）におけるモンゴル語・文字の使用および教育の実態を見てみよう。新疆におけるモンゴル族は「オイラドモンゴル」<sup>14</sup>と呼称され、自らの方言であるオイラド方言に基づき、「オイラドの文人であるザヤー・バンデト・ナムハジヤムス(Zay\_a Bandid Namqaijamsu)が1648年にトド文字をつくって」(Lündüü2010:10)以来、トド文字を使用してきた。しかし、1986年から「八協」が中国領内の統一したモンゴル語の教科書を作ることになった（資料編:資料 3）。それまで使用されてきた文字が廃止され、内モンゴルで使われているモンゴル文字に取り換えられた。そのような動向により「20世紀に新疆に居住するモンゴル人は自前の①トド文字、②モンゴル語による教育ができる師範学校、③民族語（トド文字による）の出版社、いわばその民族の存続にかかわる三つの要素を失ったといえる」<sup>15</sup>と指摘されている。

オイラド語の環境については、「オイラド語は年輩の人が話すことばになっている。ラジオはモンゴル語で放送されている。新疆では60%の人口がトルゴード・モンゴル人だからトルゴード方言が標準方言として、56年に定められている。しかし、今は、チャハル方言で放送している。それが全国のモンゴル語の標準だからだという。チャハル・モンゴル人はそれほど多くいない。だから、現実から離れたものになっている。多くの人がチャハル

---

<sup>14</sup> オイラドモンゴルは、ホショード部族、ウーレッド部族、トルゴード部族、ドゥルブッド部族の総称である。

<sup>15</sup> 2010年12月19日に行われたモンゴル文化基金主催の「20回モンゴル学術交流会」、宝力徳巴図（ボルドバト）氏の研究発表「新疆におけるモンゴル語教科書の地域的特徴」を参照。



方言を聞きなれないのが現状である。出版物、新聞のほとんどはホドム文字（伝統モンゴル文字）だ。以前は、トド文字の教科書もあった。今は、内モンゴルで統一に出版された教科書を使うことになっている。使用文字変革により新疆の出版社の仕事がなくなったので、従業員は失業することになった」（50代、研究者、男性：資料 2-I-05-017）。このように文字改革によって、多くの不利や不便をもたらす結果をまねいたことがわかる。オイラドモンゴル人自身も「オイラドモンゴルにとってジャンガル<sup>16</sup>、トド文字、オイラド法典<sup>17</sup>の3つはオイラドモンゴル人のアイデンティティを確立する上で重要な要素である」<sup>18</sup>と捉え、これらに対する伝承、保全が広く行われているという。

上記のようにモンゴル国、内モンゴル、新疆の三つの地域からみても、文字使用には実にドラマチックな変化が認められる。さらに、モンゴル関連の様々な事情を見るにあたって、中国とロシアの両大国の状況に目を配る必要がある。特にモンゴル国の場合はキリル文字を採用しているので、ロシアからの文化的な影響は強いと思われる。モンゴル国の人々の日常会話において、ロシア語やロシア語から借用要素が多く見られるのがその一例である。

### 3.4 アイデンティティと言語

稗田（1999）は、民族のアイデンティティを①共通の出自の意識、②同一の文化意識、③宗教の意識、④人種の意識、⑤言語の意識、⑥同胞意識（稗田 1999:141）などと属性について順位をつけるという。民族の言語とアイデンティティの関係性について、マティアス（2010）は、「民族的アイデンティティの最も重要な指標は、独自の民族語である」（マティアス 2010:19）とする。「言語は、民族的アイデンティティを構成する複雑な文化体系の一要素である。もし少数派の人々が、この複雑な文化の中で、言語を重要視しなければ、彼らの言語は短期間に消滅することになる。言語は、民族的アイデンティティの表出と維持にとって、鍵となる要素である」（マティアス 2010:22）といった認識がある。「人間が自己形成する過程でかかわるばかりでなく、社会生活維持していく上で、よりどころとなるものである。人間は、社会の中で、民族、地域、性など、さまざまな種類のカテゴリーに属しているが、そのカテゴリーにふさわしい言語を使うことにより自己のアイデンティティをそのカテゴリーの中で培い、認識し、表現している」（井出 1992:28）ものとされる。言語が一種の記号としてアイデンティティの表出機能を有していると捉えることが

---

<sup>16</sup> ジャンガルは、モンゴル、ロシア、中国、カザフスタンなどの国に居住するモンゴル語、チュルク語系話者間に広く伝わってきた英雄叙事詩の一種である（Taya2012:1）。

<sup>17</sup> オイラド法典は、Mongyol oirad-un čaγaγa-yin bičig（『モンゴルーオイラド法典』）といい1640年につくられたモンゴル遊牧民自身に対する基本法である（Lündüü2010:10）。

<sup>18</sup> 2014年5月29日、30日に行われた第4回東方ユーラシア国際シンポジウム「ユーラシアの叙事詩と言語」、タヤ教授の研究発表「消滅に瀕するモンゴルの英雄叙事詩『ジャンガル』研究の意義」を参照。

できる。また、「国家語の形成が進められる一方、多数派の言語を話さない人々が多数派への同化に抵抗しようとする場合、自らの言語を民族アイデンティティの要と位置づけて言語の維持をはかる例が多くみられる」（真田他 2005:8）こともある。例えば、新疆におけるオイラドモンゴル人は、オイラド語とトド文字を自らのアイデンティティとして捉え、自己の文化を保護発展させるという意識が強まっている。「言語使用と民族的アイデンティティは自由な選択の結果ではなく、社会、そしてしばしば経済的生存競争の問題である」（マティアス 2010:24）。

表 1-4：母語の定義

基準	定義
起源	人が最初に学んだ（諸）言語
<b>アイデンティティの根拠</b>	
a.内部	人が自らのものと認識する（諸）言語
b.外部	他者によってそのネイティブスピーカーとして認識される（諸）言語
能力	人が最もよく知っている（諸）言語
機能	人が最もよく使用する（諸）言語

（出典：塚原 2010:52 から引用。）

近代国家は単一国家単一言語という思想で成り立っている。日本の場合は日本語＝国語である。中国の場合は多元一体「中華民族」と漢語を結びつけ（田中 2011:47）、さらに、「言語の統一は思想の統一」と提唱されている。もちろん、少数民族の言語は必然的にだんだん圧迫されていくと思う。表 1-4 では、母語の定義において、起源、アイデンティティの根拠、能力と機能を用いて定義している。母語には運用能力と機能はもちろんのこと、アイデンティティに深い関連があることがわかる。

『日本の多言語社会事典』（真田他 2005）では母語教育を母語の教育と母語による学習について以下のように定義する。そこには、「母語を通しての授業」、「母語能力が育成」、「自己概念やアイデンティティの形成」、「個人の権利」には母語に厳密に関係していることがわかる。

①子どもは、最もよく理解できる言語（母語）を通して授業を受けることにより、授業内容をよりよく理解することができる。これに対して、子どもの母語でない言語のみによって授業を受けるならば、授業言語を習得するまでは満足な教科学習は期待できず、その間、学習上の遅れが生じやすい。母語を授業言語とすることで、言語的

理由によって学習上の遅れが発生しない。

②母語による教育を受けることによって、母語能力が育成される。授業理解に必要な認知上負担の高い言語能力、いわゆる学習思考言語能力は教科学習を通して育成されるものである。

③母語教育は、子どもの第2言語習得、特にその学習思考言語習得に関して有効に機能する。第1言語における識字能力など高度な言語能力を習得することによって、第2言語習得をより確実なものにすることができる。近年の第2言語習得研究によると、第1言語にある程度習熟しているならば、子どもはそこで習得した意味体系を第2言語へと転移することができ、それによって第2言語習得はより確実に促進されることが考えられている。

④母語教育は、肯定的な自己概念やアイデンティティの形成に寄与する。母語はアイデンティティ形成のための言語といわれるように、母語の喪失はアイデンティティ・クライシスという心的状況を作り出し、子どもの学習活動を阻害する危機性を有している。母語の保持・文化の継承を可能にするばかりでなく、親とのコミュニケーションを通じた情緒の安定、人格の形成、アイデンティティの確立の点においても重要である。

⑤母語教育は、母語によって教育を受ける権利を保障することでもある。民族の平等、人種差別撤廃という今日の世界的な流れのなかにあつて、母語を使用し、維持するという権利は、個人の権利からマイノリティ集団にとっての権利として認められつつある。この観点から母語教育はマイノリティ集団にとって、ひいてはその成員個人にとって、集団存続の面から重要であるといえる（真田他 2005:31-33）。

子どもの母語による学習の利点、働きとそれが母語の保持・文化の継承を可能にする上、やはりアイデンティティに深く関わり、所属集団自体の存続に関わることがわかる。内モンゴルにおけるモンゴル語とモンゴル語による教育を見ていく上では、モンゴル系の諸部族、民族が分布する地域的特徴、歴史的時代的背景も重要な要因として無視することができない。漢化の強い影響下に置かれている内モンゴルに対して、隣接するモンゴル国は規範として大きな影響を与えるものと考えられる。さらに、地域的に「モンゴル」の舞台としてのユーラシアというように広い範囲からみていく必要があると考えられる。現在の内モンゴルのモンゴル人にとって母語であるモンゴル語の使用学習というのがいかなる状況かを、文化的アイデンティティに結び付けて実態を見る。

## まとめ

本章は序論で3節からなる。第1節では研究目的と方法について述べた。

第2節では先行研究を取り上げて概観した。岡本(1999)は、中国の少数民族に関する法的規定、政策方針、民族学校に対する政策について、公的立場やハード面の情報のみに留まらず、現場での政策方針の実施状況や具体的な反響、成果、当事者たちの意識など、ソフト面まで詳細な分析を行った研究である。オンドルナ(2007)は、内モンゴルの牧畜地域と農耕地域と都市部の人口が雑居するという特徴を持つ、赤峰市におけるモンゴル民族と漢族間の、いわゆる族際婚姻についての調査研究において、血統的民族、法的民族、文化的民族と社会的民族という4つの要素が相互作用しながら「民族(ミンズウ)意識」を形成していると論じている。フレルバートル(2009)は、モンゴル語がどのように変化してきたか、その要因、そして、いかなる政策をとるべきかについて、提言する著作である。モンゴル語の実態を①モンゴル語の漢化と退化；②モンゴル語の規則と計画；③民族教育；④社会・モンゴル語および使用、の4項目にわたり、主に内モンゴルにおけるモンゴル語の変容、民族教育の現状、モンゴル語の使用状況について報告している。また、内モンゴルにおけるモンゴル民族の教育をテーマに日本の大学で執筆された博士の学位論文で、モンゴル人のアイデンティティ、民族教育、人類学的視点からみた民族教育、二言語教育、三言語教育、英語教育、近代文化・教育政策といった、多方面からの内モンゴルにおけるモンゴル民族教育を中心に研究が広がっていることがわかる。いずれにおいても、内モンゴルにおける牧畜地域、モンゴル民族学校と言語使用実態に主眼を置いた内容は少ないと感じられる。

第3節では、議論の射程などについて述べた。内モンゴルにおけるモンゴル語文字について言及するに当たり、政治的区切りである国境を省いてみることを不可欠であると考えられる。まずは、ユーラシアの大地における「モンゴル文字」について考察を加え、モンゴル文字、キリル文字、トド文字とそれぞれの地域で政治や政策の影響により互いに使用が繰り返されていたことがわかる。それに、モンゴル国、ロシア、中国の3つの国において、モンゴル語と文字の政策や実態について考察を加えた。最後に、言語とアイデンティティの関わりについて「言語は、民族的アイデンティティの表出と維持にとって、鍵となる要素である」(マティアス 2010:22) ということを確認した。

## 第二章 牧畜地域におけるモンゴル民族学校の状況

### 第1節 内モンゴルにおけるモンゴル民族学校の実態

#### 1.1 内モンゴルの概要および人口推移

内モンゴルとは1947年5月1日に樹立された「内モンゴル自治政府」で、後の内モンゴル自治区の通称である(資料編:資料3)。内モンゴルは中国の北部に位置し、面積は118.3万km<sup>2</sup>である。地理的には、北東から南西にかけて、中国の8つの省・自治区と隣接し、北はモンゴル国及びロシアに接している。2000年の第5次国勢調査によると、自治区総人口は約2,332万6千人で、そのうち漢族は1,846万6千人であり、79.2%に当たる。対して、モンゴル族は339万5千人(17.1%)である。残る3.7%は朝鮮族(21,859人)、満州族(499,911人)、回族(209,850人)、ダウール族(77,188人)、エヴェンキ族(26,201人)、オロンチョン族(3,573人)、チベット族(2,062人)等である<sup>19</sup>。1949年の建国以後、「内地」から多くの共産党幹部、軍人、労働者、教師及び国家公務員等が内モンゴルに移住させられた。岡本(1999)によれば、「1952年の内モンゴルと綏遠省の合併により、大量の漢人移住を受け入れた。農業分野においても、1955年に中央政府によって山東、河北、山西省から2万2030人の農民が内モンゴルへ計画的に移住させられた。1969年までに包頭市、フフホト市等の工業都市への投資を目的に北京、天津、上海から公務員だけ3万2900人を移住させた」という。こうした国家の移住政策以外でも、1969～1970年には自治区外からの漢人の移住が100万人を超え、1980年代になると、移住人口は年間20万程度に落ち着く(トクタホ 2009:59)。図2-1は、内モンゴルが設立された1947年から2005年までの当該自治区における、漢族・モンゴル族とその他の民族の人口推移を示したものである。総人口は47年から10年ごとに倍増しているが、77年からは上昇が緩やかとなる。しかし、モンゴル族を含む少数民族の人口推移には、それほど目立った変化はない。

少数民族地域における漢族移住の急増は、民族語の保障を求める比率の低下につながり、漢語の堪能なモンゴル人あるいは漢人の、少数民族地域における特権的階層化を促進する。それは「少数民族の言語、文化及び風俗習慣を喪失させる大きな原因となる。内モンゴルにおける漢族の移住とそれに伴うモンゴル族人口の変容は、内モンゴルの民族教育に大きな影響を及ぼざるをえない」(トクタホ 2009:60)と位置付けられており、官脇は「内モ

<sup>19</sup> 『内モンゴル自治区2000年人口普查資料』pp. 46-47を参照。

ンゴル自治区とは名前のみで、モンゴル族の自治区などどこにもない」と指摘している（宮脇 2002:258）。

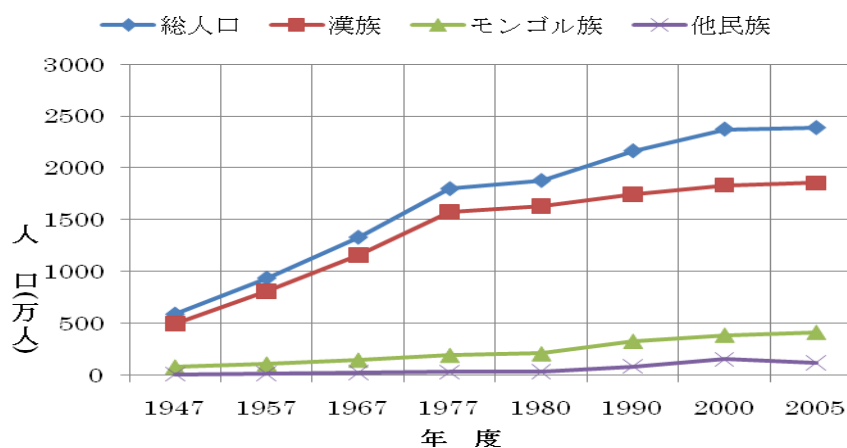


図 2-1 : 内モンゴルの人口推移 1947 年～2005 年

(出典：トクタホ 2009:60 を基づいて作成。)

## 1.2 内モンゴル全土における教育の変化

内モンゴルにおける民族教育や学校教育における、「教育政策」が少数民族教育へもたらした具体的な影響について、先行研究では「少数民族教育政策」、「少数民族に対する特別な施策と措置」のもと、少数民族の教育事業はかつてない成果を収めたとされているといわれている。1947 年の内モンゴル成立当初、民族学校数はほぼゼロに近い状態だった。それが、1993 年の時点では、幼稚園が 106 校、小学校が 3,026 校、中学校が 390 校までに増加している。内モンゴルでは、50 年あまりの期間を通して、民族学校数や各級の在校生数、教師数の増加などの面では、確かに成果を得たとすることができる（ハスエルドン 2005）。では、2000 年以後の状況がいかなるものであるかを見てみよう。

1986 年に『中華人民共和国義務教育法』<sup>20</sup>が施行され、中国全土における農村地域の小中学校に対する配置調整が行われた。近年では「義務教育普及の促進」にともなう牧畜・農村地域の義務教育改革の進展は、中国全土の発展につながる重要政策として位置づけられている。2001 年に「国務院の基礎教育改革と発展に関する決定」<sup>21</sup>が公表され、牧畜地域の小中学校の配置調整が行われた。「小学校は居住地近辺で、中学校はある程度集中的に

<sup>20</sup> 『中華人民共和国義務教育法』は、1986 年 4 月 12 日の第六次全国人民代表大会第四次会議で可決され、2006 年 6 月 29 日に第十次全国人民代表大会常務委員会第二十二次会議にて修訂された。八章、六十三条からなる。

<sup>21</sup> 「国務院の基礎教育改革と発展に関する決定」は、2001 年 5 月 29 日に「国発〔2001〕21 号」公文書として各省、自治区直轄市の人民政府、国務院の各部委、各所屬機構宛に通達された。

運営し、教育資源を有効に配布し、合理的、計画的に学校配置を調整する原理に従う。農村地域、牧畜地域の小学校は学生の通学便を配慮しつつ合併を行う。交通の不便な地域では学校を維持し、学校配置調整を原因とする途中退学を防ぐ。学校配置調整は危険建築物の改造、学校教育制度の規範、都市化の発展、移民移動など統一計画と同時に行う」(民族教育処 2011:24) と明記されている。

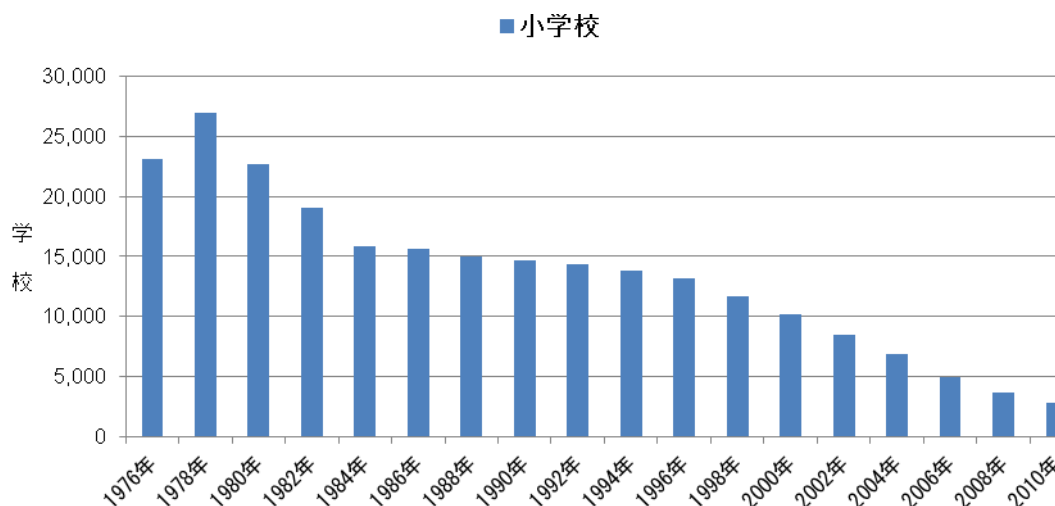


図 2-2 : 小学校の学校数推移 1976 年～2010 年

(出典：民族教育処 2011:pp365-428 を基づいて作成。)

図 2-2 に、内モンゴル全土における 1976 年から 2010 年までの小学校数の推移について、二年ごとの変化を示した。図からわかるように、ピークである 1978 年には 26,980 校まで増大したが、30 数年間で学校数は漸減していったことがわかる。1990 年に約半分の 14,634 校に、2000 年に 10,147 校、2010 年には当初の約一割である 2,767 校にまで減少していることがわかる。

図 2-3 は、同じく 1976 年から 2010 年までの中学校と高校の学校数の推移である。1976 年に 4,817 校あった中学校が、2010 年になると二割に当たる 834 校となっている。高校の場合も 1976 年の 2,066 校から 2010 年の 289 校に減少した。図 2-4 に示したのは、内モンゴルにおけるモンゴル民族学校のみでの学校数の変化で、小中高校の学校数の変化をそれぞれ表している。中学校と高校の学校数は大幅な変化は見られず、小学校に限り激減していることを確認できる。

ハスエルドン (2005) は「民族教育の問題をハード面ではなくソフト面を見たときどうなるだろう」と示唆する。つまり、民族学生の卒業総数の問題ばかりでなく、質的な問題をも考慮すべきである、ということだ。民族教育の「質」は、少数民族出身の人々が自民族の言語による学校教育を受けられるかどうかをもっとも重要な要素である。教育におけ

る「質」と言えば、教育環境、教育内容、学力などの要因が想起されるが、少数民族への教育という観点に立てば、自民族の言語・文字によって学校教育が受けられたかどうかの計測はきわめて重要である。

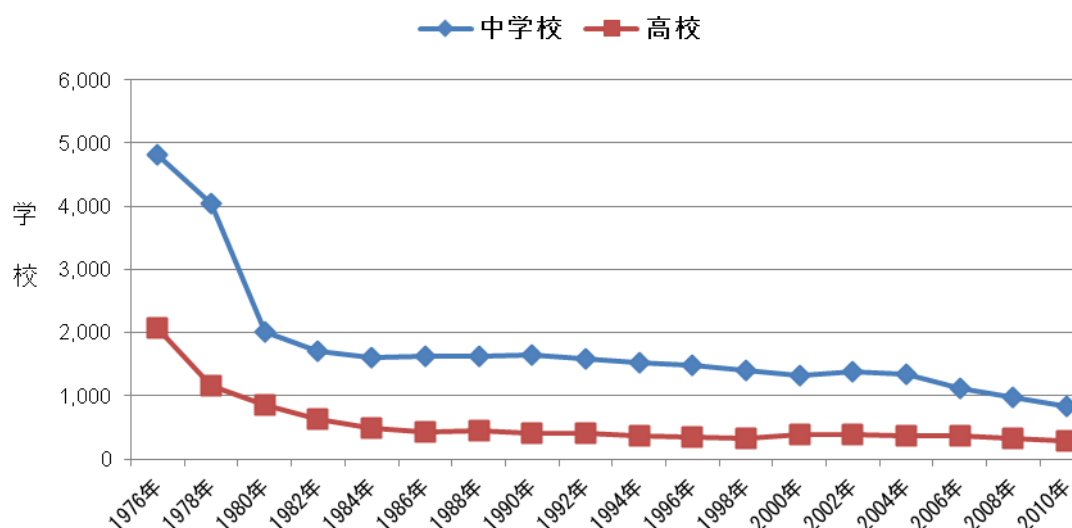


図 2-3：中学校と高校の学校数推移 1976年～2010年

(出典：民族教育処 2011:pp365-428 を参考に作成。)

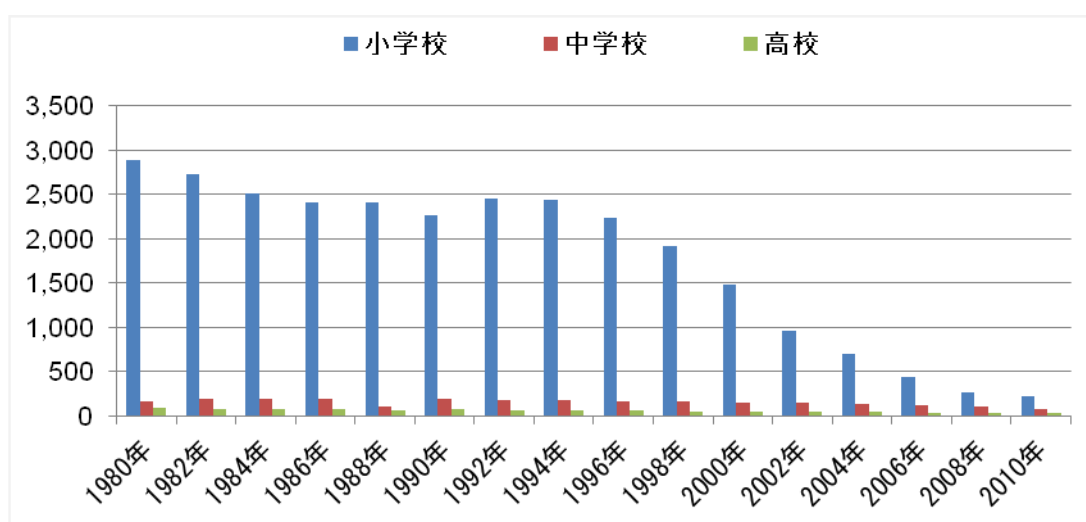


図 2-4：モンゴル民族学校数推移 1980年～2010年

(出典：民族教育処 2011:pp365-428 を基づいて作成。)

図 2-5 は、1980 年から 2010 年までのモンゴル人学生数と、その中でモンゴル語による教育を受けたモンゴル人学生数の変化を二年ごとに示したものである。モンゴル人学生、特に小学生は 90 年代中盤がピークだとわかる。やはり、モンゴル人の児童数がそれ以来



減少に転じている。80年代後半には、中国では「一人っ子政策」が実施されているため、その影響がモンゴル民族にも現れているといえる。同時に、モンゴル語で教育を受けている学生も大幅の減少を見せている。小学校に限って言えば、80年代には約3人に2人がモンゴル語で教育を受けていたものが、2010年には3人に1人となっており、比率の低下は明らかである。中学校の学生については、モンゴル人学生数は増えるものの、モンゴル語で教育を受けるのは逆に右肩下がりの状況である。高校の場合は、モンゴル語で教育を受ける学生数自体は増えているものの、モンゴル人高校生の総数と対照させると、かつて2人に1人であったものが、4人に1人へと、モンゴル語で教育を受ける割合が大幅に減少していることがわかる。では、内モンゴルの中部に位置するシリングル・アイマグにおける教育の変化について、教育機関の内部資料から検証する。

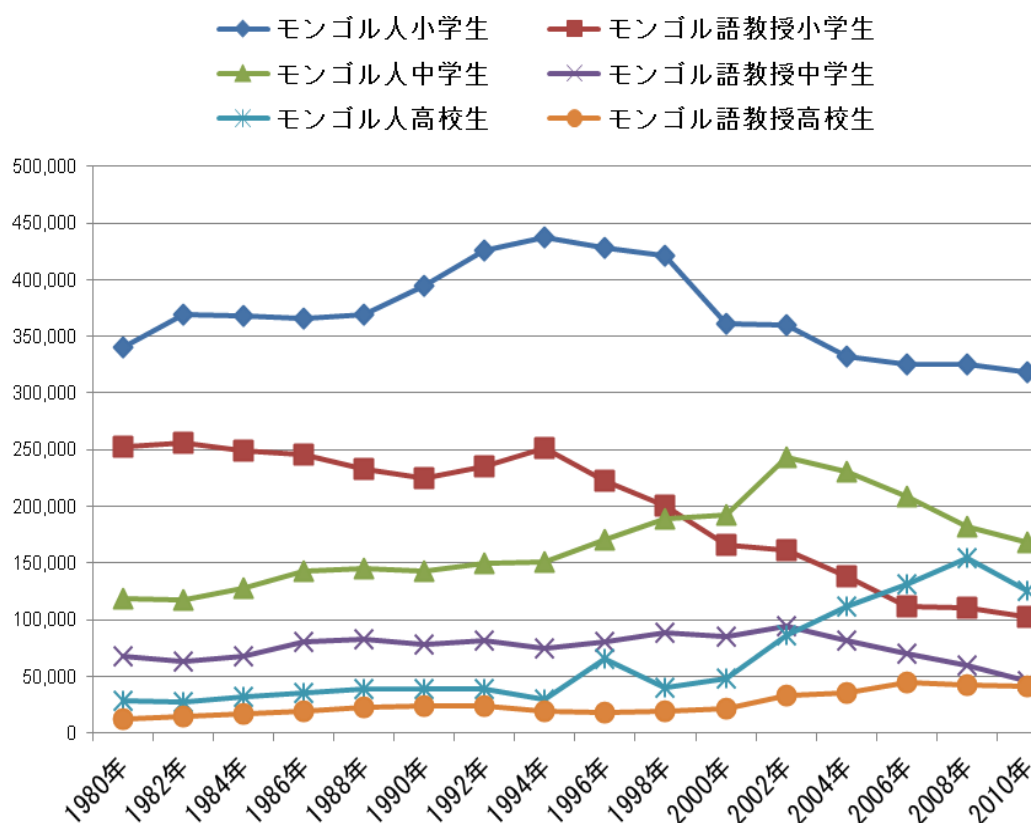


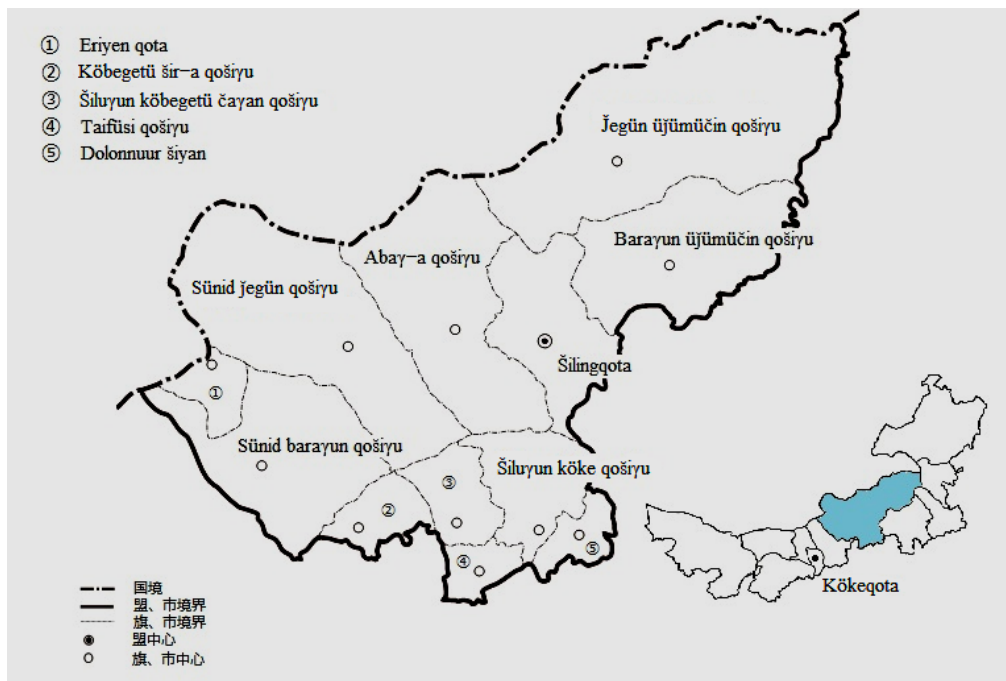
図 2-5 : モンゴル人学生及びモンゴル語教育を受ける学生推移 1980年～2010年

(出典：民族教育処 2011:pp365-428 を基づいて作成。)

### 1.3 シリングルにおける学校統廃合

地図 2-1 は、内モンゴルのシリングル・アイマグ (Šili-yin goul aimay) である。シリ

ゴルは内モンゴルの中部に位置し、北部はモンゴル国に隣接し、南部は河北省に接している。9つのホシヨ、2つ市と1つの県がある<sup>22</sup>。シリンホト市は政府所在地で中心地ある。



地図 2-1 内モンゴルのシリンゴル・アイマグ

(出典：ムンクバト 2013a:207)

表 2-1：シリンゴルにおける牧畜地域学校配置調整 2004 年～2006 年

単位：学校

東ウジムチン (Ĵegün üjümüçin qoşıyu)	廃:13 新:1 拡:1 移:1
Ongyun 小学校、Bulay 小学校、Ulayai 小学校、Eriyenqobi 小学校、Ejinaγur 小学校、Köbcinyobi 小学校、Küriyetü 小学校、Bayankögebür 小学校、Ekebulay 小学校、Altanqili 小学校、Manduqubulay 小学校、Dayutunaγur 小学校、Bogdaaγula 小学校を廃校。Uliyasutai 小学校を拡大建設。Gurbaduγar 小学校を新しく建設。	
西ウジムチン (Barayun üjümüçin qoşıyu)	廃:14 新:2 拡:1
Qoγulatu-yin γoul 小学校、Alta-yin γoul 小学校、Ĵir-un γoul 小学校、Dayaça-yin bulay 小学校、Ulayanhayaly_a 小学校、Bayanquşıyu 小学校、Qarayantai 小学校、Bayanquwa 小学校、Qanaγula 小学校、Buryasutai 小学校、Γuruqan 小学校、Baçi 小学校、Bayanγoul 小学校、Ĵiran 小学校を廃校。Mongγol 小学校を拡大建設。Qoyarduγar 小学校、Ĵegun keseg-ün 小	

<sup>22</sup> それぞれ、Ĵegün üjümüçin qoşıyu、Barayun üjümüçin qoşıyu、Şiluyun çayan qoşıyu、Abay\_a qoşıyu、Sönid jegün qoşıyu、Sönid barayun qoşıyu、Köbegetü şir\_a qoşıyu、Şiluyun köke qoşıyu、Taifusi qoşıyu の9つのホシヨ、Şilingqota、Eriyenqota の2つの市と Dolonnuur şıyan の1つの県である。

学校を新しく建設。			
シヨローン・チャガーン ( <b>Šiluyun čayan qošiŋu</b> ) <span style="float:right">廃:7 拡:1</span>			
Ulayančab 小学校、Büridü 小学校、Onibatu 小学校、Bulagantoqai 小学校、Yikenayur 小学校、Šangdu 小学校、Altanyadasu 小学校を廃校。Mingyatu 小学校を拡大建設。			
アバガ・ホシオー ( <b>Abay_a qošiŋu</b> ) <span style="float:right">廃:7 拡:1</span>			
Bayantuy 小学校、Jiryalangtu 小学校、Čenggelbulay 小学校、Yekeyoul 小学校、Naranbulay 小学校、Qongyuryoul 小学校、Čayannayur 小学校を廃校。Mongyol 小学校、Furgaduŋar 小学校を拡大建設。			
スニド・ジューン ( <b>Sönid jегün qošiŋu</b> ) <span style="float:right">廃:7 新:1</span>			
Qongyur 小学校、Čayanobuy_a 小学校、Bayanayula 小学校、Bayannayur 小学校、Dalai 小学校、Delgerqan 小学校、Darqanayula 小学校を廃校。Qoyarduŋar 小学校を新しく建設。			
スニド・バローン ( <b>Sönid barayun qošiŋu</b> ) <span style="float:right">廃:4 拡:2</span>			
Dügürengöljei 小学校、Bütümji 小学校、Saiqanöljei 小学校、Ačiduayula 小学を廃校。Mongyol 小学校、Qoyarduŋar 小学校を拡大建設。			
フバート・シャル旗 ( <b>Köbegetü šir_a qošiŋu</b> ) <span style="float:right">廃:4 拡:1</span>			
ソムの 2 学校と 2 つの重点学校を廃校。第一小学校を拡大。			
シヨローン・フフ ( <b>Šiluyun köke qošiŋu</b> ) <span style="float:right">廃:6 拡:2</span>			
Bošoudai 小学校、Jögelenyul 小学校、Jiyasutai 小学校、Naratu 小学校、Keresutei 小学校、Qangqal 小学校を廃校。Küseleng 小学校と Mongyol 小学校を拡大建設。			
タイフス ( <b>Taifusi qošiŋu</b> ) <span style="float:right">廃:1</span>			
Günbulay 小学校を廃校。			
オラガイ開発地区 ( <b>olayai negegelte-yin orun</b> ) <span style="float:right">廃:1</span>			
Heyang 小学校を廃校。			
シリン浩特市 ( <b>Šilingqota</b> ) <span style="float:right">廃:1</span>			
Čoy ayula 小学校を廃校。			
<b>2004 年</b>	<b>2005 年</b>	<b>2006 年</b>	<b>合計</b>
廃:27 新:1 拡:6 移:1	廃:24 新:3 拡:4	廃:14	廃:65 新:4 拡:10 移:1

(説明：廃は廃校、新は新築、拡は拡大増築、移は移動建設のことである。)

(出典：現地調査資料に基づいて作成。)

『シリングゴル・アイマグ全土におけるソムの学校配置調整計画の実施意見に関する報告』<sup>23</sup>では、表 2-1 のように牧畜地域の学校統廃合が計画されていたことがわかる。「围封转

<sup>23</sup> 当報告は、2004 年 8 月 10 日に、「シリングゴル・アイマグ行政機構の教育局公文書」と題し、シリングゴル盟教育局発〔2004〕15 号公文書として報告された。

移」<sup>24</sup>戦略を促進させ、シリンドルの経済形式転換を加速させると同時に、教育資源を有効活用し、都市部と地方の教育水準の格差を縮小させ、多くの牧畜民の子弟が質の高い教育を受けられるために、牧畜地域にあるソムの学校の配置調整を行う。シリンドル政治委員会、シリンドル行政機構は、牧畜地域にあるソムの学校の調整を広範囲で実施し、現在の60のソムの学校と5の教育点<sup>25</sup>に3年間を費やして統廃合を行う。牧畜地域にあるソムの学校を町に集中させ運営する。その目的は、「两主一公」<sup>26</sup>という学校運営形式を強化し、「两免一补」<sup>27</sup>や「全免」<sup>28</sup>形式の教育を実現させ、学校運営効果と規模を向上・拡大させ、都市部と地方の格差を縮小させ、都市部教育と牧畜地域教育、普通教育と民族教育を均質化する」とある。このように目的と計画が学校統廃合の大きな推進力になっていたことがわかる。表2-1から見て取れるように、面積の広い地域では7から14の学校が廃校となっていた。全体からみて2004年には27校、2005年には24校、2006年には14校という一定しない数値で牧畜地域において廃校が行われていたことがわかる。合計では、わずか3年間で65校が廃校されたことになる。シリンドル全体に4つ新しい学校が建設され、既存の10校が拡大増築され、1校が移転された。

「学校統廃合は、教育への投資を集中させているといわれている。しかし、牧畜地域の学校の状況を見る限り、まったく異なる効果をもたらしている。牧畜民の生活基盤、生活様式は都市部の人々とは異なるので、学校配置もその状況に応じて、牧畜民たちの居住状況に合わせ、生活状況に適した配置や運営をしなければならない」（60代、作家、男性：資料2-B-22-012）という。今回の牧畜地域における学校統廃合は、強制的な面と、自然発生的側面が認められる。それは、政府から強制的に統廃合を行った例もあるが、在校生の減少により自然と閉校せざるを得ない事例もあるという。「牧畜地域の学校は、学習環境がよくない。例えば、ガスもないために冬でも暖房器具を使えない。石炭を燃料にして各教室を暖めていた。様々な情報や教師たちへの待遇がいつも、町の状況に比べて遅れており、行き届かない状況がほとんどだった。もちろん、経済的にゆとりがある家庭は、子どもを町の学校に通わせるようになっていく。教職員たちも、金曜日の夕方に町に戻り、金土日に3泊して月曜日の朝一番に学校に戻ってくる。だから、帰属意識が低く、町に愛着の強い者が多かった。でも全員がそういうわけではなかった。生活基盤がここにある人たちはここから離れたくなかったのも事実である」（40代、詩人、男性：資料2-B-23-023）と話

---

<sup>24</sup> 围封转移 (*Weifeng zhuan yi*) とは、牧草地を包囲する地域から牧畜民を移動させる、対砂漠化政策である。

<sup>25</sup> 教育点とは、一貫した学校ではなく、特に小学校低学年の学生が様々な状況により一時的に教育を受けられ施設で、高学年になれば町の学校に移動される。

<sup>26</sup> 两主一公 (*liangzhu yigong*) とは、学校運営形式に則り校舎を建設するときの建物の形状である。两主は、教室棟と教員などの事務棟のこと。一公は学生寮である。

<sup>27</sup> 两免一补 (*liangmian yibu*) とは、政府からの補助金制度の一つである。学生の学費と書籍代を免除し、生活費と補助する。そのすべてを政府が補助し、学校側に支給するという。

<sup>28</sup> 義務教育段階の学費を全額免除すること。

す。いずれにしても学校統廃合について、賛否両論がある。しかし、シリングルにおける学校統廃合は計画的に行われていたことがわかる。次は、牧畜地域における学校統廃合について、ウジムチンの事例を通して、50年代からの牧畜地域の学校の変化と2000年以後の学校統廃合の状況、学校統廃合に関する人々の証言を交えつつ考察していく。

## 第 2 節 牧畜地域ウジムチンにおける学校統廃合の事例

### 2.1 西ウジムチンについて

ウジムチン地域はシリングルの東部に位置する（地図 1-1 前掲）。ウジムチン地域は西ウジムチン（Barayun üjümüčin qošiγu）と東ウジムチン（Ĵeyün üjümüčin qošiγu）に分かれている。ウジムチン地域は典型的な草原地帯で、牧畜業が盛んである（写真 2-1、写真 2-2）。2000 年に「西部大開発」が実行されて以来、資源開発が進められている。特に、石炭鉱が発見され、開発が進められているなど、草原の工業開発の現状と将来性が各界から注目を浴びている。写真 2-1 は採掘が進む鉱山で、その手前で羊の群が草を食べながら牧草地に広がっている様子である。このような資源開発、資源採掘において露天掘りは典型的な方法である。しかし、牧畜民はこれを環境破壊とみなし、強い不快感を抱いているのが現状である。



写真 2-1：資源開発が進む山と羊の群（2013 年 8 月、西ウジムチンで撮影）



写真 2-2：牧草地へ向かう馬の群（2013 年 8 月、西ウジムチンで撮影）

西ウジムチン政府によれば、総人口は 72,376 人、そのうちモンゴル民族の人口は 49,215 人で 68%を占め、残りの 32%には漢族、回族、満州族、ダウール族が含まれる。総人口中、牧畜民は 39,914 人で 55.1%を占める。また、図 2-6 からわかるように、2006 年から 2009 年にかけて人口は徐々に増加する傾向にあった。一方では、非都市人口が減少しつつあることがわかる。その要因は都市化が奨励され、牧畜民の町への移住が浸透しつつあったことが挙げられる。牧畜民は町から離れ、草原奥地で家畜を生業しながら生活を営んでおり、非常に分散して居住している特徴がある。その意味で、牧畜生業を営んでいる牧畜民の子どもの通学などには不便が伴うことが想像できる。

2000 年以後はシリングル全土で行政体制改革が行われた。それまでの西ウジムチンに

は 19 のソムと 1 つのバラガスがあったが、図 2-7 からわかるように、2000 年からの行政体制改革により大幅の統廃合を経て、2006 年から 5 つのバラガス、1 つのソムとなっている。

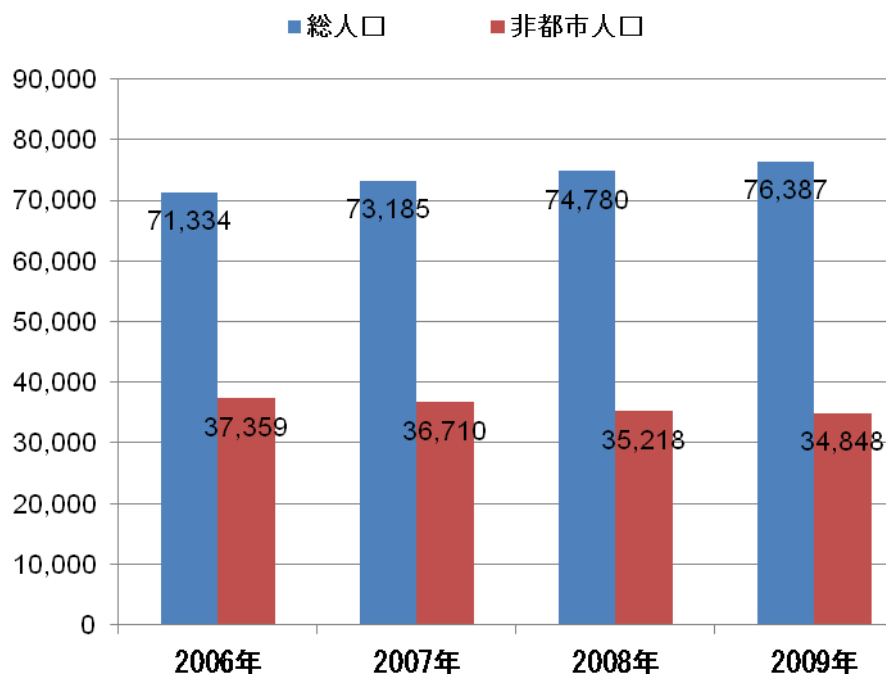


図 2-6 : 西ウジムチンにおける総人口と非都市人口の変化

(出典：内モンゴル統計年鑑 2008；2009；2010 を参考作成。)

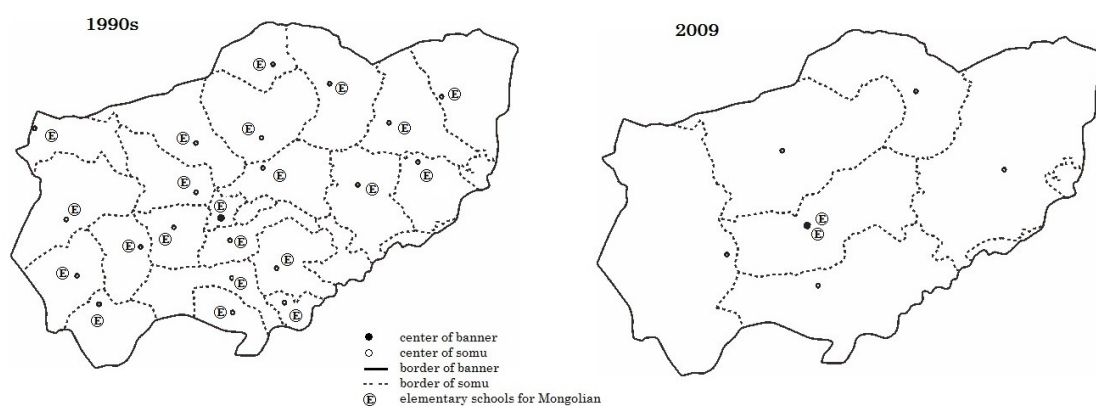


図 2-7 : 西ウジムチンの行政区分の変化と小学校数の変化：90 年代と 2009 年

(出典：Monkbat 2014:196)

西ウジムチンでは行政体制改革の実施に伴い、地方学校の統廃合も行われた。図 2-7

は、西ウジムチンにおけるモンゴル族学校の分布について、90年代と2000以後の状況を比較したものである。90年代には、西ウジムチンの各ソムには21の小学校が点在していた。町には、モンゴル族学校の小学校1校、漢族の小学校3校を合わせて25の小学校があった。それが、2008年現在の西ウジムチンの教育局のデータでは、小学校が4校、中学校が2校、高等学校が1校、合計7校になっている。そのうちモンゴル民族小学校は2校、中学校は1校である。ただし、高校の場合は総合学校で、モンゴル語と漢語でクラスが分かれている。このように20数箇所に点在していた学校が、統廃合後は一箇所に集められている。

## 2.2 学校統廃合についての聞き取り調査

### 2.2.1 牧畜地域における学校統廃合の波

「1950、51、52年の3年間にわたり、3か月間の短期訓練班が設けられ、各機関の指導者、教師や各ソム、ガチャのリーダーを育成していた。または小学校4、5年間の学歴がある人間を重点的に使っていた。私の友人には、小学校5年の学歴で、のちに裁判所に通訳の仕事に就いた。学長を務めた人もいる。その時代は読み書きができる人材は重宝されていた」（70代、牧畜民、女性：資料2-A-01-007）ことがある。当時の学校は人材輩出のための母体として重要な役割を果たしていたことが明らかである。

表2-2：ウジムチン地域における民族学校建設の芽生え

単位：人

時期	場 所	創業者数	学生数	教職員数
1950/10/1	オランハーラガ・スム <sup>29</sup>	2	60	4
1951/8/1	オボート・スム <sup>30</sup>	2	120	5
1952/9/1	インジガン・スム <sup>31</sup>	2	45	4
1952/9/1	シン・スム <sup>32</sup>	2	30	3
1952/10/2	ラマ・イン・フレー・スム <sup>33</sup>	2	90	4

（出典：Yongdun1986:11；1993a:46；1993b:63に基づいて作成。）

<sup>29</sup> オランハーラガ・スム (Ulayaŋqayaly\_a süm\_e) は1691年に建設され、今西ウジムチンのオランハラガ・ソムにある。

<sup>30</sup> オボート・スム (Obuyatu süm\_e) は1723年に建設され、文化革命中に破壊された。

<sup>31</sup> インジガン・スム (Injayan süm\_e) は1733年に建設され、今西ウジムチンのバインホア鎮にある。

<sup>32</sup> シン・スム (Šin\_e süm\_e) は1745年に建設され、今東ウジムチンのドートノール・ソムにある。

<sup>33</sup> ラマ・イン・フレー・スム (Lama-yin küriy\_e süm\_e) は1781年に建設され、今東ウジムチンの中心地のオリヤスタイ鎮にある。



表 2-2 からは、1950 年から牧畜地域における民族学校の普及が本格化したことを確認できる。また、当時は地元のスム（寺院）側の財産や資金などが、モンゴル民族の教育団体の結成や人材育成に大きな経済的な支援を行っていたといえる。歴史の波によって学校の在り方も左右され、統合と分散を繰り返していたことが窺える。Yongdun（1986）は以下のように記述する。1960 年に、人民公社<sup>34</sup>が示した「荒地、牧草地を開発」という方針の下に、分散していたモンゴル・ゲル<sup>35</sup>学校を人民公社の管轄下に集中させ、新たな学校がつくられた。1975 年までは 23 の小学校があったが、その後 75 校が建てられ、計 98 校となった。それらは余りにも広範囲に分散していたため、学校の運営・教育が質的に落ち込み、発展を阻碍した（Yongdun1986:13-15）。

表 2-3：西ウジムチンにおける学校の変遷歴

時期	統合・分散	移動経緯
1956 年	統合	インジガン寺の学校をオボート寺の学校に統合
1958 年	分散	各地域にモンゴル・ゲルを設置し、学校をつくる
1960 年	統合	小中学校をソムに統合
1975 年	分散	各ガチャに学校をつくる
1990 年	統合	各ソムの中学校をバラガスに統合
2003 年	統合	各ソムの小学校をバラガスに統合

（出典：資料 2:B-04-006 に基づいて作成。）

「西ウジムチンにおける民族学校は統合と分散の繰り返しである」（資料 2:B-04-006）といわれる経緯は、表 2-3 に示した通りである。「西ウジムチンの各スムの近くには学校があった。54 年前後インジガン・スムにあった学校はオボート・スムに統合させられた。また、大躍進<sup>36</sup>のとき（58 年から）学校の民営化と称してモンゴル・ゲルを設置し、その前に旗を挙げれば学校と認められたため、学校が瞬く間に広範囲に出現した。70 年初頭にまた統合させが、75 年に各ガチャに学校をつくり、学校を分散させた。例えば、バーチ・ソム<sup>37</sup>の場合は、6 つのガチャそれぞれに小学校がつくられた。それらが後にまたソムに統合させられた」（資料 2:B-04-006）という。90 年には各ソムの中学校だけを西ウジムチンの中心部の町に統合させた。そして 2003 年に各ソムの小学校を町に統合させた。

「昔は 15 人の学生を集めないと学習班を設けることはできず、個人が学習班を開いた

<sup>34</sup> 中国では 1958 年から合作社の合併により組織され、生産手段の公社所有制に基づく配分制度が実行された。人民公社（*renmin gongshe*）は地区組織の単位となり、すべての住民の生産、消費などを行っていた。

<sup>35</sup> モンゴル・ゲル（*Mongyol yer*）、遊牧民の移動式居住で、ゲルともいう。

<sup>36</sup> 大躍進（*dayuejin*）は、1958～61 年に毛沢東の提唱で展開された大衆による経済建設運動。

<sup>37</sup> バーチ・ソム（*bači somu*）は、2000 年までに西ウジムチンにあった 19 のソムのうちの 1 つ。

場合はすべての運営管理を各自で行うという規則があり、個人ではなかなか学習班を開くことができないものだった。当時はモンゴル民族のための学習班はいくつかあった。漢族のための学校はなかった。そして、ほとんどの漢族がモンゴル民族学校で学習していた。漢族の人間だがモンゴル学校で学び、現在モンゴル族学校に勤めている人もいる」(70代、教師、男性：資料 2-A-02-005) と述懐する。また学校運営そのものについて「学校は貧しい庶民の居住地に近いところをつくることを第一に考えなくてはならない。公民に便宜を図り、生活の負担を減らし、子供の通学の利便などを優先する必要がある。今の民族学校の統廃合後の状況に鑑みれば、近い将来また各バラガスに学校をつくるのではないか」(70代、教師、男性：資料 2-A-02-005) と長年牧畜地域の民族教育に専念してきた経験から民族学校の不安定な状況を予測している。牧畜地域の民族学校の展開と統合は、1950年代以後、頻繁に行われてきたことがわかる。

## 2.2.2 民族学校の統廃合に対する人々の発言

2000年以後の西ウジムチンにおける民族学校の統廃合は、それまでの学校統合と異なる一面が認められる。学校統合は教育投資を集中させるのが目的だとされている。しかし、「それは民族学校への投資を減らしていることだ。数少ない学校に大規模で投資するより、たくさんの学校それぞれに少額でも投資した方が牧畜地域の学校にはメリットが大きい」(50代、作家、男性：資料 2-B-02-012) という。

また、「当地域の経済状況と文化背景を考慮して民族学校を展開すべきで、地域密着型のモデルを構築すべきである。西ウジムチンの広さからみて、学校は最低でも4か所(ソムやバラガス)にあるのが望ましい。学校が一か所に限られることは不適切である。学校が遠いため、通学の不便さを理由に進学できない子どももいる。それが教育の普及にも影響することになる」(40代、研究者、女性：資料 2-B-07-008) と指摘する。さらに、「それは、外見的には、ソムの学校は交通が不便、経済的に困難、学習環境が悪いなどといったことが原因で学校を統合した。経済面で運営費がかかるため、行政体制改革と同時に学校を再編している。それは非常に評価すべきところである」(50代、教師、男性：資料 2-B-03-011)。一方、牧畜地域の学校統廃合により、「①150キロ離れたところから学校に通う子どもいる。②子どもたちは幼い時から親を離れて寮で生活をするものの、寮生活の環境に慣れない。よって、③ホームシックなどの問題が生じる。④寮に住めない子どもは、親や親戚が子どもと一緒に市街地に転居する。子どもと同居することで、⑤牧畜民に必要な以上の経費がかかる。それらを原因とし、⑥新しい貧困現象が生まれた」(50代、教師、男性：資料 2-B-14-011) など多くの問題が浮上していることを指摘する。

上記の発言に反映されたように、2000年以後行われた学校統廃合はきわめて不適切であったことが明らかである。そのような不安と不満の声が政府側に認知されたのは2012年

末ごろだと推測できる。「学校統廃合を停止し、牧畜地域、農耕地域など地方における義務教育段階の学校設置状況について計画を立て、国家教育改革組織委員に報告・登録しなければならない。登録が完成する以前の牧畜地域、農耕地域など地方における義務教育段階の学校統廃合することを停止する」<sup>38</sup>と牧畜地域の学校統廃合が適切でなく、それを停止しなければならないという方針が提示された。当通知については、「地域政府、教育機関が示した過去の成果、民族教育関連の政策の成果などが、否定的効果をもたらし、牧畜地域の義務教育の健全な発展を妨げるという、民族教育政策の敗北である<sup>39</sup>」という一面を浮き彫りにする結論を示している。

## 2.3 考察

もちろん、牧畜地域の学校統廃合は合理的ではない、牧畜民に大きな負担を強いるようになったなど、ネガティブな意見が多く見られる。予想通り、民族学校の統廃合を否定的に捉える人が大半であった。牧畜地域における民族学校発展史をたどると、その時代の社会、政策を明瞭に観取できる。だが、中国建国以来 60 年あまりの年月を経たとしても、民族学校や牧畜地域の学校配置は確実な方針や計画の実現を得ていないという民族教育の現状が明らかとなる。牧畜地域における民族学校の統廃合の不適切さは、保護者たちの声にも現れる。実際には、過度の統廃合によって民族学校が一か所に限定される状況である。それが牧畜民と彼らの子弟に大きな不利益を与えたと現地の人々はいう。

学校統廃合は教育投資を集中させることが目的であったとはいえ、統廃合は過剰であったと判断できる。西ウジムチンは典型的な草原地帯であり、総人口の 5 割以上が牧畜民である。牧畜地域での定住化が進んだとされているが、一年を通じ定期的に移動しながら遊牧している世帯もある。牧畜民は、生活の必要により、広い範囲に分散して生活している。そういう意味で、農村地と都市部とは生活様式やパターンが全く違うシステムで機能している。そういった状況では、牧畜民の生活はもとより、子弟の教育問題、特に通学の難易度が大きな問題となる。牧畜地域における人口分散と地域の広さを考慮すると、少なくとも現在の西ウジムチンの 5 つのバラガスと 1 つソムそれぞれに学校があることが望ましい。それが民族教育の普及につながるものであると考えられる。近い将来、再び各バラガスに学校を設置し、民族学校を分散させる可能性があるといわれている。そうした民族学校の分散と統廃合がいつまで続けられるのか、現地の人々は不安を募らせている。ようやく、2012 年末に民族学校の統廃合の禁止が通知された。以上のように、民族教育民族学校関連の政策の如何で変転する状況を注視していく必要がある。

---

<sup>38</sup> <http://www.holvoo.net/article/articleView.do?id=9c383a55-c62b-497d-94e5-f5e333354d66> を参照、2013 年 5 月 2 日最終アクセス。

<sup>39</sup> 同上。

## 第3節 モンゴル人学生による学校選択の実態

### 3.1 モンゴル人児童生徒の学校選択について

牧畜地域におけるモンゴル民族の児童生徒は、母語による教育を受けられているか、その現状について当該地域の人々の意見に耳を傾けてみよう。

「モンゴル人児童が、漢族学校に通わされるケースが多くなっている。モンゴル語で学習しても、モンゴル語を使う機会があまりにも少ないと見なされ、多くの保護者たちは子どもに漢語での教育を要望している。数少ない牧畜民や都会に住む人だけが、子どもたちをモンゴル族の民族学校に通わせているのが現状である。今は、児童が幼稚園に入る以前の段階で、すでに漢語を修得している。ある保護者によれば、孫をモンゴル族幼稚園に通わせると、今まで活発でいた孫が寡黙になり、座ったまま身動きせず、他の児童とのやり取りもなくなってしまったという。そこで、親が仕方なく漢族の幼稚園に通わせたところ、孫は活発に戻ったそうで、その変身ぶりに驚いていた」(70代、教師、女性:資料2-D-05-004)と述べる。

また、「90年代には、モンゴル人の親たちが子どもを中国の名門学校に進学させ、良い就職先を得ることを目的に、子どもを漢族学校に通わせていた。この数年間は、当時の子どもたちが大学に進学する年代となった。しかし、親の期待通りに区外(内モンゴル自治区以外)の名門大学に進学した学生は、親の希望とは裏腹にごくわずかだった。その要因は、漢語で学習を行ったとしても、中国における受験競争率はあまりにも厳しかったからである。この残酷な事実を耳にした近年のモンゴル人の親たちは、子どもをモンゴル民の幼稚園に通わせ始めている。フフホト市では、モンゴル民族幼稚園の開校日前夜から長蛇の列ができたことがあった。今でも入園ができなくて順番待ち状態である」(40代、研究者、男性:資料2-H-07-009)と語る。都市部においては、子どもにモンゴル語で教育を受けさせる取り組みが広がっているともいえよう。

牧畜地域の町では、「A幼稚園では、2008年から入園児童が増えている。西ウジムチンの政府は新しく保育園を開くことにした。一方、個人が運営する幼稚園も毎年増加している。A幼稚園はモンゴル族と漢民族を問わずに募集し、モンゴル語クラス、漢語クラスに分けている。モンゴル語クラス、漢語クラスのどのクラスに通わせるかは親が決めている。政府からは児童の生活補助金が出ている。保育費と管理費を合わせて700円で、40%をシリントン政府が、60%を西ウジムチン政府が出している。それも入園児が増えた要因だと思う。以前は、牧畜民の児童は幼稚園に通わず、就学年齢になれば直接小学校に入っていたことが多かった。政府からは牧畜民が都市に移住することを奨励され、さらに、入園児に補助金を出しているために、保護者たちの子どもを保育園に通わせる意識も高まったと

思う。しかし、問題点として浮上することは、①A 保育園は 300 人が定員だが、それをはるかに超えた 700 名（2011 年現在）の児童が在籍している。②子どもたちが入園できない状態で、来年（2012 年）9 月に入園する子どもが今年の（2011 年）9 月から志願している」（40 代、教師、女性：資料 2-G-16-013;G-17-013）という。

このように、モンゴル人児童を取り巻く言語環境は大きく変容しており、児童は入園時にはすでに漢語を修得しており、漢語による教育が優位になっている状況が読み取れる。また、都市部では親たちの強い願望によって進学する学校が選択されものの、風潮の変化によってその選択がゆらいでいることが、保護者たちの反応から感じられる。モンゴル語による教育を子どもに受けさせようという姿勢も強まっていることが分かる。牧畜地域の就学前教育が最近になって着実に進展していることが読みとれる。しかし、その体制はいまだに整っていないこともまた指摘できる。次は、牧畜地域における言語教育に関し、人数と割合を把握したい。

内モンゴル全土ではモンゴル人の子どもたちが漢族学校に通っていることは先行研究でも指摘されてきた（岡本 1999；ハスエルドン 2005；フレルバートル 1997）。特に都市部では、漢族学校に通う少数民族の子どもたちが年々増えている。しかし、牧畜地域では何人のモンゴル人の学生がどれぐらいの割合で漢語による教育を受けているか、その具体的な数値はほとんど示されていない。

### 3.2 西ウジムチンにおける民族学生の学校選択

表 2-4：2007～2008 年度西ウジムチンにおける学生統計

単位:人

区分	学生総数	民族別			教育言語別		非母語教育
		モンゴル族	漢族	その他 <sup>40</sup>	モンゴル語	漢語	モンゴル人
幼稚園	651	399	245	7	205	446	48.6(%)
小学校	4,430	3,141	1,227	62	2,139	2,291	31.9(%)
中学校	1,799	1,521	263	15	1,295	504	14.9(%)
高校	1,319	1,052	247	20	914	405	13.1(%)
合計	8,199	6,113	1,982	104	4,553	3,646	25.5(%)

（出典：調査資料に基づいて作成。）

表 2-4 は、「西ウジムチンの 2007～2008 年度」の 5 つの幼稚園、小中高校 7 校の各学

<sup>40</sup> その他には、回族、満州族、ダウール族が含まれる。

校における学生総数、教育言語別と民族別の学生数を示したものである。まず、表の「民族別」と「教育言語別」の項目を比較してみる。小学校の場合は、西ウジムチンにモンゴル族小学校が2校、漢族小学校が2校ある。モンゴル人生徒は3,141人、そのうちモンゴル語で教育を受けている生徒数は2,139人である。したがって、小学校の段階で漢語による教育を受けているモンゴル人児童の数は、差し引き1,002人となる。これはモンゴル人学生総数の31.9%に当たる。また、中学校の場合は、モンゴル族中学校が1校、漢族中学校が1校ある。中学校の段階では、モンゴル人学生は1,521人、そのうちモンゴル語で教育を受けている学生数1,295人であり、その差は226人で、約14.9%となっていることが分かる。表2-4の「非母語教育モンゴル人」の項目において、2008年現在で西ウジムチンにおける漢語での教育を受けているモンゴル人学生数は、モンゴル人学生総数のうち、それぞれ、幼稚園48.6%、小学校31.9%、中学校14.9%、高校13.1%の割合に当たる。合計でも、25.5%となる。

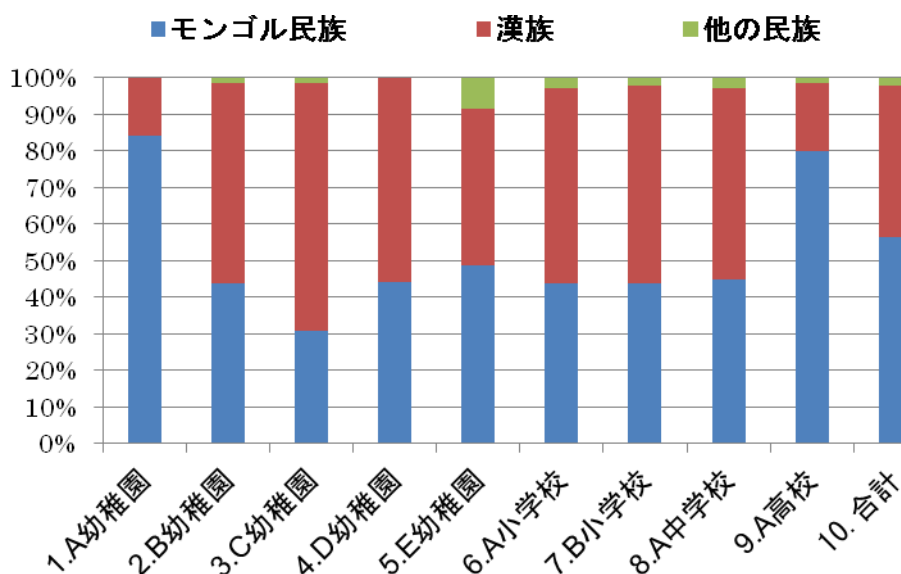


図2-8 漢族学校で教育を受ける各民族学生数の割合

(出典：調査資料に基づいて作成。)

では、幼稚園から小中高校の各段階での漢族学校だけで、それぞれに在籍する児童生徒中、モンゴル人出身の学生がどの程度の比率に当たるだろうか。各学校の漢族学生数とモンゴル人学生数およびその他の民族の比率を確認する。図2-8は、西ウジムチンにおける9つの漢族学校（その中、幼稚園が5つ）および漢語クラスに通うモンゴル人児童生徒の割合を示したものである。回族、満州族、ダウール族も一定の割合を占めていることが

わかる。図 2-8 の A 幼稚園と A 高校は、総合学校のため、モンゴル族と漢族が同じ学校に通い、クラスと教育言語が分かれている。漢語学校（クラス）で漢語による教育を受けているモンゴル人の子どもたちは、それぞれの学校で 3 割から 5 割を占めていることが表からわかる。例えば、A 小学校には 1,248 人の学生が在籍する。その内訳は、漢族が 664 人、モンゴル族が 546 人、回族が 25 人、満州族 8 人、ダウール族が 5 人である。モンゴル人学生は当校全校生の 43.8% の割合を占めている。全体の合計から見ても、2008 年現在、西ウジムチンにおいて漢族学校（クラス）に 3,645 人の学生が在籍している。そのうちモンゴル人児童生徒は 1,559 人で、43% に当たる。つまり、1,559 人のモンゴル人児童が漢族学校に在籍し、漢語で教育を受けていることになる。

図 2-9 は、西ウジムチンにおける A 高校に在籍しているモンゴル人学生をモンゴル語と漢語による教育言語別に、2007 年、2008 年、2009 年の 3 年間の変動を表したものである。A 高校は西ウジムチンの唯一の高校で、モンゴル民族、漢民族及びその他の民族が混在する学校で、モンゴル語と漢語のクラスに分けられている。この学校のような例は内モンゴルでは多くみられる。西ウジムチンの高校に在籍するモンゴル人学生総数は 2007 年から順次、1,319 人、1,459 人、1,462 人と右型上がりになっている。その一方、漢語教育を受けるモンゴル人学生も 138 人、193 人、277 人と年々増えていることがわかる。モンゴル民族学生の中で漢語教育を受ける学生は、割合からみても 10.5%、13.2%、18.9% と増加していることがわかる。

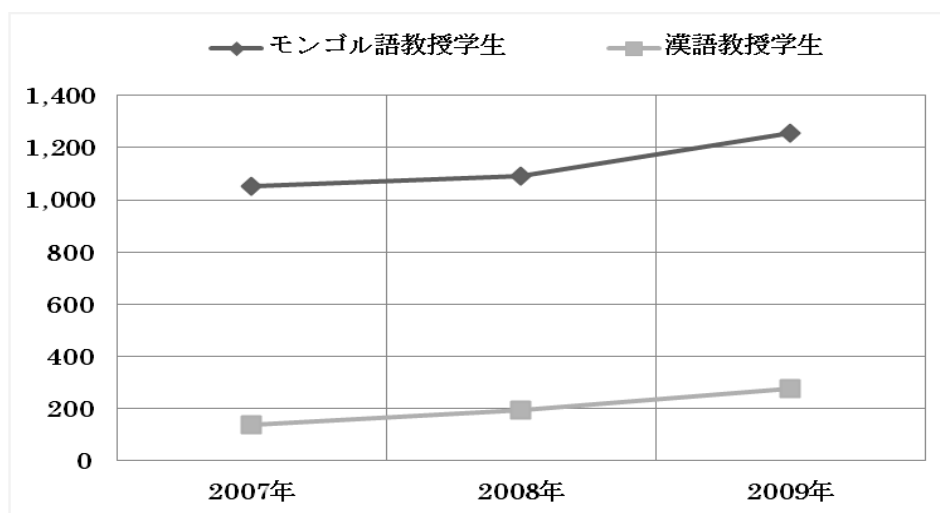


図 2-9：西ウジムチンの A 高校のモンゴル人学生の推移

(出典：調査資料に基づいて作成。)

### 3.3 学校選択に関するアンケート調査から

一次アンケート調査は、2012年11月にシリングル西北部の3つのホショーとフフホト市の小中高校生と大学生を対象に、121人の学生を対象に実施したアンケート調査の結果である。まず、調査対象者の家庭環境をみる(図2-10)。親の職種については、父親が牧畜民という回答が62.8%、母親が牧民という回答が64.5%で、家庭が牧畜業に従事している点に着目できる。遊牧民の家庭の子どもは非常に高い割合を占めている。その他に公務員<sup>41</sup>、自営業、運転手、農民という職種も一定の割合で確認できる。小中高校生に限りこれらの職種は、親が町に常住し、その町で生計を立てていることを示している。

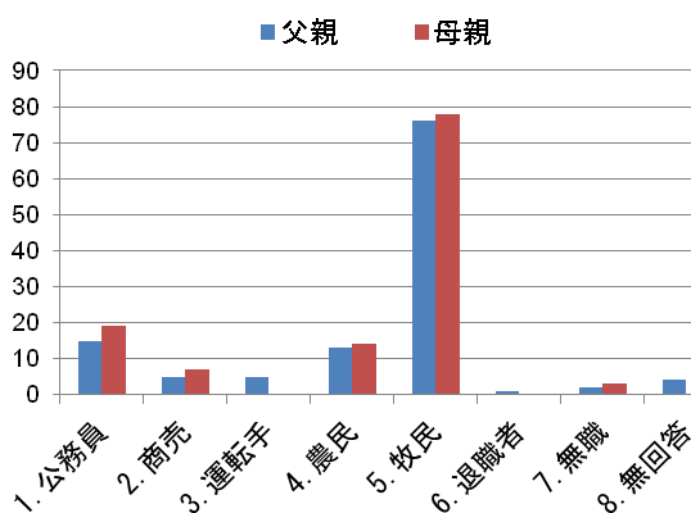


図2-10：モンゴル人学生の親の職種

(出典：アンケート調査に基づき作成。)

モンゴル人学生の中では、モンゴル民族学校に通わずに、直接漢族学校に通う学生が増加している。この現象はモンゴル族学校の学生の漢族学校への流出を意味しており、モンゴル民族の教育について考える上で大きな問題の一つであると考えられる。もちろん、民族学校の学生数が減少すればするほど、民族学校そのものの存続に直接的影響を与えることになる。アンケート調査において、学校選択について全体的には「親の意向」という回答が比較的多く、26%に当たる。それと平行して「学校の魅力」という項目も26%である(図2-11)。特に小学生の回答の中にそのような回答が目立った。具体的な「学校の魅力」には、様々な回答が見られる。たとえば、大学生の中には「学校の知名度が高い」という記入例がある。小中学生は、「管理が適切である」「教育のレベルが高い」「学校の設備がいい」などと記入している。中でも小学生の「環境がいい」という回答例が非常に多い。「環境が

<sup>41</sup> 公務員に警察、共産党幹部、教師、医者、家畜医、通訳の仕事が含まれる。



いい」ということは、学習環境、施設や設備が整っていることに加えて、やはり、知名度の高さが「いい学校」という評価をもたらしたと考えられる。小学生のそのような「学校の環境がいい」という表現の裏には、当然親からの影響が加味されていよう。小学生による「管理がいい」「教育のレベルが高い」といった評価は、親を主とする社会的な強い影響が評価に作用したと考えられる。小学生が学校について全体的に把握し、そのような評価判断を下すのは常識的には困難であろう。

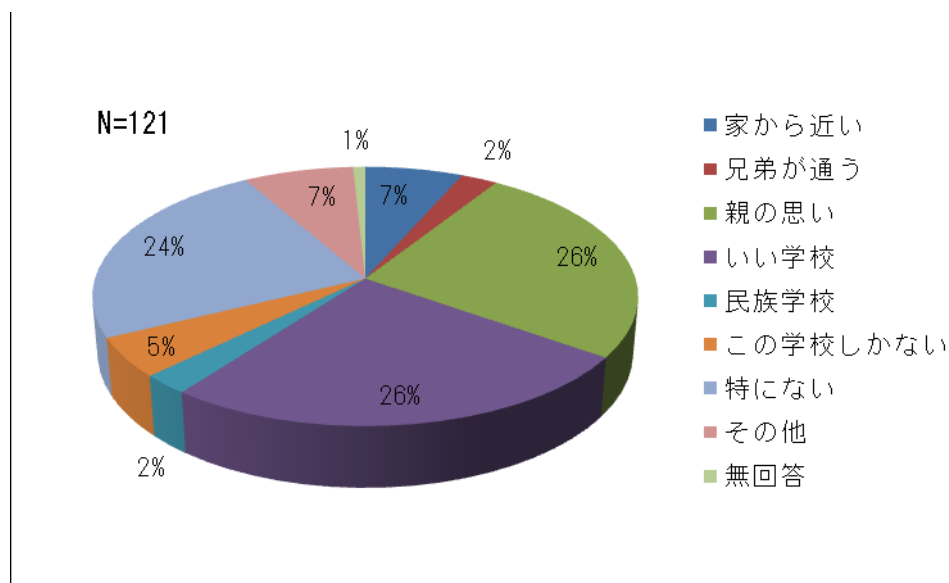


図 2-11：今通う学校を選択した理由

(出典：アンケート調査に基づき作成。)

### 3.4 学校選択の今日的意味

学校選択において、学校の位置条件、設備施設の状況、教員体制、自分の関心がある分野の有無が最優先に考えられるだろう。しかし、多数者、少数者という力関係があるときは、より高い地位を得るための、自分にもっとも利益のあるほうが選ばれる可能性がみえ始めている。

「新疆では若い世帯は子どもを漢族学校に入れていることがもはや漢語教授の流行になっている。内モンゴルではそれと逆の流行が起きている。モンゴル人は家庭が二人以上の子どもを生むようになってきている。子どもにモンゴル語で教育を受けさせるなどの現象がおきている。内モンゴルでのモンゴル語への流行のきっかけは：①年輩の人々の教訓がある。年輩の世帯は子どもを漢語による教育をうけさせた。著名な学者たちもそうだ。彼らの子どもが大きくなって漢族の嫁や婿を連れてくるようになった。それが家庭環境、価値観に大きな変化をもたらした。モンゴル民族古来の人間関係が変わった。例えば、親の面倒をみないなどがあげられる。それで年配の方たちは子どもを漢語で教育させることは大きな間

違いという結論を出し、内モンゴルの社会全体に呼びかけている。漢語で教育を受けることで子どもの価値観が変わり、漢族との結婚が、親の理想と子どもの理想に溝を生じさせてしまった。②モンゴル文化域 (mongyol suyul-un orun) 建設というスローガンの誕生もある。モンゴル文化がモンゴル人の誇りであり、売りであると認識し始めている。モンゴル民族の衣食住などモンゴル民族ならではの特徴がうまれる。モンゴル文化が内モンゴルの象徴である。自分の文化に価値があることに気付いた。③国連からの少数言語文化の保護の提言が大きな影響があり、新たな認識がうまれている。④モンゴル語で教育を受けることによって漢語で教育を受けるより、少なくとも一つのことばを多く身につけることができる。漢語で教育を受ければモンゴル語を忘れてしまう場合が多い。だから、モンゴル語で教育を受ければ、ことばの資源が多いと捉えている。モンゴル語で教育を受ければ他の言語を習う時に勉強しやすと言われていた。この流行はフフホト市だけの現象であり、如何に地方に伝えていくが課題である」(50代、研究者、男性：資料 2-E-11-17) と語る。都市部においてこのような現象もあり、モンゴル語による教育への関心を寄せ始めているといえよう。

一方では、「シリンホト市では、経済的裕福な家庭は子どもを漢族学校に行かせるようになってきている。時代の流行のようになってきている。モンゴル族学校の学生減少が民族教育に直撃影響を与える。シリンホト市では、小学校が 10 校あり、中学校は 6 校ある。中学校の中で、モンゴル族だけの学校が 1 つしかない。今うちの学校では 200 人以上の教員がいる。今のところでは、モンゴル人教員採用の枠がない状況である」(30代、教師、女性：資料 2-G-07-036)。「チャガーン・ハバには小中学校がありました。今は、小学校が残され、中学校が旗中心部に移動させられている。変化として、裕福な家庭、教師や幹部らは子どもを町の中心部に行かせ、漢語で教育を受けさせる。牧畜民、貧しい家庭、親がない子どもなどがモンゴル族学校に行くという。子どもが何語で教育を受けているかによって社会的階級を見抜くことができる」(50代、研究者、男性：資料 2-I-07-017) という。「うちの学校には、400 人以上の学生がいる。約 70 人がシリンホト出身の子どもだ。シリンホト市は、80%のモンゴル人の子どもたちが漢語による教育を受けている実態がある。牧畜地域では生活的、経済的余裕がない人たちの子どもがモンゴル語で教育を受ける。また、教養があると見なされ、安定した職に就いた人はおおよそ子どもを漢語で教育させる。知識層や富裕層の人たちが漢族学校に行かせる」(50代、教師、男性：資料 2-H-03-034) という。

「うちは子どもを漢族学校に通わせている。今は、漢族学校に行かせたことをとても後悔している。自分は漢語が苦手なで、①子どもの宿題を手伝うのに苦労している。子どもが勉強できているか、いないのかわからなくてとても心配する。②漢族学校でかかる雑費が多い。学費と教科書代は払わないがそれ以外で、補助資料などをいっぱい買わせる。モンゴル族学校にはそのようなものはない。③子どもを漢族小学校にいかせる時は何も考えていなかった。子どもの父が漢族だから漢族の学校に行かせた。私自身は漢語による日常会

話は不自由なく通じる。でも、漢語の読み書きができない。子どもの成績は、語文（漢語）、数学、英語の三科目がすべて 90 点以上の成績でも、クラス内では、高い順位に入れない。それで④漢族学校では競争率が高いということを実感している。いかにいい成績を取ってもいい学校に入れないということを実感している」（30代、主婦、女性：資料 2-G-08-035）というような事例があるという。

アンケート調査から学校選択はほとんど親の意向で決められることがわかった。学校の良さ、いわゆる学校の施設設備の良し悪し、教員体制などが決め手あることも浮上してきた。しかし、聞き取り調査からは、経済的裕福な家庭、安定職に就いている家庭ほど漢族学校に行かせるということがわかった。牧畜民や生活的不安定、社会的地位が低い家庭がモンゴル民族学校に子どもを行かせるという。子どもをどの学校に行かせているかによって、家庭や親の社会的地位がわかるという結果になっている。

### 3.5 考察

モンゴル人の児童生徒が母語であるモンゴル語による教育を受けず、幼稚園時から漢語で教育を受けている。こうした現象は、先行研究においても多く指摘されている。モンゴル人の児童生徒が、幼いころから漢語の世界に溶け込むことは、モンゴル族の言語・文化の発展に様々な影響を与えることになる。現地の人々の意見からも、モンゴル人の子どもたちを取り巻く言語環境が大きく変容しており、児童は入園時にすでに漢語を修得しており、漢語が優位になっていることが読み取れる。それによって、教育言語もモンゴル語から漢語にシフトしてきていることが確認できる。

また、親たちの強い要望によって入学・進学する学校が選択されるものの、時代風潮により選択にゆらぎが現れている。都市部においても、モンゴル語による教育を子どもに受けさせようという姿勢も強まっていることが分かる。牧畜地域の就学前教育は、最近になって着実に進展している。地方政府から補助金が提供されるなど、児童を入園、進学できるように努力していることが窺えるが、幼稚園の数や広さによって全員は入園できない状況である。都市部にしても、牧畜地域にしても、その体制がいまだに整っていないことが指摘できる。

さらに、牧畜地域においてどれほどの学生が漢語で教育を受けているか、その割合や数値の傾向を調査した結果、2008年の時点では、モンゴル人の児童生徒のうち、漢語による教育を受けている（あるいは漢語学校に在籍中の）児童生徒の幼稚園、小中高校の各段階でのモンゴル人学生総数に対する割合は、高等学校で 13.1%、中学校で 14.9%、小学校で 31.9%、幼稚園で 48.6%にそれぞれ当たっている。図 2-9（前掲）にも示したように、高校に在籍するモンゴル人学生数が増えるにつれて、漢語による教育を受ける学生も 2007年、2008年、2009年それぞれが 138人、193人、277人と年々増加の傾向にあることが

わかる。モンゴル人学生が漢語学校に通うという問題が、牧畜地域にも広がっているといえる。

マティアス（2010）は、民族的少数派は、たいてい様々な偏見に直面している。さらに偏見が偏見を生み、他の面でのイメージの悪さから言語が否定的に見られるのである。こうした少数派の言語は、「後進的」「田舎」「貧困」といった否定的イメージを植えつけられていくのである。しかし、台湾の先住民や日本のアイヌ人といったアジアの国々における少数派は、自身に対するこのような偏見をよはやよしとせず、差別と戦っているのである（マティアス 2010:20）という。表 2-5 からわかるように、牧畜民は「居住地」「生業」「社会的地位」からみて「否定的」概念に分類される。そのような否定的な要素もあり、モンゴル語の教育、牧畜環境よりも漢語の教育、都市部での生活環境が好まれていると思われる。次の節では、牧畜民の生活環境について考察する。

表 2-5：民族的偏見全般に関する対立的項目

コンテキスト	否定的	肯定的
居住地		
	田舎（遠隔地）	都会
生業		
	狩猟採集民	牧畜民
	牧畜民	農耕民
	農耕民	都会労働者
宗教的帰属		
形態	特定集団	支配的宗教
信仰体系	古い	新しい
社会的地位		
	後進的	現代的
	貧困	富裕
	政治的弱者	代表的
	教養がない	教養がある
言語		
話者	少数	多数
使用領域	家庭	多領域
媒体	口頭	文字
地位	低い	高い

（出典：マティアス 2010:20 から引用。）

## 第4節 内モンゴルにおける子どもたちとその生活環境

### 4.1 牧畜民たちの生活環境

#### 4.1.1 牧畜民の年間行事の変容

牧畜民の生活においては、四季折々の行事が定められていた(小長谷 1991; 児玉 2012)。牧畜民は、家畜に依拠した生活を営んでいるため、家畜、牧草地、水は日常の中でなくてはならない要素である。これらの繋がりを有効に保たなければ、生活が保障されない。家畜は大切な財産であり、命綱である(鯉淵 1992:97)。家畜は、春に出産期を迎え、体毛が生え代わり、精力が強まっていく。夏には涼しい風、新鮮な水と草を求めて行動範囲が広まる。秋は、脂肪質に富んだ秋草を食べ、体は一段と大きく成長し、越冬のための冬毛が生える。冬になると家畜は雪を食べ、枯れ草を食べ、塩分がある土をなめる。また、家畜は温暖な季節には向かい風を求め、寒冷な時期には逆風に追われる習性がある。牧畜民は家畜のその様な絶え間ない変化や行動を察知し予測し行動しなければならない。

一方では、社会的変貌に伴い、牧畜民の生活基盤に多くの変化がおきて、家畜とともに催す年間行事も変化しつつある。表 2-6 は、西ウジムチンの牧畜民数人に対して実施した聞き取り調査に基づき作成したもので、1993年と2013年の比較である。1993年は、人民公社政策が廃止されてから10数年、牧草地が各家庭に分配されてから間もない時期であり、牧畜民たちの生活が充実し始めた時期でもある。山、谷、川、道など地理的特徴を目印に大まかに分配されていた各家庭の牧草地がもっと詳しく計り直されていた。その数年後からウジムチン地域では牧草地に柵を立て始め、定住化が本格化された。

それから20年後、2013年になるとあらゆる面に亘って大きな変化が起きていることがわかる。まずは、調査対象の家庭では養う家畜の種類が、ラクダ、牛、馬、羊、ヤギの5種類から馬、羊、ヤギの3種類に減少したことが挙げられる。今は、羊のみ、馬のみ、牛のみといった、単一種類の家畜を扱う家庭が増えている。特に、ウジムチン地域は「ウジムチン羊」という地域のブランド羊の生産地である。よって特産の羊を扱う家庭が多い。家畜の種類が限定された大きな要因は、人手不足と家畜の買収価格の高騰だという。それと同時に、家畜のための人件費の値上がり、牧草、飼料の値上げも要因として数えられる。

2000年以後牧畜民にとって新たに課された条件は、家畜の放牧禁止である。政策としてすでに「放牧禁止」が実行されている。主な理由として、砂漠化などの環境問題が挙げられる。完全に放牧が禁止された地域もある。砂漠化が深刻な状況でない地域においても、4月から5月にかけての45日間は家畜放牧禁止政策が行われている。この期間は、家畜の放牧が規制され、家畜小屋での飼育を余儀なくされる。牧畜民はこの時期のために牧草、飼料を準備する必要があり経済的支出も多くなり、繁忙期となっている。また、調査対象

家庭の E 家<sup>42</sup>においては、馬の乳搾りと羊の冬季出産を行うことで経済的に大きな利益をもたらしている。では、それらについて見てみよう。

表 2-6 : 牧畜民の家畜にかかわる年間行事

時期	1993 年	2013 年
1 月、2 月	I. 冬オトル移動 <sup>43</sup> の帰り	1. 羊ヤギの牧草飼料飼育 (5 月中旬まで)
3 月	1. 小型家畜 <sup>44</sup> の出産 (一ヶ月)	2. 羊の出産、ヤギの出産 (一ヶ月)
4 月	2. 大型家畜 <sup>45</sup> の出産 3. 家畜の去勢、印付け、耳印 (一日) 4. 馬のたてがみきり (一日) 5. 馬の訓練 (一週間/一頭) 6. 牛の糞集め (二週間)	3. 家畜放牧禁止 (45 日間) 4. 馬の出産 (一ヶ月半) 5. 馬のたてがみきり、去勢、印付け (一日) 6. 馬の訓練 (一週間)
5 月	7. 牛の搾乳 (10 月末まで) 8. 毛刈り (羊、らくだ) (一ヶ月) 9. ヤギ毛取り (一ヶ月) 10. 競争馬訓練 (約 3 ヶ月) 11. 子羊の毛刈り (数日)	7. 羊毛取り、ヤギ毛取り (一ヶ月) 8. 子羊の毛刈り (数日)
6 月	II. 夏営地へ移動	I. 夏秋営地へ移動
7 月	12. 乳製品の貯蔵 (約 4 ヶ月) 13. 家畜の予防接種 (数日)	9. 馬の搾乳 (二ヶ月) 10. 子羊売出し (数日)
8 月	III. 秋営地へ移動 14. 毛皮の加工処理第一弾 (2 週間) 15. 牛の訓練 (1 週間) 16. 家畜の売出し開始 17. 家畜小屋の修理補強 (1 週間)	11. 草刈 (刈り、組む、運ぶ) (一ヶ月) 12. 種羊ヤギの群れへの合流
9 月	18. 草刈 (刈り、運ぶ) (一ヶ月半)	13. 家畜の売出し開始
10 月	19. 種羊ヤギの群れへの合流 20. 毛皮の加工処理第二弾 (数日)	II. 冬春営地へ移動 14. 家畜小屋の修理補強
11 月	IV. 冬春営地へ移動 21. 家畜の牧草飼育 (4 ヶ月)	

<sup>42</sup> E 家は西ウジムチンに居住し、馬を中心的に飼っている。30 代の両親と二人の子どもの 4 人家族の家庭である。

<sup>43</sup> オトル移動(otor negüdel)は、一般の遊牧とは異なり、短い期間や少人数で行う遊牧のこと。

<sup>44</sup> 小型家畜(boy mal)には羊とヤギが含まれる。

<sup>45</sup> 大型家畜(boda mal)にはラクダ、牛、馬が含まれる。

12月	22.冬オトル移動（約一週間かけて着く） 23.越冬用食肉のための家畜屠殺（数日） 24.家畜への塩分供給 25.政府からの家畜の年末カウント 26.政府に家畜税金支払い 27.政府に牧草地税金支払い	15.越冬用食肉のための家畜屠殺（数日） 16.家畜への塩分供給 17.家畜の牧草飼育 18.牧草地の補助金を受け取る 19.政府からの家畜の年末カウント
-----	---	---

（小長谷 1991；児玉 2012:88-89；現地調査に基づいて 2014 年 5 月 7 日作成。）

#### 4.1.2 馬の搾乳



写真 2-3：馬の搾乳

（2013 年 8 月西ウジムチンに撮影。）

馬の搾乳自体は昔から行われていた（梅棹 1990；鯉淵 1992）。E 家は、かつては小規模で自家用として搾乳し発酵させて飲み物にしていた。現在では、町の病院と契約を結び、6 月から 8 月の間二ヶ月間は馬乳を提供している。病院側はモンゴル薬に併用することもあれば、栄養飲料として患者に飲ませているという。2012 年には 10 頭、2013 年には 20 頭の馬を搾乳しているという（写真 2-3）。モンゴル語では馬乳を *gegün-nü sü* という。*gegüü* は子どもを産んだ雌の馬で、*sü* は乳を意味する。発酵させた馬乳をチェゲー (*čege*) と呼ぶ。生乳の値段は 1kg あたり 30.00 円で、チェゲーの場合は 1kg あたり 40.00 円で高

く売れる。表2-7はそれぞれの一日の生産量と出荷時の収入の目安を示したものである。一日に取れる馬乳はおよそ 35kg である。当家庭は、チェゲーにして売る場合は、衛生管理や労力などにコストがかかるので搾りたての馬乳だけを二ヶ月間病院に提供している。収入は二ヶ月で約 63,000 元になる。馬を中心に扱っている E 家にとって、馬乳を売って得られる収入は家庭の経済的支えになっていることがわかる。

表 2-7：馬乳とチェゲーの買収額と収入

	買収値段	量	総額
馬乳	30.00 元/kg	35 kg /日	1,050 元
チェゲー	40.00 元/kg	35 kg /日	1,400 元

(出典：聞き取り調査の資料に基づいて作成。)

#### 4.1.3 羊の冬季出産



写真 2-4：真冬に双子をもつウジムチン羊 (2012 年 1 月西ウジムチンで撮影)



写真 2-5：家畜小屋で生まれたばかりの子羊 (2012 年 1 月西ウジムチンで撮影)

1993 年には、小型家畜の出産が 3 月からで、ほぼ雪解け後に天候も春めいてから始まり、4 月から大型家畜の出産となっていた。2013 になると、ほとんどの家庭では、真冬の 1 月から小型家畜の出産シーズンを迎えられるようになっている(写真 2-4、写真 2-5)。かつては「家畜の冬季出産はありえない。冬の寒さは、羊やヤギの生まれたばかりの子どもが凍死するほどで、誰もそれを避けていた。家畜の冬季出産をやって成功した例はなかった」(70 代、牧畜民、女性：資料 2-L-01-015) という。しかし、現在は経済的利益を考慮し、家畜が早く生まれれば、当然出荷時にはそれなりの大きさとなるため高い値段で売れるという。そのための設備、牧草、飼料などがそろわなければ、羊の冬季出産は困難だという。冬季出産について「春になると仕事が集中することを避けられる。子羊に早い時期から飼料が与えられるから、売り出すときは高い値段で売れる。家畜の頭数を早期に減らせば、牧草地の保護につながり、金銭的支出も減る」(30 代、牧畜民、女性：資料



2-L-02-041) と述べたように、様々なメリットがあるという。

その他にも政府から「子羊の補助金」があるという。「旗政府は牧畜民を羊の冬季出産に転向させるため、旗全体の牧畜民に 2,298 万元の補助金を交付し、世帯平均支給額が 4,787 元となった。補助金交付期間中は 355,000 頭の子羊を出荷することができた (Üjümüčin čimegelel 2010:11)」そうだ。それは子羊をある一定の基準で食肉会社を買取り、売った子羊の頭数に準じ政府から各家庭に補助金を出すというシステムである。売買には、「①子羊の体重が 25kg 以上。②補助金の対象になる時期は毎年の 6 月 15 日から 7 月 15 日の間。③政府からの補助金は 1kg にあたり最高 5.00 元」(50 代、研究者、男性：資料 2-L-02-041) といういくつかの基準が設けられている。表 2-8 は、売り出した子羊に対する補助金と時期の対応を示している。補助金の対象は、6 月 15 日から 7 月 15 日の一ヶ月間で、補助金の最高額が 1kg あたり 5.00 元で、5 日ごとに補助金額が減額され、最終的に 1kg あたり 0.40 元となる。表 2-9 は、子羊一頭当たりの平均収入の 2012 年、2013 年と 2014 年の比較である。子羊の平均重量は 35kg で基準重量を上回っている。買収金額は 1kg あたり 26.00 元から 28.00 元に増額しているように、2013 年には高く売れていることがわかる。しかし、今年 2014 年には家畜の買収価額が落ちていることがわかる。全体から見て、牧畜地域において様々な政策などの影響で牧畜社会や牧畜生活そのものも変わりつつあるといえる。生活の維持のために、経済的利益を最優先に考えざるを得ない状況である。では、子どもたちの生活環境と実態についてみてみよう。

表 2-8：売り出した子羊に対する補助金と時期の対応

日時	6 月			7 月		
	15-20 日	21-25 日	26-30 日	1-5 日	6-10 日	11-15 日
補助金額	5.00 元	4.00 元	3.00 元	2.00 元	1.60 元	0.40 元

(出典：現地調査資料に基づき 2013 年 9 月 5 日作成)

表 2-9：子羊一頭当たりの収入 E 家の場合

	重量	買収金額	小計	補助金	小計	総額
2012 年	35kg	26.00 元/kg	910 元	5.00 元/kg	175 元	1,085 元
2013 年	35kg	28.00 元/kg	980 元	5.00 元/kg	175 元	1,155 元
2014 年	30kg	20.00 元/kg	600 元	4.00 元/kg	120 元	720 元

(出典：現地調査資料に基づき 2014 年 7 月 3 日作成)

## 4.2 子どもたちの生活の実態

### 4.2.1 家庭の状況

上述の通り、社会的な変化が牧畜民の家庭においても大きな変化をもたらしているといえる。都市化などの政策に従い町に転居できない家庭の子どもたちの状況を確認したい(写真 2-6、写真 2-7)。E 家は二人の子どもがいる 4 人家族である。下の子は今 4 歳で、まだ保育園に行かずに家で両親のそばにいる。当家は、約 50 頭の馬を中心に生計を立てている。羊は 200 頭程度、ヤギと牛は少ない。人手が足りなくて、家畜を他人に委ねるのも人件費がかかるので、2013 年末までに牛をすべて売却する予定である。



写真 2-6：子馬に乗る牧童（2011 年 8 月撮影）



写真 2-7：毛皮の民族衣装を身にまとう牧童（2012 年 1 月撮影）

E 家における子どもの教育や生活について、「うちは家畜が比較的に多いので、他人の牧草地を借りて転々と移動を繰り返してきた。自分の持っている牧草地は一人分しかない<sup>46</sup>。昨年までは、自分の牧草地と他人から借りた牧草地の 2 箇所の間を行き来していた。夏秋には借入地で、冬春には所有地で過ごしていた。2013 年 6 月からは新しく広い牧草地を 5 年契約で借りたのでしばらくはここで生活する。自分のところの草を刈って売れば現金収入になるため、借りた牧草地の代金に当てつもりでいる。今の状況では牧畜の仕事が忙しく、他の仕事はできないので、町に移住してもまともな生活をできる確証がない状況である。これから政府からの牧草地利用に関する政策がどう変わるかはわからないが、しばらくは牧畜をやり続ける。だから町に行って子どもの面倒も見切れない。上の子を 6 歳の時から町に行かせて、去年（2012 年 9 月）から小学校予備クラスに入れた。町にいる親戚にお願いして預けていた。子どもはまだ小さいので、親から離れて生活するのは大変だった。子どもにはつらい思いをさせたと思う。彼はもう町の生活が二年目で、小学校 1 年生になり、学校の寮に住んでいる。金曜日の夕方学校が終われば、金土日の 3 日間は町に

<sup>46</sup> 牧草地を個人に分配するとき地域によって割り与えられた広さが違う。当時のその地域の持っている土地の広さと当地域の住民の数によって、一人に与えられる牧草地の広さが異なる。当地域では一人当たり千畝である。

ある親戚の家で過ごさせてもらっている。週末になれば、学校にはほとんど学生がいなくなるので、子どもが寂しいし、親としても不安。これが現状である。一方では、家にいる子は、幼稚園に行かせる年齢だが、どうするかはまだ迷っている。彼は昼間は大人がみな外で家畜の世話など仕事なので、彼は大人たちの周りで遊んだり、家畜小屋で休んだりしている。早く幼稚園にも行かせたいが、また他人に頼るのかと思うと複雑な気持ちだ」(資料 2:L-03-041) と語っていた。

#### 4.2.2 幼稚園の状況

従来は、牧畜地域出身の児童は幼稚園に入らず、直接小学校に入学していた。現在は、都市化の影響で町に移住してきた牧畜民は、子どもや孫を幼稚園に行かせるようになってきている。その傾向の背後には、「政府が幼稚園の様々な費用を免除するようになり、児童それぞれへの補助金が直接幼稚園側に支給されるようになったという。それが大きな原動力になった」(40代、教師、女性：資料 2-G-16-013) という。そのような背景のもとで、町の幼稚園児の数は増す一方である。しかし、幼稚園の数が増えていないので、幼稚園の受け入れ定員を大きく上回っているのが現状である。シリングルのいくつかのホショーや市に足を運んでみたが、どこも同様の状況にある。2011年9月に、西ウジムチンのある幼稚園を訪れた際に驚くべき光景を目にした。50代の牧畜民が孫を連れて、入園申し込みのために当幼稚園の入り口で待っていた。彼に尋ねると「牧畜民は飴と鞭の政策で町に移動させられてきた。町に来ていろいろと不自由を感じている。せつかく町に引っ越してきたので、孫を幼稚園に行かせようと入園申し込みに来たが、残念なことに入園を断られた」(50代、牧畜民、男性：資料 2-J-07-043) と嘆いた。その孫が幼稚園の入り口で、園庭で様々な玩具で遊び、自由に走り回る園児たちの姿を憧れの目で眺めていた姿が今でも鮮明に思い出されるのである。その幼稚園の状況を確認したところ、「2011年9月上旬現在、当幼稚園は定員を超えていた。今は、一年後の2012年9月に入園を望む児童の募集が始まっている」(40代、教師、女性：資料 2-G-17-013) と説明された。このことから、都市化が加速し移入牧畜民の数は増えつつあるが幼稚園に児童が入りきれない状況をもたらしたことは明らかである。「大学を卒業しても仕事がない若者がいっぱいいる。しかし、学校などには教員が足りない、施設が足りないのが現状である。モンゴル人として生まれたものの民族学校に入れない、モンゴル人として育てていく条件がない。内モンゴルの状況は政策と現状はとてもゆがんでいる」(40代、研究者、男性：資料 2-G-18-009) とも言われている。学校には教室など設備施設の不足や人員不足が見て取れる。

「近年は、幼稚園が児童を受け入れることができず、新学期が始まる度に、保護者たちは、子どもを入園させるために苦労していることが広く知られている。幼稚園の入園難が社会問題になっている。そのような事態を解決するため、ホショーの政府は新たに

4つの幼稚園を建設する計画を立てた（Üjümüčin čimegelel 2011:30-32）」らしい。2010年から建設が始められているという。未だに牧畜地域に生活している、牧畜民の子どもの特徴としては、新学年が始まる9月に園児が押し寄せ、10月の連休からは子どもが少なくなる。9月中は、牧畜民たちにとって牧草刈りのシーズンで最も忙しい時期である。その繁忙期だけ子どもを幼稚園に預ける牧畜民も多い。

#### 4.2.3 小学生たちの住居状況

牧畜地域から町に移住してきた児童たちは、学校の寮での生活を強いられる。しかし、全ての児童が寮で生活ができるかというところではない。小学校低学年の段階、すなわち、小学校1、2年次には寮での生活は困難である。子どもたちはまだ幼い時期であり十分に自立しておらず寮の生活になじみにくい。そのような状況では借家、あるいは、親戚の家に身を寄せることになる。

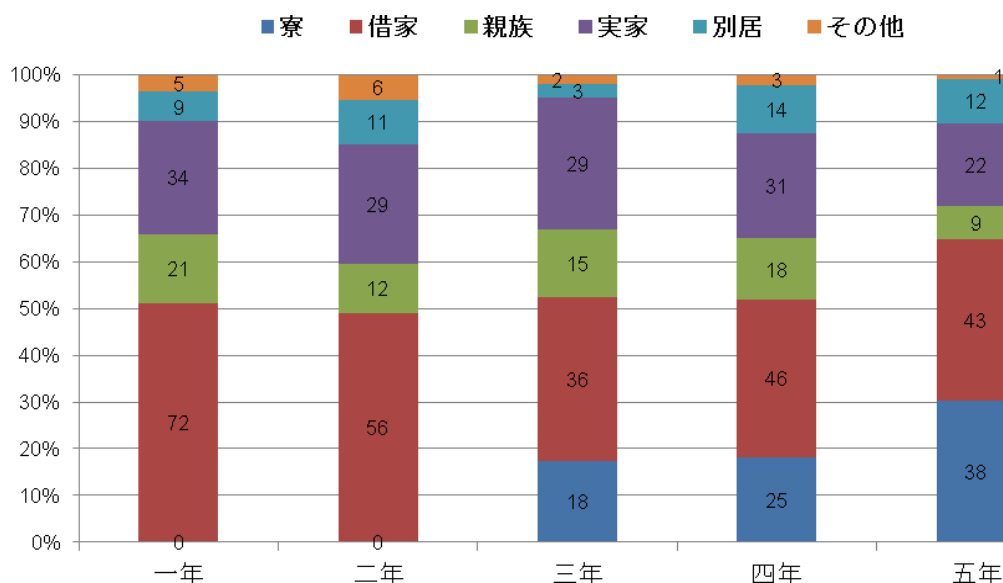


図 2-12：小学生の居住状況

(出典：現地調査資料に基づいて作成。)

図 2-12 は、シリングルのショローン・フフ・ホショー（Šiluyun küke qosiyu）の SH1 小学校に在籍する 1 年次から 5 年次の児童の通学中の住居状況である。2008 年、当該学校の 1 年次には 141 名の学生が在籍していた。その中で、34 名はその町出身者で、町に本籍がある。当然、両親もその町で職に就いていることになり、毎日実家から通学している。また、107 人が各ソム出身者で、戸籍上は町出身の子どもと異なる。そのうち、67%

が借家している。約 20%の学生が親戚の家に住んでおり、寮に生活する学生はいないことがわかる。学年全体から見ても、1年生の 5 割が借家していることがわかる。その他にも、親が田舎で家畜の仕事をし、子どもが町にある家から学校に通う場合もある。図の中の「その他」という項目の中には、自分の家で居住に困っている学生を住ませるという下宿を営む人に頼んで子どもを学校に行かせているというケースもある。その場合親はまったく知らない人にお金を払って子どもの面倒を見てもらっているということになる。このように牧畜地域から町に来た子どもの 7 割近くの児童が、借家から学校に通っている。借家するにしても、両親の一人が子どもの面倒を見る必要があり、常時一緒に生活している。子どもの発育などの面から見れば、この成長段階では両親のそばにいて、毎日学校に行くことが望ましい。しかし、牧畜民の子どもは、そのような恵まれた状況にないことがわかる。両親とも街で子どもの面倒を見切れない場合は、祖父や祖母が孫を世話するのが典型的である。いずれにしても、学校の寮に住むより、借家から学校に通う方が、経済的には負担が大きい。牧畜地域と町二重生計を立てることは、牧畜民のように、定期的収入がない人々には予想以上の経費がかかるなど様々な問題があることが以下の陳述からわかる。

まだ自立ができない子供にとって親元を離れた寮での生活は大きな負担となる。子どもの発育にも影響が出ることが懸念される。ホームシックなどで勉強に集中できないことも起こりうる。他方で、牧畜民の生活に怠慢や家事放棄が生じ、家庭崩壊をまねいている。牧畜民は牧畜地域と町の二重生計を立てることになり、生活の出費は大きくなる（70 代、教師、男性：資料 2-F-02-006）。学校統廃合により学校の寮に住まざるを得ない学生が多くなり、寮生活の面倒を見切れる職員がいない。寮に住む学生たちの世話をする人がたりない（資料 2: 40 代、研究者、男性：資料 2-B-15-009）。親の一人が草原の奥地で家畜の世話をしながら生活をする。祖父や祖母あるいは両親の一人が、子どもが保育園のときから高校を卒業するまで、町で一緒に生活しなければならない。だから、生活の基盤が二重生活になければならない。そこには、生活費、交通費など余分な経費がかかる。いろいろと補助金制度があるといえども、その裏に牧畜民はそれより多額の経費がかかっている（60 代、作家、男性：資料 2-B-19-039）。借家ということは、①家賃が安い分、老朽化し危険な物件が多い。②年輩・若い人が子どもの面倒をみているケースが多い（40 代、教師、男性：資料 2-B-24-032）。

#### 4.2.4 子どもの描写による生活の実態

学生が書いた作文「路地裏のモンゴル」<sup>47</sup>（Qairqan 2011）。

---

<sup>47</sup> モンゴル語のタイトルは「γudumjin deki mongyol」となっている。作者名は Način、指導教員名は Mendü。

両親におねだりをしながら育てられた私、生まれ育った故郷や親戚の人々から離れ、町の学校に入るためにバスに乗った。そのとき大声で泣いていた自分のことを今でも心の底から非難することはできない。数年前までは、ソムにあった学校が「教育環境がよくない」、「学生がすくない」などの理由で閉鎖された。その結果牧畜民の子どもたちは遠く離れた町の学校に通うしかなくなった。それがとても不便である。家庭では、できる範囲で家事や家畜の仕事の手伝いをしていた祖父が私と一緒に町に生活することになった。それは、私を学校に通うわせるためである。

祖父と私、二人で町にある小学校の近く、お寺の南側にある漢族の倉庫を借りて生活することになった。以来この近辺にある他の家の倉庫などを借りて転々としながら過ごしてきた。振り返ってみれば、私は少年時代の7年間を、祖父は晩年の7年間をそうやって過ごしていた。この路地の倉庫全部を私たちの様な牧畜地域から町に来た「文化の遊牧民たち」が借りて生活をしている。(中略) 祖父はこの周辺に住んでいる同じ世帯の、同じ運命をたどる仲間たちができ、暇なときにいつも話しをしていた。仲間たちには、生活がとても貧困な家庭のものもある。でも子どもや孫たちに教育をさせるためには町に来て、家を借りて生活をしている。(中略) 私は町というのは綺麗なところだとよく耳にしていた。しかし、「百聞一見にしかず」という言葉の通り、町の状況をこの目で確認できた。町のいいところはいっぱいあるはずだ。その良さを私たちのような他人の倉庫の狭い空間で生活している人間には自覚しがたい(中略)(Qairqan 2011 より抜粋)。

当文章からは牧畜地域から教育を受けるために町に移住してきた子どもの小学校時代の生活の実態を描いた内容である。「牧畜地域から街に移入する牧畜民の生活状況について慨嘆する。最近、田舎から町に移り、借家して生活している者もいる。そのなかで多くの保護者は、町に移ってきて子どもを学校に行かせた後、やることなく、毎日ギャンブルをやっている場合が非常に多い。このような環境では、子どもの心身に与える悪影響がとても大きい。例えば、私は数年前、高校でクラス担任をしていた。ある日うちのクラスの学生が昼休みに家に帰ったところ母親が家になかった。それで方々を探し回ったところ、賭博場で見つけた。その母親が「私は遊んでいるから、あなたは妹と一緒にどこかでお昼をすまして」といいながら5元を渡したそうだ。その他にも、両親の一人が犯罪者、離婚者だという子どもが多くなっている。これは社会問題である。町に転入した牧民の離婚率も高くなっている」(40代、教師、男性：資料2-F-07-020)という様な現象は、学校統廃合後の問題であると認識していた。

#### 4.3 アイデンティティの変容

モンゴル民族にとって、モンゴル語はコミュニケーションのためのツールのみならず、モンゴル人のアイデンティティのシンボルでもある (Humphrey 1999:23)。内モンゴルにおける言語とアイデンティティについて、Urtunasutu (2012) は、「アイデンティティは、時と場所の違い、言語と認識の違い、社会と文化の違い、政治と政策の違いから様々な変化の中に存在する。例えば、内モンゴルでは文化革命中やその後の時代には、モンゴル人の中でモンゴル人の親から生まれたことを後悔する者が現れる。モンゴル語の名前を持っていることを恥ずかしがる。モンゴル語で話すことが一種の屈辱であるとし、名前をモンゴル語から漢語に変える、苗字を隠す、集団から遠ざかるなどの現象が起こっていた。それが現在でもある程度継続されている。これは、時代の風潮においてアイデンティティは変わるものであるという意識の現れである。このように、民族の言語、故郷、母文化から離脱した人間がある日から自分を見知り、故郷を恋しく思い、母語を切に望み、母文化を慕うようになる。自分はなにが何でもモンゴル人であるべきだと自覚し、言語と文化圏へと合流する現象はよく見られる」(Urtunasutu 2012:842) と述懐している。

2011年11月に実施した調査では、「うちの子どもは今モンゴル語で教育を受けてモンゴル民族学校に通っている。娘を幼稚園の時に一定期間、漢族の幼稚園にいかせたことがある。今の学校では二回も飛び級している。娘の成績はいい。漢語で書かれた本や雑誌を読むのが大好きだった。でも、モンゴル語の方の書物はあまり読まない。民族学校に教えている漢語の授業の内容が簡単すぎて、とてもつまらないという。娘が自分の名前をも漢語に変えたいという」(40代、教師、女性：資料 2-E-12-029) との発言があった。そのように、自民族の言語文化が漢族に比べて劣っていると考える若者の存在を否定できない状況である。内モンゴルにおいては様々な政策や革命の影響でモンゴル人の文化的、言語的アイデンティティが変わりつつあると考えられる。一方では、牧畜民の「家畜を飼う生活が時代遅れと見なされている。町に移り、汚い、きつい、危険な仕事に就く人たちが先進的だと見なされている。自然環境の中で放牧し、自然に調和した生活をする人たちが悪者で、資源開発で大地を掘り起こす行為が善であるという考えが広がっている」(40代、教師、男性：資料 2-F-09-020)。というように、町への移住は古来の遊牧文化や生活に比べて異なるという強い認識をもつ人もいる。やはり、文化的要素を安易に変えたくないということだといえる。

時代背景や政策によって、「モンゴル人」と名乗るだけで圧迫を受け、迫害をされる時期があった。ソ連においても、中国においても同じような侵略が行われていたと考えられる。そのときは、財産はもちろん、人間の命でさえ守ることはできなかった。モンゴル人だから、という唯一の理由で殺害されたのである (楊 2008:1)。自らの命を守るためには「自分」を変えて生きるより選択しがなかつただろう。その意味では、内モンゴルのモンゴル人は心身両面に大きな迫害を負ったまま 21 世紀を突入したと思われる。それにしても、自らの民族文化などに強い信念を抱きながら生きる人間とそれと逆に考える人間も混在し

ている状況であると考えられる。また、自らの文化などの維持・保持・伝承の力を入れている行為が広く確認できる。その行動に深く関わるものはモンゴル民族、文化としてのアイデンティティそのものだと考えられる。

#### 4.4 考察

牧畜地域において政策転換など様々な社会的変容の中で生きる牧畜民と彼らの子どもたちが直面する実態について記した。内モンゴルにおける経済的な政策がもたらした牧畜民の生活形態の変化は、個々人の心身両面に大きな変化を生じさせたといえる。牧畜民たちの家畜にかかわる年間行事の変化からもわかるように、牧畜民の観点に立てば、経済的利益を優先する中で守り続けるものと、失っていくものがある。その中で、子どもたちの家庭内の役割及び教育を受けるにしても、幼いときから親元を離れ、町に移って生活しながら通学せざるを得ない状況を確認した。さらに、幼稚園の定員超過という現状も深刻な問題である。その意味では、教育体制がいまだに不十分といえよう。学校統廃合から発生した、小学校の児童たちや家庭が、悲劇に見舞われ始めていることが聞き取り調査から判明した。地方における家畜の世話にも人手不足、賃金高騰などデメリットが多い。牧畜民は町に行ってもまともな仕事が見つかることがないともいわれている。町で子どもの世話をする人々が、子どもが学校にいる時間を持て余し、暇つぶしのため始めたゲームがやがて賭博に発展し、家庭に重大な損失を発生させた事例すら生じている。それを理由に離婚騒動に進むケースも多い。このような家庭崩壊が、社会問題として認知されている。

子どもたちは、生まれてから学校に入る短い間は牧畜文化を背景に生活をする。学校に入れば、家庭から切り離された空間で育てられるようになる。家庭において親からモンゴル人、牧畜民のアイデンティティが植え付けられるのが、わずかな期間しかないことが見受けられる。

遊牧文明を背景に見ると、内モンゴルで起こりつつある社会的な状況は、牧畜民の生活様式を遊牧から定住へ、さらに都市化の進行による定住先からの移住ということで、移民の運命を強いられる。それと同時に牧畜民は、学校や教育の関連から生じる子どもの教育を目的に牧畜地域から町へ移り、学校周辺で転々と移動を繰り返している現状である。学生の作文にも記載されている「文化の遊牧民」という表現の通りである。彼らは生活的、経済的不安定な状況におかれ改善策が不足であると指摘できる。これが内モンゴルにおけるモンゴル民族の教育がおかれた状況の一面である。

#### まとめ



第二章は4節からなる。第1節では、内モンゴルにおける民族教育の状況について概観した。内モンゴルでは人口が激増する一方である。しかし、牧畜地域の民族学校の統廃合が行われ、モンゴル民族学校が激減していることを確認できた。特に、2000年以後の牧畜地域の民族学校の統廃合は、計画的に行われていたことが内部報告資料から把握できた。

第2節では、学校統廃合について焦点を絞り、ウジムチン地域の事例から見ることにした。中国の建国以後の牧畜地域の民族学校の状況から見る限り、2000年以後の統廃合は異例であり、よって、当該地域における子どもたちの教育や牧畜民の生活に大きな影響をもたらしていることがわかる。

第3節では、モンゴル人学生の学校選択について考察した。モンゴル人学生が漢族学校に入学することについて先行研究においても多々指摘されていた。実態調査を通じて、2008年現在で西ウジムチンにおける漢族学校に漢語での教育を受けているモンゴル人学生数は、モンゴル人学生総数のうち、幼稚園48.6%、小学校31.9%、中学校14.9%、高校13.1%をしめていることがわかった。アンケート調査から学校選択はほとんど親の意向で決められることがわかった。学校の良さ、いわゆる学校の施設設備の良し悪し、教員体制などが決め手あることも浮上してきた。他方では、経済的裕福な家庭、安定職に就いている家庭ほど子どもを漢族学校に行かせる。牧畜民や生活的不安定、社会的地位が低い家庭がモンゴル民族学校に子どもを行かせるということが聞き取り調査からわかった。子どもをどの学校に行かせているがによって、家庭や親の社会的地位がわかる。

第4章では、牧畜民とその子どもたちの日常生活について考察を行った。牧畜地域において政策転換など様々な社会的変容の中で生きる牧畜民と彼らの子どもたちが直面する実態である。内モンゴルにおける経済的な政策がもたらした牧畜民の生活形態の変化は、個々人の心身両面に大きな変化を生じさせたといえる。その上、教育体制がいまだに不十分といえよう。学校統廃合から発生した悲劇に、小学校の児童たちや家庭が見舞われ始めていることが聞き取り調査から判明し、家庭崩壊などが起こり、社会問題として認知されていることがわかる。遊牧文明を背景に見ると、内モンゴルで起こりつつある社会的な状況は、牧畜民の生活様式を遊牧生活から定住生活へ、さらに都市化の進行による定住先からの移住ということで、移民の運命を強いられる。牧畜民は、学校や教育の関連から生じる子どもの教育を目的に牧畜地域から町へ移り、学校周辺で転々と移動を繰り返している現状である。彼らは生活的、経済的不安定な状況におかれ改善策が不足であると指摘できる。

### 第三章 教科科目としての「言語」

#### 第1節 二言語教育の実態

##### 1.1 中国における「二言語教育」

内モンゴルにおける言語使用問題と教育の状況を明らかにするためには、さらに視野を広げ、東アジア文化圏といった方面に対する先行研究ならびに現在の研究状況などを踏まえつつ、比較検討する必要がある。それは今日のグローバル化、IT化などが進展した時代状況下において必要不可欠な手続きである。中国における少数民族言語がおかれた背景と影響を与える諸要因を確認し、内モンゴルの牧畜地域におけるモンゴル語の実情を再考したい。内モンゴルにおける遊牧地域が、開墾や工業化によって変貌していくなかで、中国領内におけるモンゴル語・文化は「漢化」の強い影響を受けつつある。特に、内モンゴルでは、2000年以後に牧畜地域において、多方面で変化が発生していることについて前章から確認できる。その様な社会的変容と同時に、モンゴル語に関する認識も変化している。

そこで、本章では、内モンゴルにおける民族教育にまつわる問題点について、都市部と牧畜地域、民族学校と漢族学校状況の比較分析から着手する。さらに、東アジア文化圏における各地域の教育カリキュラムに配置されている「言語」や「民族語」の教科科目に関する比較考察を行う。これは、中国において少数民族を対象に実施される「二言語教育」政策の状況と、他の多民族社会の状況との比較により、差異を析出することを目的としている。そして、東アジア文化圏におけるカリキュラム上の「民族語」について概括する。まずは、中国に実施されている「二言語教育」と「バイリンガル教育」の実態を見てみよう。

表3-1：カナダにおける小学校のバイリンガル教育

	幼稚園	小学校	
教育言語	ウクライナ語(100%)	ウクライナ語(50%)	英語(50%)
授業科目		ウクライナ語、社会、体育、 美術、音楽	英語、算数、理科

(出典：中島 2005:135 に基づき作成。)

「バイリンガル教育」に関しては、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどのような多

民族、多文化、多言語社会を対象に行われた研究が参考となる。「バイリンガル教育とは、複数の言語がなんらかの形で運用される教育の総称で、その内容は 2 言語を育てる教育、2 言語を使用する教育、2 言語使用の子どものための教育など多義にわたる。言語の数が 3 言語以上の場合もバイリンガル教育と呼称される」（真田他 2005:25）。例えば、「カナダのエドモンド<sup>48</sup>公立学校教育委員会は、1973 年に幼稚園段階から英語＝ウクライナ語バイリンガルプログラムを導入した」（中島 2005:135）。それに基づき、幼稚園では授業すべてをウクライナ語で行い、小学校ではウクライナ語と英語を 50%ずつ使用する。表 3-1 は、カナダのアルバータ州における幼稚園と小学校のケースである。「アメリカの場合は、英語が十分ではない生徒に対して母語を用いて教科教育と英語教育を行う移行型のバイリンガル教育がある」<sup>49</sup>。「それは、教育手段として母語を用いることによって、英語の習得とアイデンティティの確立と成績の向上を図るものであった」（末藤 2002:113）という。

一方では、中国における二言語併用教育政策とは少数民族に対して民族語と漢語の二言語教育（双語教育という）、或いは二言語を用いた教育を実施する言語政策である。中国の少数民族二言語教育が公式に始められたのは 1950 年であり、少数民族の中学校で「漢語と民族語を同時に教える」よう当時の国家教育部が定めたものである。少数民族学校が行う漢語教育は、50 年代には中学 1 年次から、60 年代には小学校高学年から、80 年代には小学校 2・3 年次から実施されたように、学習開始の時期は早まっており、現在では母語教育と同時にされるようになってきている。ただし、地域によって相違点が存在する。二言語教育について、漢語と少数民族言語の授業開始時期に注目すると、教育課程は三つのタイプに分けられる。

表 3-2：民族語と漢語の授業開始時期

タイプ	小学校低学年～	小学校高学年～	地域
A	民族語	漢語	新疆、青海省等
B	民族語、漢語（同時）		吉林省等
C	漢語	民族語	チベットの一部

（出典：小川 2001:133 に基づき作成。）

表 3-2 の通り、漢語と民族語の学習状況には差異があり、地域ごとに様々である。民族学校の教科課程は、使用言語の状況によって各地域や民族ごとに異なる。民族語と漢語を併用する学校は多いが、漢語のみで教育している箇所も少なくない。民族地域において

<sup>48</sup> カナダのアルバータ州の州都である。

<sup>49</sup> アメリカのカリフォルニア州の例である。

は、教科課程の言語に限っても様々な制度や制限がある。言語教育では、二言語教育制度は民族地域ごとに多様な方法を取っている。国の教育機関が示した一定の方向性はあるものの、民族地域への浸透は多種多様である。現在では国の政策として定着したものの、実際には、その制度と現実の間に大きな落差があることも事実である。

例えば、涼山イ族自治州（四川省）では、言語の違いに従って、普通学校と民族学校に分かれており、民族学校は教授言語としてイ語を用いるかどうかで一類体制と二類体制<sup>50</sup>に区分されている。「学校の良さは上学校への進学者数による」、「イ語を学んでも仕事上役に立たない」と地元の学校関係者は述べる。カリキュラムの正当性は、必ずしも民族の独自性という観点からは出てこないのである（小川 2001:131）。民族学校にもかかわらず、なぜ1年次から漢語を学ぶのか、そして漢語の授業時間数が多いのか、という理由の一つがここにある。これは決して偶然ではなく、学生数の確保が危ぶまれる状況では、できるだけ早期に漢語に触れさせる必要がある、と教育関係者が判断した結果なのである。「学校は中共（中国共産党の略）とイ族の「出会い」の場であり、中華民族とは、中国で生まれた人間が無条件になれるのではなく、教育によって形成される人間像だからである」（小川 2001:136）という指摘もある。

「内モンゴル自治区第一期民族教育会議」（資料3）における「内モンゴル民族教育の方針と任務」では、「モンゴル民族小学校では、農業地区か牧区かに関わらず、小学校5年生から全ての学校で漢語の授業を設ける」方針が打ち出され、翌年の6月21日から全自治区で実施された。このため、漢語教育が一部から全ての学校に拡大し、中国におけるモンゴル民族教育は新段階へ進んでいくことになる。憲法に示された民族政策のあり方と矛盾する方針が、各民族地区で推進されていった背景には、国民統合という中央政府の路線が強力に貫徹された（トクタホ 2009:57）ことが指摘できよう。1957年には、内モンゴル自治区教育庁が、漢語授業の導入について「民族学校の中で、愛国主義教育を徹底し、先進民族の文化を吸収し、民族の言語を豊かにするために、自治区ではすべての民族学校で漢語授業を加える」（トクタホ 2009:57-58）と定め、中央政府の路線に忠実に従うようになった。

中国における55の少数民族は、「少数民族識別工作」により定義されたものが多いととらえることができる。民族教育に対して行う教育は「少数民族政策」として位置づけられ、そこでは国家統合が強調されている。各民族の平等や団結が強調され、少数民族の国家からの分離・離脱は断固として否定されている。しかし、実際には少数民族が地域ごとに様々な問題を抱えていることは良く知られている。少数民族地域での自らの母語教育を求めた暴動やデモの発生は、メディアで報じられる通りである。二言語教育においても、教科課程における民族語と漢語の割合と位置付けは、地域ごとに相違がある。また、二言語教育

---

<sup>50</sup> 一類体制と二類体制は、民族学校の教育言語の違いを示し、教育言語が民族語か否かで区分されている。内モンゴルにおいても同様の分類がある。詳しくは後述する。

は、地域によってその目的が異なっている。

少数民族言語政策の関連で新たな動きとして、2012年7月に「少数民族事業〔第12次5年〕計画」<sup>51</sup>が発行され、少数民族文化遺産の保護作業を強化することの目的としての民族語文プロジェクトも計画された<sup>52</sup>という。同時に、少数民族言語文字事業の改革と発展につき、2012年12月に、「国家中長期言語文字事業改革及び発展計綱要」<sup>53</sup>が発表された。当綱要には、「少数民族言語計画を制定、調査実施する際に、国内言語状況に着眼するだけでなく、中国が複雑たる豊かな言語文化資源を有する国際環境を視野に置く」<sup>54</sup>と強調し、言語文化資源が国際戦略に変換されていることがわかる。

## 1.2 内モンゴルにおける「二言語教育」の実態

二言語教育とは、一般には少数民族に対して行われる、民族語と漢語の二言語教育、或いは二言語を用いた教育を指す(岡本 1999:115)。その二言語教育における政策と実態とは、各少数民族それぞれに応じて落差があることが指摘されている(岡本 1999; 周 2001; 哈斯額爾敦 2005)。二言語教育は内モンゴルでは「漢語教育」の「美称」のようなもので、実際には二言語教育と名付けられた政策がとられる前から漢語教育が進められていた(愛知大学現代中国学会 2004:29)。一方、少数民族地域での三言語教育とは、二言語教育にさらに外国語の科目を加えることを指す。現在、内モンゴルで小中高等学校の外国語科目は主に英語である。内モンゴルにおける教育政策、言語政策の現状に関係して「二言語教育」、「三言語教育」、「バイリンガル教育」、「トライリンガル教育」といった問題が数多く議論されている。特に、内モンゴルにおける民族学校の言語教育の中での英語教育の実態を、多角的に分析した研究がある。

表 3-3：モンゴル民族小学校の教育言語

	甲式小学校(学級)		乙式小学校(学級)	
教育言語	モンゴル語(100%)		モンゴル語(12%)	漢語(88%)
学年	低学年～	高学年～	低学年～	
授業科目	全科目	漢語のみ漢語	モンゴル語のみ	モンゴル語以外

(出典：現地調査資料に基づき 2012年2月18日作成。)

<sup>51</sup> 当計画は、中国国務院事務局発〔2012〕38号公文書として、2012年7月に発行された。

<sup>52</sup> 黄行(Huangxing)(中国社会科学院民族学・人類学研究所教授)、2013年12月9日、首都大学東京に行われた『現代中国における言語政策と言語継承：少数民族言語を中心に考える』研究会に「当面の中国少数民族言語政策について解説」というテーマで発表した。原稿を参考。

<sup>53</sup> 当綱要は、中国教育部国家言語委員会発「教育部語用司〔2012〕1号公文書として、2012年12月に発行された。

<sup>54</sup> 前掲、黄行 2013年12月9日を参考。

表 3-3 は、内モンゴルの民族学校における二言語教育の例である。ここでは民族学校における甲式と乙式学級の実態を挙げる。民族学校における甲式学級では「モンゴル語」を教育言語として「漢語」を加えて学習し、乙式学級は「漢語」を教育言語にして「モンゴル語」を加えて学習する。甲式学級は教育言語がモンゴル語なので、小学校低学年から全科目をモンゴル語で教育し、小学校 2 年次からは「漢語」の科目において徐々に漢語で教育する方法が採られている。乙式学級は教育言語が漢語であり、「モンゴル語」の科目だけがモンゴル語で行われ、その他の科目は漢語で授業されている。このような状況が内モンゴルでの「二言語教育」の実態である。

「三言語教育（モンゴル語、漢語、英語）について、今はモンゴル語を 1 年次、漢語を 2 年次、英語を 3 年次からそれぞれ教えている。同じ年次に 2 種類の言語を学習し始めることを避けている。子どもによって発音などが混同されることがあるので、基本的なものが身についたら次の言語を導入する方針を採っている。これが一番よい方法である」（50 代、教師、男性：資料 2-D-01-011）。しかし、「漢語、英語を小学校の段階から教えることがモンゴル人児童の母語を用いて考えること、話すことの障害となっている。小学校で児童に 1 年次から漢語を教えることはモンゴル人児童の言語による思考力に影響を与え、混合語の発生の原因となっている。さらにモンゴル民族学校において教科科目の数が多くことは子どもの知識を順次身につけることへの障害となり、学習意欲に影響を与えている。教科書が漢語の教科書をそのまま訳したもので、牧畜地域とモンゴル人児童の生活の特徴に合っていない内容が多い。また 3 年次から英語を教えはじめ、言語の科目と授業科目の多さから子供たちはどれも手につかず、学習意欲が衰える現象が起きている」（30 代、教師、女性：資料 2-D-04-001）。「英語の学習においては、まず、英語を使う機会がない。家庭内に子どもの英語の勉強を指導できる人間がいない。授業以外で使う場所がない。英語担当の教師以外は指導できる人はない」（70 代、教師、男性：資料 2-D-03-005）。「三語試験班<sup>55</sup>には一定期間の設定があるほうが望ましい。今の状況は一回実施すればいつまでも三語試験班のまま、長期的にやればその意義は違うものになる。1 つのアイマグでは 1、2 クラスあれば十分。それ以上多くなってはいけない。すべての学校、すべてのクラスでやることで、母語のモンゴル語を習う意欲がなくなってしまう。なぜなら、三語を習ったら、学生の負担が重くなる。外国語は今の時点では使うところはない。モンゴル語と漢語の学習使用で精いっぱいだ。三語を使いこなしている学生も少ない。だから外国語は選択履修すればいい」（50 代、作家、男性：資料 2-D-06-010）。「今の大学生はモンゴル語で正しい文を書けなくなっている。やはり、三言語教育になってからモンゴル語の授業科目の学習時間数が減らされたのが一因だ。昔は毎日モンゴル語の授業があった。今は漢語、英語の授業時間数が増加しており、その時間はモンゴル語の授業時間数が削られている。①

<sup>55</sup> 三言語実験班は、*yurban kelen-ü tursilta-yin angyi* といい。名前の通りであれば実験的なものである。しかし、現実では実験ではなくそのような名前がつけたクラスであるという。

また、モンゴル語を使う環境が無くなっている。家に帰れば漢語のテレビが 24 時間ながれているからどこ行っても漢語だ。②授業時間数の軽減でモンゴル語そのものが影響を受けている。文系の学生に影響が著しく生じている」(50代、研究者、男性：資料 2-D-07-017)。などと内モンゴルにおける二言語教育、三言語教育に対して外国語の学習の必要性、重要性の視点や母語学習にマイナスな影響を与えているというような反対意見が多くみられる。

内モンゴルの現状は、特に乙式学級の状況はカナダの事例と比較して、また学校の教育言語と言語科目の配分からみて、はたして「バイリンガル教育」の定義に当てはまるだろうか。次節ではカリキュラムに配置される母語について考察を行う。

## 第2節 カリキュラムにみる「母語教育」

### 2.1 民族学校と漢族学校の母語教育

民族語による教育は今後の民族言語と文化の発展に重要な役割を果たすと考えられる。しかし、内モンゴルにおける状況は、社会的に民族語使用の重視度が低くなっていることが、現地の声から浮き彫りとなる。内モンゴルにおける漢語優勢の言語環境と言語接触により民族語使用が制限されている環境では、言語学習には一層の取り組みと努力が必要だと感じられる。

表3-4：民族学校と漢族学校の一週間の授業科目比較

単位：時間

番号	授業科目	民族学校		漢族学校	
		1年次	3年次	1年次	3年次
1	モンゴル語	10	6	—	—
2	漢語	3	4	13	12
3	英語	—	3	2	4
4	算数	6	4	8	10
5	道徳	2	2	2	—
6	体育	4	3	4	2
7	音楽	2	2	2	1
8	美術	3	2	2	2
9	書道	3	1	—	—
10	情報	—	1	—	—
11	心理	—	1	—	—
12	科学	—	2	—	2
13	研究	—	1	—	—
14	読書	1	1	1	—
15	制作	—	1	1	1
16	クラス会	1	1	—	1
科目数		10	16	9	9
週間総授業数		35	35	35	35

(出典：現地調査資料に基づき作成。)



内モンゴル以外の少数民族地域では何らかの対策が取られているのだろうか。その好例は、吉林省延辺朝鮮自治州の朝鮮族学校に見られる。そこでは、朝鮮語と漢語の教育における摩擦を和らげるために、小学校進学前の「予備班」<sup>56</sup>の段階では朝鮮語だけの教育を徹底させているという。「朝鮮学校では小学校 1 年次から漢語を教え始めている。朝鮮語と漢語の二つの言語を同時に教えると、漢語にすでに慣れた朝鮮族児童たちの朝鮮語学習に影響が生じる。そこで予備班には朝鮮語だけで教えている」(Gürjeb 2008:167) という。モンゴル語の場合も、児童の小学校入学前の段階で行われる就学前教育においてモンゴル語の指導を充実させるのが好ましいと考えられる。

表 3-4 は、モンゴル民族小学校と漢族小学校における 1 週間の授業科目を比較し、どれ程の科目が履修されているかを示したものである。民族学校の小学校 1 年次ではモンゴル語、漢語、算数を中心に 10 の科目が履修されている。3 年次になるとモンゴル語、漢語、算数に英語が加わり、合わせて 16 の科目に増加している。一方、漢族学校では小学校 1 年次に漢語、英語、算数を中心に 9 の科目があり、3 年次になっても変わりなく 9 科目が履修されていることがわかる。

表 3-5 : モンゴル族学校と漢族学校の言語科目と算数科目の比較

単位：時間/週(%)

学校	モンゴル族学校		漢族学校	
	1 年	3 年	1 年	3 年
モンゴル語	10(28)	6(17)	—	—
漢語	3(9)	4(11)	13(37)	12(34)
英語	—	3(9)	2(6)	4(11)
算数	6(17)	4(11)	8(23)	10(29)

(出典：現地調査資料に基づき 2011 年 10 月 26 日作成。)

表 3-5 からは、モンゴル語、漢語、英語と算数について、民族学校と漢族学校のそれぞれの学校、学年での差異を明白に認めることができる。個々の学校において、母語の 1 週間の授業時間数とその割合を見ると、民族学校においては、1 年次ではモンゴル語が 10 時間で、1 週間の総授業のうち 28%に当たり、3 年次になると 6 時間で、17%へ大幅に減

<sup>56</sup> 「予備班(beletkel angyi)」は、幼稚園とは別のものである。農村部や牧畜地域では幼稚園に通えない子どもが多くいるため、小学校に進学する前の段階で「予備班」(「学前班」ともいう)というクラスに入るのが一般的である。少数民族地域では、幼稚園もそれほど普及していないため全ての児童が幼稚園に通うことはできない。「予備班」は幼稚園に行けなかった児童が小学校に入る前に通うもので、小学校と一体になっていることが多い。延辺朝鮮自治州ではそれとは別に「予備班」を設置して、児童の朝鮮語学習に力を入れているという。

少している。それに対して漢族学校の漢語は1年次に13時間で、37%に達し、3年次になると12時間で、34%を維持している。民族学校では3年次になると英語が追加され、モンゴル語、漢語とともに3つの言語を履修するが、漢族学校では漢語と英語の2つの言語科目である。その上、漢族学校では漢語や算数の授業の時間が依然と高い割合を占めている。一方、民族学校のモンゴル語は10時間から6時間に、算数は6時間から4時間に減少されている。

## 2.2 日本の小学校における母語教育との比較

表3-6：カリキュラムにみる母語教育

単位：時間

国・地域	日本		内モンゴル	
	日本	在日朝鮮	モンゴル民族	漢族
学校				
学年	3年次	3年次	3年次	3年次
民族語	6(22%)	7(27%)	6(17%)	12(34%)
言語2	—	4(15%)	4(11%)	4(11%)
言語3	—	—	3(8%)	—
算数	5(19%)	5(19%)	4(11%)	10(28%)
科目数	10	8	16	9
週間授業総数	27	26	35	35

(出典：調査資料に基づいて作成。)

2008年のリーマン・ショック<sup>57</sup>により世界的に金融危機が起こり、アメリカや日本をはじめとする先進国の金融機関や企業が大きな打撃を受けたことは広く知られている。そのような背景から失業者が激増した。2008年末から2009年の年始にかけ、東京の日比谷公園には年越し派遣村が開設されたことも影響の一つである。同時期には、在日ブラジル人にも大きな波紋が広がっていた。日本におけるコミュニティそのものが破壊され、言語の壁、収入など、生活基盤が危うい状況下で、祖国ブラジルへの帰国を余儀なくされた人が多数いたことがメディアにさかんに取り上げられた。在日ブラジル人学校も2008年以後閉鎖されつつある(小内 2013:268)という。それとは異なり、在日朝鮮人の場合は、そのような現象は確認されていないが、日本で生活する長い歴史の中で、教育問題などが再三に亘り問題になってきた。例えば、日本の高校の授業料の無償化などに絡んで在日朝鮮学校が度々メディアに登場する。この二つの集団の大きな違いは、日本という社会への適

<sup>57</sup> リーマン・ショックとは、2008年9月15日にアメリカ合衆国の投資銀行であるリーマン・ブラザーズの破綻、さらにこれが世界金融危機の引き金となったことを表す。

合度に端を発しているのではないかと思う。多言語化する日本で、身近に存在するマイノリティとしての在日朝鮮人のネットワークへの注目、特に民族語の教育問題の調査は活発である。これらとの比較研究も価値があると思われる。多言語社会日本におけるマイノリティの言語教育、言語使用に関する研究を試みに対照させてみよう。

表 3-6 は、日本におけるこのような現状を踏まえ、日本の小学校と在日朝鮮人学校における言葉の教育と、内モンゴルにおけるモンゴル民族学校と漢族学校の小学校のカリキュラムを比較したものである。国が違えば、国策も異なるのは当然だが、東アジア文化圏という枠組みの中で「民族語」、「母国語」の教育の本質に触れるのが目的である。

先ず、日本の学校教育における外国語教育に関しては、明らかに「二言語教育」や「バイリンガル教育」という表現は使われていない。学校教育においては「国語」（日本語）が主流であり、中学校で「英語」の科目が追加されている。小学校では「総合学習」の時間に様々な言語が取り入れられ、ゲーム式や異文化に触れるなどの授業方法を用い異文化に親しみ、触れる程度である。また、「外国語」という科目が履修されていたとしても、そこに取り入れる言語は地域によって異なる。英語、中国語など様々で、当該地域が特に交流のある相手国や地域の言葉が「外国語」の科目として登場するのであった。「英語」の授業科目が加わってからは、ネイティブ英語話者が ALT<sup>58</sup>として小中学校の英語の授業に採用されるようになる。しかし、日本語と英語の「バイリンガル」が期待されていない上、小学校での「英語」の科目を履修させるべきか否かは現在でも賛否両論の状態である。

表 3-6 では、日本の学校の授業時間割表では 10 の科目（国語、算数、体育、図工、音楽、理科、社会、図書、道徳、総合学習）が履修され、1 週間に 27 時間の授業が配置されている。その中で国語（母国語）は 6 時間で、一週間の総授業の 22%にあたり、算数の 5 時間は 19%となる。当小学校では 5、6 年次から英語の授業が履修され、1 年間で 35 時間の授業があり、そのうち 30 時間に ALT が参加すると当校の教頭はいう。

一方、李（1998）は、在日朝鮮人に関して、朝鮮学校のバイリンガル教育（朝鮮語と日本語）は、結果として「バイリンガル」教育であると論じられている。朝鮮学校での教育とは、日本という環境に対抗しながら民族アイデンティティを身につける場所である。「民族教育機関を通じて初めて本格的に母国語に接し、あたかも外国語を学ぶように学習する」のである（李 1998:112）。表 3-6 は、千葉市にある朝鮮学校<sup>59</sup>の小学校 3 年次の授業時間割表に基づいている。当学校の授業時間割表では 8 の科目（社会、国語、算数、理科、日本語、保健体育、音楽、図工）が履修されている。小学校 3 年次で週に 26 時間の授業があり、その中で国語（＝朝鮮語、民族語、母国語）が 7 時間で 27%にあたり、日本語（言語 2）が 4 時間で 15%、算数が 5 時間で 15%とそれぞれなっている。この場合は、日本に生まれ育った在日朝鮮人二世、三世にとって日本語がすでに日常生活で使う言語化してい

<sup>58</sup> ALT とは、Assistant Language Teacher の略である。

<sup>59</sup> [http://chiba.tongpo.com/hakkyo/html/01\\_annai/03\\_curriculum.htm](http://chiba.tongpo.com/hakkyo/html/01_annai/03_curriculum.htm) (2011 年 10 月 26 最終アクセス)。

るので、母国語の朝鮮語に対し第二言語とはいいい難い。しかし、日本語が当小学校のカリキュラムでは朝鮮語より少なく配分されているので言語 2 と表記した。朝鮮学校は「日本における朝鮮語の継承・維持の拠点としての役割に大変大きい。母語としての日本語の干渉を受け、独特の在日朝鮮語も使われる。朝鮮語の学習のみならず、朝鮮人としてのアイデンティティや自尊感情をはぐくむ重要な場所になっている（藤井 2013:264）」と記述する。日本語がすでに優勢の言語である環境にも関わらず、母国のことばである朝鮮語が、日本の学校における国語より多くカリキュラムに配置され、学習されている。彼らにとって日本語の学習は自然に習得できる状況であり、朝鮮語は民族の文化とアイデンティティとして捉え、日本語の学習時間数より多く配置されていると考えられる。

表 3-6 のモンゴル民族小学校の 3 年次の授業時間割表の数値を当てはめた。ここでは 16 の科目が履修されている。1 週間で 35 時間の授業があり、その中、モンゴル語（母語）が 6 時間で 17%、漢語（第二言語）が 4 時間で 11%、英語（第三言語=外国語）が 3 時間で 8%、算数が 4 時間で 11%に配分されている。

表 3-6 の漢族小学校の 3 年次には 9 の科目が履修されている。1 週間で 35 時間の授業があり、その中で、漢語（母語）が 12 時間で 34%、英語（外国語）が 4 時間で 11%、算数が 10 時間で 28%となっている。

## 2.3 考察

民族学校と漢民族学校の授業時間割表の比較から言えるのは、表 3-4（前掲）の通り、漢族学校では徹底した民族語教育がなされていることが読み取れる。民族学校では 3 年次になると外国語の英語が追加され、モンゴル語、漢語、英語の 3 つの言語を履修する。それに対して、漢族学校では漢語と英語の 2 つの言語科目である。その上、漢族学校では漢語や算数の授業の時間が依然高い割合を占めている。民族学校のモンゴル語は 10 時間から 6 時間に、算数は 6 時間から 4 時間に減少されている。すなわち、民族学校においては英語の科目が加わることで他の科目の割合に影響を与えているといえる（ムンクバト 2012a:16）。もちろん、学習効果や学習意欲への影響が懸念されている声も現地から上がっている。

モンゴル族学校における甲式と乙式学級で扱われているモンゴル語の科目に関して、甲式学級ではモンゴル語と漢語の時間数の差が、学年が上がるにつれて少なくなる。一方、乙式学級では漢語が主流で、その差異が徐々に少なくなるものの 6 年次になってもモンゴル語が漢語の時間数より 4 時間少ない。年間からみて 136 時間の差がある。乙式学級の実態からいえば、モンゴル語が履修されているように見えるが、最終的には漢語より軽視され、結果的に漢語への同化を目的とする仕組みと位置付けられる。カナダのバイリンガル教育の状況を参考とした場合、乙式学級のモンゴル語の科目を含むいくつかの科目をモン

ゴル語で履修するようになれば、バランスが取れた本格的な「バイリンガル教育」といえる。しかし、現在の状態では漢語への同化をもたらす「二言語教育」「双語教育」に他ならない（ムンクバト 2012a:16）。

東アジア文化圏という枠組みの中での比較からは、漢族学校では民族語と算数が一週間授業の中で3割以上という高い割合をしめ、均整の取れた国民教育の姿が見える。日本の学校と朝鮮学校からも民族語の教育については2割程みられる。在日朝鮮人学校では、異国に生活基盤を置き、母語がすでに日本語に取り替えられたにも関わらず、朝鮮語が日本語より多く履修される。そこに教わる朝鮮語は民族の文化とアイデンティティの継承と考えられる。それに反して、モンゴル民族学校では民族語であるモンゴル語授業の割合が2割に満たず、学年が上がるにつれて割合が減少するという深刻な問題を孕んでいる。それに算数の授業が1割と少ないのも不安視される。

民族学校の甲式と乙式学級では教育言語の違いからカリキュラムなど様々な面で相違がある。根本的には、それぞれの学校において、対象とする学生のモンゴル語の運用能力に大きな違いがある。そこでモンゴル語に習熟した子どもと、モンゴル語が未修得な子どもに教える「モンゴル語」がそれぞれどういうものか、学習内容などについて次節で比較して考察する。

### 第3節 教科科目としての「モンゴル語」

#### 3.1 モンゴル民族学校の甲乙式学級について

内モンゴルにおけるモンゴル族学校は、教育言語の違いから甲式学級と乙式学級<sup>60</sup>に区別されている。モンゴル民族学校の小中学校では、モンゴル語を教育言語として学ぶ一方で、「漢語」を独立した科目として学習するタイプの「加授漢語型」を甲式学級と呼ぶ。対して、漢語を教授言語とし、「モンゴル語」を独立科目として学習するタイプの「加授民族語型」を乙式学級と呼んでいる（岡本 1999:212；シンジルト 2003:260；スチンゴワ 2007:236；青格楽図他 2008:4）。

内モンゴルにおいては、モンゴル人児童が入学進学する際は甲式学級、乙式学級と漢族学校の3つの選択肢がある。しかし、その3種の学校や学級が同じ町や都市にすべて存在することは稀である。牧畜地域の中心部の町においては、甲式学校と漢族学校が併存している。大都市のフフホト市では、民族学校のなかに甲式学級と乙式学級があり、それと別に漢族の学校がある。小中学校における教育言語と学習言語については、表3-7から確認できる。甲式においては、モンゴル語を中心に漢語と英語が学習される。乙式では、漢語を中心にモンゴル語と英語が学習される。漢族学校においては漢語と英語の二種類の言語が学習される。少数民族出身の学生は、民族学校に通うのが一般的である。しかし、幼い頃から民族語のモンゴル語にあまり触れなかった児童生徒が、漢族学校に通い漢語で教育を受けるといったケースが増えている。モンゴル民族出身の学生が漢族学校に入学すれば、漢語だけで教育され、民族語は学習しない。その意味では、彼らは民族語の教育から切り離されている。乙式学校においては、教育言語は漢語だが、民族語のモンゴル語が一教科として学習されるため、モンゴル語をある程度習得できる。甲式に入学すれば、モンゴル語が教育言語で、加えて漢語と英語を学習する。

表3-7：モンゴル民族学校と漢族学校の教育言語と学習言語

学校	甲式	乙式	漢族学校
教育言語	モンゴル語	漢語	漢語
学習言語1	漢語	モンゴル語	英語
学習言語2	英語	英語	—

<sup>60</sup> 甲式・乙式という表現を、モンゴル語では甲を「köke」といい、乙を「kökegčün」という。甲式学級を「köke angyi」、乙式学級を「kökegčün angyi」という。

表 3-8 : 甲・乙式学級のモンゴル語と漢語授業時間数の差異

単位：時間

		小学校					
学年		1年	2年	3年	4年	5年	6年
甲 式	モンゴル語	12	11	8	9	6	9
	漢語	0	5	5	5	5	5
	(±)/週	+12	+6	+3	+4	+1	+4
	(±)/年	+408	+204	+102	+136	+34	+136
乙 式	モンゴル語	4	4	3	3	3	3
	漢語	10	10	8	8	8	7
	(±)/週	-6	-6	-5	-5	-5	-4
	(±)/年	-204	-204	-170	-170	-170	-136

(注：±は漢語との時間数の差を示す。出典：現地調査資料に基づいて作成。)

表 3-8 は、内モンゴルにおけるモンゴル族学校について、甲式と乙式学級別にモンゴル語と漢語の授業時間数の差を比較したものである。甲式学級の 2 年次ではモンゴル語科目が 1 週間に 11 時間であるのに対して、漢語は 5 時間である。すなわちモンゴル語科目の時間が 1 週間で 6 時間多い。しかし、学年が上がるるとともにその差異が少なくなる。一方、乙式学級では、小学校 1 年次ではモンゴル語が 4 時間であるのに対し、漢語は 10 時間である。モンゴル語が 6 時間も少ないことが分かる。乙式学級では、その差異が徐々に少なくなるものの、6 年次でもモンゴル語が 4 時間少ない。年間では 136 時間の差がある。

表 3-9 は、モンゴル民族学校における甲式と乙式が、互いにどのような相違点があるかを分析したものである。

まずは、甲乙式両学級について見てみる。それぞれの学校の地域的分布では、内モンゴルの中西部、新疆ウイグル自治区、青海省、甘粛省に点在するモンゴル族小中学校は甲式学級を取り入れている。一方、東北三省<sup>61</sup>およびこれら三つの省に隣接する内モンゴル東部、河北省にあるモンゴル族小中学校は乙式で行うところが多いという（スチングワ 2007:236）。また、フフホト市、包頭市など内モンゴルの中で人口が密集する都市部にも乙式の学校が多い（岡本 1999:221）。「甲・乙学級双方ともモンゴル族学生を対象に募集を行っている。どの学校や学級<sup>62</sup>を選択して進学入学するかは親や学生本人が決めているのだ」（50 代、教師、男性：資料 2-G-23-011）、まだ、「民族学校の甲乙式学級それぞれを

<sup>61</sup> 東北三省とは中国の東北部位置する三つの省である。それは北から順に黒龍江省、吉林省、遼寧省である。

<sup>62</sup> 「学校や学級」については、同じ学校に甲乙式が併存する学校もあれば、甲乙式がそれぞれ独立した学校場合もあるため、そのような表現を使用する。

対象にしてモンゴル語科目の試験も異なる」(50代、作家、男性：資料 2-G-22-010) という。両方とも民族学生を対象に募集している。その選択は親や学生本人によるものだという。その教育言語の違いから、教科書やカリキュラムなど様々な面で相違点があると推測される。

表 3-9：甲乙学級の比較

比較項目	甲式	乙式
1.分布	牧畜地域、農耕地域	都市部、農耕地域
2.募集学生	モンゴル人児童	モンゴル人児童
3.教育言語	モンゴル語	漢語
4.他の学習言語	漢語、英語	英語、モンゴル語
5.モンゴル語科目の試験	甲式用	乙式用
6.モンゴル語教科書難易度	民族学校用	甲式用より易しい
7.漢語教科書難易度	乙式より易しい	漢族学校と同じ
8.英語教科書	モンゴル語訳あり	漢族学校と同じ

(出典：現地調査；スチンゴワ 2007:236；青格樂図 2008:4 に基づいて作成。)

甲乙式の根本的な違いは、教育言語が異なることである。甲式ではモンゴル語が教育言語であり、それに漢語と英語の二つの教科科目を加えて学習する。この場合は内モンゴルで出版された教科書を使う。「漢語」の科目は少数民族対象の教科書を使い、「英語」も単語や文法項目などがモンゴル語で書かれた教科書を使う。乙式では漢語が教育言語であり、さらにモンゴル語と英語を履修する。この場合、モンゴル語の教科書だけがモンゴル語で書かれたもので、甲式用教科書より内容などの難易度が低いものである。モンゴル語科目の試験も乙式用のものがある。他の科目は全て漢族学校のものを使っている。

甲・乙式学級それぞれの小学校における 3 言語学習について、一週間当たりの総授業時間数がどのような割合で配置されているかを検討してみることにしよう。すでに確認したように、甲式学級における一週間に学習する 3 言語の時間数を見ると、モンゴル語科目の授業時間数は、小学校低学年では一週間あたり 9 時間となるが、高学年になると 6 時間に減少する。その他、漢語が 1 年次から 3 時間配置され、3 年次から 4 時間に増える。英語は 3 年次から週に 3 時間の頻度で開始されている。乙式学級小学校の 3 言語学習の一週間の授業時間数に関しては、漢語の授業が中心になっていることがわかる。モンゴル語の授業は 1 年次から始まるものの、一週間に 3 時間程度である。小学校高学年になると、モンゴル語の授業時間数は、外国語である英語の授業時間数と同じく週に 3 時間学習される。

実際にフフホト市の H1 小学校の甲式学級と乙式学級を見てみよう。それぞれの学級を



学年別にみたものが表 3-10 である。当小学校で、乙式学級が 4 割近くをしめていることがわかる。甲式学級の 3 年次から 1 年次までのクラスの数が増えていることをはっきり見て取れる。近年はモンゴル語の教育を好む傾向が増えているからといわれている。では、甲・乙学級それぞれにおける同一学年用の「モンゴル語」の教科書の内容について詳しく比較分析し、それぞれの教科書がおかれる重点とねらいについて考察したい。

表 3-10：フフホト市の H1 小学校の甲乙式学級の割合

単位：クラス

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	
甲式学級	4	3	3	2	3	2	63%
乙式学級	1	2	2	2	2	1	37%

(出典：現地調査資料に基づいて作成。)

## 3.2 甲乙式用『モンゴル語』教科書の比較

### 3.2.1 教科書の書誌情報から

筆者は「モンゴル語」の教科書を内モンゴル教育図書館<sup>63</sup>から購入した。甲乙式用それぞれの書誌情報の比較は表 3-11 の通りである。甲乙式の 2 種類の学級があることは承知していたが、しかし、想定外に教科書は 3 種類のもものが売られていた。その 3 種類はいずれも「モンゴル語」の教科書である。教科書の内容や量などを中心に、小学校高学年用の教科書の内容を検討した。表 3-11 は小学校 5 年次前学期用の教科書を比較した表で、それぞれ「甲式」、「乙式 1」と「乙式 2」の三つに表記し区別する。表 3-11 の中、「甲式」は牧畜地域<sup>64</sup>と甲式学級を対象とする教科書である。まず、教科書のタイトルからみると、モンゴル文字で「甲式」はモンゴル語で「Mongyol Kele」で、漢語で「语文 (Yuwen)」である。乙式学級用の教科書に関しては、対象地域の違いにより教科書が異なり、筆者はその相違点を比較するために「乙式 1」及び「乙式 2」と表記する。「乙式 1」と「乙式 2」はいずれも乙式学級用で、出版社の違いからもわかるように「乙式 1」は内モンゴルで、「乙式 2」は東北三省で使われている。「乙式 1」と「乙式 2」の両者はモンゴル語で「Mongyol Kele bičig」(モンゴル語文)、「蒙古语文 (Menggu yuwen)」という漢語訳になっている。編集と発行所に関しては、「甲式」と「乙式 1」は「小中学校語文編集委員会」が編集し、内モンゴル教育出版社から出されている。「乙式 2」は「東北三省モンゴル語教材編集委員会」が編集し、遼寧民族出版社が出版したものである。

<sup>63</sup> 内モンゴルに使用されている小中高校の教科書全般、練習問題、読書書物などが売られている。

<sup>64</sup> 甲式・乙式学級は、内モンゴルの大都市で実施されている。例え、シリンゴル・アイマグの各旗において今のところ乙式学級は実施されておらず、甲式学級と漢族学校が併存している状況である。

表 3-11：甲乙式用「モンゴル語」教科書の比較

1.対象学級	甲式	乙式 1	乙式 2
2.教科書	『語文』 Kele bičig	『モンゴル語文』 Mongyol kele bičig	『モンゴル語文』 Mongyol kele bičig
3.学年	五年（上冊）	五年（上冊）	第九冊 <sup>65</sup>
4.編著	小中学校「語文」編集 委員会	小中学校「語文」編集 委員会	東北三省モンゴル語教材 編集委員会
5.出版社	内モンゴル教育出版社	内モンゴル教育出版社	遼寧民族出版社
6.出版所	フフホト市	フフホト市	瀋陽市
7.出版年	2009 年初出版	2009 年初出版	2009 年初出版
8.課数	26 課	14 課	16 課
9.語彙	モンゴル字のみ	モンゴル字・漢語訳	モンゴル字・読み方・漢語訳
10.ページ数	246 ページ	104 ページ	85 ページ
11.印刷	カラー印刷	カラー印刷	白黒印刷
12.値段	8.64 元	4.04 元	4.50 元



（出典：「語文」2011；「モンゴル語文」2009；「モンゴル語文」2011に基づいて作成。）

テキスト量をみると「甲式」には 26 の課が収められ、246 ページからなり、豊富な内容が組み込まれている。「乙式 1」は 14 課で 104 ページ、「乙式 2」が 16 課の 85 ページで、3 者は同じ学年用にもかかわらず、互いの分量には大きく開きがあることがわかる。最も特徴的だといえるのは、各教科書の末尾に収録されている語彙表である（図 3-1）。「甲式」はモンゴル文字だけがピックアップされている。「乙式 1」はモンゴル文字に漢語訳付き、「乙式 2」はモンゴル文字に読み方<sup>66</sup>と漢語訳を付すといった違いがある。「乙式 2」に関しては、小学校 1 年次から 4 年次までの教科書の語彙表に、モンゴル語の読み方と漢語訳が記載されている。小学高学年になると語彙表から読み方が外され漢語訳のみが併記される。その代りテキストごとに登場する新出語彙に読み方がついている。3 種類の「モンゴル語」の教科書は上記のように書誌情報や外見に限ってもそれほど多くの違いがあることがわかる。では、教科書の内容に踏み込んで比較してみたい。

<sup>65</sup> 乙 2 の教科書に限り表記が第一冊から第十二冊となっており、第九冊が 5 年次の第一学期用の教科書に当たる。

<sup>66</sup> ここでいう読み方は、モンゴル文字を標準語の話しことばを基準につくられたガリグ文字の記号である。

図 3-1 : 3 種教科書の語彙リストの比較

甲式	乙式 2	乙式 2
		

(出典 : 「語文」 2011: 238 ; 「モンゴル語文」 2009: 91 ; 「モンゴル語文」 2011:73 から引用。)

### 3.2.2 教科書の目次から

表 3-12 は「甲式」用の教科書の目次を示すものである。7 ページから 8 ページにわたる長い作文が多くみられる。各課を総合すればテキスト量の多さが見受けられる。その中で、第 7 課「牧民のころ」、第 8 課の「故郷の歌」、第 12 課の「馬頭琴」、第 16 課の「チンギスの友人」、第 22 課の「ラクダ」、第 23 課の「仔馬と子ども」などのようにモンゴル民族、遊牧文化、家畜といったモンゴル民族の生活文化について書かれたテキストが多くみられる。また、ユニット練習が頻繁に用いられている。表 3-13 は「乙式 1」用の教科書で、計 16 課からなり、モンゴル民族の生活文化についての内容は見られない。表 3-14 は「乙式 2」用の教科書で、計 14 課が配置され、4 つのユニット練習が配置されている。乙式両者は「甲式」に比べて内容の豊富さや分量面で劣ることが見てとれる。

表 3-12 : 「甲式」学級用教科書の目次

課	題目	ジャンル	枚数	課	題目	ジャンル	枚数
1	わたしの学校	詩	2	15	草原の湖	作文	4
2	親子の絆	作文	7	16	チンギスの友人	物語	3
3	リス	作文	6		ユニット練習 (五)		5
	ユニット練習 (一)		7	17	夜	作文	8
4	神と子ども	作文	4	18	鶴	作文	5
5	二つの鉄球	作文	4	19	ハラガンとハムホール	作文	5

6	いつでも春	作文	6	20	マッチを売る女の子	作文	8
	ユニット練習 (二)		5		ユニット練習 (六)		5
7	牧民のこころ	作文	6	21	地球と地震	作文	3
8	故郷の歌	詩	3	22	ラクダ	家畜紹介	5
9	森のやまびこ	作文	7	23	仔馬と子ども	物語	9
10	証明書	証明書書方	3		ユニット練習 (七)		4
	ユニット練習 (三)		5	24	子どもの鹿	作文	11
11	山と岩	詩	4	25	弓	弓の紹介	5
12	馬頭琴	作文	10	26	早く大きくなりたい	作文	6
13	塩の湖	作文	5		ユニット練習 (八)		7
	ユニット練習 (四)		7		語彙リスト		9
14	キュウリ	作文	8				

表 3-13 : 「乙式 1」 学級用教科書の目次

課	題目	ジャンル	枚数	課	題目	ジャンル	枚数
1	私に新しい物がある	作文	2	9	病院で	会話	3
2	飛行士になろう	詩	3	10	日記	日記紹介	3
3	三羽のカラス	作文	3	11	太陽と月と星	詩	3
4	庭の掃除	会話	4	12	魚釣り	作文	2
5	資産	作文	3	13	食品店で	会話	3
6	友人	作文	3	14	美人娘	作文	3
7	子ども展示会	詩	4		語彙リスト (モンゴル語→漢語)		14
8	キツネとハリネズミ	作文	3				

表 3-14 : 「乙式 2」 学級用教科書の目次

課	題目	ジャンル	枚数	課	題目	ジャンル	枚数
1	祖国	国の紹介	1	10	何をしているのか	会話	2
2	どこに行くのか	会話	1	11	私の先生	詩	1
3	気候	作文	1	12	果樹園	作文	2
4	猫よ、言わないで	詩	1		ユニット練習 (三)		3
	ユニット練習 (一)		3	13	家に帰れば何をする	会話	1
5	誰に何をやらせるか	会話	2	14	着物	会話	2
6	熟語	熟語	1	15	欠席届	会話	1

7	宝	歌	4	16	ボール	作文	1
8	カササギとその子	作文	1		ユニット練習 (四)		4
	ユニット練習 (二)		3		句読点	文法	2
9	ナーダム	会話	2		語彙リスト (モンゴル語→漢語)		8

### 3.2.3 各課のジャンルから

図3-2は、三種類の教科書の内容について、それぞれの課がどのようなジャンルに相当するかを見たものである。ジャンルの区別に関しては、各教科書に記載されている規定に従っている。「甲式」の教科書には物語が2篇、作文18篇、詩3篇、紹介文3篇で、4つのジャンルが含まれ、その中で作文の数が他の二つに比べてはるかに多いことがわかる。「乙式1」の教科書には作文7篇、詩3編、紹介文1篇、会話が3篇が載っており、4つのジャンルからなる。「乙式2」の教科書には、作文4篇、詩2篇、紹介文1篇、会話が7篇、歌や熟語が1篇ずつ収録されていることがわかる。乙式用両者の教科書のテキストには、会話が含まれていることが注目すべき点である。さらに「乙式2」に関して言えば、会話が中心になっていることに気がつく。このような教授法は会話を用いてことばを習得させるという第二言語習得に比重が置かれていることが指摘できる。本節冒頭で触れたように、各教科書の末尾に収録されている語彙表において、「乙式2」にはモンゴル文字に読み方と漢語訳が付いているということからも、モンゴル語が外国語のレベルで扱われていると言える。

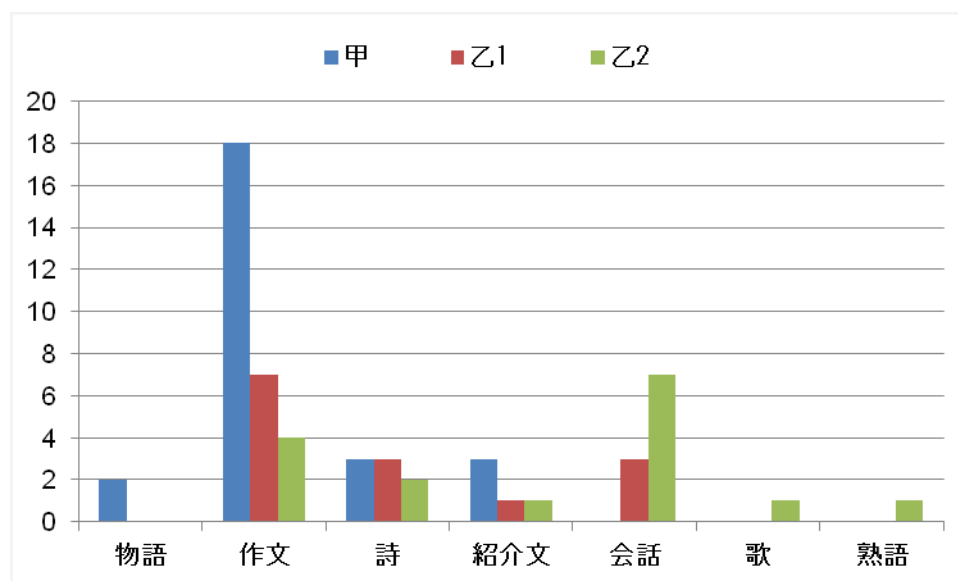


図3-2: 3種教科書の各課をジャンル別の比較

(出典:「語文」2011;「モンゴル語文」2009;「モンゴル語文」2011に基づいて作成。)

### 3.2.4 練習問題の内容から

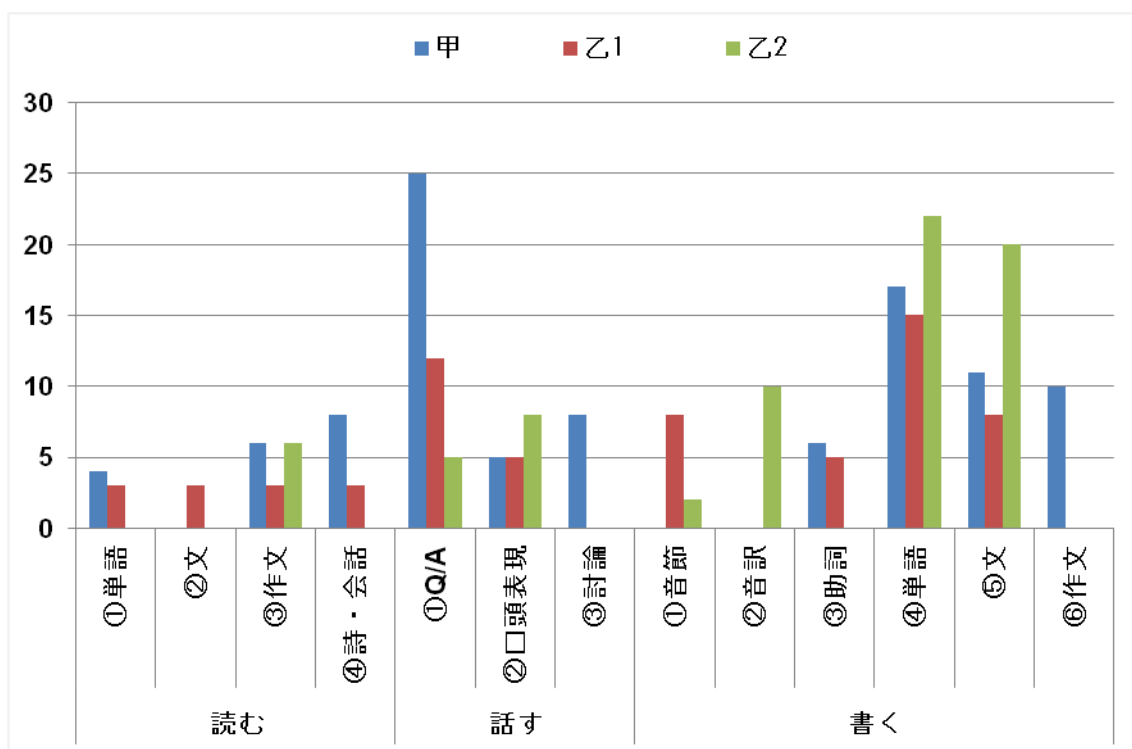




図 3-3：教科書練習問題の比較

(出典：「語文」2011；「モンゴル語文」2009；「モンゴル語文」2011に基づいて作成。)

モンゴル語をはじめて習う時には、「チャガン・トロガイ (čayan toluyai)」、「ガリグ・ウスグ (yaliy üsüg)」を習い、次にモンゴル文字を習うことになる。チャガン・トロガイを習えば、読み書きができる。ガリグ・ウスグは外来語や借用文字に使われることが多い。また、小学の低学年の段階にはモンゴル文字をチャガン・トロガイに分解できるようになることが重要とされる。それを「節に分解する (üiy\_e ber salyaqu)」という。ここで言う「節 (üiy\_e)」とは、モンゴル文字の構成には規則があり、基本的にはチャガン・トロガイが一節になる。それに単独の子音が附されれば上のチャガン・トロガイに接続し一節と見なす。言語学でいう音節とは異なり、音声学的な問題は含まず、小学生向けの内容なのであくまでも文字上の指導となる。例えば、日本語の「米」をモンゴル語で「tutory\_a」という。「tutory\_a」という文字を節で捉えると、「tu + tur + γ\_a」と3つの節に分かれる。その中で、第二節は「tu」+「r」子音となっている。小学校低学年の段階には「モンゴル文字→節」、「節→モンゴル文字」という往還を習得するための練習問題が多くあり、その変換能力を身につけさせることが重視されている。また、モンゴル語には文法的に男性・女性・中性の区別があり、それは母音によって識別される。このような規則性を理解できることが、早い段階で要求される。

### 例 3-1：モンゴル文字を節に分ける。

モンゴル文字：  (保護する、愛護する)

モンゴル文字の節： 

ha+ma+ya+la +n\_a

ガリグ文字： hamayalan\_a

### 例 3-2：ガリグ文字を読んでモンゴル文字を書く。

ガリグ文字： ci haanaas ireb

モンゴル文字： 

日本語： (あなた どこから きましたか)

では、それぞれの教科書の練習問題における読む、話す、書くの三つのスキルを中心にみてみたい(図 3-3)。読む練習に関して言えば、「甲式」には、各課に登場する新しい語彙を読む、長文を読む、詩や会話などを読むという練習が組み込まれている。それに対して、「乙式 1」には、一文<sup>67</sup>を読むという練習も含まれている。この二者に反して、「乙式 2」には、短いテキストを読むという練習しかないのである。「甲式」について、全般的に詳しくみると、練習問題に挙げられたテキストや詩を感情を込めて、流暢に読むという練習が多く課されていることが特徴的である。続いて、話す練習は、「甲式」には Q/A<sup>68</sup>の練習が 25 種もあり、他の二つに比べて目を引く点である。テキストを読んだ後に、その内容についてクラス全体で討論するという課題は甲式に限られる。さらに、親から聞いた物語などをクラスに対し発表するといった口頭表現の練習がある。それに対して、乙式の両者では、話す練習が比較的少ないことがわかる。また、乙式の両者ともにテキストを読んだ後にその内容について発表するといった口頭表現が中心となっている。「甲式」には、乙式の両者比べて非常に高いレベルの言語運用スキルが求められていると言える。最後に記述力においては、どの学級でも単語の反対語、同義語などを答える、挙げられた単語を使って文を作るという練習が頻繁にあり、短文作成に重点が置かれていることがわかる。「甲式」には、助詞や単語の穴埋め練習のほかに、文を作る、作文を書くという練習項目がある。乙式の両者には音のレベルの練習があることが「甲式」とは異なる点である。例 3-1 のように、モンゴル文字を節に分ける、またその逆に、節をつないで文字を完成させるという練習の頻度が高い。それに、「乙式 2」には、例 3-2 のようにモンゴル文字の発音に合わせて、ガリグ<sup>69</sup>を書く練習が多く設けられている。特にモンゴル文字を節に分解することが焦点となり、その練習問題が多く見られる。総じて、「乙式 2」の教科書では読

<sup>67</sup> 文は sentence のことを指す。

<sup>68</sup> Q/A は question/answer、その課の内容についての質問を回答する口頭表現の練習である。

<sup>69</sup> ガリグ (Galig) 文字は、内モンゴルの標準音発音記号である。

み、書き、口語表現が主眼となっており、特にモンゴル文字を節に分解する、節を加えて文字を完成させるなど、モンゴル文字の読み書きを正しく身につけさせることに重点が置かれている。例えば、「isgöljü」（蹴る）と綴って、[ösgölz]、[ösgölz]のどちらが正しい読み方かを選ぶといった練習が多く見られる。ここでは、「isgöljü」と綴って[ösgölz]と読むのが正解である。このように、「乙式2」ではいかに標準語に近く、正しく読めるかが追求されていることがわかる。

### 3.3 『モンゴル語科目の学習指導要領』の比較

#### 3.3.1 学習指導要領について

表 3-15：甲乙式学級用「モンゴル語科目の学習指導要領」の目次

甲式	乙式
第一章 はじめに	第一章 はじめに
1 授業特徴と位置づけ	1 授業特徴と目標
2 授業基礎概要	2 授業基礎概要
3 指導要領計画概要	3 指導要領計画概要
第二章 授業目標	第二章 授業目標
1 総目標	1 総目標
2 各段階目標	2 各段階目標
第三章 実施提案	第三章 実施提案
1 教材編集の提案	1 教材編集の提案
2 教材資料使用の提案	2 教材資料使用の提案
3 指導に関する提案	3 指導に関する提案
4 評価に関する提案	4 評価に関する提案
付録	
1 詩や作文に関する提案	
2 読書に関する提案	
3 文法知識に関する提案	
4 用語、その漢語訳と説明	

(出典：『モンゴル語文習指導要領』2005；2013に基づいて作成。)

甲・乙式学級それぞれに対して、日本の「学習指導要領」にあたる『モンゴル語文習指導要領』がある。以下では甲・乙式学級双方の「学習指導要領」を詳しく分析する。甲式用の『モンゴル語文習指導要領』（2005）と乙式用『モンゴル語文習指導要領』（2013）



は、ともに『モンゴル語文習指導要領』研究査定グループ<sup>70</sup>が作成し、内モンゴル自治区教育出版社から刊行されている。「教育部の委託により内モンゴル自治区教育厅」（資料 7）が『モンゴル語文習指導要領』を作成に取り組んでいることがわかる。表 3-15 は、両学級用の『モンゴル語文習指導要領』の目次である。甲式用は、「はじめに」、「授業目標」、「実施提案」の 3 章と付録から構成され、55 ページである。乙式用も同じく 3 つの章で構成され、32 ページである。ページ数からもわかるように、量的に違いがある。目次構成自体には大きな差異は見られないが、甲式においては付録部分が付加されている。付録部分の内容は、モンゴル語の詩や文学作品などのタイトルを多数挙げたものである。更に各学年に合わせた読書資料として物語、小説、叙事詩などのタイトルも記載されている。

### 3.3.2 指導要領の内容の比較

資料 5 と資料 6（資料編）は、それぞれのテキストにおけるモンゴル語学習指導要領の第二章「授業目標」の内容を抜粋し、日本語訳したものである。甲式においては、第一章で、「モンゴル語文の育成は他の授業科目を学習するための基礎であり、生徒たちの全人的な育成と生涯発展の基礎である」（資料 5）と記述されている。一方、乙式では、「母語を失ったモンゴル人児童・生徒にとって、モンゴル語の授業は第二言語教育である」（資料 6）と明記されている。また、「モンゴル語文の授業が生徒のモンゴル語の基礎能力とモンゴル文化形成を発展させる目的を有する」とし、乙式学級の生徒たちの「モンゴル語を使用する環境をつくり、モンゴル語を用いて教育を行う機会を守る」（資料 6）と規定されている。このように、両学級におけるモンゴル語そのものの位置づけについては、指導要領の第一章である、「はじめに」の部分に明示されている。

両者の指導要領に共通して中核となっている部分は、第二章の「授業目標」である。その内容について詳しく見てみたい。いずれも小学校の段階において、1・2 年次が第一段階、3・4 年次が第二段階、5・6 年次が第三段階と 3 つの段階に分けて授業内容が計画、配置されている。表 3-16 では、両学級の各段階における指導計画の内容について対照している。比較する方法として、まず、それぞれに掲載されている内容をモンゴル語から日本語に訳し、その中から重点目標を抽出し、①基礎知識、②文法内容、③作文練習、④総目標の 4 つに分け、それぞれの内容が双方においてどの段階で扱われているかを比較した。

表 3-16 に挙げた基礎知識という枠では、甲式においては、「チャガン・トルガイ」、「母音字・子音字」、「語尾子音字」、「節」、「節読み」、「語読み」などの内容が 1・2 年次に教えられている。しかし、乙式においては「母音字・子音字」、「節読み」、「語読み」が 3・4 年次に教えられることになっている。また、乙式において、新たに「授業用語」、「話

<sup>70</sup> 両研究査定グループの構成メンバーが異なる。

しことば」などが加わっている。甲式にはそのような言及は見られない。

表 3-16 : 学年別にみる授業目標

	内容	甲式	乙式
基礎知識	1.チャガン・トルガイ (čayan toluyai)	1、2年	1、2年
	2.母音字、子音字	1、2年	3、4年
	3.語尾子音字	1、2年	1、2年
	4.語の節 (üy_e)	1、2年	1、2年
	5.節読み <sup>71</sup>	1、2年	3、4年
	6.語読み <sup>72</sup>	1、2年	3、4年
	7.授業用語	—	1、2年
	8.話しことば	—	3、4年
文法	9.名詞・動詞の区別	3、4年	—
	10.格助詞	3、4年	5、6年
	11.人称所属語尾	3、4年	—
	12.名詞複数語尾	3、4年	5、6年
作文	13.文をつくる	1、2年	5、6年
	14.句読点	1、2年	3・4年
	15.作文を書く	5、6年	—
総目標	16.語	3,300 語	900 語
	17.言語機能 (聞く、話す、読む、書き)	読み書き	4 機能
	18.母語	言及あり	—
	19.モンゴル語	—	言及あり
	20.言語感覚	言及あり	言及あり

(出典：『モンゴル語文習指導要領』2005；2013に基づいて作成。)

次に、文法的内容を見る。甲式の3・4年次には基本的な文法内容である「名詞・動詞の区別」、「格助詞」、「人称所属語尾」、「名詞複数語尾」が登場する。その中で、「格助詞」「名詞複数語尾」は、乙式では5・6年次に扱う内容として配置されている。「名詞・動詞の区別」と「人称所属語尾」については小学校の段階では扱われていない。

語や文を書くことについては、甲式には1・2年次から「文をつくる」という課題があ

<sup>71</sup> モンゴル文字を読む時に節に分けて読む方法 (üyčilejü ungsiqu) (節読み) と文字ごとに読む方法 (ügečileju ungsiqu) (語読み) がある。

<sup>72</sup> 同上。

り、「句読点」を正確に使うことなどが求められている。また、5・6年次になると作文を書く練習があり、単年度で16回以上の作文練習をしなければならない。それに反して、乙式では、5・6年次になってから「文をつくる」という練習が設けられる。

最後に、両学級の指導要領それぞれの総目標の中身を確認する。甲式には小学校の段階で最低3,300語を学習し、正確に使用することが要求されている。それに対して、乙式は900語程度である。また、ともに「独力で本を読む能力を身につけて、よい言語感覚を育成し、文章の内容を理解できる…」(資料5;資料6)とあるように、「言語感覚」について言及されている。言語能力については、甲式では「読み書き」が基本的なスキルになっている。乙式には「聞く、話す、読む、書く」、いわゆる「4つの言語機能」が1年次から6年次まで中心的なスキルに位置付けられている。更に、甲式においては、「母語」というキーワードがみられる。それは、「モンゴル語文の能力を上達させると同時に、母語を用いて考える…」(資料5)と記述されている。一方で、乙式には「教科書に沿ったモンゴル語で考える…」(資料6)と記されている。

### 3.4 考察

内モンゴルの牧畜地域では民族学校の統廃合が行われ、地方の町や各旗の中心部にしかない状況である(ムンクバト 2012b)。一方、大都市に居住しているモンゴル人、あるいは移動してきたモンゴル人たちは、その都市の中で非常に分散した居住生活をしており、民族学校の数自体が異常に少ない状態である。モンゴル語の教育の現状には、このようないくつかの背景を持っている。甲乙式学級の対象となる学生の違いから、モンゴル語科目の教科書の比重が異なってくるのが、「モンゴル語」の教科書の内容分析から明瞭となった。そこにはモンゴル語を既修の子どもと、モンゴル語に未習熟な子どもという対象の違いがある。言い換えれば、母語の交替がすでに行われている子どもたちが存在するのである。都市部で生まれ育った子どもたちの場合、生活環境が完全に漢語中心になり、本来の母語であるモンゴル語から切り離されているという実態がある。自らの話す言語が自然に漢語へと交替して、モンゴル語が使えなくなるというのが都市部出身の子どもの特徴になりつつある。しかし、上記のような「モンゴル語」の教科書における相違は、単なる子どもの言語使用状況から生まれたものだというより、子どもが生活する地域社会の状況が異なることが主要因となっているといえよう。該当地域に適応した「モンゴル語」の教科書がつくられていることが、教科書の内容から明確に見てとることができる。表3-17に示したように、対象地域により、漢化の進み具合のいかんで、モンゴル語による教育の実態がそれに連動して変化していると考えることができる。

モンゴル語が比較的多用されている地域、特に牧畜地域には甲式が普及し、漢化の影響を強く受けながら民族語としてのモンゴル語が教育言語であり続けている。チベット自治

区や新疆ウイグル自治区では、すでに民族語による教育が廃止されており、それに反発する暴動やデモが頻繁に起きている状況である（読売新聞 2010 年 11 月 27 日朝刊）。内モンゴルの牧畜地域における取組は民族語による教育の維持を訴え、現状を保持している状況である。

表 3-17：民族語の教育その役割

	甲式	乙式 1	乙式 2
対象地域	牧畜地域（内モンゴル）	都市部、農耕地域（内モンゴル）	東北三省
民族語教育	維持	復興	

一方では、漢語・漢化への同化が進んでいる地域、例えば、フフホト市のモンゴル民族学校では、甲式学級と乙式学級が同じ学校で併存している。都市部ではモンゴル語使用の頻度が衰え、モンゴル語が使えなくなった子どもが多く存在するために、乙式学級を取り入れている。そこでは基本的に漢語による教育を行い、モンゴル語が一科目として学習される。使われる前掲の「乙式 2」の教科書は甲式に比べて内容や量などが少ない。つまり、モンゴル語が習得できなかった子どもに対して、モンゴル語に親しみモンゴル語を身につけるための、いわばモンゴル語の復権への試みである。

また、内モンゴルの外、例えば、黒龍江省におけるモンゴル族の場合は、モンゴル語によるカリキュラムが一時停止され、2005 年 9 月から再開されたものの、モンゴル語は選択科目として履修されている現状である（包聯群 2011:80-85）という。「遼寧省では、モンゴル語を回復させるために努力している。モンゴル語で学習できる学校があるという。70 年代からモンゴル語で教育できるシステムができた。モンゴル民族学校には甲乙式学級がある」（50 代、教師、男性：資料 2-I-11-011）という。これらの地域では少なくとも学校現場において、モンゴル語による教育が不可能になり、すでに漢化された状況だといえる。現状に応用する対策としての「モンゴル語の教育」は、最早、モンゴル語の復興への取り組みと位置付けざるを得ない。モンゴル語にルビを振り、漢語の訳をつけてあることもそのような社会的実状の反映といえる。このように同じ「モンゴル語」の教科書であっても、モンゴル語が使用されている社会的環境に違いがあるために、教科書の編集において、様々な工夫や内容や進捗状況に大きな開きが現れているのである。ある意味で漢化の強い影響から生まれた産物と考えられる。

さらに、双方の「モンゴル語学習指導要領」の比較を通して、モンゴル語そのものが「母語」か「第二言語」のどちらと見なされるかによって、異なった学習指導要領がつけられていることがわかった（資料 5；資料 6）。甲式において、いわば一般のモンゴル人に対するモンゴル語の学習は、指導要領に明記されている通り、モンゴル語の読み書きが基本的

なスキルとなっている。モンゴル語の学習において「標準語」あるいは「母語」を用いてモンゴル語文を考えることが前提になっているといえる。他方で、乙式に対する「モンゴル語」の学習とは、最初の段階から「モンゴル語」教育が「第二言語」だと前提化され、計画されていることが新たに把握できた。乙式用モンゴル語の教科書の後半に記載されているように、モンゴル語の単語に漢語訳が併記されることは、漢語の補助に依存してモンゴル語を学習するという状況だといえる（ムンクバト 2013b）。乙式における『モンゴル語文』は、「学生たちにモンゴル語・文字を身につけさせる」（『モンゴル語学習指導要領』研究査定グループ 2013:2）と明記されているように、単なる言語の学習に過ぎないと言える。甲式の場合は、「学生たちの語文の基礎を全面的に高めることが目的で、モンゴル語の学習において優れた文章などへの触れ合いを通じて知識を拡張し、学習方法を獲得し、関心や認識を高め、自然、人々、文化への愛着を育む」（『モンゴル語学習指導要領』研究査定グループ 2005:2）。というように、モンゴル語が新たな価値観、世界観を身につけるための手段となっていることがわかる。更に、甲式では、モンゴル語が学習言語だという前提があり、モンゴル語を基盤に他の科目を学習するのである。その意味では、乙式に比べて高い言語運用能力が必要となるのである。

## まとめ

本章は3節からなる。第1節では、中国において少数民族を対象に実施される「二言語教育」政策の状況と、カナダとアメリカなど多民族社会の状況との比較により、差異を析出した。そして、東アジア文化圏におけるカリキュラム上の「民族語」について概括した。内モンゴルの現状は、特に乙式学級の状況はカナダの事例と比較して、また学校の教育言語と言語科目の配分からみて、バランスが取れた「バイリンガル教育」といいがたいといえる。

第2節では、カリキュラムにみる母語教育について考察を行った。東アジア文化圏という枠組みの中での比較からは、漢族学校では民族語と算数の科目が一週間の授業の中で3割以上という高い割合をしめ、均整の取れた国民教育の姿が見える。日本の学校と朝鮮学校からも民族語の教育については2割程みられる。在日朝鮮人学校では、異国に生活基盤を置き、母語がすでに日本語に取り替えられたにも関わらず、朝鮮語が日本語より多く履修される。そこに教わる朝鮮語は民族の文化とアイデンティティの継承と考えられる。それに反して、モンゴル民族学校では民族語であるモンゴル語授業の割合が2割に満たず、学年が上がるにつれて割合が減少するという深刻な問題を孕んでいる。それに算数の授業が1割と少ないことがわかった。

第3節では、内モンゴルにおけるモンゴル人に対する「モンゴル語」教育について、都市部と牧畜地域や教育言語の違いなど、いくつかの視点から概観してきた。まず、甲乙式学級制度は、教育言語の違いから教育過程において様々な違いを生むことになる。次にモンゴル人学生を対象とするモンゴル語と漢語の二種類の教育言語があることを前提に、そこで教えられる内容にどのような違いがあるかを確認した。さらに、双方の「モンゴル語学習指導要領」の比較を通して、モンゴル語そのものが対象となる学生の「母語」か「第二言語」のどちらと見なされるかによって、異なった学習指導要領がつけられていることがわかった。

## 第四章 内モンゴルにおけるモンゴル語・文字使用の実態

### 第1節 モンゴル人学生の日常生活における言語使用

#### 1.1 モンゴル人学生の言語使用

本章では、内モンゴルの牧畜地域出身のモンゴル人学生<sup>73</sup>に焦点を当て、彼らの言語使用の実態を明らかにすることを目的とする。遊牧民は経済的弱者であり、生活様式や文化のあらゆる面において、彼らの子弟の教育は重要な課題だと考えられる。また、遊牧民たちは都市部から離れて生活をしているため、彼らの言語生活はもちろん、生活形態も都市部の状況と異なる場合がある（ムンクバト 2013a:205）。つまり、モンゴル語と漢語の重要度には地域差がある（佐々木 2011:131）ことを意味する。モンゴル民族にとって、モンゴル語とモンゴル文字は文化の基盤といえる（バイルモンド 2013:28）が、彼らがそれに接する機会の差は無視できない。

内モンゴルにおけるモンゴル民族の教育に関しても、実情を見ると数々の課題や矛盾を抱えている（須川 2011；格日樂 2007）ことが認められる。内モンゴルの民族言語・文字の使用に関しては、「内モンゴル自治区モンゴル語・文使用条例」<sup>74</sup>というモンゴル語使用権限を保障する法的規定が施行されている。当条例の詳細内容は資料4に掲載する。モンゴル語・文字の保護、使用、学習について、モンゴル人が自らその権限を求め、活性化・実用化させる責務がある（Sainbayar 2009:108）と考えられている。近年は内モンゴル全土にわたって、モンゴル語・文字の使用を奨励し発展を促進させるための取り組みが広く行われている（資料3）。しかし、学校教育では、民族学校の高校は理科系の授業を漢語で行わなければならないという「法案」が提出されたことがある（Erdemtü 2005）という。その法案は漢化を促進させるものだと考えられ、漢化は少数民族にとって「発展」や「革新」ではなく、「後退」、「迷走」である（Erdemtü 2005）と強く批判されている。このように民族語による教育の維持が訴えられている。現状を見る限り、都市部はもちろんのこと、牧畜地域においても言語使用に漢化の影響が及んでいると考えられる。

2000年以降は、特に、牧畜地域において多方面で変化が起きている。自然環境保護の名目で「生態移民」、「禁牧」など様々な政策が実施されている。同時に、資源開発が急ピッチですすめられ、遊牧民の生活基盤の維持そのものが危惧される状況である（ムンクバト

<sup>73</sup> モンゴル人学生に関して、本調査では小学生、中学生、高校生、大学生が調査対象となる。

<sup>74</sup> 「内モンゴル自治区モンゴル語・文使用条例(Öbör mongyol-un öbertegen jasaqu oron-u mongyol üge kele üsüg bičig-ün ajil-un dürim)」は2005年5月1日から施行された。当条例は総則、学習と教育、使用と管理、科学研究と規範化・標準化、法律上責任、付則の5章、40の項目からなる。

2013a)。開発などの余波で外部からの人口が増え、漢族の人口比率は増加しつつある。その人口変動はモンゴル民族の教育に間違いなく大きな影響を及ぼしている（トクタホ 2009:60）と考えられる。漢族の流入によって、モンゴル語と漢語の二つの言語接触が見られる現場においては、社会的に漢語が優勢となっている。その環境においては、モンゴル語の存続自体が危機に瀕している。例えば、モンゴル語は漢化の影響を受け、親族名称の中にまで漢語による表現が入り込んでいる（フレルバートル 2009:146）。また、モンゴル語の会話における漢語の借用（イリチ 2012）、漢語からの影響（Kurebito 2008）といったモンゴル語と漢語の混合使用などについて研究した論説も多数見られる。モンゴル語と漢語の混合使用が非常に深刻な状況にある（ポインウリジ 2013:35）という指摘もある。言語教育の分野でも、内モンゴルにおける「母語教育」「二言語教育」「三言語学習」などの点で多くの問題を抱えている。筆者はこうした状況におかれているモンゴル民族の教育に焦点を当て考察してきた。例えば、民族学校の統廃合やモンゴル人学生の学校選択の変容についての研究などがそれに含まれる（ムンクバト 2012b）。

上述したような背景をもつモンゴル人学生を対象に、言語使用に関するアンケート調査を行った。牧畜地域から町に移動させられた子どもたちにとって、生活環境の変化は言語使用に大きな影響を与えると考えられる。そこで、子どもたちの移転先の生活の中でのことばの使用状況を考察する。

## 1.2 調査概要等

本調査は<sup>75</sup>、内モンゴルの首府フフホト市とシリントルの西部にあるモンゴル民族学校に在籍するモンゴル人学生を対象に実施した。シリントルは、内モンゴルの中部に位置し、北はモンゴル国に隣接した牧畜地域である。今回は4校（小学校、中学校、高校、大学をそれぞれ一校）を選び、合計で121人の学生を対象に実施したアンケートの分析を通じて考察を行う。調査対象者の内訳は小学生が46人、中学生が31人、高校生が20人、大学生が24人である。性別では、男子学生は41%で、女子学生は59%である。

アンケート用紙の内容は次の通りである（表4-1）。問1から問5までは、学生の基本情報で、学年、性別、年齢、両親の職種、出身地について記入させた。問6は、家庭、学校、友人同士、買い物の4つの場面におけるモンゴル語、漢語の使用状況について回答してもらった。問7と問8は、学生本人が使うモンゴル語と漢語について「聞く、話す、読む、書く」の4技能それぞれについて5つのレベルによる自己評価を求めた。問9は、放送やテレビなど文化生活における言語使用に関して、モンゴル語、漢語、英語のどの言語を中心に接触しているか、回答を求めている。問10は、学校生活における居住状況を

---

<sup>75</sup> 本調査は2012年11月1日から23日の間3週間にわたって内モンゴルの牧畜地域を中心に実施したものである。



実家、学校の寮、借家、アパートの中から選択してもらった。問 11 は、学生が現在通っている学校に関して、どのような理由でその学校を選んだのかを尋ねた。問 12 と問 13 は、学生本人が希望する学歴と職種などについてである。本稿では、モンゴル人学生たちの日常生活における言語使用状況を中心に提起して分析する。アンケート集計統計はデータ集計ソフト SPSS を用いて行った<sup>76</sup>。

表 4-1：アンケート用紙の内容

質問項目	内容
問 1～5	基本情報
問 6	日常生活での言語使用状況
問 7、8	モンゴル語と漢語の 4 機能別の自己評価
問 9	文化生活における使用言語
問 10	学校生活での居住状況
問 11	現在在籍中の学校を選んだ理由
問 12、13	学生の希望する学歴及び職業

(出典：2011 年 11 月に実施したアンケート調査に基づき作成。)

### 1.3 アンケート調査にみる言語使用

#### 1.3.1 学生たちの家庭背景

まず、調査対象者の家庭環境を見る。親の職種については、父親が牧民という回答が 62.8%、母親が牧民という回答が 64.5%で、家庭が牧畜業に従事している学生の多さを確認できる。その他に公務員、自営業、運転手、農民という職種も一定の割合で回答されていた。これらの職種は、親が町に常住し、その町で就労していることを示している。なお、上記の公務員には、警察、幹部、教師、医師、獣医、通訳の仕事が含まれる。

モンゴル人学生の中では、モンゴル族学校に通わずに、直接漢族学校に通うケースが増加している。この現象はモンゴル族学校生の漢族学校への流出を意味するものであり、モンゴル民族の教育について考える上で大きな問題の一つである。もちろん、民族学校の学生数が減少すればするほど、民族学校そのものの存続が危うくなる。今回の調査において、学校選択について全体では「親の希望」という回答が比較的多く、26%を数える。それに平行して「この学校はいい」という項目も 26%である。特に小学生の中にそのような回答が目立つ。「この学校はいい」とは具体的にどういうことかに関して様々な回答が見られる。たとえば、大学生の中では「この学校の知名度が高い」「この学校は有名」だという記入例

<sup>76</sup> 石村他 (2011) ; 石村他 (2013) ; 内田 (2007) を参照した。

がある。小中学生は、「管理がいい」「教育のレベルが高い」「この学校は設備がいい」などと記入していた。中でも小学生には「環境がいい」という回答例が非常に多い。小学生のそのような「学校の環境がいい」という表現の背後には、やはり親からの影響があると思われる。小学生による「管理がいい」「教育のレベルが高い」といった評価は、親や社会一般の評価に強い影響を受けているものだと考えられる。小学生が学校について総合的に把握してそのような価値判断をするのは難しいと思われるからである。

通学状況については、都市部出身の学生が実家から通学している一方で、牧畜地域出身の学生は寮に入り、その割合は64%を占めている。小学1年次から親元を離れて寮の生活を強いられることは、子供たちにとって大きな負担となる。このため、アパートなどに住んでいる学生も17%おり、そのほとんど小中学生となっている。

### 1.3.2 生活の中での言語使用

表 4-2：生活環境と言語使用

単位：%

場面別	家庭	学校	友人同士	買い物
①モンゴル語のみ	75.1	53.7	54.5	1.7
②モンゴル語が多い	14.9	32.2	30.6	4.1
③両方	9.1	11.6	13.2	24.8
④漢語が多い	0.8	0.8	0.8	39.7
⑤漢語のみ	0	0	0	28.1
無回答	0	1.7	0.8	1.7

(出典：2011年11月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

学生たちの言語使用状況を把握するため、家庭、学校、友人同士、買い物の4つの場面におけるモンゴル語と漢語の両言語の使用頻度について、「①モンゴル語のみ、②モンゴル語が多い、③モンゴル語と漢語両方、④漢語が多い、⑤漢語のみ」の5つの選択肢から回答してもらった。表4-2の通り、アンケートの集計結果として、モンゴル民族の子どもたちの言語使用状況は、場面によって相違がある。家庭においてはモンゴル語を使うという子どもが最も多く、75.1%が「モンゴル語のみ」と回答している。一方、学校、あるいは友人同士という場面でもモンゴル語を使うという回答が全体の過半数を占め、学校では53.7%学生が「モンゴル語のみ」用いると回答し、友人同士でも54.5%の学生が「モンゴル語のみ」だと回答している。それに対して、買い物においては状況が一変して、39.7%の学生が「漢語が多い」、28.1%の学生が「漢語のみ」と回答している。すなわち、全体の

学生の中で6割以上の学生が買い物をする時には漢語に依存する傾向が見られた。

表 4-3 : 場面別と学校種別における言語使用のクロス表

単位 : %

場面別	学校種別				
	小学	中学	高校	大学	
家庭	①モンゴル語のみ	78.2	77.4	65.0	75.0
	②モンゴル語が多い	15.2	16.1	15.0	12.5
	③両方半々	6.5	6.5	20.0	8.3
	④漢語が多い	0	0	0	4.2
	⑤漢語のみ	0	0	0	0
友人同士	①モンゴル語のみ	65.2	67.7	40.0	29.2
	②モンゴル語が多い	28.3	22.6	25.0	50.0
	③両方半々	4.3	9.7	35.0	16.7
	④漢語が多い	0	0	0	4.2
	⑤漢語のみ	0	0	0	0
	無回答	2.2	0	0	0
学校	①モンゴル語のみ	76.1	54.8	50.0	12.5
	②モンゴル語が多い	21.7	22.6	30.0	66.7
	③両方半々	0	16.1	2.0	20.8
	④漢語が多い	0	3.2	0	0
	⑤漢語のみ	0	0	0	0
	無回答	2.2	3.2	0	0
買い物	①モンゴル語のみ	0	6.5	0	0
	②モンゴル語が多い	0	3.2	10.0	8.3
	③両方半々	30.4	22.6	45.0	0
	④漢語が多い	30.4	32.3	40.0	66.7
	⑤漢語のみ	24.8	35.5	5.0	25.0
	無回答	4.3	0	0	0

(出典 : 2011 年 11 月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

表 4-3 では、場面別における言語使用を学校種別に集計したものである。小学生から大学生まで年齢差による言語使用に相違があるかを確認できる。ここでは対象者を学校種別にそれぞれ 100%とし、その中での割合から比較している。場面別を比較してみる買い

物の場面において小中高校と大学いずれも「③モンゴル語・漢語両方」「④漢語が多い」「⑤漢語のみ」の3つの項目が高い割合を占めて、使用言語が漢語へとシフトしていることがわかる。大学に限って言えば、調査対象者の在籍する学校がフフホト市、つまり比較的大都市になるため、モンゴル語が通用する環境でないことがはっきりとわかる。そのため買い物において漢語が使われていると言えるが、それはあくまでも地域的差異とも捉えられない。しかし、小中高校の場合は比較的モンゴル語の使用頻度が高い環境であるにも関わらず、買い物するには漢語の使用が高い割合を占めている。特に若い年齢層の小中学生の場合で、「漢語が多い」、「漢語のみ」という回答の合計がそれぞれ60%を超えている。

### 1.3.3 学校における言語使用の事例

学校ではモンゴル語を使う傾向が強いという結果が出た。一方、子どもたちの学校における状況を観察した限りでは、友達間でも漢語を使って会話する現象が認められる。たとえば、エレンホト市のE1小学校がそのひとつである。エレンホト市のモンゴル族の学校は、モンゴル国からの学生を受け入れている点で、内モンゴルのモンゴル族学校にはまれな特徴をもっている。もう一つの特徴は、校内の掲示や標識にモンゴル文字と漢字、キリル文字の三種類が記載されていることである。写真4-1はエレンホト市のモンゴル族学校の教務係の入り口に掲げられていた看板である。「教務処」という案内板を中段にモンゴル文字で「*Kičiyel kümüjil-ün γajar*」と書き、上段は漢字で「教務処」、下段がキリル文字で記されている。校内のみならず、当市の商店街に見られる看板でも、三種類の文字が併記されているところが多い。



写真4-1：校内看板

(エレンホト市のE1学校校内、2012年11月09日筆者撮影。)

そこで、当校内での言語使用状況について、当時の教頭に尋ねた。「私はモンゴル語によ

る名称に注目し、学生たちに指導している。元々モンゴル語にあった名称が漢語に代わっているのが多い。例えば、「万年筆」はモンゴル語で「bir」だが漢語で「钢笔（gangbi）」といい慣れている。そのように使い慣れていく中で、自分がいざモンゴル語で表現しようとするときに思いつかなくなってしまうことは多々ある」（40代、教師、男性：資料2-E-04-020）。「子どもたちがモンゴル語を使わずに漢語を使って会話をする現象は、内モンゴル全土に起きている。テレビなど日常の生活環境において、漢語が中心になっているのが主な原因である。この学校では、子どもに学校でモンゴル語を使わせる環境の保持を目的とする改善策として「母語保護者」<sup>77</sup>という取り組みを実施した。それは、先ず①子どもたちを互いに監視させ、モンゴル語による会話中に漢語を使わないよう、お互いに注意させ、次の段階では②先生が指導し間違いを訂正するなどの方法を取った。それをしばらく実施することで、校内で効果が出てきた。しかし、子どもの生活の中の言語使用を制限してはいけないという教育局側の指導を受け、その取り組みは中止された」（40代、教師、男性：資料2-E-05-020）と語った。

牧畜地域における言語使用の特色を見る上で、このエレンホト市の民族学校が実施した実践例に注目したい。図4-1からわかるように、この学校には外部地域から受け入れた学生が多く在籍している。結果として、本市と本市の各ソム出身の学生が26%と、全体の4分の1に過ぎないことがわかる。当校の736人の学生中、70%の学生が内モンゴルの全土から集まっていることがわかる。内モンゴルといえども、地域的にいくつかの方言があるため、子ども同士の交流にも影響が出ると思われる。また、モンゴル国からの学生も4%在籍している。

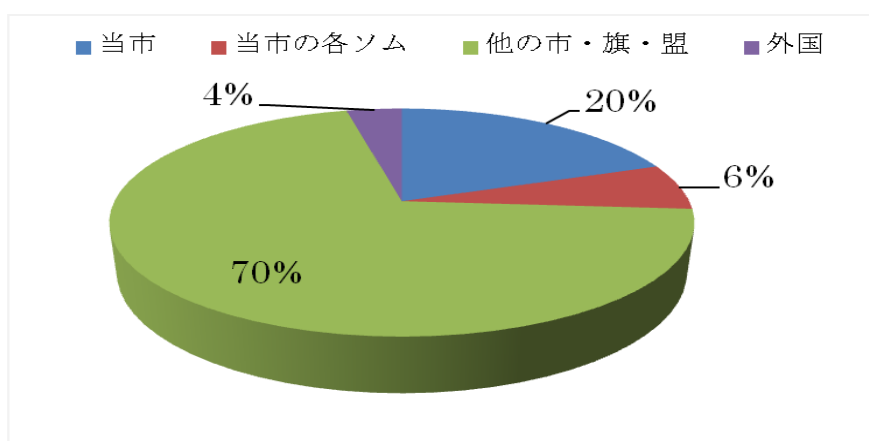


図4-1：エレンホト市E1小学校の在籍学生の状況

(出典：2011年11月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

<sup>77</sup> 「母語保護者」をモンゴル語で(eke kele-ben qamayalanči)という。

## 1.4 考察

今回の調査の結果、内モンゴルにおける牧畜地域から町に移動させられた子どもたちの言語使用状況に関して、家庭内においては 121 人中 91 人の学生が「モンゴル語のみ」を使うと回答しており、75.1%という高い割合を示した。それはやはり、遊牧民の家庭に生まれ育ったことで、モンゴル語が使える環境にあると考えられる。しかし、その一方で家庭や学校において、モンゴル語と漢語の両方を使うと答えた学生も 1 割程度存在している。更に、買い物をするためには「漢語のみ」、または「漢語が多い」という答えが多く、全体では 67.8%の学生が事実上漢語を使用している計算になる。すなわち、買い物をするにあたっては、モンゴル人学生たちの使用言語がモンゴル語から漢語へとシフトしていることが明らかに見て取れる。このことから、モンゴル語は、家庭や学校という非常に限定された場で用いられる言語となっており、学生たちが一步社会に踏み出せば、外部に広がる漢語の世界に取り込まれるという実態が浮かびあがってくる。その背景には、社会的情勢として漢人人口の割合の上昇、漢語使用の頻度の高さといった理由を挙げられるだろう。また、学校という、子どもたちの身近な環境でさえ、自らの民族語であるモンゴル語が十分に通用しにくくなっているというのが現状である。少数民族の言語使用に関して法律や条例などが次々と施行される反面で、モンゴル語の使用頻度は依然低く、さまざまな圧力を受けつつある。エレンホト市の小学校の事例からも分かるように、学校側のモンゴル語に対する保護・維持のための取り組みでさえ維持できていないことは注目に値する。民族学校だからこそ、教科書の読み書きだけではなく、民族語の使用をサポートし、奨励するのが求められるべき方針と考えられる。しかし、上述のように内モンゴルでは教育関連機関からの制約を受け、学校側の取り組み自体が困難になっているというのが現状である。

## 第2節 モンゴル人学生の文化生活における言語使用

### 2.1 文化生活と言語使用に関する調査について

本節では、内モンゴルにおけるモンゴル民族学校に在籍するモンゴル人児童生徒の言語使用に関して、彼らの文化生活におけるモンゴル語使用状況を言語機能という側面から考察する。日常の生活においてテレビを視る、ラジオ放送を聴く、インターネットを利用する際に用いる言語について確認する。さらに文字媒体としての新聞や雑誌に関し、モンゴル語と漢語のどちらの言語で書かれた書物を主に使用しているかについてのアンケート調査を分析する。前節において牧畜地域出身のモンゴル人学生のモンゴル語使用に関するアンケート調査から、日常生活におけるモンゴル語使用の使用場面に焦点を当てた結果、モンゴル語は家庭、学校という非常に限定された場所で使われることばとなっており、プライベートでない空間に出た学生たちは漢語の世界に取り込まれる実態を浮き彫りした。モンゴル人の児童生徒たちの文化生活における言語使用を把握するために、これまでの調査を踏まえ、調査内容や方法を発展させる必要がある。それは、昨今のインターネットなどといった比較的新しい情報伝達の手段が飛躍的に進歩し、人々の日常生活において必需品となっている。そのようなメディアへのアクセスに使用する言語・文字が、今後のモンゴル語文化の発展につながる可能性を探る。

現代の社会的な生活状況において、テレビ、ラジオ、インターネットなど生活必需品は、新たな情報にアクセスする一種の道具の役割を果たしていることはいままでもない。内モンゴルも例外でなく、それらは辺境の牧畜地域を除けば、都市生活者にとっては身近なものである。牧畜地域では、電気が通っていない地域において家庭内でのインターネット利用は難しい。風力発電、ソーラーパネルなどを使って携帯電話やテレビ、ラジオのための必要な電気を調達している状況である。

今回の調査は、内モンゴルにおけるモンゴル人学生の言語使用現状を確かめるために、2013年8月から9月の間、西ウジムチンにおけるモンゴル民族学校の小学生、中学生、高校生を対象にアンケート調査を実施した。今回は回答者の人数を増やし、小中高校生を対象に345人分の回答用紙を配布し、341人から回答を得た。その中で有効回答は339人で、99%の回答率である。回答者の詳細は、小中高校生順に34%、30%、36%となっている。男女別では男子学生が52%、女子学生が47%である。年齢別には表4-4の通りで11歳から19歳までで13歳(31%)、14歳(25%)、17歳(24%)の順に割合が大きかった。アンケート調査の中核はやはり、ラジオ、テレビ、インターネット、新聞、雑誌といった各メディアにおける使用言語についてである。また、インターネットでどのようなホームページや内容を中心に利用しているかも尋ねた。

表 4-4：アンケート回答者の年齢別内訳

年齢	人数 (人)	割合 (%)
11歳	3	0.9
12歳	12	3.5
13歳	106	31.3
14歳	84	24.8
15歳	11	3.2
16歳	17	5.0
17歳	82	24.2
18歳	19	5.6
19歳	5	1.5

(出典：2013年8月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

## 2.2 文化生活におけるモンゴル語使用の実態

前回の調査と同様、やはり家庭という場面において「モンゴル語のみ」を使うという回答は、非常に高い割合であった。「モンゴル語が多い」という回答と合計で全体の約 87% を占めることになる。家庭は、最初の社会化段階を担う重要な教育機関（東他 1988:73）であり、生活の最も基礎的な単位という社会的側面からみて、期待通りの結果といえる。では、家庭という空間の内部において、メディアに接する場合のモンゴル語と漢語の依存度を比較したい。表 4-5 は、家庭での言語使用とメディアを利用する時の言語使用状況と新聞と雑誌を読むときにどの言語を中心に使っているかを示したクロス集計したものである。

それでは、表 4-5 の各項目を検討しよう。表の上部の列は「家庭」における言語使用状況で、それをテレビ、インターネット、ラジオの順にいかなる回答が示されたかを表す。家庭では 207 人の学生が「モンゴル語のみ」を使うという回答を得られている。しかし、メディアにアクセスするときには 207 人中の大多数が「モンゴル語のみ」という回答をしていないことが明白である。家庭において「モンゴル語のみ」という回答で、テレビとインターネットの場合には、「漢語が多い」「漢語のみ」という回答の合計はそれぞれ順に 116 人と 176 人となっている。対象者全体では 217 人と 289 人で、64%と 85%の高い値となっている。それに相反して、ラジオ放送を聴くときにはモンゴル語で放送されるラジオを聴く人が非常に高い割合を占めていることがわかる。



表 4-5 : 家庭内言語とメディア使用言語のクロス表

単位:人

		家庭				
		モンゴル語のみ	モンゴル語が多い	半々	漢語が多い	合計
合計		207	87	41	4	339
テレビ	モンゴル語のみ	36	5	4	0	45
	モンゴル語が多い	54	17	4	0	75
	漢語が多い	94	51	26	2	173
	漢語のみ	22	13	7	2	44
	無回答	1	1	0	0	2
インターネット	モンゴル語のみ	6	2	3	0	11
	モンゴル語が多い	22	7	1	0	30
	漢語が多い	106	45	17	1	169
	漢語のみ	70	29	18	3	120
	無回答	3	4	2	0	9
ラジオ	モンゴル語のみ	154	54	20	0	228
	モンゴル語が多い	39	19	13	2	73
	漢語が多い	11	7	6	1	25
	漢語のみ	3	4	2	1	10
	無回答	0	3	0	0	3
新聞紙	モンゴル語のみ	106	42	12	0	160
	モンゴル語が多い	78	33	16	1	128
	漢語が多い	20	6	11	1	38
	漢語のみ	3	5	2	2	12
	無回答	0	1	0	0	1
雑誌	モンゴル語のみ	106	45	15	1	167
	モンゴル語が多い	75	30	17	0	122
	漢語が多い	24	7	7	1	39
	漢語のみ	2	3	1	1	9
	無回答	0	2	0	0	2

(出典 : 2013 年 8 月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

新聞と雑誌、それぞれが 288 人と 289 人という高い割合でモンゴル語を使っていること

を確認できる。家庭においてモンゴル語のみと回答し、新聞紙と雑誌の利用時にやはり漢語を主体とする傾向は、いずれにおいても 20 数人に限られている。では次に、インターネットの利用時にモンゴル語のサイトと漢語のサイトのどちらを多く利用し、どのような内容や目的で検索しているかを見てみよう。

### 2.3 インターネット利用と言語使用

表 4-6：小中高校生がよくアクセスする漢語のサイト

No.	利用サイト名	小学校	中学校	高校	合計
C1	360	30			30
C2	Baidu	84	52	56	192
C3	Taobao	21	14	25	60
C4	Tudou	33	4	12	49
C5	QQ	11	38	5	54
C6	Youku	12	9	9	30
C7	Souhu	22	1	2	25
C8	Google	1	1	2	4
C9	Fengxing	6	1	6	13
C10	Tianmao	3			3
C11	Sougou			6	6
C12	Kaixin		1		1
C13	Renren	2	2	1	5
C14	Hao123	1		8	9
C15	Weixin		8		8
C16	Weibo		4		4
C17	Renmin		1		1
C18	Tianmu	2			2
C19	Youzhan	1			1
C20	Kaixin		1		1
C21	Baofeng			1	1

(出典：2013 年 8 月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

表 4-7：小中高校生のよくアクセスするモンゴル語のサイト

No.	利用サイト名	小学校	中学校	高校	合計
M1	Ehshig	7	44	61	112
M2	Holvoo	30	51	73	154
M3	Haraa	2	7	27	36
M4	Altandoroo	1		2	3
M5	Taliinburgud	1	2	20	23
M6	Tengertal	2	1	36	39
M7	Altantab			10	10
M8	Mongol	3	8	5	16
M9	Mongolbolon		4	3	7
M10	Solongo		2	2	4
M11	Chingishaan		2		2
M12	MongolAEI		6		6
M13	Tulag		4	2	6
M14	Huhsuld		8	3	11
M15	Gard	11			11
M16	Duuchin	2		1	3
M17	Nahiya	1			1
M18	Nuudel			2	2
M19	Monkgal			2	2
	無回答	20	12	9	41

(出典：2013年8月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

まずは、モンゴル語のサイトと漢語のサイトの比率を検討する。表 4-6 と表 4-7 は、学生たちのよく利用するサイトについて自由記述によるものである。学生たちは、よく使うウェブサイトのアドレスやモンゴル語と漢語それぞれによるサイト名など様々な方法で記入した。表では当該サイトの表記にしたがって示した。表 4-6 で、整理番号の前に「C」をつけたのは漢語のサイトで 21 件あり、表 4-7 で、「M」をつけたのはモンゴル語のサイトで 19 件ある。モンゴル語のサイトと漢語のサイトがほぼ同等の件数が挙げられた結果は、モンゴル語のサイトがそれほどあげられたことが意外に思える。なぜなら、モンゴル語自体がパソコンで入力できるようになったのは、漢語より新しいからである。学生たちが取りあげたよくアクセスするサイトで最も多いたのは C2.baidu で、当サイトは中国国内で最も一般的な漢語のポータルサイトである。二位はモンゴル語のサイト、M2.holvoo

である。当サイトはモンゴル語で記述された、内モンゴルにおいて最も人気のあるサイトである。スマートフォン<sup>78</sup>用のコンテンツも充実しており、手軽にモンゴル語のサイトを閲覧できるのである。三位に M1.ehshig というサイトもまた、スマートフォンからアクセス可能なモンゴル語サイトで、モンゴル楽曲を聴くことができる。

表 4-8：小中高校生のインターネット利用目的別の集計

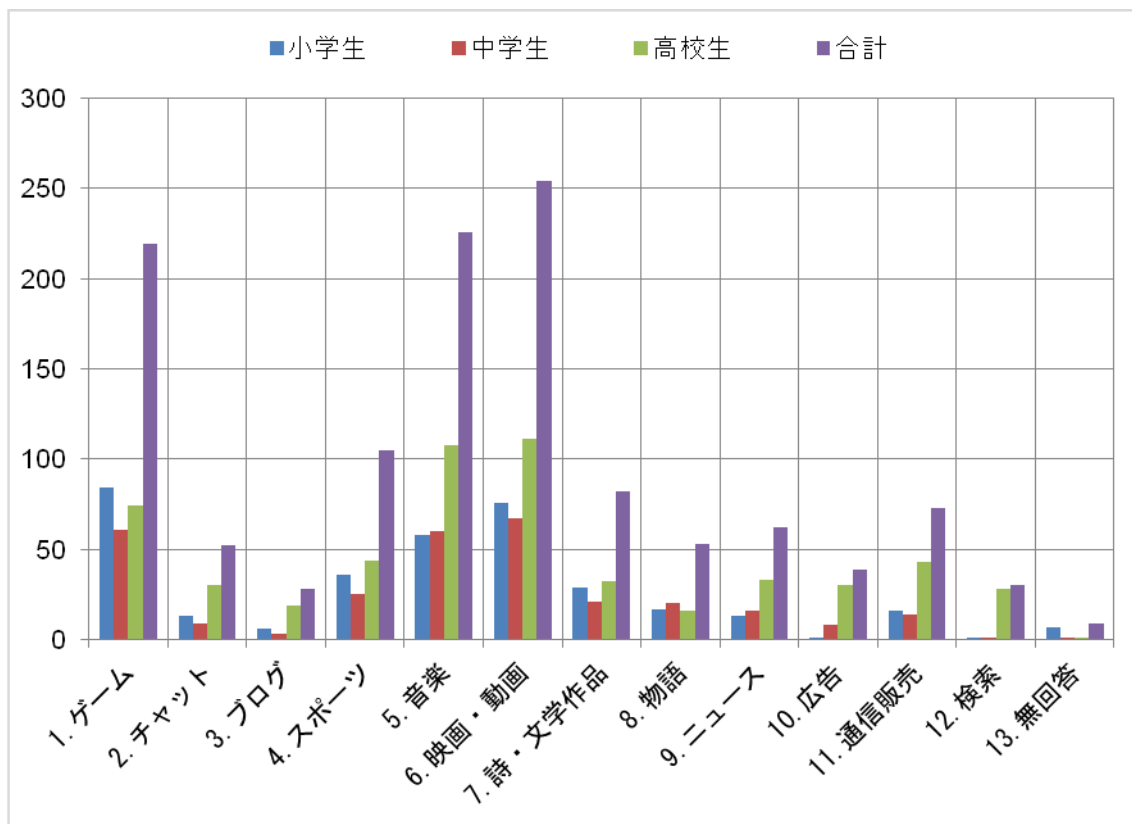
検索目的	小学生	中学生	高校生	合計
1.ゲーム	84	61	74	219
2.チャット	13	9	30	52
3.ブログ	6	3	19	28
4.スポーツ	36	25	44	105
5.音楽	58	60	108	226
6.映画・動画	76	67	111	254
7.詩・文学作品	29	21	32	82
8.物語	17	20	16	53
9.ニュース	13	16	33	62
10.広告	1	8	30	39
11.通信販売	16	14	43	73
12.情報検索	1	1	28	30
13.無回答	7	1	1	9

(出典：2013年8月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

次には、インターネット利用時にどのような目的で利用しているかを見てみよう。回答用紙には、表 4-8 のように、12 項目の中からよくアクセスするコンテンツを複数回答させた結果を示したものである。「6.映画・動画」「5.音楽」「1.ゲーム」の順に娯楽項目が多く選ばれている。図 4-2 からわかるように、合計で 100 件以上挙げられたのは「6.映画・動画」「5.音楽」「1.ゲーム」「4.スポーツ」の 4 項目である。続いて 50 件以上 100 件未満は多い順に「7.詩・文学作品」「11.通信販売」「9.ニュース」「8.物語」「2.チャット」である。

<sup>78</sup> スマートフォン smartphone、内モンゴル語では、oyutu yar utasu といい。モンゴル国で uqayalig yar utasu といわれている。

図 4-2：小中高校生のインターネット検索目的別



(出典：2013年8月に実施したアンケート調査に基づいて作成。)

## 2.4 考察

これまでの調査からは、内モンゴルにおけるモンゴル語と漢語の使用頻度について、モンゴル語の使用が衰退、減少にあるという実態を明らかにしてきた。しかし、家庭は最初の社会化段階を担う重要な教育機関であり、人間生活の最も基本的な単位だという社会的側面としては、家庭内のモンゴル語使用率が高いのは期待通りの結果といえる。そこで、家庭という空間内において、メディアに接するときにはモンゴル語と漢語のどちらを多く使うのかを確認した。調査対象者の小中高生たちは、家庭においてモンゴル語を使うこと自体は高いパーセンテージの回答を得られたにもかかわらず、家庭内でメディアにアクセスする際に漢語へシフトしていることが明らかとなった。特に、テレビとインターネットを利用するときには漢語主体であるように、使用言語が変わっていることがわかる。しかし、ラジオ放送を聴く場合には、モンゴル語の使用が依然として高い割合を維持していることが注目すべき点である。

一方で、インターネット利用に当っては、モンゴル語のサイトが漢語のサイトとほぼ同じ件数が挙げられたことは、予想外であった。現代におけるモンゴル語・文字使用の維持

にはインターネットの役割が期待できるといえよう。また、アクセスするコンテンツとしては、「6.映画・動画」「5.音楽」「1.ゲーム」「4.スポーツ」の4項目が順に多かった。それは普遍的に人気が高いため、想定内の回答だった。続く50件以上100件未満の回答が寄せられたのは、多い順に「7.詩・文学作品」「11.通信販売」「9.ニュース」「8.物語」「2.チャット」の5項目でなる。これらの項目に焦点を当てると、「2.チャット」は他者との交流、「9.ニュース」は社会の新しい出来事や情報の察知、「11.通信販売」は買い物による生活向上といった機能や働きがあると考えられる。では、「7.詩・文学作品」「8.物語」という項目が合計でそれぞれ82件と53件も挙げられ、合計135件になるのはなにを意味するであろうか。検索目的の合計個数は1,231であり、その中で約11%に当たる。他の項目に比べてそれほど高い割合でない。よく利用するサイトの中ではM2.holvooは、詩、文学作品、物語などがそれぞれのジャンルに分けられて多く掲載されており、常に更新されているサイトである。言語による文化が一定の人気を維持しているという意味で、インターネットは、モンゴル語文字の使用の活性化が期待できる一のメディアといえよう。

## 第3節 モンゴル文字使用に関する法律

### 3.1 モンゴル語文字使用について

本節では、内モンゴルにおけるモンゴル文字の使用状況を、法律や当該社会における使用実態や事例を対象に考察を加え、問題の所在を明らかにする。言語習得、学校教育や就職についての様々な問題は、現代社会において人々の生活に密接に関連する。ここでは、言語的・民族的な少数者が不利な立場に陥る場合が多い。国や地域の情勢、社会背景と地理的事情によって多種多様なケースが発生している。自民族固有の言語を失い別の言語の使用を余儀なくされる、という過酷な現状を生きる少数者ないし少数集団は世界中に多々存在する。中国の領内では満州族がその一例である。日本においてもアイヌ語や琉球語は絶滅寸前の状況にある。例えば、アイヌに関しては今日、言語・文化の復興が進められている（中川 1999）。だが、実際にアイヌ語を学ぼうとする場合、母語話者から直接学ぶことができず、アイヌ語を学習した話者の指導を受けなければならない（田村 2011:245）。アイヌ語教室は日本全国に点在しているわけではなく、北海道を中心としており、数自体もごく少数という現状である。アイヌ語のように喪失寸前から復興に向かう事例と、健全な環境やシステムがあるにも関わらず衰え、軽視されていくモンゴル語の傾向は相反するように考えられる。日本ではさらに、在日朝鮮人学校、中華学校も多言語化する日本の社会における少数者としての言語習得や学校教育などに多くの問題を抱えている（杉村 2011；中野 2010；宋 2010；野元 2012）。

このような傾向を踏まえ、内モンゴルにおけるモンゴル文字の使用に関する法律規定をみてみたい。

### 3.2 「モンゴル語・文字使用条例」とは

芒来夫（2007）は、「民族区域自治法は立法自治権、人事管理の自治権、経済管理の自治権、資源管理の自治権、財政管理の自治権、教育の自治権、言語文字文化の自治権など数多くの少数民族自治権を定めているものの、それは原則的規定のみにとどまっているため、各少数民族自治地方はその少数民族の実情を踏まえて、自治条例及び単行条例の形で具体化する必要がある」（芒来夫 2007:59）とし、法律規定をさらに具体化する必要を訴える。しかし、Sainbayar（2009）は、「民族語による業務サービスがあったものの、日常生活に関連する法律などを求め活用しないことにより次第に停止され、機能しないことになった」（Sainbayar 2009:108）との見解を提出している。モンゴル語と文字の保護、使用、学習を少数民族出身者自身がその権限を求め、活用化・実用化させる任務があると同論文

では語られている。では、「モンゴル語文字使用条例」という条例を見てみよう。

内モンゴルでは、「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」が2005年5月1日から施行された。当条例の内容は総則、学習と教育、使用と管理、科学研究と規範化・標準化、法律責任と附則の6つの章、40条からなる。資料4は当条例の和訳である。これはモンゴル民族言語使用権限を保障する法律である。当条例が実施されてから、内モンゴル各地で、当条例実施記念祝賀会や促進を図るためのモンゴル語の弁論大会やモンゴル文字の書道のコンテスト、展示会など、様々なモンゴル語文字使用に関連する大小イベントが開催されている。また、個人的なモンゴル語学習なども行われている。例えば、「フフホト民族庶務委員主催のフフホト市初のモンゴル語学習班が2011年10月21日に「フフホト市民民族実験学校」で第一回の授業をスタートさせた。モンゴル語学習班では母語を忘れたフフホト在住のモンゴル人にモンゴル語を教える目的で、授業は週に一回行われる。今回は二つのクラスに分け、合計100人以上の学習者が参加し、モンゴル語の学習を始めた」<sup>79</sup>とあるのは非常に興味深い活動に思え、さらなる拡大が期待される。また、当条例に関して、「条例が規定されたものの、それをいかに実用化していくかという詳しい規則がない」(50代、教師、男性：資料2-J-03-011)という意見もあった。ようやく、「2012年11月28日に、内モンゴル自治区民族庶務委員から『内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例の実行細則』<sup>80</sup>の意見採集通知が内モンゴル全土の盟、市、旗の民族庶務局や委員宛てに配布された」<sup>81</sup>という。当細則がいち早く決議されることが望ましい。

### 3.3 社会におけるモンゴル文字使用の事例から

日本の法廷において「方言を用いたことを裁判長に注意され、標準語使用が求められた」(田中 2002:140-144)という事例があることは示唆に富んでいる。本稿では法廷におけることばのやり取りではなく、裁判や請求を通じてモンゴル文字の使用が再認可された事例や、日常生活の中でモンゴル語文字の使用が滞っている場面の現状を示す。

#### 事例1：「漢字で書け」<sup>82</sup>

その一つは、手紙の宛先をモンゴル文字で書くことを制限されたケースである。封筒に

---

<sup>79</sup> モンゴル語の通信サイト (<http://www.holvoo.net/article/articleView.do?id=4d361446-4109-462f-9799-17d512b44c03>、最終アクセス2013年12月4日)を参照。

<sup>80</sup> 「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例の実行細則 (Öbür mongğul-un öbertegen jasaqu oron-u mongğul üge hele üsiğ bičig-ün ajił-un dürim-i keregjigülkü narin jorbus)」。

<sup>81</sup> モンゴル語の通信サイト (<http://www.holvoo.net/article/articleView.do?id=f1bccbe5-654f-46aa-acea-b7a5d6a8dcd0>、最終アクセス2013年12月5日)を参照。

<sup>82</sup> Erdemtü(2005)を参照。



モンゴル文字で住所を書いて郵送したが相手に届かず、返送された。しかも、封筒には「漢字で書け」「モンゴル文字は読めない、漢字で書け」などと漢字の文言を添えられていたという。その手紙の送り主であるエルデムト氏は、『Unuy\_a』(Erdemtü 2005)という著書で「手紙の住所をモンゴル文字で書けばどうなるか」、「モンゴル語文字の使用権利を法律で守ること」と二節にわたりその一連の遣り取りについて詳述している。手紙の住所をモンゴル文字で書いて郵送した場合、手紙が届かずに手元にもとってくることが多い問題に気付いたエルデムト氏は、フフホト市の郵便局局長宛てに証明書を添え手紙で知らせた。しかし、返事はなかった。そこで結局は法律をもってその問題に対するに至り、弁護士を通して裁判を起こしたのである。2005年4月27日にフフホト市新城区人民法院の法廷で訴訟は開始された。その時点では、郵便局側は過失を認め、示談などを持ちかけていたが、エルデムト氏はそれに応じなかった。最終的にエルデムト氏は弁護側の勧めに従い、郵便局側の要求を受け入れ和解に至った。この事件は新聞雑誌、インターネットなど各種メディアで広く取り上げられ、反響を呼んでいる。問題の終息から間もなく、2005年5月17日に「内モンゴル自治区郵便局における宛先をモンゴル文字で書かれた郵便物を有効に解決する通知」<sup>83</sup>という初の公文書が自治区全土の郵便局に配布されたという。

事例1の問題は、モンゴル文字を使用する権利を阻碍されていることにある。「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」の第二条の第一項には「モンゴル語文字は当自治区の通用言語文字である」と明記されている。内モンゴル領内にも関わらず、モンゴル文字を自由に使う権利が失われたことになる。モンゴル文字で書かれた手紙を的確に処理できなかった点で、郵便局側に過失が認められる。

## 事例2：モンゴル語文字使用を求めて<sup>84</sup>

第二は、公的機関の手続きにおいて、モンゴル語文字の使用が制限されていることに対して、法律に基づきその使用権利・権限を強く求め続けた結果、多くの機関がその要請に従いモンゴル語文字を公用できるようになった事例である。当事者であるサインバイル氏はモンゴル料理屋を経営していた。職業柄、税金、衛生などについて様々な公的機関が関与してくる。筆者が本人に聴き取り調査した折には、14の公的機関と交渉したと語った。これらの機関が、モンゴル語はおろかモンゴル文字も使わずにモンゴル人と接し、公的な手続きを遂行していた。当事者は、関連する法的規定を根拠にモンゴル語はもちろん、モンゴル文字で表記された条文、領収書、案内書などを公的機関側に求めたのである。公的機関側はすぐには対応できず、数日から数週間後にモンゴル文字で書かれた手続き案内な

<sup>83</sup> 「内モンゴル自治区郵便局における宛先をモンゴル文字で書かれた郵便物を有効に解決する通知(Öbür mongğul-un öbertegen ĵasaqu oron-u ſiudan tobçiy\_a-yin mongğul-eyer qayaylaysan ſiudan ĵobiğuly\_a-yi ĵohistai ſiıdburileku tuqai medegdel)」。

<sup>84</sup> Sainbayar(2009)を参照。

どを当事者の手元に届けたそうである。適切な対応が不可能だった機関はやむを得ず、税金や罰金の徴収を断念する結果となったという。

「私は数年前まではレストランを経営しており、そのときに衛生局、税務署など 14 の行政機関が関係していた。それらの機関の中で、モンゴル語ができる人は一人もいなかった。法律を無視し、無防備でやっていた。そのときに、「モンゴル語文字使用条例」が可決され、執行された。元々その条例は法律に則って作られているので、本当に機能するののかと思い、これらの機関を対象に試してみたのが私だ。結果的に、これらの機関は法律に沿って私の要請に従うようになった」(60代、作家、男性：資料 2-E-18-039)。

「私は、林東師範学校で校長を勤めたときは、最初の所信表明の挨拶を、まずモンゴル語で話し、次に漢語で同じ内容を繰り返して言った。その次の会議からモンゴル語だけで行った。漢人の書記が漢語の使用を求めてきたが、モンゴル人が漢語を十分に理解できない上、たった一人だけの漢人のために漢語への統一はできない。その書記に通訳をつけて、続行した。結果的に漢人の書記は他のところへ異動していった。モンゴル人が皆このように行動していたならば、モンゴル人の就職先がなくなるはずはない」(60代、作家、男性：資料 2-E-17-039)。

### 事例 3：「モンゴル人の縄張りではない」<sup>85</sup>

第三は、サインバイル氏（事例 2 と同一人物）が交通警察に停止を命じられ、速度違反の罰金を取られることになった事例である。車を運転していたサインバイル氏と警察間のやり取りは、以下の通りである。運転手は速度違反のため、警察官は運転免許などを没収し、罰則書類に署名することを命じた。運転手は「中華人民共和国民族区域自治法」と「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」の規定通りにモンゴル文字、またはモンゴル文字と漢字両方を併記した罰金用紙を求めた。その要求に対して警察は「そんなものは存在しない」と憤る。そこで運転手は所持していた「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」を警察に示した。すると警察は「これは自治区の規定だけで、我々は国の法律を適用している」と威嚇した。それに対し運転手はさらに「中華人民共和国民族区域自治法」を提示すると、「そんなものはいない、ここは、赤峰市だ。モンゴル人の縄張りではない」と警察はより態度を硬直化させ、署名を強制した。運転手はかたくなに署名を拒んだ。数日後に、公安局支局の責任者らがサインバイル氏を招き、「当局には今のところモンゴル文字の罰金用紙がない。まず、あなたの罰金を免除してから進めていく。あなたの要求を上位機関に書面で報告し、解決できるように努力する。警察官があなたに理不尽な対応したことは責任者である我らに責任がある。これから警察官たちの法律や政府政策関連の指導

---

<sup>85</sup> Sainbayar(2009)を参照。

につとめ、今後このようなことを起こさないように誓う。申し訳なかった」と謝罪した。運転手は罰金の免除が目的ではなく、公的機関だからこそ法的規定に準じて職務に当たるよう要望した。

事例 2 と事例 3 は、公的機関におけるモンゴル文字使用の実態を物語っている。「モンゴル語文字使用条例」の第二項「自治区における各級公的機関が業務執行する際に、モンゴル語、漢語の二種類の言語と文字を併用し、モンゴル語文字を主とする」、あるいは第二三条の「公共サービスや業務を行う事業はモンゴル語文字を使用する公民に対して相手にモンゴル語文字を使う」といういくつかの規定が無視されていたのである。サインバヤル氏が当条例に基づき、モンゴル語文字の使用を強く訴えた結果、モンゴル文字による資料や用紙などが新たに作成されたケースであり、公的機関も法律に則って要請にしたがい、責務を果たしたといえる。

#### 事例 4：街角のモンゴル文字



写真 4-2：博物館の看板（2012 年 11 月撮影）

内モンゴルには商店街や公的機関、道路標識、街角の看板など社会表面文字表記について、法律でモンゴル文字と漢字を併記することが規定されている。現地を訪れたならば、二種類の文字が並ぶ表記方法に、異国情緒を感じるかも知れない。写真 4-2 はシリングル盟のスニド右旗にある博物館の看板であり、上は「Sünid Müzei」とモンゴル文字、下には「苏尼特博物馆」と漢字で「スニド博物館」と書かれている。漢字の看板「苏尼特博物馆」で、「苏尼特」は「スニド(Sünid)」というモンゴル語の地名の音写で、「博物馆」は「博物館」の簡体字表記である。この看板はその規定に忠実である。横書き看板の場合は、上部にモンゴル文字、下部に漢字を配置する。縦書き看板であれば、向かって右側にモンゴル文字、左に漢字で書くことが定められている。

しかし、内モンゴル全土にわたる看板や標識で、その規定が厳守されているわけではない。近年、インターネットが普及し、携帯電話のチャット機能などを通じて、内モン

ゴルにおける看板・標識が話題となり、社会問題化している。問題なのは芸術的、あるいはユーモアにみちた看板ではなく、モンゴル文字の単なる誤字脱字、誤用が含まれるものがほとんどであることである。例えば、ウェブ上でも「モンゴル情報クローズアップ」というブログに「内モンゴルにおけるモンゴル言語文字の軽視傾向の一事例」というタイトルでエッセイが掲載されており、現場写真が多く掲載されている。そこには、「現在内モンゴル各地では、一見法律に基づき、街角の看板などにモンゴル文字と漢字が併記されているようだが、誤訳、誤記、珍訳、語順違い、活字の転倒など、見るだけで憤怒するようなものが多い。神聖なモンゴル文化を侮辱されている気がしてならない。しかし、これらをすべて共産党の政策のせいにはならない。漢民族の支配下にあるから仕方がないと悲観ばかりしてはいけない。なぜモンゴル社会では、こうしたモンゴル文字を軽視した行動に対して、関連機関に取り締まりや管理強化などを訴える人がいないのか、不思議である」<sup>86</sup>と、法的規定があるにも関わらず、看板をつくる機関、個人やそれらに関わっているモンゴル人たちがモンゴル文字を粗雑に扱っていることに遺憾の意を募らせている。

事例 4 は、「モンゴル語文字使用条例」の第二二条「当自治区行政区域内の社会における表面文字にモンゴル文字と漢字の二種類の文字を併用する」という項目に関連している。モンゴル文字と漢字の二種類の文字を使うのが原則である。地域によって使われる文字が異なる場合もある。公的機関は看板に基本的にモンゴル文字と漢字を使う。特に商店街におけるモンゴル文字の誤字脱字が大きな問題である。モンゴル文字に似ていても正確ではないこともあり、モンゴル文字がただ形式的に掲げられているに過ぎない。

「赤峰市のモンゴル学校は最近まで、漢語が主要言語になっていた。教室内の言語以外は漢語だった。教職員の出勤名簿にもモンゴル文字で署名してはいけないほどだった。今は新しい校長が赴任してきて、校内の使用言語を漢語からモンゴル語使用へ切り替えられた。その結果、本来であれば校長になるはずの漢人の副校長が移動していった。運よくモンゴル人の学校長が来て、モンゴル語が使われ始めた。体操の時間にもモンゴル語で授業するようになった。だから、この学校に漢人の校長はしばらく着任しない。漢語で運営されていたから漢人の管理職が入ってくるのであり、教職員も増え、最後にモンゴル人学生も来なくなる。結果的に一つの民族学校が息の根を止めることになる」(60代、作家、男性：資料 2-E-16-039)。

筆者は現地調査のために内モンゴルの各地を訪れた。そこでの移動の多くはバスや列車を用いる。乗車中は様々な案内が放送される。2013年9月上旬に西ウジムチンからフフホト市を結ぶバスでは、音声案内は漢語に限られていた。西ウジムチンから赤峰市を結ぶバスでは、まずモンゴル語の案内が流れ、次に漢語で同内容が放送される。バスターミナ

---

<sup>86</sup> バー・ボルドー「内モンゴルにおけるモンゴル言語文字の軽視傾向の一事例—問題提起と呼びかけ—」(<http://mongol.blog.jp/archives/51744103.html>、最終アクセス 2013年12月4日)

ルにおいても同様の傾向があり、両語併用について地域間格差が明らかである。「モンゴル語と漢語の二言語を併用する」という明確な法的規定があるものの、統一したシステムとして機能していないことが見受けられる。

### 3.4 考察

内モンゴルにおいては、モンゴル語文字が使用できる環境や場所は極めて限定的である。モンゴル語・文字使用やその伝承に強い信念と愛着を持つ少数の篤志家の地道な努力によって、言語文化が守られている現状を、これまで見てきた事例により改めて痛感できるだろう。彼らの努力は新しきものへの挑戦ではなく、旧来の伝統を法的規定に則し、公的機関へ訴え続ける粘強な努力の賜物と感じられる。その行動によって、漢化への対抗意識が伝播し、衰退傾向にあるモンゴル語文字を人々に再認識させる気運をももたらしたと考えることができる。モンゴル語を主に使う人々にとって、所与の言語を生涯に亘り使い続ける権利の着実な拡大が果たされたのである。なぜなら、モンゴル語使用の機会や領域が広がれば、モンゴル語教育を受ける学生は確実に増え、数的優位から就職先の増加も見込めるものと考えられるからである。さらに、テレビ、ラジオ、新聞雑誌、インターネットなどのメディアにおける地位向上へも繋がるだろう。

問題の所在は、やはり、モンゴル語の所有者であるモンゴル族の人々自身の責任意識と考えられる。たとえ法規や政策により権利が認められていたとしても、当事者であるモンゴル人たちがそれを認知・理解し、実生活のなかで尊厳を守るために活用しない限り、法律そのものが機能しないのである。例えば、事例1のように法廷における主張により、モンゴル族にそのような法的規定の存在が周知され、新たに対応策がとられた例もある。また、先駆者たちに続き、多くのモンゴル語文字使用者が法律に準拠するかたちで固有の文化、権利・権限を堅守する運動を拡大させることが重要だと考えられる。大きな経済的、文化的影響のもとで、重要性が衰えつつあるモンゴル語文字の復権には、モンゴル民族の人たちの意識・関心を高めることが不可欠だと考えられる。

### まとめ

本章は3節からなる。第1節では、内モンゴルにおける牧畜地域の町に移動させられた子どもたちの言語使用状況に関して、家庭内においては121人中91人の学生が「モンゴル語のみ」を使うと回答しており、75.1%という高い割合を示した。それはやはり、遊牧民の家庭に生まれ育ったことで、モンゴル語が使える環境にあると考えられる。しかし、

その一方で家庭や学校において、モンゴル語と漢語の両方を使うと答えた学生も1割程度存在している。更に、買い物をするためには「漢語のみ」、または「漢語が多い」という答えが多く、全体では67.8%の学生が事実上漢語を使用している計算になる。すなわち、買い物をするにあたっては、モンゴル人学生たちの使用言語がモンゴル語から漢語へとシフトしていることが明らかに見て取れる。このことから、モンゴル語は、家庭や学校という非常に限定された場で用いられる言語となっており、学生たちが一歩社会に踏み出せば、外部に広がる漢語の世界に取り込まれるという実態が浮かびあがってくる。その背景には、社会的情勢として漢人人口の割合の上昇、漢語使用の頻度の高さといった理由を挙げられるだろう。

第2節では、家庭内でメディアにアクセスする際に漢語へシフトしていることが明らかとなった。特に、テレビとインターネットを利用するときには漢語主体であるように、使用言語が変わっていることがわかる。しかし、ラジオ放送を聴く場合には、モンゴル語の使用が依然として高い割合を維持していることが注目すべき点である。一方で、インターネット利用に当たっては、モンゴル語のサイトと漢語のサイトではほぼ同じ件数が挙げられたことは、予想外であった。現代におけるモンゴル語・文字使用の維持にはインターネットの役割が期待できるといえよう。

第3節において、モンゴル語文字使用に関する法律条例とモンゴル語文字使用の事例をあげ実態を考察した。モンゴル語の所有者であるモンゴル民族の人々自身には責任意識があると考えられる。当事者であるモンゴル人たちがそれを認知・理解し、実生活のなかで尊厳を守るために活用しない限り、法律そのものが機能しないのである。多くのモンゴル語・文字使用者が法律に準拠するかたちで固有の文化、権利・権限を堅守する運動を拡大させることが重要だと考えられる。大きな経済的、文化的影響のもとで、重要性が衰えつつあるモンゴル語・文字の復権には、モンゴル民族の人たちの意識・関心を高めることが不可欠だと考えられる。

## 終章 結論

本論文では、内モンゴルにおける牧畜地域の教育状況に関する事例を通してモンゴル民族の学校形態、モンゴル語の使用状況やそれに関する法律条例の実態を考察しました。モンゴル民族にとって文化の認識は、彼らの生活空間である大地、運命の象徴である天空、生業の基盤である家畜に根ざした遊牧生活、この三者のコンテクストによって育まれた精神の本源である。その背景に、モンゴル民族の伝統文化が継承され、独特な自然観、価値観、宗教意識が生まれた。こうした多様な文化のコンテクストがモンゴル民族の民族的、文化的アイデンティティの形成及び継承に大いに相互作用し今日を迎えたと考えられる。しかし、グローバル化に伴い、環境変化、生活基盤の変容、伝統文化の喪失などのさまざまな負の連鎖がモンゴル族のアイデンティティの変容に大きな影響を与えたと考えられる。こうしたおびただしい影響を、本研究では、学校教育、母語教育、瀕死に直面する言語の運命という視点からの解明するアプローチを試みた。

モンゴル民族の教育と言語使用は危機状況にあるという想定を念頭に置きながら、綿密な現地調査、聞き取り調査、アンケート調査を施し、その実態を理解し、研究した。そして結論として以下の3点から述べ、課題を提示したい。

### 1 牧畜地域における学校形態

牧畜地域において牧畜民の生活様式は都市部とは異なり、彼らの子弟の教育や通学なども同じく異なる。2000年以後行われた民族学校の統廃合はあまりにも極端なことであり、牧畜民たちの生活や彼らの子弟の学校生活にさまざまな不利な影響を与えていることが筆者の一連の調査研究で浮き彫りになった。調査からは公民に平等な質量の教育を受給させることを目的に実施された計画が、まったく異質な結果をもたらすことが露骨にされた。牧畜地域における公的施設である学校の統廃合により、子どもたちの住居空間と生活環境が変わったことは問題の発端であると考えられる。「モンゴル民族の遊牧生活に最も身近な牧畜地域の学校は、文化と言語を肌で感じ、育まれていく聖地である」(Sainbayar 2009:73)と牧畜地域の学校とモンゴル語文化の関係性が述べられている。子どもたちが町に移って教育を受けることは、文化的環境、言語的環境から隔離された現実を招いたといえる。

牧畜民たちにとっては二重生活が強いられ、経済的負担が増し、家庭生活にも大きな打撃をもたらしていることがわかった。町に移ったとしてもモンゴル人の児童が民族幼稚園に入園できないという事情も発生している。都市部にしてもモンゴル民族の保育園に入園することができず、あげくの果てに漢族の幼稚園に入園するしかないという実態であることがわかった。児童が一度漢族学校に入校すれば、再び民族学校に戻るのには難しい。この

ような児童と学校と母語教育の運命的な繋がりとの相関性を徐大明氏は「母語習得は児童期の一回限りのチャンスしかない。母語能力は人体の一部と見なしており、分割や変更しにくい」<sup>87</sup>と指摘している。さらに、小中高校生の漢族学校への入学進学率も年々増えていることが明らかになった。

教育の普及について言及するときは、公的施設としての学校の充実さを軽視してはならない要素だと考えられる。しかし、学校統廃合により公的施設がなくなった。牧畜民たちはどのような方法を使っても子どもの教育には熱心で、教育へのアクセスを試みる。それは遊牧生活様式の一形態であるオトル放牧 (otur negühü) と同じ感覚のものである。牧畜民という身分で家畜とともに草原を季節的遊牧生活という状況から一変し移住民という身分で子どもの教育のために町の中、学校周辺で学期ごと、または学年ごとに移動を繰り返す実態である。

「中国は現在大規模な都市化と新農村建設などにより、文化遺産の保護は窮地に立たされている。間違った農村建設は、人と自然が長きにわたり築いてきた環境を破壊し、急速な都市化は周辺の文化的風景をのみ込んだ」<sup>88</sup>という指摘がある。内モンゴルの実態も同様である。都市化により、牧畜地域の生活様式、社会形態、自然生態などに大きな被害をもたらしたといえる。

遊牧文明を背景から考えれば、内モンゴルで起こりつつある社会的な状況は、牧畜民の生活様式を遊牧から定住へ、さらに「都市化」、「生態移民」政策などの進行による定住先から移住させられるということで、牧畜民たちは「移民」という不本意な運命を強いられている日常になっている。それと同時に牧畜民たちは、子どもの教育を目的に牧畜地域から町へ移り、学校周辺で転々と移動を繰り返している。彼らは生活的、経済的不安定な状況に陥り、果てには家族分散、家庭崩壊という最悪の事態に追い込まれることもある。しかし、状況改善策が未だに不十分であることが指摘できる。これが内モンゴルにおけるモンゴル民族の教育がおかれた状況の一面を端的に示すものと考えられる。

## 2 言語使用の実態

言語は言うまでもなく一民族の存亡にとって、最も重要な精神的支柱の一つである。母語と母国語は異なる概念であり、学校は「教育」という普遍性を持つ手段でその相違、相克と重要性を児童及び生徒に身につけさせるものである。しかし、少数民族の言語は、いつも国家、政治、制度の煽りで、その存亡が危機に追い込まれるという悲運的な掟がある

<sup>87</sup> 徐大明 (Xu Daming) (中国言語戦略研究センター・南京大学教授)、2013年12月9日首都大学で行われた『現代中国における言語政策と言語継承：少数民族を中心に考える』研究会に「母語の平等政策の政治経済的効果」というテーマで発表した。その原稿を参考した。

<sup>88</sup> 「文化遺産は先人たちの軌跡、無知な破壊の抑制が求められる一中 (<http://www.recordchina.co.jp/group.php?groupid=60429> 最終アクセス 2014年8月9日。)



ことも否定できないだろう。中川（1996）は、ソ連の実情について「国家主義」は政治的・経済的な面からの統合に関わり、政治的運営の「効率」を問題にする。国家の政治的統合し、経済的に効率よくそれを運営しようとした場合、国内で使用される言語の多様性は、もっぱらその阻害する要因としてとらえることになる。そこでその解決策として、より広範囲なコミュニケーションを行うための言語を国家語・公用語として採用する必要がある（中川 1996:268）と記述している。ロシアのみならず中国の状況も同様であると言っても過言ではない。

一方では、モンゴル語文字の使用の実態は、学生たちの生活環境において、モンゴル語が家庭と学校で使われ、使用場所がとても限定されていることを把握できた。さらに、家庭といっても、家庭の中でインターネットへのアクセスやテレビをみる時にも漢語に頼って情報収集していることがアンケート調査からわかった。インターネットへのアクセスやその検索内容にモンゴル語を用いて、モンゴル語による「詩・文学作品」「物語」といった内容が一定の割合をしめている。比較的新たな情報伝達手段としてのインターネットやスマートフォンなどを積極的に活用し、モンゴル語文字使用の関心を高めることが今日の手法の一つだと考えられる。モンゴル語は家庭という場面では親子間の会話、学校という場面では授業中の先生の話と先生との情報交換のためにしか使用されていないといえる。モンゴル語がこのように、使用領域の縮小されている現状は想定外の結果で、絶滅に瀕していく実態が明らかに見て取れる。内モンゴルにおける言語使用状況は、「中国」「漢化」という大きな経済的、文化的力のもとで、衰弱衰退の危機に面しているといえる。こうした現状を現地の学者は「漢語の勢力により、モンゴル人たちは自らの言語文字への信念を失い、母語の認識が衰退の現象がおきている」（Joriyту 2006:170）と、危機感を持って指摘している。言語政策からみても、「多くの国々の憲法や法律には、母語平等の内容が組み込まれている。しかし、それは形式的なもので、理想に過ぎない」<sup>89</sup>と徐大明氏は指摘する。

筆者は、モンゴル語・文字使用が法律によって保障されていないという仮説を立てて調査を進めていた。しかし、人々はその法律条例に関する認識が低いことが明らかになった。一部の自民族の言語と文化などに強い信念を持つ人たちの、少数民族関連の法律条例をもとに法廷に立ち、関係する機関への粘着な要請などを経て、自民族の言語と文字を守っていく努力があった。その行動によって、紙にしか書かれていなかった法律条例が多くの人々に知られることになった。それは自民族の言語文化の蘇生や復旧につながる行動だと考えられ、そのような行動がさらに広がることが期待したい。そのためには、人々に自民族文化での関心を高めること重要であると考えられる。それは、威信（prestige）というものである。「威信というのは価値観の問題であり、その言語を使用することが社会的なプラスの価値を持ってとらえられるかどうかということである」（中川 1996:270）。内モンゴルに

---

<sup>89</sup> 前掲、徐大明 2013 年 12 月 9 日。

において都市部では、少なくとも子どもをモンゴル民族学校でモンゴル語による教育をさせようという動きが起きている。その行動には、モンゴル語文化が誇りあるものとして再認識し始めていると見なし、高く評価をすることができる。しかし、その現象は地域的に限定されていることもあり、さらに広く浸透させることが課題である。さらに、「単に教育の場でとりあげたり、あるいは語彙を充実させていったりということだけで、少数言語の使用される場の拡大を保障することできない。それを使うだけの動機づけを行い、あるいはそれを使うのを妨げる心理的要因を取り除いていくことが、言語保持にとって不可欠の条件となる」（中川 1996:271）という。内モンゴルのモンゴル人たちがどこまで自分たちの母語を保持できるかが、モンゴル人を含めて、世界のモンゴル学者たちの関心事の一つにもなっている。しかし、内モンゴルの学校教育が、言語環境、文化環境、教育環境というさまざまなジレンマに直面している今日、モンゴル族にとって、自分たちの「言語保持」という精神の戦いの延長戦は未知数である。その現状と過程を微視的に分析し、理論付けを試みたのが本研究の目的の一つでもある。

### 3 アイデンティティの変容

「モンゴル民族が自然環境の中、遊牧生活様式を背景に牧畜生業の知恵に頼り長い歴史道程を経て、さまざまな文化を創造し結晶してきた」（Urtunasutu 2012:823）。その意味では、モンゴル人にとって牧畜文化はアイデンティティの根幹を位置づけることができる。つまり家畜、草原、自然信仰に根ざした生き方とそれらを源泉に成り立つ文化と言語であると考えられる。しかし、ソ連では「共産主義思想に基づく土着の精神文化の排斥、あるいは1960年代に行われた集中化政策などを通して伝統的な生活形態が破壊された」（中川 1996:276）ことによって、少数民族言語の威信を保つには、かなり困難な状況になっているという。内モンゴルにおいても、文化革命のときにさまざまな領域にわたり襲撃された経験があり（楊 2008a ; 2008b ; 2008c ; 2008d）両者の状況は行為として匹敵すると考えられる。今なお、様々な形式の「政策」「革命」は強いられている。

例えば、牧畜民が都会に移住することによって、生活環境、価値観、文化などが根幹から失われ、彼らの生活、文化が危機に瀕していると考えられる。モンゴル人にとって生活基盤の変化は文化的アイデンティティに大きな変化をもたらすと考えられる。牧畜地域に学校など公的施設が一掃され、牧畜民たちもさまざまな政策に甘んじて町へ移住していく。開発の横行とともに多くの労働者とその代わりに牧畜地域に展開されている資源開発区域に移入してくる。その周辺に経済発展に全力を投じるそれらの人のために、新たな町が作られる。もちろん、学校も民族学校に取り替えられ他の学校が作られる。他方では、牧畜地域の子どもたちは、生まれてから小学校に入るまで数年間は牧畜文化を背景に生活をする。学校に入れば、家庭から切り離された空間で育てられるようになる。その意味で、

それまでの数年間は親から、モンゴル人としての牧畜文化的アイデンティティが植え付けられる貴重期間であることが見受けられる。

さらに、学校選択においてモンゴル人の中でアイデンティティに変化がおきている状況を一目瞭然である。経済的裕福、安定的職柄をもつ親は更なる高い社会的地位を狙い漢族学校に子どもを行かせる。経済的に不安定な、牧畜民の家庭は子どもをモンゴル民族学校に行かせる。それは、モンゴル民族学校と漢族学校の選択により、家庭や両親の社会的階級性が反映されているといえるという事例で、聞き取り調査から明らかになったことである。

中国建国以来、人民公社、文化革命、資源開発、行政体制改革などが実行されてきた。内モンゴルにおけるモンゴル人社会は、文化、土地、資源、財産などあらゆる面で改革が攻められ、つくりなおしが実施されてきた。それにより、アイデンティティ・クライシス (identity crisis) が起きざるを得ない実態であるといえる。内モンゴルにおける数々の変化は、そのような経済発展を最優先志向政策から生まれた社会的産物であるといえる

内モンゴルにおける牧畜文化を背景にしたこれらの問題は、内モンゴルのみならず、ユーラシアの地で異なる政治的領域に分断されて生きるモンゴル人全体に関わる問題である。いわゆるモンゴルの未来図を考える上では、内モンゴルの今日の状況は一例に過ぎないが、視野を広げて研究していく上では、必要不可欠な事例であり、過程でもあると考えられる。それは、モンゴルを生きる人々は同一の遊牧文明と牧畜文化といった文化的基盤から発し、異なる空間に、異なる変貌をしていると考えられるからである。ユーラシアの諸地域でマイノリティとしてのさまざまな背景に置かれるモンゴル諸集団の言語や教育の問題を調査し、更なる巨視的分析を試み、研究を深め、その根底に絡みあう政治的、経済的、制度的諸要素を解析し、理論的射程を構築することを今後の研究課題に据える。

## 参考文献

- 愛知大学現代中国学会（2004）「民族自治における内モンゴル自治区」『中国 21』  
Vol.19,pp.5-36.愛知大学現代中国学会。
- アスコン（2001）「内モンゴルにおける遊牧社会の崩壊過程と現存する諸問題」『日中社会学研究会研究』第9号、pp.7-17、日中社会学会。
- アラタ（アラタ）（2011）『中国・内モンゴル地域における民族教育に関する人類学的研究』博士学術論文、広島大学。
- アルタン・バートル（2009）『多言語社会における少数民族の変容—現代中国のモンゴル族の中心に一』博士学術論文、神戸大学。
- アルタンデレヘイ（2008）楊海英編訳『中国共産党によるモンゴル人ジェノサイド実録』静岡大学文学部「アジア研究プロジェクト」。
- 井出祥子（1992）「言語とアイデンティティ—多元主義世界における言語研究のもう一つのアプローチ」月刊『言語』Vol.21、No.10、pp.28-33、大修館書店。
- 石村貞夫；劉晨；石村友二郎（2011）『SPSS でやさしく学ぶアンケート処理（第3版）』東京図書株式会社。
- 石村貞夫；石村光資郎（2013）『SPSS による統計処理の手順（第7版）』東京図書株式会社。
- 稲垣清（1999）『中国のしくみ』中経出版。
- イリチ（2012）「チャハル方言における漢語との接触現象とその地域差—シリンホト市とグンボラガ・ソムの比較から—」千葉大学『ユーラシア言語文化論集』第14号、pp.97-104。
- 内田治（2007）『すぐわかる SPSS によるアンケートの調査・集計・解析（第3版）』東京図書株式会社。
- 梅棹忠夫（1990）『梅棹忠夫著作集第2巻モンゴル研究』中央公論社。
- エレヌカレル・ダンコース（1990）『崩壊したソ連帝国—諸民族の反乱』高橋武智訳、藤原書店。
- 遠藤克弥（2008）『教育の挑戦—多文化化・国際化』勉誠出版。
- 小川佳万（2001）『社会主義中国における少数民族教育』東信堂。
- 大塚和義（1985）「モンゴル民族にみる中国の少数民族教育」『民博通信』No.29、pp.18-23、国立民族学博物館。
- 岡本雅享（1999）『中国の少数民族教育と言語政策』社会評論社。
- 小内透（2013）「ブラジル人学校」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』pp.267-269、三元社。

- オンドルナ（2007）『多民族混住地域における民族意識の再創造－モンゴル民族と漢族の族際結婚に関する社会学的研究』溪水社。
- 金子享（1999）『先住民族言語のために』草風館。
- 格日樂（ゲレル）（2007）「中国民族教育における教育自治権について－民族教育の使用言語文字と教育内容に対する自治権を中心に」『中国少数民族の自治と慣習法』pp.61-86、成文堂。
- ゴイハン（高友晗）（2008）「内モンゴル自治区におけるトライリンガル教育－少数民族学生の母語能力への影響を中心に－」『PROCEEDINGS 03』、pp.65-75。
- （2010）「内モンゴル自治区における英語必修化に伴うトライリンガル教育の現状と課題」『人間文化創成科学論叢』第13巻、pp.217-225。
- （2011）「民族学校の義務教育段階における英語教育政策に関する一考察－導入時期と教授言語を中心に－」『PROCEEDINGS 16』、pp.151-157。
- （2012）『中国の英語教育必修化に伴う民族教育の変容：内モンゴル自治区の分析中心として』博士学術論文、お茶の水女子大学。
- 高明潔 2004 「ソムと鎮の間－内モンゴル牧畜業地域における新しい文化の再生－」『中国 21』 Vol.19. pp.57-80、愛知大学現代中国学会。
- 鯉淵信一（1992）『騎馬民族の心－モンゴルの草原から』日本放送出版社。
- 児玉香菜子（2012）『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容－オルドス地域農耕民とゴビ地域遊牧民の事例－』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会。
- （2014）「定住モンゴル牧畜民の都市化動態」『第 28 回北方民族文化シンポジウム網走報告』 pp.23-28。
- 小長谷有紀（1991）『モンゴルの春』川出書房新社。
- （2003）『モンゴル国における 20 世紀社会主義を生きる人々の証言』国立民族学博物館調査報告 41。
- 坂本佳鶴恵（2005）『アイデンティティの権力－差別を語る主体は成立するか』新曜社。
- 佐々木ゆきえ（2011）「中国の少数民族優遇政策に関する考察－モンゴル民族の教育の中心として－」『日本とモンゴル』第 46 巻第 1 号、pp.123-136。
- 真田信治編（2010）『社会言語学の展望』、くろしお出版。
- 真田信治；庄司博史編（2005）事典『日本の多言語社会』岩波書店。
- 須川宏之（2011）「蒙古語の言語文字の教育とその使用状況について」『旭川大学紀要』第 70 号、pp.71-105。
- 杉村美紀（2011）「日本の中華学校における母語教育の今日的意義」『ことばと社会』13 号：学校教育における少数派言語』三元社、pp.172-189。

- (2008) 「国際化をめぐる中国の教育格差」『沸騰する中国の教育改革』諏訪哲郎他編、pp.89-116、東方書店。
- 渋谷謙次郎 (2007) 「「母語」と統計—旧ソ連・ロシアにおける「母語」調査の行方」『ことばと社会 10号—社会言語学再考』、pp.175-207、三元社。
- (2012) 「ソ連の言語政策—その歩みと特徴」砂野稔幸編『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』、pp.194-214、三元社。
- 社会教育促進全国協議会編 (1985) 『社会教育ハンドブック』エイデル研究所。
- 周飛帆 (2001) 「中国少数民族に対する教育政策とその理念」『多文化共生社会の教育』、pp.262-274、玉川大学出版部。
- 庄司博史 (1999) 「ことばの二〇世紀—象徴としてのことば、商品としてのことば」庄司博史編『ことばの二〇世紀』、pp.12-26、ドメス出版。
- (2000) 「中国少数民族政策の新局面—特に漢語普及とのかかわりにおいて—」『国立民族学博物館研究報告 27 (4)』 pp.683-724。
- (2003) 「中国少数民族政策の新局面—特に漢語普及とのかかわりにおいて—」『国立民族学博物館研究報告』 27 卷 4 号、pp.683-724。
- シンジルト (2003) 『民族の語りの文法—中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社。
- 新保敦子 (2011) 「現代中国における英語教育と教育格差—少数民族地域における小学校英語の必修化をめぐって」『早稲田大学大学院教育研究科紀要』第 21 号、pp.39-54。
- 末藤美津子 (2002) 『アメリカのバイリンガル教育—新しい社会の構造を目差して—』東信堂。
- スチンゴワ (2007) 「現代中国にける少数民族教育に関する実証的研究—モンゴル民族中学校の実態調査から—」『言語・地域文化研究』13 号、pp.227-247。
- 砂野幸稔 (2012) 「多言語主義再考」『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』砂野稔幸編、pp.11-48、三元社。
- 宋実成 (2010) 「在日朝鮮人による朝鮮語の継承・使用について—幼少期に渡日した 1 世と日本で生まれ育った 2 世の事例—」『ことばと社会 12 号: 移民と言語②』、pp.101-128、三元社。
- 高橋朋子 (2013) 「移民の母語教育」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』 pp.89-105、三元社。
- 田中克彦 (1992) 『モンゴル—民族と自由』岩波書店。
- (1993) 『ことばのエコロジー—言語・民族・「国際化」—』農山漁村文化協会。
- (2002) 『法廷にたつ言語』岩波現代文庫。
- (2011) 『漢字が日本語をほろぼす』角川 SSC 新書。
- (2013) 『シベリアに独立を! 諸民族の祖国をとりもどす』岩波現代全書。

- 田村雅史 (2011) 「アイヌ語研究史から見たアイヌ語教室」『ことばと社会 13号 : 学校教育における少数派言語』 pp.245-252、三元社。
- 青格楽図 (チンゲルト) ; 烏蘭 (オラン) (2008) 「内モンゴルのモンゴル民族の言語教育事情」『北海道言語文化研究』 No.6、 pp.3-6。
- 塚原信行 (2010) 「母語維持をめぐる認識と実践—ラテン系移民コミュニティと日本社会」多言語研究『ことばと社会』 12号、 pp.48-77、三元社。
- テグス (2009) 「統一文字への夢—1950年代中国におけるモンゴル語のキリル文字化運動」ユ・ヒョジョン ; ボルジギン・ブレンサイン編著『境界に生きるモンゴル世界—20世紀における民族と国家』、 pp.327-363、八月書館。
- 東洋 ; 奥田真丈 ; 河野重男編 (1988) 『学校教育辞典』 教育出版。
- トクタホ (套図格) (2011) 『中国籍モンゴル人留学生の民族的アイデンティティの変容に関する研究』 博士学術論文、首都大学東京。
- (2009) 「内モンゴル自治区における教育問題の源流」 日本国際教育学会『国際教育』 15号、 pp.47-68。
- (2007) 「少数民族留学生の民族的アイデンティティの変容と教育—中国国籍モンゴル人留学生への調査を通して—」『日本学習社会学会年報』 第3号、 pp.58-67。
- 中川裕 (1996) 「少数民族と言語の保持」 宮岡伯人編『言語人類学を学ぶ人のために』、 pp.263-280、世界思想社。
- (1999) 「アイヌ語復興の現状について」 言語権研究会編『ことばへの権利—言語権とはなにか』、 pp.30-37、三元社。
- (2012) 「言語接触における経済とアイデンティティ」 千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第239集、中川裕編『ユーラシアの多言語社会と言語政策』、 pp.1-4。
- 中島和子 (2005) 中島和子 ; 高垣俊之訳『カナダの継承語教育—多文化・多言語主義をめざして』 ジム・カミンズ ; マルセル・ダネン著、明石書店。
- 中島勝住 (1993) 「中華人民共和国における少数民族教育問題」『多文化教育の比較研究—教育における文化的同化と多様化』 小林哲也 (他) 編、 pp.287-311、九州大学出版会。
- 中野克彦 (2010) 「エスニック・メディアを通して見た在日中国に言語教育」『ことばと社会 12号 : 移民と言語②』 pp.78-100、三元社。
- 娜荷芽 (ナヒヤー) (2012) 『近代内モンゴルにおける文化・教育政策研究:1932—1945』 博士学術論文、東京大学。
- 西村幸次郎 (2007) 「中国民族法制の問題状況—動向と課題—」『中国少数民族の自治と慣習法』 pp.1-32、成文堂。
- 日本生涯教育学会編 (1990) 『生涯学習事典』 東京書籍。
- 野元弘幸 (2012) 「在日外国人とアイヌ民族の教育の取り組みから「教育の機会均等」

- と考える」日本国際教育学会『国際教育』第18号、pp.109-111。
- ハイシツヒ（2000）田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』岩波文庫。
- ハス額尔敦（ハスエルドン）（2005）「中国少数民族地域の民族教育政策と民族教育の問題」『多元文化』第5号、pp.265-280、名古屋大学
- ハスゲレル（ハス格日楽）（2004）「中国におけるモンゴル民族教育の国語（モンゴル語）教科書に関する研究」『上越社会研究』第19号、pp.101-110、上越教育大学社会科学教育学会。
- （2005）「中国におけるモンゴル民族教育の構造と課題」『国際教育』第11号、pp.43-62、日本国際教育学会。
- （2013）『中国内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の現状と課題:バイリンガル教育と英語教育の導入に伴う変容を中心に』博士学術論文、首都大学東京。
- バイルモンド（2013）「中国内モンゴル自治区における少数民族の言語政策とモンゴル語の保護と継承の実態」『現代中国における言語政策と言語継承（第一巻）』包聯群編、pp.26-31、三元社。
- 稗田乃（1999）「民族のアイデンティティと言語—死語のプロセスの類型論」庄司博史編『ことばの二〇世紀』、pp.140-154、ドメス出版。
- 福田幸夫訳（1994）レオ・ヴァイスゲルバー著『母語の言語学』三元社。
- 藤井幸之助（2013）「朝鮮学校」多言語化現象研究会編『多言語社会日本—その現状と課題』、pp.263-266、三元社。
- 二木博史（2004）「文字とナショナリズム—モンゴルの場合」『月刊言語』Vol.33/No.5、pp.42-49、大修館書店。
- フフバートル（1999）「国境にまたがる民族の言語—モンゴル民族の言語問題の現状」『変貌するモンゴル世界—国境にまたがる民』和光大学モンゴル学術調査団著、pp.322-359、新幹社。
- （2000）『私が牧童だったころ—モンゴル人が語るモンゴル世界』インターブックス。
- （2007）「現代中国の言語政策—普通話普及と少数民族語」山本忠行；河原俊昭編著『世界の言語政策第2集—多言語社会に備えて』pp.75-108、くろしお出版。
- （2012）「新疆におけるオイラドモンゴル人の文字改革問題—オイラドの「モンゴル族」化と文字、書きことばの喪失」『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』砂野稔幸編、pp.266-308、三元社。
- フレルバートル（1997）「内モンゴル自治区の民族教育をめぐる諸問題」『言語・国家、そして権力』田中克彦著、pp.91-105、新世社。
- （2002）「1950年代内モンゴルで起きたモンゴル文字のキリル文字化運動」『モンゴル研究論集』東北大学東北アジア研究センターモンゴル研究成果報告Ⅰ、pp.133-144、



- 東北大学東北アジア研究センター。
- 包聯群 (2011) 『言語接触と言語変異—中国黒龍江省ドルブッドモンゴル族コミュニティ言語を事例として』 現代図書。
- ボインウリジ (2013) 「モンゴル人大学生のモンゴル語の使用実態—内モンゴル自治区フフホト民族学院の事例として—」 『現代中国における言語政策と言語継承 (第一巻)』 包聯群編、pp.32-38、三元社。
- 宝力嘎 (ボラガ) (2011) 『モンゴル民族の教育についての研究:中国内モンゴル自治区シリントゴル盟中心に』 博士学術論文、関西学院大学。
- (2009) 「子どもの心身の発達に家畜が及ぼす影響についての考察—内モンゴル自治区のマラチンの事例研究—」 関西大学院 『教育学論説』 創刊号、pp.199-209。
- マティアス・ブレンツィンガー (2010) 「民族言語的少数派における言語の活力」 飛内悠子; 原聖訳 『ことばと社会別冊 3—言語的多様性という視差』 pp.15-33、三元社。
- 芒来夫 (2007) 「中国における民族自治地方の立法自治権—その現状と課題—」 『中国少数民族の自治と慣習法』 pp.33-60、成文堂。
- 三橋秀彦 (2011) 「グローバル化に直面する中国民族教育—双語教育改革の現在—」 『国際関係紀要』 第 20 巻第 1・2 合併号、pp.337-354。
- 宮脇淳子 (2002) 『モンゴルの歴史—遊牧民の誕生からモンゴル国まで』 刀水書房。
- ムンクバト (2014a) 「内モンゴル自治区におけるモンゴル文字の使用について—その使用事例や法律規定からの一考察—」 『千葉大学人文社会科学研究』 第 28 号、pp.237-247。
- (2014b) 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族学校に教える「モンゴル語」—甲・乙式学級の「モンゴル語科目学習指導要領」の比較から」 千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 275 集 『モンゴル高原における文化資源の再生と保全に関する研究』 児玉香菜子編、pp.29-48。
- (2013a) 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族学校の教育について—モンゴル人学生の言語使用に関するアンケート調査から—」 『千葉大学人文社会科学研究』 第 27 号、pp.205-213。
- (2013b) 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族の学校教育の現状について—甲・乙式学級の「モンゴル語」教科書の比較から」 千葉大学 『ユーラシア言語文化論集』 15 号、pp.121-130。
- (2012a) 「モンゴル自治区における民族学校の言語教育について—モンゴル族学校、漢族学校、日本の小学校と在日朝鮮人学校のカリキュラム比較からの一考察—」 千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 239 集 『ユーラシアの多言語社会と言語政策』 中川裕編、pp.5-20。
- (2012b) 「内モンゴル自治区における牧畜地域の民族教育の現状—民族学生の学校選択に関する一考察—」 千葉大学 『ユーラシア言語文化論集』 14 号、pp.105-116。

- (2011) 「内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育について—西ウジムチン旗の民族学校の統廃合からみる」 千葉大学『ユーラシア言語文化論集』13号、pp.67-75。
- (2010) 『内モンゴル自治区におけるモンゴル民族教育の現状—西ウジムチン旗におけるモンゴル民族学校の事例から』 修士論文、千葉大学大学院。
- 毛利和子 (1998) 『周縁からの中国—民族問題と国家』 東京大学出版会。
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説：国語編』、東洋館出版社。
- 楊海英編訳 (2008a) アルタンデレヘイ原著『中国共産党によるモンゴル人ジェノサイド実録』 静岡大学文学部「アジア研究プロジェクト」。
- 楊海英 (2008a) 「「少数民族虐殺は正しかった」—中国共産党唐山学習班班員の日記—」 『アジア研究』 静岡大学文学部「アジア研究プロジェクト」 pp.21-75。
- (2008b) 「モンゴル人の日記の中の中国文化大革命 (1)」 静岡大学人文学部『人文論集』 第58号2、pp.43-70。
- (2008c) 「モンゴル人の日記の中の中国文化大革命 (2)」 静岡大学人文学部『人文論集』 第59号1、pp.113-140。
- 吉野耕造 (2006) 「現代モンゴル語文法の言語教育学的一考察—付属語接尾法を中心として」 『語学教育研究論叢 23』、pp.191-214、大東文化大学。
- 読売新聞 2010年11月27日朝刊、「メガチャイナ強さと脆さ (4)」：楊海英「母語を失う少数民族漢語重視不満うっ積」。
- 李月順 (1998) 「朝鮮学校における朝鮮語教育」 『多文化教育—多様性のための教育学』 中島智子編、pp.97-132、明石書店
- 渡邊日日 (2012) 「ロシア・ブリヤートンにおける多言語状況の諸相—ブリヤート標準文章語をめぐる言語政策とその変容」 『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』 砂野稔幸編、pp.215-242、三元社。

### 【モンゴル語】

- Bayar, S (2009) *Jiluyu. Ündüsüiten-ü keblel-ün qoriy\_a.* (バヤル 2009『道しるべ』民族出版社。)
- Dumdadu bay\_a suryayuli-yin kele bičig nairayulqu jöblel (2011) *Kele bičig* (tabudugar on degetü debter). *Öbör mongyol-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriy\_a.* (小中学校語文編集委員会 2011『語文』五年上冊、内モンゴル教育出版社。)
- (2009) *Mongyol kele bičig* (tabudugar on degetü debter). *Öbör mongyol-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriy\_a* (小中学校語文編集委員会 2009『モンゴル語文』五年上冊、内モンゴル教育出版社。)
- Erdemtü, R (2005) *Unuy\_a. Öbör mongyol-un suyul-un keblel-ün qoriy\_a.* (エルドムド 2005『手段』内モンゴル文化出版社。)

- (2004). *Küike tengyer. Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy\_a.*  
(エルドムド 2004 『蒼き空』 内モンゴル人民出版社。)
- Gürjeb (2008) *Eril sübegčilel-ün jam. Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy\_a.* (グルジェブ 2008 『教育反思と研究』 内モンゴル人民出版社。)
- (2009) *Ėgüdüin dü sümeljekü on jil. Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy\_a.*  
(グルジェブ 2009 『夢幻歲月』 内モンゴル人民出版社。)
- Ėgüin qoltu yorban moji orun-u mongyol surqu bičig nairayulqu jöblel (2011) *Mongyol kele bičig*  
(yisüdüger debter). Liyuoning-un ündüsten-ü keblel-ün qoriy\_a. (東北三省モンゴル語教材  
編集委員会 2011 『モンゴル語文』 第九冊、遼寧民族出版社。)
- (2008) *Mongyol kele bičig* (duloduyar debter) Liyuoning-un ündüsten-ü keblel-ün  
qoriy\_a. (東北三省モンゴル語教材編集委員会 2008 『モンゴル語文』 第七冊、遼寧  
民族出版社。)
- Ėoriytu, Г (2006) Eke kelen-ü uqamsar ba eke kelen-ü ulamjilal, *Mongyol kele qamayalalta kiged  
qous kelen-ü jıyan suryayalta-yin sodulyan*, pp.163-174. Öbör mongyol-un arad-un  
keblel-ün qoriy\_a. (ジョログト 2006 「母語の保護と母語の伝承」 『モンゴル語の保護  
と二言語教育研究』 内モンゴル人民出版社、 pp.163-174。)
- Kürelbayatur (2009) *Mongyol kelen-nü ami aqui.* Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy\_a.  
(フレルバートル 2009 『モンゴル語生態』 内モンゴル人民出版社。)
- Lündüü, Ė (2010) *Mongyol oirad-un čayaža-yin bičig deki todü üsüg-ün jarim dayaburi-yin tuqai.  
Kele ba orčiyuly\_a.* 25duyar bodi (No.97) (ルンドー 2010 「モンゴルオイラト法典にお  
けるトド文字の接辞について」 『言語と翻訳』 雑誌、第 25 卷、No97)
- Mongyol kele bičig-ün kičiyel-ün barimjijy\_a sodulun togtuyaqu ajił-un duyuilang (2005)  
*Mongyol kele bičig-ün kičiyel-ün barimjijy\_a.* Öbor mongyol-un suryan kümüjil-ün  
keblel-ün qoriy\_a. (モンゴル語学習指導要領研究査定グループ 2005 『モンゴル語学習  
指導要領』 内モンゴル自治区教育出版社。)
- (2013) *Mongyol kele bičig-ün kičiyel-ün barimjijy\_a.* Öbör mongyol-un suryan  
kümüjil-ün keblel-ün qoriy\_a. (モンゴル語学習指導要領研究査定グループ 2013 『モン  
ゴル語学習指導要領』 内モンゴル自治区教育出版社。)
- Qairqan (2011) *küdege-yin bay\_a suryayuli-yi töbleregüilün neilegülku dü boi boluysan asayudal:  
Ėiryal-un jam somun-u a yačayan-u bay\_a soryayuli bolun suruyči ger-ün aqama-un jışıyen  
deger\_e.* master čola qamayalaqu ügülel. Öbör mongyol-un yeke soryayuli. (ハイルハン 2011  
『牧畜地域における小学校統廃合の段階におきた問題—ジャルガル・イン・ジャム・  
ソムの A ガチャの小学校、学生、保護者らの事例から—』 修士論文、内モンゴル大学。)
- Sainbayar,G (2009) *Qauli • Kele • Amidural.* Öbör mongyol-un suyul-un keblel-ün qoriy\_a.  
(サインバヤ 2009 『法律・言語・生活』 内モンゴル文化出版社。)

- Sečinbayatur nar (2005) *Mongyol kelen-ü nutuy-un ayalun-u sijilel-un uduritqal*. Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy\_a. (スチンバートル他編 2005『モンゴル語の方言研究概論』内モンゴル人民出版社。)
- Sečinçoytu (2005) *Mongyol ulus tu toyurin surulçaysan baiçayalt-yin medegülülte. Öbör mongyol-un suryan kümüjil. 519duyar*. pp5-8. Öbör mongyol-un suryan kümüjil sedgül-un qoriy\_a. (スチンチョクト 2005「モンゴル国に見学した報告」『内モンゴルの教育』Vol.519、pp.5-8、内モンゴル教育雑誌出版社。)
- Taya ; Taibung (2012) *Ĵangyar-un erdem sinjilegen-u tekst 4: Obolai-yin Ĵangyar arban bölüg. Öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy\_a*. (タヤ ; タイボン 2012『オブライの「ジャンガル」10篇』ジャンガル研究のテキスト4、内モンゴル人民出版社。)
- Tümünjarjal (2008) *Mongyol kele biçig-i surçu keregleku ba sodulaqu asayudal*. Öbör mongyol-un suryan kümüjil-ün keblel-ün qoriy\_a. (トモンジャルガル 2008『モンゴル語文字の学習使用と研究について』内モンゴル教育出版社。)
- Üjümüčin čimegelel (2010) *Üjümüčin čimegelel. malčid tu üilečilekü tabčing maičid tu ben tayašiyaydaju bain\_a. Barayun üjümüčin qošiγun-u uqayulqu keltes*. (「牧畜民のためのサービスが牧畜民たちに愛されている」『ウジムチン通信』2010、西ウジムチン政府、pp.10-12。)
- (2011) *Üjümüčin čimegelel. Man-u qošiγu šin\_e čečerlig baiγulun surqu nasun eče emünekü keiked-ün suryan kümüjil kürtekü dü küčirtai asayudal-yi šiidbürilekü ber bain\_a. Barayun üjümüčin qošiγun-u uqayulqu keltes*. (「我がホショーが幼稚園を建設し学齢前児の教育の入園難を解決するようになった」『ウジムチン通信』2011、西ウジムチン政府、pp.30-32。)
- Urtunasutu, N.B (2012) *Obuyan taqily\_a-yin soyol-un kömün jüi-yin sudulul*. Öbör mongyol-un yike suryaγuli-yin keblel-ün qoriy\_a. (ボルジギン・N・オルトナスト 2012『オボー祭祀の文化人類学的研究』内モンゴル大学出版社。)
- Uyangγ\_a (2014) *Küdege-yin suryaγuli-dehi bairisil-un tohirayululta-eče egüsügsen asayudal-un tuqai sodulul: Aru qurčün qušigun-u jišisen deger\_e*. master čola qamayalaqu ügülel. Öbür mongyol-un yeke soryaγuli. (オヤンガー2014『牧畜地域にいける学校体制異調整から生まれた問題に関する研究—アル・ホルチン旗の事例から』修士論文、内モンゴル大学。)
- Yongdun (1986) *Barayun üjümüčin qošiγun-nu eng-ün soryan qümüjil-ün qögjite-in toimu 1950-1985*. (ヨンドン 1986「西ウジムチン旗の普通教育発展概要—1950年～1985年」『西ウジムチン旗の文化・歴史資料集』2号、pp.10-35、政治協商会議西ウジムチン旗委員会文化歴史工作会。)
- (1993a) *Malčin tariyačün-nu soryan qümüjil-ün qögjilte-in toimu 1950-1991*. (ヨン

ドン 1993a 「牧民・農民の教育発展概要—1949 年から 1991 年」『西ウジムチン旗の文化・歴史資料集』6 号、pp.44-51、西ウジムチン旗委員会文化歴史工作会。）

——— (1993b) Barayun üjümüčin qosiyun-nu soryan qümüjil-ün tomu qereg 1902-1991. (ヨンドン 1993b 「西ウジムチン旗の教育大事変—1902 年から 1991 年」『西ウジムチン旗の文化・歴史資料集』6 号、pp.61-71、西ウジムチン旗委員会文化歴史工作会。)

### 【中国語】

陈立鹏(2007)『中国少数民族教育立法新论』中央民族大学出版社、北京。

法律出版社法规中心编(2007)『中华人民共和国义务教育法』法律出版社、北京。

法律出版社法规中心编(2007)「中华人民共和国教育法」『中华人民共和国义务教育法』pp.37-48、法律出版社、北京。

国家统计局人口和就业统计局(2006)『中国人口年鉴 2006』中国统计出版社、北京。

——— (2009)『中国人口年鉴 2009』中国统计出版社、北京。

内蒙古教育志编委会编 (1995)『内蒙古教育史志资料』第一辑上、内蒙古大学出版社、呼和浩特市。

——— (1995) 内蒙古教育史志资料第一辑下、内蒙古大学出版社、呼和浩特市。

——— (1995) 内蒙古教育史志资料第二辑、内蒙古大学出版社、呼和浩特市。

内蒙古自治区教育厅民族教育处 (2004)『内蒙古民族教育工作手册』内蒙古民族教育出版社、呼和浩特市。

——— (2011)『内蒙古民族教育工作手册』第一辑、内蒙古民族教育出版社、呼和浩特市。

内蒙古自治区统计局 (2008)『内蒙古统计年鉴 2008』中国统计出版社、北京。

——— (2009)『内蒙古统计年鉴 2009』中国统计出版社、北京。

——— (2010)『内蒙古统计年鉴 2010』中国统计出版社、北京。

——— (2002)『内蒙古自治区 2000 年人口普查资料』中国统计出版社、北京。

全国人大编(2004)『中华人民共和国宪法』中国法制出版社、北京。

乌云高娃；白音巴图(2012)「农村牧区小学布局调整后小学生的社会支持体系评价-基于内蒙古赤峰市巴林左旗蒙古族小学的调查」『教育学报』第 8 卷第 3 期、pp.54-60。

西乌珠穆沁旗志编纂委员会 (2003)『西乌珠穆沁旗志』内蒙古文化出版社、赤峰市。

### 【英語】

Bradley David(1998) 'Minority Language Policy and Endangered Languages in China and Southeast Asia'. *Studies in Endangered Languages*. pp49-83. Hituzi Syobo.

Carmen Fought (2010) 'Ethnic identity and linguistic contact' *The handbook of language contact*. Raymond Hickey(ed). pp.282-298.

- Goihan ; Miku IWASAK(2008) 'Issues facing ethnic minority education in the Inner Mongolia autonomous region in China. *PROCEEDINGS01*. pp.145-151.  
Ochanomizu university.
- Humphrey, C ; Sneath, D(1999) *The End of Nomadism ?*. Duke University Press.
- Kurebito Tokusu (2008) 'Language 'pollution' in Mongolia: with a focus on the Khorchin dialect'. *Past and present dynamics: the Great Mongolian State*. pp.117-125.
- Ma Rong(2007) 'Bilingual Education for China's Ethnic Minorities'. *Chinese education and society*. Vol.40, No.2, pp.9-25.
- Monkbat (2014a) 'A case study of language education in the Inner Mongolia'. *Journal of Chiba university eurasian society*. No.16. pp.261-266.
- (2014b) 'A case study of the education in the pastoral areas of the Inner Mongolia Autonomous Region'. *Studies on humanities and social sciences of Chiba university*. Vol.28, pp.193-197.
- Nakawo Masayosi; Konagaya Yuki; Shinjilt(eds) (2010) *Ecological Migration Environmental Policy in China*. Peter Lang.

【ホームページ】

- <http://chiba.tongpo.com/hakkyo/html/> (千葉朝鮮初中級学校、日本語)
- <http://iss.ndl.go.jp> (国会国立図書館、日本語)
- <http://mongol.blog.jp> (モンゴル関連情報掲載ブログ、日本語)
- <http://www.holvoo.net> (モンゴル語通信ネット、モンゴル語)
- <http://www.oyungerel.org/myprofile.html> (個人のオフィシャルサイト、英語)
- <http://www.recordchina.co.jp> (日本最大の中国情報サイト、日本語)
- <http://www.xiwuqi.com> (西ウジムチン旗政府ホームページ、モンゴル語)
- <http://www.xlgl.gov.cn> (シリングル盟政府ホームページ、漢語)
- [www.mglradio.com](http://www.mglradio.com) (MGL ラジオ、モンゴル語)

## 資料編

### 資料 1：一部のアンケート調査項目と単純集計

#### 1. 学歴別

1 小学生	115 人 (33.9%)
2 中学生	102 人 (30.1%)
3 高校生	122 人 (36.0%)

#### 2. 性別

1 男性	178 人 (52.5%)
2 女性	159 人 (46.9%)
3 無回答	2 人 (0.6%)

#### 3. 民族帰属

1 モンゴル民族	338 人 (99.7%)
2 その他 (漢族)	1 人 (0.3%)

#### 4. 年齢別

1 11 歳	3 人 (0.9%)
2 12 歳	12 人 (3.5%)
3 13 歳	106 人 (31.3%)
4 14 歳	84 人 (24.8%)
5 15 歳	11 人 (3.2%)
6 16 歳	17 人 (5.0%)
7 17 歳	81 人 (24.2%)
8 18 歳	19 人 (5.6%)
9 19 歳	5 人 (1.5%)

#### 5. あなたの父親の仕事について (自由記入)

1 アナウンサー	1 人 (0.3%)
2 その他 (死亡)	1 人 (0.3%)
1 医者	2 人 (0.6%)
2 運転手	5 人 (1.5%)

3	管理職	1人(0.3%)
4	教師	3人(0.9%)
5	警察官	4人(1.2%)
6	公務員	6人(1.8%)
7	裁判員	1人(0.3%)
8	自営業	3人(0.9%)
9	宗教(お坊さん)	1人(0.3%)
10	修理屋	2人(0.6%)
11	家畜医	2人(0.6%)
12	出稼ぎ	4人(1.2%)
13	商売	1人(0.3%)
14	農民	3人(0.9%)
15	牧畜民	272人(80.2%)
16	無職	3人(0.9%)
17	無回答	17人(5.0%)

#### 6. あなたの母親の仕事について(自由記入)

1	ベビーシッター	1人(0.3%)
2	医者	2人(0.6%)
3	会計士	1人(0.3%)
4	管理職	1人(0.3%)
5	記者	1人(0.3%)
6	教師	10人(2.9%)
7	公務員	4人(1.2%)
8	裁縫	6人(1.8%)
9	自営業	7人(2.1%)
10	出稼ぎ	3人(0.9%)
11	商売	3人(0.9%)
12	職員	7人(2.1%)
13	家畜医	1人(0.3%)
14	農民	2人(0.6%)
15	牧畜民	270人(79.6%)
16	無職	10人(2.9%)
17	無回答	10人(2.9%)



## 7. あなたの日常生活における言語使用状況

### 7.1. 家庭の場面

1 モンゴル語のみ	207 人(61.1%)
2 モンゴル語が多い	87 人(25.7%)
3 モンゴル語・漢語半々	41 人(12.1%)
4 漢語が多い	4 人(1.2%)
5 漢語のみ	0 人

### 7.2. 友人同士の場面

1 モンゴル語のみ	108 人(31.9%)
2 モンゴル語が多い	135 人(39.8%)
3 モンゴル語・漢語半々	90 人(26.5%)
4 漢語が多い	5 人(1.5%)
5 漢語のみ	0 人
6 無回答	1 人(0.3%)

### 7.3. 買い物の場面

1 モンゴル語のみ	3 人(0.9%)
2 モンゴル語が多い	20 人(5.9%)
3 モンゴル語・漢語半々	163 人(48.1%)
4 漢語が多い	105 人(31.0%)
5 漢語のみ	48 人(14.2%)

### 7.4. 学校の場面

1 モンゴル語のみ	124 人(36.6%)
2 モンゴル語が多い	140 人(41.3%)
3 モンゴル語・漢語半々	75 人(22.1%)
4 漢語が多い	0 人
5 漢語のみ	0 人

## 8. あなたのモンゴル語に能力

### 8.1. 聞く能力

1 よくできる	214 人(63.1%)
2 できる	105 人(31.0%)
3 大体できる	19 人(5.6%)

4 あまりできない	1人 (0.3%)
5 できない	0人
6 無回答	0人

## 8.2. 話す能力

1 よくできる	179人 (52.8%)
2 できる	122人 (36.0%)
3 大体できる	33人 (9.7%)
4 あまりできない	5人 (1.5%)
5 できない	0人
6 無回答	0人

## 8.3. 読む能力

1 よくできる	148人 (43.7%)
2 できる	142人 (41.9%)
3 大体できる	40人 (11.8%)
4 あまりできない	9人 (2.7%)
5 できない	0人
6 無回答	0人

## 8.4. 書く能力

1 よくできる	160人 (47.2%)
2 できる	130人 (38.3%)
3 大体できる	36人 (10.6%)
4 あまりできない	13人 (3.8%)
5 できない	0人
6 無回答	0人

## 9. あなたの漢語の能力

### 9.1. 聞く能力

1 よくできる	108人 (31.9%)
2 できる	181人 (53.4%)
3 大体できる	42人 (12.4%)
4 あまりできない	8人 (2.4%)
5 できない	0人

6 無回答 0 人

### 9.2. 話す能力

1 よくできる 89 人 (26.3%)  
2 できる 163 人 (48.1%)  
3 大体できる 72 人 (21.2%)  
4 あまりできない 15 人 (4.4%)  
5 できない 0 人  
6 無回答 0 人

### 9.3. 読む能力

1 よくできる 90 人 (26.5%)  
2 できる 163 人 (48.1%)  
3 大体できる 68 人 (20.1%)  
4 あまりできない 18 人 (5.3%)  
5 できない 0 人  
6 無回答 0 人

### 9.4. 書く能力

1 よくできる 98 人 (28.9%)  
2 できる 153 人 (45.1%)  
3 大体できる 65 人 (19.2%)  
4 あまりできない 20 人 (5.9%)  
5 できない 2 人 (0.6%)  
6 無回答 1 人 (0.3%)

## 10. あなたのラジオ放送を聴くときの言語使用

1 モンゴル語のみ 228 人 (67.3%)  
2 モンゴル語が多い 73 人 (21.5%)  
3 漢語が多い 25 人 (7.4%)  
4 漢語のみ 10 人 (2.9%)  
5 無回答 3 人 (0.9%)

## 11. あなたのテレビを見る時の言語使用

1 モンゴル語のみ 45 人 (13.3%)

2 モンゴル語が多い	75 人 (22.1%)
3 漢語が多い	173 人 (51.0%)
4 漢語のみ	44 人 (13.0%)
5 無回答	2 人 (0.6%)

**12. あなたのインターネットを使うときの言語使用**

1 モンゴル語のみ	160 人 (47.2%)
2 モンゴル語が多い	128 人 (37.8%)
3 漢語が多い	38 人 (11.2%)
4 漢語のみ	12 人 (3.5%)
5 無回答	1 人 (0.3%)

**13. あなたの新聞紙を読むときの言語使用**

1 モンゴル語のみ	167 人 (49.3%)
2 モンゴル語が多い	122 人 (36.0%)
3 漢語が多い	39 人 (11.5%)
4 漢語のみ	9 人 (2.7%)
5 無回答	2 人 (0.6%)

**14. あなたの雑誌を閲覧するときの言語使用**

1 モンゴル語のみ	11 人 (3.2%)
2 モンゴル語が多い	30 人 (8.8%)
3 漢語が多い	168 人 (49.9%)
4 漢語のみ	120 人 (35.4%)
5 無回答	9 人 (2.7%)

**15. あなたのよく利用するホームページは (自由記入)**

**【漢語のサイト】**

1. 360	30 人
2. Baidu	192 人
3. Taobao	60 人
4. Tudou	49 人
5. QQ	54 人
6. Youku	30 人
7. Souhu	25 人

8. Google	4 人
9. Fengxing	13 人
10. Tianmao	3 人
11. Sougou	6 人
12. Kaixin	2 人
13. Renren	5 人
14. Hao123	9 人
15. Weixin	8 人
16. Weibo	4 人
17. Renmin	1 人
18. Tianmu	2 人
19. Youzhan	1 人
20. Baofeng	1 人

【モンゴル語のサイト】

1.Ehshig	112 人
2.Holvoo	154 人
3.Haraa	36 人
4.Aitandoroo	3 人
5.Taliinburgud	23 人
6.Tengertal	39 人
7.Altantab	10 人
8.Mongol	16 人
9.Mongolbolon	7 人
10.Solongo	4 人
11.Chingishaan	2 人
12.MongolAEI	6 人
13.Tulag	6 人
14.Huhsuld	11 人
15.Gard	11 人
16.Duuchin	3 人
17.Nahiya	1 人
18.Nuudel	2 人
19.Monkgal	2 人
無回答	41 人

## 16. あなたのインターネットで検索する内容

1. ゲーム	219 人
2. チャット	52 人
3. ブログ	28 人
4. スポーツ	105 人
5. 音楽	226 人
6. 映画・動画	254 人
7. 詩・文学作品	82 人
8. 物語	53 人
9. ニュース	62 人
10. 広告	39 人
11. 通信販売	73 人
12. 情報検索	30 人
13. 無回答	9 人

## 資料 2 : 聞き取り調査資料

### 2.1 聞き取り調査基本情報

表 5-1 : 聞き取り調査協力人物リスト

番号	性別	職種	年齢	備考	住居地	時間
001	女性	教師	30代	小学教員	西ウジムチン	2009/09
002	男性	教師	30代	中学教員	西ウジムチン	2009/09
003	男性	教師	30代	中学教員	西ウジムチン	2009/09
004	女性	教師	70代	定年退職教員	西ウジムチン	2009/09
005	男性	教師	70代	定年退職教員	西ウジムチン	2009/09
006	男性	教師	70代	定年退職教員	西ウジムチン	2009/09
007	女性	牧畜民	70代	牧民長老	西ウジムチン	2009/09
008	女性	研究者	40代	大学教授	フフホト市	2010/01
009	男性	研究者	40代	大学教授	フフホト市	2010/01
010	男性	作家	50代	雑誌編集者	フフホト市	2010/01
011	男性	教師	50代	小学校学長	フフホト市	2010/01
012	男性	作家	60代	雑誌編集者	シリन्हト市	2010/01
013	女性	教師	40代	保育園園長	西ウジムチン	2011/08
014	男性	教師	60代	元学長	西ウジムチン	2011/08
015	女性	牧畜民	70代	牧民長老	西ウジムチン	2011/08
016	男性	教師	60代	定年退職教員	フフホト市	2012/01
017	男性	研究者	50代	大学教授	フフホト市	2012/01
018	男性	牧畜民	50代	牧畜民	ジョローン・フフ	2012/01
019	女性	主婦	30代	保護者	フフホト市	2012/11
020	男性	教師	40代	高校教頭	エレンホト市	2012/11
021	男性	学生	10代	高校生	エレンホト市	2012/11
022	男性	学生	10代	高校生	エレンホト市	2012/11
023	男性	詩人	40代	元教員	西スニド旗	2012/11
024	男性	教師	40代	高校教員	西スニド	2012/11
025	女性	教師	50代	保育園園長	アバガ	2012/11
026	男性	教師	50代	中学校教員	アバガ	2012/11
027	男性	職員	40代	教育局職員	アバガ	2012/11
028	女性	教師	40代	小学校教員	シリन्हト市	2012/11

029	女性	教師	40代	保護者	シリンホト市	2012/11
030	男性	教師	40代	小学校教員	シリンホト市	2012/11
031	女性	教師	40代	保育園園長	シリンホト市	2012/11
032	男性	教師	40代	小学校教員	シリンホト市	2012/11
033	男性	教師	40代	中学校教員	シリンホト市	2012/11
034	男性	教師	50代	小学校学長	シリンホト市	2012/11
035	女性	主婦	30代	保護者	シリンホト市	2012/11
036	男性	教師	30代	中学校教員	シリンホト市	2012/11
037	男性	研究者	40代	大学教員	フフホト市	2012/11
038	女性	教師	60代	保育園院長	フフホト市	2012/11
039	男性	作家	60代	元教員	赤峰市	2013/08
040	男性	牧畜民	40代	ガチャ長	西ウジムチン	2013/08
041	女性	牧畜民	30代	保護者	西ウジムチン	2013/09
042	男性	研究者	50代	大学教授	フフホト市	2013/09
043	男性	牧畜民	50代	保護者	西ウジムチン	2011/08
044	女性	学生	20代	在日留学生	新疆出身	2014/07

## 2.2 聞き取り内容分類

表 5-2 : 聞き取り内容の分類

学校関連	教育関連	言語関連	文化・法律関連
A. 牧畜地域の学校	C. 教育のモデル	D. 二言語、三言語	F. 親、子どもと家庭
B. 学校統廃合	I. 他の地域の状況	E. モンゴル語文字	J. 法律政策
G. 民族学校、漢族学校	K. 教育全般	H. 母語教育	L. 文化変容

## 2.3 聞き取り調査の文字起こし

### A. 牧畜地域の学校と教育について

A-01-007 : 1950、51、52年の3年間にわたり3か月間の短期訓練班が設けられ、各機関の指導者、教師や各ソムとガチャのリーダーを育成していた。または小学校4、5年生の学歴のある者を大いに使っていた。私の友人には、小学校5年の学歴で、のちに裁判所に通訳の仕事に就いた。もう一人は小学校5年を終えたのちに学長を務めていた人もいる。そ



の時代は読み書きが出来る人材は重宝されていた。当時の学校も人を育み、人材育成に大きな役割を果たしていたといえる。

**A-02-005** : 昔は、15 人を集めないとクラスを設けることはできなかったのもので、個人がクラスを開いた場合はすべてに運営管理を各自で行うという規則があり、個人ではなかなかクラスを開くことができないものでした。当時はモンゴル民族のための学習班はいくつかあった。漢族のための学校はなかった。それで、ほとんどの漢民族がモンゴル民族学校で習っていた。漢族でもモンゴル学校で学習し、今もモンゴル族学校に勤めている人もいます。「学校は貧困庶民の玄関につくる」これは毛主席（毛沢東）の言ったことばである。公民に便宜を図ること、生活の負担を減らすこと、子どもの通学の利便さなどを優先して考えたことである。現在（2000 年以後）の民族学校の状況からみれば、近い将来また各バラガスに学校をつくるのではないかと予測できる。

**A-03-011** : 民族教育について、①明朝時代やその後には、家庭教師を招いて自分の家で子どもを勉強させる。あるいはお坊さんから学ぶというのが主流でした。特に学校という概念はなかった。後に、清朝の時代ではスム（寺院）が普及した。スムを頼って学ぶ場合は、お坊さんたちは、チベット語や仏典などを教えると同時にモンゴル語文字も教えていた。だから人々は子どもをスムに行かせていた。②中華民国の時代、1900 年代末から 1930 年代にかけて、知識人は学校を作るようになった。ハラチン王（グンスンノルブ）がつくった「女子学校」などがある。また、「チャハルの青年学校」（張北にあった）もある。1940 年代には、ウジムチン地域で東ウジムチン旗王の女子学校がつくられた。西ウジムチンにも王付近の学校があった。③その後は、1945 年からシリングル盟の政府が新しく樹立され、1947 年からは確実な政府として機能した。そのときから学校というものが本格的政府によりつくられ始めた。以来、文化革命までは、学校という行政機関が制度化し、定着した。学校がないと、人間は文化的知識を得られないという認識が一般化したのである。その後、文化革命に入り、学校そのものが破壊され、教育が停頓した。それが中国全土における教育に対する大きな衝撃となった。モンゴル地域の学校は 66 年末から 70 年までまったくなくなった。68、69 年には文化革命指導組、赤軍などが貧困人民を学校に行かせて学校を保護するという運動があった。しかし、その後は教育まったく行われず、学校を利用して革命が展開していた。70 年からは軍隊による学校運営の形式が実行されたが、それほどよい結果を招くことはなかった。シリングル盟の状況を見る限り、この時期からは青少年たちの教育の問題に関して国や自治区政府から目を向けられるようになり、本格的な学校運営と教育が始まったといえる。それで、ソムやガチャに学校を作ることが広まった。国や政府のお金で学校を作るとは困難で、民間、ガチャ、バリガードが学校をつくることになった。

**A-04-011** : 文化革命直後であらゆる面で不安定な時期でもあった。国には学校をつくる経

経済的力もなかった。だから地方の最小の行政機関としてのバリガード<sup>90</sup>に学校つくることを請願した。バリガードが学校をつくり運営していた。当時バリガードは共同生産隊として、経済的に余裕があった。70年代上半では、ソムの学校は国がつくったもので、それより下位の行政機関においてその地方の行政か、民間からの出資で運営が任されていた。私もバリガードの学校出身である。

**A-05-011 氏:** シリングル盟で、チャハルでは80年から、ウジムチンでは81、82年から学校が普及しはじめた。その数年後にソムを中心に学校をつくるようにという指示があつて。ソムに学校が集められた。その裏にやはり、国の経済体制が変わり、共同体から個人へ配分を行うという意図があつたのだろう。バリガードの経済状況は衰退し、学校運営などはどうも困難になった。それで、ソムに学校が移転され、国により管理されて、安定して15年から20年の発展軌道に入ってきたといえる。

**A-06-011 氏:** 現在は、うちの学校には800人ぐらい学生がいる。フフホト市出身の子どもが7割で、3割が他の市や盟から来ている。外部の子どもはほとんど学校の寮に住んでいる。80年代には、フフホト市におけるモンゴル民族学校の状況は、学校では教員も少なかったし、学生も少なかった。子どもたちの親といえば、内モンゴル大学、内モンゴル師範大学の教員の子どもたち、あるいは、内モンゴルの出版社、内モンゴル放送局、内モンゴルテレビ局のモンゴル人職員の子どもたちだった。今は、地方からのモンゴル人商人たちも増えたので彼らの子どもが大勢いる。

## **B. 民族学校統廃合について**

**B-01-027 :** 学校統廃合を行う当初は、牧民出身の保護者には反対する声が多かった。学校が移転されることで、彼らにとって牧畜地域と町の間での往復が多くなり、生活面で不便となるからだ。今回は町の幼稚園の子どもたちが通えないということで、牧畜地域に新幼稚園をつくった。資金は政府からは援助されている。民間でもいいがどんどん保育園をつくるよう奨励し、政府が援助することになっている。その分、設備などを各自でそろえるというのが前提条件である。

**B-02-012 :** 民族学校の統廃合はある意味で民族学校への投資を減らしている。少数の学校に大規模で投資するより、たくさんの学校それぞれに少額でも投資した方が牧畜地域の学校にはメリットが大きい。

**B-03-011 :** 21世紀に入り、2000年以後は、ソムの学校を廃止するようになった。ソムの学校は教育の質、環境などがよくない。やはり、経済的發展をしたところにあるほうがよいという意見に賛同できる。一方では、やはり経済的問題で、たくさんのところで学校を

<sup>90</sup> バリガード (bariyada)は行政区間名で、ソムの下位単位である。バグ (bag)ともいわれる。今はガチャに統一されている。

作ることは経費がかかる。労働力も余分に必要とされる。そのような状況から逃れるために学校統廃合をした。

**B-04-006**：西ウジムチンの学校には「三回の分散と統合」の経緯がある。各スムの近くには学校があった。54年前後インジガン・スムにあった学校はオボート・スムに統合させられる。大躍進のときは学校を民営にするといいモンゴル・ゲルを立て、その前にのぼりを上げれば学校を開けるようになり、学校が瞬く間に広範囲に普及した。70年初頭にまた統合し、のちに分散させるが、さらにその後各ガチャに学校を作り、学校を分散させた。例えば、バーチ・ソムの場合6つのガチャそれぞれに小学校が作られた。それらがまたソムに統合させられた。90年に各ソムの中学校だけをホシヨに統合された。2003年に各ソムの小学校をホシヨの中心町に統合された。

**B-05-009**：政府側の言い分は、牧畜地域では学校の環境がわるい、教員のレベルが低い、学生がないなどといったいくつかの問題があったからだという。統廃合によってその条件がよくなった。それは投資を一か所にまとめられるため、設備が整って、生徒も新しい教育に触れられるようになった。

**B-06-008**：子どもはまだ幼く、寮に住むしかないため、親元を離れるしかない。よって児童すべてが学校に通えるとは限らない。それを要因に学校に入っても途中退学しやすい。それで教育の質が落ち、義務教育の普及率が低下する。一方、牧畜民にとって負担が多くなった。牧畜民の家庭生活の水準が低いのでお金を使うことが多くなる。親が2週間に1回ぐらい子どもの状況を確認するために町に行く。子どもは不安を抱えており、親の定期的な訪問が心身的なフォローになるだろう。町の生活は家賃、光熱費などで金を使うばかりで、時には賃金が安いところを探して生活する。安全性などを考えればそれが命にかかわる問題でもある。

**B-07-008**：当地域の経済状況と文化背景を考慮して民族学校を展開すべきで、地域密着型のモデルを構築すべきである。西ウジムチン旗の広さからみて、学校は最低でも4か所(ソムやバラガス)にあるのが望ましい。学校が一か所に限られることは不適切である。学校が遠いため、通学の不便さを理由に進学できない子供もいる。それが教育の普及にも影響することになる。

**B-08-024**：学校統廃合は中央政府からの指示のもとで行われた。

**B-09-010**：小中学校の統廃合をしたら、その時点で元の学校施設を再利用し幼稚園を作ると決めたことがあった。しかし、それは実行できていない。

**B-10-008**：学校統廃合を行う際は当該地域の人口と土地の広さなど考えるべき。牧畜民の子供には途中退学が多く発生している。公民全般の学歴を向上させようという取り組みはあるけれど、学校統廃合によって、牧畜地域において牧畜民の学歴、進学率は下がる一方である。同時に、就学前教育、小中学教育に変化が起きていることが想定できる。国家主席胡锦涛は「中国は13億の人口がおり、われわれは一人一人に責任を持つ」といったこと

がある。しかし、牧畜民はすべてが末端となっている。その責任をどこにもとめればよい。公民であるにも関わらず平等ではない。子どもに親が教えることと先生が教えることは意味が違う。今の教育やその環境において愛情、自覚、文化がある人を育てることができると疑問である。学校統廃合が教育と社会に与えた影響と結果を明らかにしてほしい。

**B-11-005** : 学校の統廃合により古い学校の施設が無駄になった。90年代末に「两基达标<sup>91</sup>」を目標にすべての学校が施設や設備改良したばかりである。それから数年後にそれらの学校が統廃合される。ほとんどの学校の施設は放置された状況である。ウジムチンの端のあるところまでは150キロもある。そんなに遠いところから子どもたちが来ているとは信じられない。来たとしても、住居など様々な問題を抱えている。当然皆が学校の寮には住めない。だから、親の一人が子どもと町に来て借家をして世話をする。一人の親が家畜の世話をする。民族学校の状況をみれば、牧畜民や彼らの子どもにはとても不便をかけているから近い将来また各バラガスに学校を作ることになると予測できる。

**B-12-005** : 学校を町に統合して新しい学校が町の外れに建てられたことは問題である。特に高校生には夜の自習があり、自転車で片道30分かけてたどりつく。自習が終わるのが深夜になる。男子学生は心配少ないが、女子学生は怖くて通学が大変だ。数年前ある女子学生が夜学校から帰宅途中に強姦されたことがある。その責任は誰にあるか不透明である。

**B-13-011** : シリングル盟全土で行われた学校統廃合は何だったのか、私のような一人の教育関係者でもその理由がわからない。内モンゴルの西部ではそれほど学校統廃合は行われていない。また、東部の特に農耕地域でもそれほど統廃合されていない。今回の学校統廃合には対象となった地域的があるといえる。また、学校統廃合により多くの教員や職員が「内退<sup>92</sup>」させられた。

**B-14-011** : 学校統廃合の問題点として、①牧畜民の子どもにはとても不便をもたらした。遠いところで、150キロの長い道のりを半日から一日をかけて、学校にたどりつく例もある。とても不便を蒙る。まだ、幼いため、親から離れにくく、環境になれないなどの例もある。②まだ、学校の寮に住むことができない子どもが多い。そこで、子どもの世話役として親などが遠く離れた町に行って子どもの面倒を見ることになる。それにより、家の経済的出費が多くなり、多くの負担を強いられるようになった。町で借家をする、家を買うなど、本来なら予想外の出費をしている。それが、新たな生活上の困難あるいは新たな貧困状況を招いた。総合的に見ると、学校に学生が不足したから閉鎖したといわれている。しかし、学校をつくって学生が足りずに学校を閉鎖したことはないと思う。③学校を中退する学生が多い。学生本人には、やはりホームシックや環境になれないという要因がある。

<sup>91</sup> 两基达标 (*liangji dabiao*) とは、「九年義務教育を基本的普及」と「青少年文盲を基本的一掃」を掲げ、目標達成を目指すものである。

<sup>92</sup> 内退(*neitui*)とは、公務員の退職年齢を満たしていないにもかかわらず実情上は退職しており、給料などが今までの通り支給され、仕事をしないようになること。

家庭としては経済状況の困難が要因にある。学校には管理がよくないこともある。

**B-15-009**：学校統廃合により学校の寮に住まざるを得ない学生が多くなり、寮生活の面倒を見切れる職員がいない。寮に住む学生たちの世話をする人がたりない。

**B-16-037**：発展している中国にとって、牧畜地域の教育がどれほど重要で、どれ程度の価値があるかに言及する必要がある。内モンゴル、新疆、チベット、青海省などの地域は牧畜生業が中心的である。内モンゴルの現状がそれらの地域の発展に直接関係する。アメリカでも学校統合が行われていた。その同じ間違いを中国が起こしている。

**B-17-023**：牧畜地域の学校統廃合には強制的部分と自然発生的な部分の二つの要因がある。多くの人々は国からの強制だと考えている。牧畜地域の学校にいた経験者として感じたことがある。牧畜地域の学校はより辺境地域にあるので、町の学校よりあらゆるところで条件が異なる。学校の設備、生活環境、給料などが例としてあげられる。だから、学生にせよ、教職員にせよ、やはり環境が整ったところに行きたがる。まず、教職員に対する補助金などが低く、町に比べればかなりの差額ある。あらゆるチャンスから外れてしまう。また情報も遅れて届く。学生、教職員誰もがそこにいたくない。だから学校は自然になくなったと考えられる。

**B-18-039**：義務教育の段階では、学生のすべての費用を国から出すのが基本である。しかし、内モンゴルの場合は、公民からお金を集め、あるいはどこからか借金して、学校が義務教育のレベルに到達した。そうなったとたん学校統廃合を実施した。その意味では、公民はただお金を出し、それが何の役にも立たなかったことを意味し、公民の負担となっただけである。今は義務教育と称し、学費、生活費などが無償になった。でも、学校を過度に統廃合したことは、「学校は5km以内にある」という義務教育の規定を違反している。今の義務教育は学生や保護者の精神的、物質的な負担になっている。だから、このような負担になっている教育が正当な義務教育とはいいいにくい。

**B-19-039**：例えば、私が草原の奥地で家畜の世話をしながら生活をする。祖父や祖母あるいは両親の一人が、子どもが保育園のときから高校を卒業するまで、町で一緒に生活しなければならない。だから、生活の基盤が二箇所なければならない。そこには、生活費、交通費など余分な経費がかかる。いくら「两免一补」などいろいろと補助金制度があるといえども、その裏に牧畜民はそれより多額の経費がかかっている。そのような状況により、今は、牧畜地域では義務教育が本格的に実行できていないといえる。

**B-20-040**：牧畜地域の学校では学生が少なくなり、統廃合が行われた。しかし、町の学校に学生が多すぎて、1クラス60人から70人の学生になり、クラス担任の先生や各教科担当の先生たちの学習指導の大きな負担になった。学校を統廃合することだけを考えていた結果、統廃合された後に何が起きるかを考えていなかったことがはっきり見えている。

**B-21-040**：ソムの学校には学生が少なくなったが、その学校の先生たちにとっては少人数の学習指導になるから、ある意味では教育の効率が上がった。例えば、バーチ・ソムの学

校では、1クラス20人で、先生たちは指導しやすくなり学生たちの成績も上がった。私の数人の知り合いの子どももいい成績で、重点学校に入った例もある。

**B-22-012**：学校統廃合は、教育への投資を集中させているといわれている。しかし、牧畜地域の学校の状況を見る限り、まったく異なる効果をもたらしている。牧畜民の生活基盤、生活様式は都市部の人々とは異なるので、学校配置もその状況に応じて、牧畜民たちの居住状況に合わせ、生活状況に適した配置や運営をしなければならない。

**B-23-023**：牧畜地域の学校は、学習環境がよくない。例えば、ガスもないために冬でも暖房器具を使えない。石炭を燃料にして各教室を暖めていた。様々な情報や教師たちへの待遇がいつも、町の状況に比べて遅れており、行き届かない状況がほとんどだった。もちろん、経済的にゆとりがある家庭は、子どもを町の学校に通わせるようになっている。教職員たちも、金曜日の夕方に町に戻り、金土日に3泊して月曜日の朝一番に学校に戻ってくる。だから、帰属意識が低く、町に愛着の強い者が多かった。でも全員がそういうわけではなかった。生活基盤がここにある人たちはここから離れたくなかったのも事実である。

**B-24-032**：借家ということは、①家賃が安い分、老朽化し危険な物件が多い。②年輩・若い人が子どもの面倒をみているケースが多い。③ギャンブルに依存し「モンゴル麻雀」が流行している。もはや社会問題になっている。これらは学校統廃合後の問題である。

**B-25-017**：民族学校の統廃合により、①一個の人間として育っていくに適した環境、子どもの成長に相応しい環境がなくなった。子どもは両親と一緒にいるのが理想的な環境である。心理的成長に好ましい。②経済的、社会的な、家庭内の問題が多発している。③牧畜民を都市へ誘導する基本的な手段は学校を移動させることだった。先ず、町に行って家を買って、家を買ったら家畜を売り都市へと移る。しかし、町の生活環境は金持ちには天国で、収入がない人間にとっては地獄である。④町に移住した牧畜民は仕事に就かず、収入がない。それが社会に大きな負担をもたらした。

**B-26-027**：学校統廃合後は良くなったところは、学校の設備、学生の生活環境（住食）だ。保護者の反応は良くなかった。彼らにとって、牧畜地域から街への転居などは不便だった。経済的余裕がある人たちはすでに子どもを街に移していた。ソムの学校には生活面で困難な人々が残っていた。

**B-27-015**：学校が移動と同時にソムにあった郵便局もなくなった。出版社に注文した雑誌が郵便局に届き、いつも取りに行っていた。今は、雑誌新聞などは入手できず、新しい情報が得られなくなった。

## C. 教育のモデル

**C-01-002** : 素質教育<sup>93</sup>は学校教育において学生を全面的に発展させるのが目的だ。自分の好きな分野、特技を発展させること。多才なる学生が多く育てられている。小学校の時点から体育専門の学校に行った例もある。自分の得意な分野、個性により芸術専門学校に進学する学生もいる。

**C-02-004** : 今は学校内外で様々なイベントが多いし、勉強以外に自分をアピールできる場と自分の潜在能力を発見できるきっかけが多い。

**C-03-003** : 素質教育の基本的考え方は子どもたちを全面的発展させることである。しかし、最終的に学生を評価するときはやはり試験により評価する。全科目の試験結果で最終的判断が下される。だから従来の試験対応教育もなくてはならない。だから素質教育のやり方はこの地域に適していないといえる。

**C-04-001** : 素質教育はあまりにも皮相に捉われ、自民族の伝統を忘れている。モンゴル人の子どもは漢語を用いて物事を考えることになって、モンゴル語を用いた学習の妨げになる。とにかく母語を習う意欲が衰えているのが現実である。

**C-05-011** : 素質教育について 1996 年から提唱され、始まった時には、しきりに「素質教育の普及」「素質教育の実行」などと主張されていた。今はそれほど熱心にされていない。問題は、素質教育の定義自体も明らかにされていなかった。従来からあったモデルなのかもわからない。どの範囲で、どれ程度やるものなのか曖昧なものになっている。モンゴルにはもともとあったものである。「一つの項目に熟知すれば、多くの物事に慣れる」という諺がある。これは素質教育であると考えることができる。保護者たちも家の中で子どもに「やってはいけないもの」、「やってもいいもの」「どのような物事に興味を持ちやり続ければ将来的にどう役に立つ」などと子どもに言い聞かせる習慣がある。これも素質教育だと考えることができる。しかし、素質教育そのものはもう放置されている状況である。

## D. 二言語政策、三語教育学習について

**D-01-011** : 三言語教育（モンゴル語、漢語、英語）について、今はモンゴル語を一年次、漢語を二年次、英語を三年次からそれぞれ教えている。同じ年次に 2 種類の言語を学習し始めることを避けている。子どもによって発音などが混同されることがあるので、基本的なものが身についたら次の言語を導入する方針を採っている。これが一番よい方法である。

**D-02-004** : モンゴル人の子どもは漢民族の子どもに比べ、英語の発音などを習得するのが

---

<sup>93</sup> 素質教育(*suzhi jiaoyu*)は、教育を受ける側の各方面にわたる素質を高める教育のモデルで、思想道德素質、能力育成、個人の個性発展、心身健康教育を重視する。

比較的気楽だ。英語は幼いころから習ったほうがいい。母語学習の障害になるものはない。子供もとても好んでいるし、親も週末や休みに塾に通わせている。

**D-03-005** : 英語の学習においては、まず、英語を使う機会がない。家庭内で学生の勉強を指導できる人間がない。授業以外で使う場所がない。英語担当の教師以外は指導できる人はない。

**D-04-001** : 漢語、英語を小学校の段階から教えることがモンゴル人児童の母語を用いて考えること、話すことの障害となっている。小学校で児童に1年次から漢語を教えることはモンゴル人児童の言語による思考力に影響を与え、混合語の発生の原因となっている。さらにモンゴル民族学校において教科科目の数が多いことは子どもの知識を順次身につけることへの障害となり、学習意欲に影響を与えている。教科書が漢語の教科書をそのまま訳したもので、牧畜地域とモンゴル人児童の生活の特徴に合っていない内容が多い。また3年次から英語を教えはじめ、言語の科目と授業科目の多さから子供たちはどれも手につかず、学習意欲が衰える現象が起きている。

**D-05-004** : モンゴル人の子どもには漢族学校に通うケースは多くなっている。モンゴル語で教育を受けても使う場所があまりに少ない。漢語で習っている子どもはほとんど町出身の子どもだ。牧畜地域出身の親や少数の町の人が子どもをモンゴル民族学校に通わせる。児童は幼稚園に入る前の時点ですでに漢語で話すようになっている。たとえば、ある親の話では、孫をモンゴル族幼稚園に通わせたら、ことばを話さなくなり、座ったところから身動きもしないようになって、他の児童とのやり取りもなくなってしまった。保護者が仕方なく漢民族（語）の幼稚園に行かせたら、活発になり、その変貌に驚いていた。

**D-06-010** : 「三語試験班」には一定期間の設定があるほうが望ましい。今の状況は一回実施すればいつまでも「三語試験班」のままで、長期的にやればその意義は違うものになる。1つのアイマグでは1、2クラスあれば十分。それ以上多くなつてはいけない。すべての学校、すべてのクラスでやることで、母語のモンゴル語を習う意欲がなくなってしまう。なぜなら、三語を習ったら、学生の負担が重くなる。外国語は今の時点では使うところはない。モンゴル語と漢語の学習使用で精いっぱいだ。三語を使いこなしている学生も少ない。だから外国語は選択履修すればいい。

**D-07-017** : 今の大学生はモンゴル語で正しい文を書けなくなっている。やはり、三言語教育になってからモンゴル語の授業科目の学習時間数が減らされたのが一因だ。昔は毎日モンゴル語の授業があった。今は漢語、英語の授業時間数が増加しており、その時間はモンゴル語の授業時間数が削られている。①また、モンゴル語を使う環境が無くなっている。家に帰れば漢語のテレビが24時間ながれているからどこ行っても漢語だ。②授業時間数の軽減でモンゴル語そのものが影響を受けている。文系の学生に影響が著しく生じている。

**D-08-017** : 昔はモンゴル民族学校で二言語教育といったら、モンゴル語が主で+漢語だったが、今は漢語が主になり+モンゴル語に変わっている。



## E. モンゴル語・文字の学習と使用について

**E-01-005** : モンゴル語は校内に限られる言葉で、校外では役に立っていない。使うところが少ないのであり、民族語広く使うべきである。街中の店などの看板にモンゴル語、漢語の2種の文字を用いた表記が行われているが、それは見た目だけのことだ。モンゴル語を本当に使っているかは大きな問題だ。公文書はすべて漢語で書かれた資料が中心的になっている。

**E-02-005** : 今はテレビ、ラジオはほとんどが漢語の放送である。例えば、今回（2009年9月）の豚インフルエンザの感染症が広がり、それに対する予防や感染情報などでは、モンゴル語での報道はなかった。漢語がわからない牧畜民は戸惑いを感じている。どうすればよいか処方さえもわからないままである。昔は、大事な会議、重要な放送にはモンゴル語の通訳が付いた。今はほとんど見られない。モンゴル人の共産党幹部らもほとんど漢語で会議を行い、書類、資料すべてが漢語のものしかない。ウジムチン地域は牧畜地域で牧畜民の多くはモンゴル語しか使わないのでモンゴル語を優先する必要がある。

**E-03-019** : 私は子どもにモンゴル語で教育を受けさせるため、モンゴル民族小学校の予備クラスにいかせている。今、子どもが勉強上、数学の科目に苦手意識をもっている。その要因は、数学の先生が内モンゴルの東部出身で、訛りがあり、先生のことばを理解できていないことである。家庭の中ではモンゴル語のチャハル方言で話をする（両親が二人ともチャハル方言話者）。面白いことに家から出て、外で他の子どもたちと遊ぶ時は別の方言を使う。団地の内に東部出身の親と子どもが多い。それで彼らの話す方言に合わせて話をする。なぜことばを変えているかと聞くと、「彼らは東部の人たちなので、合わせて話さないとわからない」と答える。

**E-04-020** : 私はモンゴル語による名称に注目し、学生たちに指導している。元々モンゴル語にあった名称が漢語に代わっているのが多い。例えば、「万年筆」はモンゴル語で「bir」だが、漢語で「钢笔（*gangbi*）」といい慣れている。そのように使い慣れていく中で、自分がいざモンゴル語で表現しようとするときに思いつかなくなってしまうことは多々ある。

**E-05-020** : 子どもたちがモンゴル語を使わずに漢語を使って会話をする現象は内モンゴル全土で起きている。テレビなど日常の生活環境において漢語が中心的になっているのが主な原因である。うちの学校では、子どもに学校でモンゴル語を使わせる環境保持の改善策として「母語保護者」という取り組みを実施した。それは、先ず子どもたちに互いを監視させ、モンゴル語による会話中に漢語を使わないよう、お互いに注意させる。次の段階では先生が指導し間違いを直させるなどの方法を取った。それをしばらく実施することで、校内で効果が出てきた。しかし、「子どもの生活の中の言語使用を制限してはいけない」という教育局側の指導を受け、その取り組みは中止された。

**E-06-016** : モンゴル語の名詞には細かい分類がある。例えば、「馬」といったときには①

名詞（専用名詞）、②性別（オス）、③数字（一頭）、④才（4歳以上）、⑤人為が加わり去勢されたなどの情報がわかる。また、モンゴル語では羊とヤギはそれぞれ名称が異なる。漢語で言うときは両方とも「羊」という文字が入る。ヤギは山や岩の登攀が得意なので「山羊（*shanyang*）」で、羊は体毛が木綿に似ているから「綿羊（*mianyang*）」などと表現している。漢語では家畜についてそれ以上詳しく表現できない。モンゴル語で「*jusag*」という家畜の名称が漢語では「一只二岁母山羊」となる。

**E-07-017**：シリングル盟のエレンホトのモンゴル語の使用はとて面白い状況である。①学校内ではモンゴル語以外を使ってはならないという校内決まりが設けられている例がある。②モンゴル国と深い交流があり、教員をモンゴル国に派遣し勉強させている。モンゴル国における教育のよいところを受け入れるなど積極的に交流が行われている。モンゴルから来た学生も多く来ており、モンゴル語・文化の復興に取り組んでいる。③先生たちが努力している。リーダたちがしっかりしている。それに反して、フフホト市のサイハン区の幼稚園では、「モンゴル人」の子どもが入って、「漢人」になって卒園してくる。都市部なので漢語が有利に働いている。エレンホトでは、モンゴル語ができない子どもがモンゴル人になって卒園するという。モンゴル語が有利であること証明している。

**E-08-017**：新疆では若い世代は子どもをモンゴル語で学習させることを嫌う。それは、モンゴル語でいい教育ができる学校がないからという。彼らは漢族学校に行けば競争が激し過ぎるということを知らない。モンゴル人はモンゴル語で習えばこそ進路が広がる。80年代では大学に入っても漢語ができないのが当たり前だった。今は逆にモンゴル語ができない学生が多い。大学のゼミでモンゴル語のレベルが低くて同じ授業（モンゴル文学史）を3年も継続履修して合格できない学生がいる。

**E-09-017**：今の若いモンゴル人夫婦たちの認識では、一人っ子は良くないとされている。80年代では、政策、経済、生活環境などが良くないため仕方がなかったので皆一人っ子でした。今は、生活の条件がとて面白いから、モンゴル人には2、3人の子どもが望ましい。一人っ子はあまりにも寂しいから少なくとも2人いればお互いに遊び、年下は年上のまねをしたり、年上が面倒みてくれたりすることができる。

**E-10-017**：①マルクス、毛沢東の民族思想では、社会主義から共産主義に移る段階では民族という概念がなくなることで人々が平等になるのが前提だと一般していた。それでこそ皆平等であることにある。それが進歩、発展であると考えられていた。いわば、私たちが「モンゴル」という要素をわすれなければ進歩したことにならない。その時代を生きた年輩の人たちにとってはこれが正義として定着している。②現実には、我々の環境がすでに変わり、玄関から外は漢語の世界になっている。③社会システムが漢語を主としており、漢語ができないと生きていられない。④本来は漢語ができないといい続ければ、モンゴル語ができる人材を手配してくれるのが当たり前だ。それがモンゴル人の就職につながる。昔は、旗レベルでは通訳機関があった。今はそれがなく、通達、書類等も漢語である。

**E-11-017** : 新疆では若者世帯は子どもを漢族学校入れていることがもはや「漢語教授の流行」になっている。内モンゴルでは逆の流行が起きている。モンゴル人は1家庭につき2人以上の子どもを生む。子どもにモンゴル語で教育を受けさせるなどの現象がおきている。内モンゴルでの「モンゴル語流行」のきっかけは：①年輩の人々の教訓がある。年輩の世帯は子どもに漢語による教育をうけさせた。著名な学者たちもそうだ。彼らの子どもが大きくなって漢族の嫁や婿を連れてくるようになった。そこから家庭環境、価値観に大きな変化をもたらした。モンゴル古来の人間関係が変わった。例えば、親の面倒を見ないなどである。それで年輩方たちは「子ども漢語で教育させることは大きな間違い」と結論を出し、内モンゴルの社会に呼びかけている。漢語で教育を受けることで子どもの価値観が変わり、漢族との結婚が理想の親と、子どもの理想に溝が生じてしまった。②「モンゴル文化域 (mongyol suyul-un orun)」建設のスローガンの誕生もある。モンゴル文化がモンゴル人の誇りであり、売りものでもあると認識し始めている。モンゴル民族の衣食住などモンゴルならではの特徴がうまれる。モンゴル文化が内モンゴルの象徴である。自分の文化に価値があることに気付いた。③国連からの「少数言語文化の保護」の提言大きな影響があり、新しい認識がうまれている。④モンゴル語で教育を受けることが漢語で教育を受けるより、少なくとも一つのことばを多く身につけることができる。漢語で教育を受ければモンゴル語を忘れてしまう場合が多い。だから、モンゴル語で教育を受ければ、ことばの資源が多いと捉えようになっている。モンゴル語で教育を受け他の言語を習う時に勉強がしやすいと言われている。この流行はフフホト市だけの現象であり、いかに地方に伝えていくかが課題である。

**E-12-029** : うちの子どもは今モンゴル語で教育を受けている。学校の成績が良くて、二回も飛び級している。幼稚園の時に一時的に漢族の幼稚園にいかせたことがある。漢語の本や雑誌を読むのが大好きだった。漢語の教科書の内容が簡単すぎて、授業中とはとてもつまらないという。モンゴル語で書かれた本などは余り読まない。自分の名前をも漢語に変えたいという。うちの子どものモンゴル語のレベルは低い。牧畜地域出身の子どもはモンゴル語がうまいので、彼らと自分を比べると劣っているためモンゴル語に関心をもたない。

**E-13-021** : 私は、小学校4年次からこの町に家族とともに移住して来た。今は高校生で、ここでの生活環境には慣れた。私は、家では両親と東部の方言を話している、学校に来たらここの方言（標準方言）を使う。最初は方言が異なるから非常に困った。例えば、私の名前は、「Ündüsü」と書いて、向うでは「undsee」と呼び、ここでは「undes」と呼ぶ。将来は生まれ故郷に帰りたい。今は高校で文系を専攻している。大学まで進学し、将来モンゴル語や地理を教える先生になりたい。

**E-14-022** : 私は他のところからこの町に移住してきた。小学校のときからここにきて、もう10年になる。ここの方言になれて、向うの方言を話せなくなった。両親も向こうの方言を忘れはじめている。

**E-15-039** : モンゴル語文字の使用が衰退したのは、我々モンゴル人に大きな責任がある。昔は、親指の大きさ程の食事券にもモンゴル文字が表記されていた。私が、ソム長だった当時は、貧困家庭は銀行から借金でき、その利子を政府が補助していた。その銀行の借金用の用紙はモンゴル文字と漢字で書かれていて、モンゴル文字で記入することができた。今は、田舎の信用社（銀行）にもモンゴル文字が使われていない。モンゴル人たちからモンゴル文字を使えという要求がなくなった。我々のモンゴル人からそういった要求がないから、行政側はもちろん対応するはずはない。今はほとんど漢字が通行している。漢字が読めない、わからなくても契約書に署名している。その結果、モンゴル文字の需要がどんどんなくなった。だからモンゴル語を習う必要性もなくなっている。モンゴル語は教室を一步出せば使えない環境になりつつある。

**E-16-039** : 赤峰市のモンゴル学校は最近まで、漢語が主要言語になっていた。教室内の言語以外は漢語だった。教職員の出勤名簿にもモンゴル文字で署名してはいけないほどだった。今は新しい校長が赴任してきて、校内の使用言語を漢語からモンゴル語使用へ切り替えられた。その結果、本来であれば校長になるはずの漢人の副校長が移動していった。運よくモンゴル人の学校長が来て、モンゴル語が使われ始めた。体操の時間にもモンゴル語で授業するようになった。だから、この学校に漢人の校長はしばらく着任しない。漢語で運営されていたから漢人の管理職が入ってくるのであり、教職員も増え、最後にモンゴル人学生も来なくなる。結果的に一つの民族学校が息の根を止めることになる。

**E-17-039** : 私は、林東師範学校で校長を勤めたときは、最初の所信表明の挨拶を、まずモンゴル語で話し、次に漢語で同じ内容を繰り返して言った。その次の会議からモンゴル語だけで行った。漢人の書記が漢語の使用を求めてきたが、モンゴル人が漢語を十分に理解できない上、たった一人だけの漢人のために漢語への統一はできない。その書記に通訳をつけて、続行した。結果的に漢人の書記は他のところへ移動していった。モンゴル人が皆このように行動していたならば、モンゴル人の就職先がなくなるはずはない。

**E-18-039** : 私は数年前まではレストランを経営しており、そのときに衛生局、税務署など14の行政機関が関係していた。それらの機関の中で、モンゴル語ができる人は一人もいなかった。法律を無視し、無防備でやっていた。そのときに、「モンゴル語文字使用条例」が可決され、執行された。元々その条例は法律に則ってできているので、本当に機能するかをこれらの機関を対象に試してみたのが私だ。結果的に、これらの機関は法律に沿って私の要請に従うようになった。

## **F.親、子どもと家庭について**

**F-01-012**: 牧畜民の子どもはホショー（旗）の中心部の町に行って学校の寮に住ませるか、町で部屋を借りて親が子供と一緒に住んで面倒を見るか、または町にいる親戚に預けるか

というパターンが多い。

**F-02-006** : まだ自立ができない子供にとって親元を離れた寮での生活は大きな負担となる。子どもの発育にも影響が出るのが懸念される。ホームシックなどで勉強に集中できないことも起こりうる。他方で、牧畜民の生活に怠慢や家事放棄が生じ、家庭崩壊をまねいている。牧畜民は牧畜地域と町の二か所で生計を立てることになり、生活の出費は大きくなる。

**F-03-004** : 今の学校には「两免一补」という制度がある。学費と食事代を免除、補助金を支給する制度がある。今、義務教育段階では学費は免除され、さらに子供が寮に住んでいれば子供が補助金をもらえる。親は満足していると思う。

**F-04-002** : 子どもは親がそばのいないことで非行に走りやすい。

**F-05-010** : 子供は 13 歳まで両親のもとで育つ必要があり、それは子どもの発育に欠かせない過程で大きな意義をもつ。

**F-06-020** : 保護者は子どもに対して「先生の話をよく聞くものだよ」、先生に対して「うちの子どもを厳しく指導してください」などという。しかし、子どもの教育は学校側だけに頼っていけない。子どもを取り巻く生活環境が大きく変わっているということを認識しなければならない。

**F-07-020** : 最近、牧畜地域から町に移ってきた人々は家を買ったものもいれば、借家して生活しているケースもある。そのなかで多くの保護者は、町に移ってきてやることもなく毎日ギャンブルに耽っている現象が非常に多い。これらの実態は子どもの心身に与える影響がとても多き。例えば、私は数年前に高校のクラス担任だった時、クラスの学生が昼休みに家に帰ったら母親がいなかった。方々を探して、賭博場で見つけた。母親は「私は遊んでいるから、あなたは妹と一緒にどこかでお昼をすまして」といい 5 元を渡した。さらに、両親の一人が犯罪者、離婚者という子どもも多くなっている。もはや一つの社会問題というべきだ。町に移った牧民の離婚率も高くなっている。

**F-08-020** : モンゴル人が自分の苦難を自ら訴えたがらない。だから、政府からの牧畜民に支給する様々な援助資金を受給できない人が多い。町というものが発展のシンボルとなり、牧民を移住させることが間違った方向へ進んでいる。牧畜民が町の生活に慣れるまで長い年月が必要だ。家畜を飼い、なに不自由なく生活していた人々を無理やり移住させた。このような現状では彼らの子どもを育てようという取り組みはよい結果を期待できない。

**F-09-020** : 家畜を飼う生活が時代遅れと見なされている。町に移り汚い、きつい、危険な仕事に就く人たちが先進的だと見なされている。自然環境の中で放牧し、自然に調和した生活をする人たちが悪者で、資源開発で大地を掘り起こす行為が善であるという考えが広がっている。

## G. 民族学校、漢民族学校について

**G-01-004** : 民族学校の方は管理がいい。民族学校ではいろいろな制度や規則がとても厳しく行われている。教師が担当する教科科目の指導案を授業ごとにチェックさせる必要がある。学校側の要求も厳格である。漢民族小学校で「道徳」、「読書」、「科学」など科目はカリキュラムに設定されているものの、実際には教えられてない。各クラスの担当教師は自分の担当する教科を多く学習させている。もちろん学生の成績がよければ、教師個人の業務成績を上げるため、他の教科を無視することもある。

**G-02-004** : 各学校に「保護者学級」をつくり、教員たちが保護者に対して話をする。時には法律関連機関から専門家を招き、法律関連の教育を行う。または意見交流し、学校側の問題点を分析し、学校改善に努めている。

**G-03-004** : 教育の普及のために「两基达标」を 1999 年に実行した。各ソムの学校に大量の資金投入と施設設備の改良を行い、基準を満たしたことで義務教育が普及した。実態は上位の関連機関から厳しい辞令が下され、下位の機関は虚偽の回答・報告をするのが一般化している。本当に目標に到達したかは疑問である。

**G-04-011** : モンゴル人児童の漢族学校に通うことについて、昔は、モンゴル人たちは自分の漢語のレベルが低いので、子どもに早い段階から漢語を習わせるよう努力し、漢語で教育をさせていた。

**G-05-011** : モンゴル民族の教育などについて、問題点はモンゴル人自身にある。あらゆる法律の存在すら知らない人が多い。物事に興味関心がない、広く情報を集める、観察する、考えるという習慣がなくなったからである。民族教育を適切に行うには、関連の法律などに精通しなければならない。時代背景、環境背景をよく研究する必要がある。その状況に応じて、学習、勉強、研究を具体化することができる。モンゴル語で教育を受ける必要性があるかといえば、もちろんある。①牧畜地域のモンゴル語文字の需要がある。行政などでも需要がある。②積極的にその需要を作る必要がある。皆がモンゴル語で教育を受けなくなれば、もちろんモンゴル語を使う場所がなくなる。モンゴル語を使う人がいればその学習、教育、放送、出版などが絶えず維持されていく。だから皆が使うことがそのニーズが広がってくる条件だ。今の人々はそのような意識がとても低い。都市の人々には、モンゴル語文化の将来がどうなるかを心配せずに、まず、子どもをモンゴル語で勉強させる必要があるという統一した認識が流通している。その反面で、牧畜地域ではモンゴル語の学習や環境が問題になっている。

**G-06-011** : 牧畜地域の町では、漢語で教育を受ける風潮が広がっている。子どもを漢語で教育させることで将来が順調となると確信している。都市部では子どもがモンゴル語で教育を受けて、将来苦勞するのはと心配する保護者も少なくない。

**G-07-036** : シリンホト市では、経済的に裕福な家庭は子どもを漢族学校に行かせるように

なっている。時代の流行のようである。モンゴル族学校の学生減少が民族教育に直撃影響を与える。シリンホト市では、小学校が 10 校あり、中学校は 6 校ある。中学校の中には、モンゴル族だけの学校が 1 つしかない。今うちの学校では 200 人以上の教員がいる。今のところは、モンゴル人教員採用の枠がない状況である。

**G-08-035** : うち子どもを漢族学校に通わせている。今は、漢族学校に行かせたことをとても後悔している。自分は漢語が苦手で、①子どもの宿題を手伝うのに苦労している。子どもが勉強できているか、いないのかわからなくてとても心配する。②漢族学校でかかる雑費が多い。学費と教科書代は払わないがそれ以外で、補助資料などをいっぱい買わせる。モンゴル族学校にはそのようなものはない。③子どもを漢族小学校にいかせる時は何も考えていなかった。子どもの父が漢族だから漢族の学校に行かせた。私自身は漢語による日常会話は不自由なく通じる。でも、漢語の読み書きができない。子どもの成績は、語文(漢語)、数学、英語の三科目がすべて 90 点以上の成績でも、クラス内では、高い順位に入れない。それで④漢族学校では競争率が高いということを痛感している。いかにいい成績を取ってもいい学校に入れないということを実感している。

**G-09-025** : 90 年代には幼稚園の児童が少ない時期があった。それで、一人の教員が 3 人の子どもを幼稚園のために見つけてくることを決め、集めた学生の数で賞金を与えるなどのキャンペーンをしたこともある。今は、子どもの学費、管理費を免除することで子どもの人数が増えてきた。

**G-10-026** : 今年うちの学校の学生数が少ない。今年の夏は雨が多くて、牧草地で草が茂って、家畜の状態がいい。それで、チャハルやスニド出身の学生が故郷に戻ってしまった。親がここにきて他人の牧草地を借りて家畜を飼っていたが、自分のところの牧草地がいいから故郷に戻った。それで子どもたちも一緒に戻り、うちの学校の学生数が少なくなった。

**G-11-027** : 私は 90 年に牧畜地域の学校に配属された。その時代は民族学校と漢族学校が別々だった。90 年代末に「两基达标」が行われ、各学校の施設や設備が改善されている。そこから数年後に学校統廃合が行われた。その当時は、各学校の状況が異なり、30~70 人の学生がいた。少ないところでは 10 数人の学生しかないところも出てきた。当時牧畜地域の学校に勤めていた教員を、統廃合後もそのまま任用しているので教育の質の面では大きな変化はないと思う。

**G-12-030** : すべての学校に補助金が行き届かない。補助金は漢族学校、モンゴル族学校の一部の重点学校に限られて分配されている。補助金の金額が多く、頻繁に支給される学校がある。例えば、シリンホト市モンゴル族中学校、第一小学、漢族学校では、第 2、9 小学校、第 6 中学校である。うちの学校は補助金が少ないので、体育館が建てられていない。

**G-13-031** : うちの幼稚園は公共施設を再利用しているので、幼稚園の施設としての基準に適合していない。今は、600 人の児童が在籍する。牧畜地域からの児童が多い。主に年輩の人が子どもの面倒を見ている。だから、幼稚園の近辺で借家し生活をしている。保育園

にはまだ、保育士や職員が足りない。

**G-14-034**：漢族の中でもモンゴル人と名乗り、モンゴル族として生きている人間も多い。そのメリットは、少数民族は就職しやすいからだ。進学にも優遇制度がある。少数民族を優先的に配慮するなどの優遇政策があるからである。

**G-15-014**：漢族学校に入学するモンゴル人の子どもが多くなっている。両親の一人が漢族なら子どもが漢族学校に行く傾向がある。漢族学校に入れば、小学校3年次から漢語で長い文章を書き、漢語だけで考えなければならない。その段階からモンゴル人の子どもはとも苦勞し、漢族の子どもと少数民族出身の子どもに勉強上、成績上の差異が生まれ始まる。漢族学校に数回授業見学に足を運んだことがある。モンゴル人の子どもが多くいることが実感できた。

**G-16-013**：2008年からうちの幼稚園の子どもが多くなってきた。政府により新しい幼稚園の建設が進められている。政府が幼稚園の様々な費用を免除するようになり、児童それぞれへの補助金が直接幼稚園側に支給されるようになったという。それが大きな原動力になった。民間の幼稚園もたくさんできてきている。政府も就学前の児童の教育を重視するようになった。生活補助金や就学前教育補助を家庭に出している。保育費と管理費で700元を給付している。そのうち、シリンゴル盟政府から40%を、西ウジムチン旗政府から60%を出している。今は、食費を自分で払うようになっている。

**G-17-013**：うちの保育園の受け入れ可能定員は300人だが、今は700人の児童が在籍している。だから、翌年度の入学申し込みが一年前から始まるようになった。

**G-18-009**：フフホト市ではモンゴル民族幼稚園の入園を申込み日より2日前から行列ができ、入園できない場合が多かった。教室などは整っているが、先生など人員が足りない状況である。一方、大学卒業して就職できない場合もある。ある意味で、モンゴル民族の教育やその環境が悪循環に陥っているといえる。モンゴル人になる条件がない。牧畜民を都市や市街に移住させるが、しかし、町に学校がない。施設設備が整っていないといえる。子どもたちには補助金が支給されている。だが、牧畜民の子どもでも学校に入れない牧畜民にはその補助金が届かない。

**G-19-009**：内モンゴルではモンゴル人として生まれたものでも民族学校に入れず、モンゴル人として育っていく条件がない。内モンゴルの状況は政策と社会が非常に歪んでいるといえる。

**G-20-027**：民族学校に対する補助金などを増やしたのでようやく安定してきた。今幼稚園の子どもは町に来ることができないので、ソムに幼稚園を新たにつくっている。旧学校校舎、旧ソム政府の施設を再利用してつくった。4つの免除、2つの補助制度もある。学費、書籍費、下宿費、宿題用のノートなど費用を免除し、貧困家庭の学生に勉強用品費用補助170元（毎月）、生活補助（小中学校）がなされている。高校や職業高校では、自治区政府が2000元（1学期）を免除、下宿費300元、生活補助700元、民族補助1000元（年間）



を給付するなど補助金が多い。また、高校を卒業して進学する学生も多くなり、90%の学生が大学に進学している。さらに、シリングル盟の政府から補助金を出して、残りの10%の学生は無料で、職業訓練などに行かせている。

**G-21-038**：フフホト市には、モンゴル人の子どもが増えている。モンゴル人の若い夫婦は二人目の子どもを産むようになってきている。モンゴル民族の幼稚園の数は少ないのが現状である。立地、環境、通学の容易さなどからうちの保育園に児童が集中してくる。将来的に当保育園の支園がつくられる予定である。いち早く実現できることを願っている。

**G-22-010**：民族学校の甲乙式学級それぞれを対象にしてモンゴル語科目の試験も異なる。

**G-23-011**：甲・乙学級双方ともモンゴル族学生を対象に募集を行っている。どの学校や学級を選択して進学入学するかは親や学生本人が決めている。

## **H. 母語教育**

**H-01-034**：牧畜地域の学校がなくなったことは、子どもたちは遊牧文化から隔離されたことを意味する。町にはモンゴル語の環境がない。90年に、バヤン氏（内モンゴル教育庁）という人が、民族学校で漢語による教育に変更するよう要請したことがあった。牧畜地域から来た子どもには無理だったので、成功しなかった。

**H-02-010**：民族教育の普及はモンゴル語と切っても切れない関係にある。個人の立場からすれば、モンゴル語で教育を受けるか他の言語で習うかは各々の選択による。少数民族に対する様々な政策はあるけれども無視されている場合が多い。モンゴル学校で漢語による教育を行うことは母語の軽視にあたる。

**H-03-034**：うちの学校には、400人以上の学生がいる。70人がシリンホト出身の子どもだ。シリンホト市は、80%の子どもたちが漢語による教育を受けている実態がある。牧畜地域では生活的、経済的余裕がない人たちの子どもがモンゴル語で教育を受ける。また、教養があると見なされ、安定した職に就いた人はおおよそ子どもを漢語で教育させる。知識層や富裕層の人たちが漢族学校に行かせる。

**H-04-034**：子どもたちはモンゴル語の学習に関心がなくなった。教科書の内容が複雑になった。詩や小説などの作者は内モンゴルの東部の人が多い。方言の差が生じ、理解しにくくなった。個人的見解だが、授業科目数が多いと感じられる。やはり、牧畜地域の学校は文化的基礎を身につけるべきだと思う。

**H-05-011**：90年代の小学校の教科書に、私の書いた文章が掲載されたことがある。教材として評判が良かった。遊牧文化関連の内容だった。しかし、今はそれが、内容が深刻、知らない単語が多いという理由で教科書から削除されている。やはり、子どもたちの文化的背景が大きく変わっていることの証だろう。

**H-06-038**：都市部出身の児童は家庭の言語使用状況が異なるので、モンゴル語ができる子

どもと、できない子どもの差が激しい。モンゴル語がまったく話せない子どもも保育園に入園してくることがある。入園の時点で1クラスに平均10人ぐらいの子どもはモンゴル語ができない状況である。1、2年かけてモンゴル語が話せるようになって卒園する子どももいる。やはり言語教育には環境が一番重要であることがわかる。

**H-07-009** : 90年代には、モンゴル人の親たちが子どもを中国の名門学校に進学させ、良い就職先を得ることを目的に、子どもを漢族学校に通わせていた。この数年間は、当時の子どもたちが大学に進学する年代となった。しかし、親の期待通りに区外（内モンゴル自治区以外）の名門大学に進学した学生は、親の希望とは裏腹にごくわずかだった。その要因は、漢語で学習を行ったとしても、中国における受験戦争はあまりにも厳しかったからである。この残酷な事実を耳にした近年のモンゴル人の親たちは、子どもをモンゴル民の幼稚園に通わせ始めている。フフホト市では、モンゴル民族幼稚園の開校日前夜から長蛇の列ができたことがあった。今でも入園ができなくて順番待ち状態である。

## I. 他の地域や少数民族について

**I-01-010** : チベット自治区や新疆ウイグル自治区では、自民族語以外の科目は漢語で行っている。中級都市には「チベット班」「ウイグル班」があり、漢語の成績が良いこれらの少数民族の子どもに対して試験を科さずに受け入れ、卒業後は政府から仕事を与えられる。その政策は、子どもの将来を考えれば親たちとしては大賛成である。内モンゴルのモンゴル人は状況が異なる。モンゴル学校では漢語の科目以外では漢語を使わない。内モンゴルでは、漢民族とモンゴル民族が同等レベルで話ができている実態を意味している。内モンゴルの状況は他の少数民族の状況に比べ、一歩進んでいるといえる。

**I-02-008** : 今回（2009）の新疆暴動以後、少数民族地域で働く官僚達に当地域民族の言語を知る必要があるとの指摘があり、広がっている。

**I-03-017** : オイラドの場合、私は小学校からモンゴル語教育を受けていた。トド文字での教育でした。師範学校に入ってホドム文字で教育された。中学校二年から漢語の拼音（*pinyin*）にふれ、師範学校に入って漢字を習っていた。1982年からトド文字を廃止し、96年にホドム文字が普及した。今は、新疆日報はトド文字で出版され、そのうち、2ページがホドム文字の内容である。学校ではトド文字を使っていないので若者はトド文字が読めなくなっている。年輩の人々はトド文字しか読めないので、トド文字の出版物もある。

**I-04-017** : ホボクサイル<sup>94</sup>の学校の状況だが、新疆でも内モンゴルで行われている学校統廃合同様、牧畜地域の学校を村中心部に集めている。漢族学校はそこに残された。うちの旗にはカザフ族（数千人）とモンゴル族（一万人以上）がいる。モンゴル族の学校だけが

<sup>94</sup> 新疆ウイグル自治区北部にあり、ホボクサイル・モンゴル自治県である。

移転されている。カザフの場合は、デモを行い、学校統廃合に反対した。「子どもの学費・生活費」「私たちの転住先の居住費」はどうかと政府に訴えたおかげで現状のまま残された。しかし、モンゴル族の場合は喜んで皆が町に行った。カザフ族とモンゴル族の価値観と認識に違いがあるといえる。

**I-05-017** : オイラド語の環境については、オイラド語が年輩の人が話すことばになっている。ラジオはモンゴル語で放送されている、新疆では60%の人口がトルゴード・モンゴル人だからトルゴード方言が標準方言として、56年に定められている。しかし、今は、チャハル方言で放送している。それが全国のモンゴル語の標準だからだという。しかし、チャハル・モンゴル人はそれほど多くない。だから、現実から離れたものになっている。多くの人が聞きなれないのが現状である。出版物、新聞はほとんどホドム文字だ。内モンゴルに多くの読者がいるからである。以前は、トド文字の教科書もあった。今は、内モンゴルの教科書を使うことになり、出版社の仕事がなくなったので、そのあげく従業員は失業することになった。

**I-06-017** : 新疆のトヴァについて。モンゴル人の勢力が強いところでは、モンゴル民族学校がなくなって漢化されていく。モンゴル人が体制でないところには、モンゴル人がそのまま残されている例がある。例えば、チャガン・ハバ<sup>95</sup>では、トヴァ人たちはモンゴル語で教育されている。この地域では、カザフ族が権力をもっている。その権力のもとでは何語で習っても構わず、自由選択によるという。彼らには自治権がない。彼らの民族的アイデンティティはモンゴル民族だが、今はトヴァへ代わっている。トヴァであることは、文化的にも経済的にもメリットが多いからだ。モンゴル族だと名乗っても人々から注目を集めることができない。①トヴァを唱えれば珍しく、観光客が多く来ることで経済的に潤うからだ。②トヴァ族は中国にほとんどおらず、消失の危機に瀕しているので、国からも援助をもらうことができる。それで生活が良くなる。しかし、結果的に彼らはモンゴル語で教育を受けるしかない状況だ。モンゴル語で教育を受け、大学に進学するしかない。彼らの使用言語は、主にチュルク語で、40%の語彙がモンゴル語である。家庭内ではトゥヴァ語を使う。高校まで学校に通えばモンゴル語が習得できるという。またカザフ語もできる。母語がトヴァ語、第二言語がモンゴル語、次にカザフ語、漢語となる。教育はモンゴル語で受ける。

**I-07-017** : チャガン・ハバには以前は小中学校があった。今は、小学校が残され、中学校が旗中心部に移転されている。変化として、裕福な家庭、例えば教師や幹部らは子どもを街の中心部に行かせ、漢語で教育を受けさせる。牧畜民、貧しい家庭、親がない子どもなどはモンゴル族学校に行くという。何語で教育を受けているかによって階級を見抜くことができる。

---

<sup>95</sup> チャガン・ハバは、新疆の北部のアルタイ地区のボーラチン県にある村。

**I-08-017:** ホボクサイルでジャンガルを「世界文化遺産(無形文化財)」に申請するという。それに登録される可能性がないと私は反論した。ジャンガルは、ことばの文化であり、口承伝承であるためことばの保存に関連する。モンゴル民族学校がなく、モンゴル語を失って、モンゴル語を話せる人がいないのから受け継ぐ人もいない状況である。だから申請しても無理だといったが、ある程度自覚しているけれど、とにかく登録してからにしようという。

**I-09-017:** ミンガンボラグという学校がある。そこは、ジャンガルの語り手を育成する学校である。「ジャンガルの揺籠」とも呼ばれている。また、「中国社会科学院のジャンガル調査基地」「ジャンガルの語り手育成中心」として知られていた。しかし、その学校は廃止され今はない。

**I-10-017:** 遊牧文化の背景で育った人々は外部からの影響を受けやすい特徴を持っている。農耕文化はそれに比べて頑固な部分がある。例えば、ある先生は新疆に移って 30 年経つが自分の方言をそのまま使い続けている。

**I-11-011:** 遼寧省では、モンゴル語を回復させるために努力している。モンゴル語で学習できる学校があるという。70 年代からモンゴル語で教育できるシステムができた。モンゴル民族学校には甲乙式学級がある。

**I-12-044:** 私は小学校から大学卒業まではモンゴル語で教育を受けた。モンゴル語で教育ができるシステムがあったからだ。大学を卒業して中学校の英語の教師になった。私が小学校のときは、1 クラス 20 人から 30 人の学級だった。高校になると 1 クラス 5、6 人となった。新疆のモンゴル人の人口は少ない上、様々な民族も混在するので、総合的にみてモンゴル民族は新疆の中で分散している。学校に学生が少なくて、学生より教員の数が多くなった例もある。教員たちはモンゴル民族学校に学生を集めるために、モンゴル族の家庭を回り、どうしても子どもたちをモンゴル民族学校でモンゴル語教育をさせるように薦め続けた。しかし、効果はなく、2000 年以後は学校統廃合が行われ、モンゴル民族の学校がなくなった。モンゴル人の親たちは、モンゴル語で教育を受けても、子どもが仕事を見つけないので、モンゴル語で教育を受けさせないという。今はモンゴル語で教育を受けようとしても民族学校がないのである。皆漢族学校に統合された。ウイグル族も、カザフ族もそうだ。モンゴル民族学校の教員は、「早退」させる、漢族学校に転勤させるなどして拡散させられた。

**I-13-017:** 新疆のバヤンゴル<sup>96</sup>のモンゴルテレビ放送を拡張する予定だ。内モンゴルのテレビ放送はモンゴル国で見られる。しかし、モンゴル国の西部では、内モンゴルの方言が通じないことがあるという。だから、オイラド方言で放送すればわかるという。そうすれば、中国の「歌」をモンゴル語、モンゴル語の方言を通じて、モンゴル国全土に放送でき

---

<sup>96</sup> 新疆の東南部に位置する、バヤンゴルモンゴル自治州である。

るといふねらいがある。

#### **J. 法律・政策に関連から**

**J-01-010** : 内モンゴルでは学費などが全額免除されており、小学校から大学までモンゴル語で教育を受けられる制度があるのが有意義なことである。また、内モンゴルから全国の40あまりの大学に進学することが可能だ。

**J-02-010** : 「モンゴル語文字使用条例」「民族教育条例」が実施され、法律に基づき教育や民族語文字使用が保障されている。

**J-03-011** : 「モンゴル語文字使用条例」は決議実行されたが、細則がないので形式上のものではないかと考えられる。本来なら条例とセットで発布されるべきだが、どのように実行していくかという計画はまだできていない。その点では、今の法律の欠点だと思う。

**J-04-039** : 中国の教育は、外国のように一人だけの子どものためにも学校をつくってくれるほど民主的ではない。学校建設運営はまるで工場のような、広く、大きく、集合的主体である。それは、義務教育法を無視していることでもある。

**J-05-039** : 今の教育の欠点は、人格を育てる認識がないところにある。よく勉強して、いい学校に行く。地区外の名門大学に入る。それが大きな目的である。

**J-06-020** : 学校教育の現場では、学校側だけに依存してはいけない。やはり、社会と保護者の協力が必要である。しかし、全般的にみれば形式的に行われている場合が多い。うちの学校が毎学期の始めに保護者を集めて会議を開いている。クラス単位で2、3回も行っている場合もある。そのような取り組みによって保護者らの学校の実態、状況、取り組みについての認識を高めてもらう。

**J-07-043** : 牧畜民は飴と鞭の政策で町に移動させられてきた。町に来ていろいろと不自由を感じている。せつかく町に引っ越してきたので、孫を幼稚園に行かせようと入園申し込みに来たが、残念なことに入園を断られた。

#### **K. 教育全般から**

**K-01-004** : 教科書の変化といえば、2009年から高校の授業科目に「自然」と「人間」の調和や、「心理学」の内容が増えた。現在は心理学の授業はとても重要視されている。最近の子どもには心理的問題が多発し、様々な現象が起きている。不登校、盗難、犯罪、音信不通になる(家出)など。いわゆる心理的指導が必要になっている。この種の分野では内モンゴルの教育は遅れている。それにしてもその分野において指導できる人材、教員など

はいない。今まではほとんど「子ども支援団<sup>97</sup>」が担っていた。児童保護団体は各機関にメンバーを配属させている。当団体は 25 年の歴史がある。

**K-02-004** : 教師に対する「表彰と懲戒」が行われている。2009 年 9 月に 80 万人民元を投資し全旗の教員を表彰した。それは統一試験科目を担当する教員だけが対象だった。

**K-03-004** : 学生の進学率は上がっている。家庭生活が貧困の場合は政府からの援助を受けることができる。生活困窮学生のために中央政府が特別な学校を包頭市につくった。特徴として、4 年間のすべての費用が無料で、卒業後に政府から仕事が割り当てられ、大学卒業後の進学も可能だ。西ウジムチンから 22 人の学生がその基準に適合し、手続きを経て進学したが、その中の 8 人が戻ってきた。学校の状況が気に入らなかったという。

**K-04-028** : 私の経験からいえば、牧畜民の子どもたちの生活環境がよくなっている。昔は、牧畜民は子どもを学校に通わせるために、学校近辺の倉庫を借りて生活していた。最近ではマンションをいくつかの家族で借りて、一家族が一つの間取りを使っている。小学校の低学年の子どもは学校の寮で生活できない。自己管理できないのが現状である。

**K-05-032** : 子どもの現状については、①牧畜生活から離れ、自身の文化から隔離された。②子どもに牧畜の仕事をやらせるには中学校まで行かせばいい。高校まで行けば町と牧畜地域の間の人間になる。牧畜の仕事も出来なくなる。やはり、人間の性質に変化が起きている。

**K-06-033** : 学校の教育方法などに進歩がない。様々な学習や勉強の機会がある。しかし、理論的な内容ばかりで、実践的なものが足りない。

**K-07-017** : 昔は、大学生たちは学生生活の中で集団行動を取っていた。今の学生は、皆一人っ子なので、一人で行動するようになっている。一人でレストランやバーなどに入る。仲間作りという意識がなくなっている。今のモンゴル人の若者は孤独や精神的異常などに陥っている。

**K-08-011** : 都市部の民族学校の学生は、80 年代には 1 クラス 11 人、90 年代に 20 人、現在は教室に入りきれないほど多い。①人々の認識が変わってきた。②政策として学費を無料にしたことがその要因だ。内モンゴルのトップであるバートル氏を評価できる。民族のためになることをした。

**K-09-042** : 従来はキリル文字のクラスは、北京大学や大連大学に設けられていた。内モンゴル大学では数回にわたりキリル文字の学習を大学で取り入れている。しかし、継続的に開講されていなかった。現在は、国家教育部からの許可があり、毎年学生募集することになった。2011 年から始まり、すでに 3 年間続いている。毎年 30 人の学生が入学してくる。今はモンゴル人学生のみを受け入れている。また、モンゴル国での 1 年間の実習もあり、今年は 25 人の学生がモンゴルに行った。モンゴル国からも専門の先生を招いて、講義し

---

<sup>97</sup> 「子ども支援団」は、「qoiči üy\_e-ben qalamjilaqu bölküm」とモンゴル語で呼ぶ。メンバーはほとんどが定年退職した人たちからなる。

てもらっている。キリル文字の読み書きはもちろん、文学作品の講読、研究などの専門的な授業がある。また、雑誌の編集者などにも積極的に参加してもらい、読書、翻訳、転写などの技能が磨かれている。留学してきた学生もとても満足して帰っている。これらの学生は就職には苦労しないと思う。

## **L. 文化的変容など**

**L-01-015** : 家畜の冬季出産はありえない。冬の寒さは、羊やヤギの生まれたばかりの子どもが凍死するほどで、誰もそれを避けていた。家畜の冬季出産を試みて成功した例はなかった。

**L-02-041** : 家畜の冬季出産を行えば、春になって仕事が集中することを避けられる。子羊に早い時期から飼料が与えられるため、売り出すときは高い値段で売れる。家畜の頭数を早期に減らせば、牧草地の保護につながり、経済的支出も減る。政府から補助金を得るためには、①子羊の体重が 25kg 以上。②対象になる時期は毎年の 6 月 15 日から 7 月 15 日の間。③補助金額は 1kg あたり最高 5.00 元。という条件がある。

**L-03-041** : うちは家畜が比較的多いので、他人の牧草地を借りて転々と移動を繰り返してきた。自分の持っている牧草地は一人分しかない<sup>98</sup>。昨年までは、自分の牧草地と他人から借りた牧草地の 2 箇所の間を行き来していた。夏秋には借入地で、冬春には所有地で過ごしていた。2013 年 6 月からは新しく広い牧草地を 5 年契約で借りたのでしばらくはここで生活する。自分のところの草を刈って売れば現金収入になるため、借りた牧草地の代金に当てるつもりでいる。今の状況では牧畜の仕事が忙しく、他の仕事はできないので、町に移住してもまともな生活をできる確証がない状況である。これから政府からの牧草地利用に関する政策がどう変わるかはわからないが、しばらくは牧畜をやり続ける。だから町に行って子どもの面倒も見切れない。上の子を 6 歳の時から町に行かせて、去年（2012 年 9 月）から小学校予備クラスに入れた。町にいる親戚にお願いして預けていた。子どもはまだ小さいので、親から離れて生活するのは大変だった。子どもにはつらい思いをさせたと思う。彼はもう町の生活が二年目で、小学校一年生になり、学校の寮に住んでいる。金曜日の夕方学校が終われば、金土日の三日間は町にある親戚の家で過ごさせてもらっている。週末になれば、学校にはほとんど人がいなくなるので、子どもが寂しいし、親としても不安。これが現状である。一方では、家にいる子は、幼稚園に行かせる年齢だが、どうするかはまだ迷っている。昼間は大人がみな外で家畜の世話など仕事なので、彼は大人たちの周りで遊んだり、家畜小屋で休んだりしている。早く幼稚園にも行かせたいが、

---

<sup>98</sup> 牧草地を個人に分配するとき地域によって割り与えられる広さが違う。当時のその地域の持っている土地の広さと当地域の住民の数によって、一人に与えられる牧草地の広さが異なる。当該地域では一人あたり千畝である。

また他人に頼るのかと思うと複雑な気持ちだ

**L-04-020** : 伝統文化の変化については、お正月には、モンゴル人が地域にある各家を回って年輩の方や長老に挨拶をする儀式があった。都会の人々にはその習慣がなくなった。子どもたちはその習慣を知らない。

**L-05-020** : エレンホト市には内モンゴル全土からの人々が移住してきて生活をしている。その土地それぞれの習慣がある。その中で、当地域の習慣が変わって、とても変なものになっている。この地域では、結婚式に「新郎の帽子を奪う」習慣がある。それは、新郎が新婦を迎えに行ったとき、新婦側の若者たちが新郎の帽子を奪うという風習だ。それが変わって、新郎のすべてのものを奪うことになり、新郎が新婦を迎えに裸足でいった。そこまではよかった。それで、新婦を迎えて新郎のところに来たら、新婦の衣裳を奪い合い。とても見苦しいものになったことがある。自らの文化を正しく理解し、正しく伝えていくということはとても重要である。

**L-06-034** : 一人っ子政策に則って、漢族と同様にモンゴル人も家庭で皆一人っ子限られるようになった。これがモンゴル族の人口減少の要因である。保護者たちは自分の生活や将来を考えている。モンゴル族の人口は確実に減少傾向にある。うちの学校は施設などがきれいに整備されたが、いつこの学校が漢族の学校になるかを思えば心配でならない。漢族の人口が多くなっているからしかたがないことである。

**L-07-039** : 牧畜生活において、家畜が生まれしてきた子どもの放棄をすることがある。難産、体調不良などが要因と見ている。そのときは、家畜の母親に馬頭琴を弾いて聞かせる、歌を聞かせるなど手段をとる。つまり、まず、心を安定させる。次に、家畜の母親の匂いを子どもにつける。子どもに子犬を近づける。親子が仲良くない状況でも、敵が出てくる時には親にとって子が味方になる。そのような心理作用が日常で用いられる。

**L-08-018** : 昨年（2011年）から政府から牧畜民への補助金が多くおりるようになった。牧草地の補助金は一畝あたり 7.50 元支給される。その他にも補助金もたくさん支給されている。

**L-09-020** : 今の若者は肉を食べるのが大好きで、家畜を飼うのが大嫌いだ。

**L-10-034** : 漢族であるにもかかわらずモンゴル族と名乗っている人が多い。①就職に便利。②進学に有利。③公的補助を受ける場面で有利。④少数民族が優先される意識が強い。⑤昇進し易い。以上のようなメリットがあるからである。



### 資料 3 : モンゴル語・文字使用に関する重要な出来事<sup>99</sup>

#### 1947 年

- 4 月 23 日 : オランホト市に内モンゴルにおける人民代表会が開かれ、「内モンゴル自治政府実行綱領」と「内モンゴル自治政府暫定組織概要」に関する討論が確定した。
- 5 月 1 日 : 内モンゴル自治区が創立された。中国領内において最初に創立された民族自治区である。同時に、自治政府が教育庁を設置し、民族教育が実行された。チチハル市に内モンゴルの軍事学校がつくられ、10 月にモンゴル語文研究係がつくられた。
- 6 月 : 内モンゴル自治区のモンゴル語文字の各分野にわたる教科書編集組がつくられ、教育庁が指導し、「モンゴル語文の小学校用教科書を翻訳編集所」とした。これは、内モンゴルで最初につくられた教科書を編集作成する組織である。

#### 1948 年

- 1 月 1 日 : 「内モンゴルの新聞社」がオランホト市につくられ、新聞が創刊した。1952 年に内モンゴルの党行政とともにフフホト市に移動された。
- 4 月 : 内モンゴルの新聞社に図書組がつくられた。
- 8 月 3 日 : 中国共産党中央委員会東北局の書記は内モンゴルの幹部らの会合に「文化建設を促進し、民衆の学校作りと運営することを促し、特に中学校を確実に運営する。モンゴル語と文字を広範囲に使う。モンゴル語による図書雑誌の出版をする。民族教育の軽視することを断乎として反対する」と指示をした。

#### 1949 年

- 3 月 10~17 日 : 内モンゴル自治区主催のオランホト市で教育関連の会合が開かれた。
- 4 月 4 日 : 内モンゴル自治区政府から「国家の民衆教育に対する指示」が出された。北京大学にモンゴル語専攻の学科がつくられた。中国で最も早くつくられたモンゴル国の言語文字や文化を育成し、研究することを基本にした専門学科である。

#### 1950 年

- 8 月 1 日 : 「新疆日報」がモンゴル語版の刊行を始めた。  
「内モンゴル自治区の小学校教育の臨時実行法案」が制定された。

#### 1951 年

- 9 月 20~28 日 : 全国の民族教育に関する初回会議が開かれ、「小中学校の教育を必ず民族

---

<sup>99</sup> Tüminjaryal 2008:290-349 より抜粋。

語と文字で教える」と定めた。

**10月12日**：中央政府から少数民族の言語と文字使用を統一の基準で指導するため教育委員会に「少数民族の言語文字研究組」をつくった。

内モンゴル人民出版社が創設され、著書編集部と教科書編著部がつけられた。

### 1952年

**5月5日**：オランホト市に内モンゴル師範学校が創設され、モンゴル語・文学の専攻がつけられた。これは新中国建国以後初の少数民族の師範学校である。

**8月8日**：「中華人民共和国民族区域自治実行要領の概要」が決議された。

### 1953年

**5月16~30日**：中国共産党中央委員会の内モンゴルと綏遠支局で「内モンゴルと綏遠のモンゴル語文字使用に関する会議」が開催された。

**7月1日**：中国共産党中央委員会の内モンゴル綏遠支局から「民族言語文字を軽視することを阻止し、民族言語文字の使用を促進させる指示」が出された。

**7月**：中国共産党中央委員会の内モンゴル綏遠支局の許可のもと「モンゴル語文字研究会」がつけられた。**55年**に当会をベースに「内モンゴルの文字改革組」がつけられた。**57年**に「モンゴル語文字使用委員会」に改称された。

**8月17~26日**：内モンゴルの教育部により全自治区の牧畜地域の小学校の教育会議が開催され、牧畜地域における教育の目的、責務、方針が決められた。

「モンゴル語の学術語組」がつけられ、「モンゴル語文字研究会」と統合された。**66年**に「モンゴル語の学術語組」は廃止された。

### 1954年

**3月**：内モンゴル自治区政府事務局に翻訳所がつけられた。

**5月1日**：内モンゴル放送局でモンゴル語による番組が放送されるようになった。

**7月**：内モンゴルのモンゴル語文字研究会が季刊誌『モンゴル語文字』の刊行を始めた。

**11月22日**：内モンゴルにおける教育に関する初の会議がフフホト市で開催され、代表たちにより教育に関する5ヶ年計画が決定された。民族の言語文字の教育を重視し、教員育成について、小中学校をモンゴル族と漢族を分けてつくる方針が示され、内モンゴル大学の創設に関する意見交換が行われた。自治区の副主席・教育部の部長のハーフンガが「内モンゴルの民族教育の方針と任務」と題した演説をした。

### 1955年

**1月**：『ユニル・チェチェグ』雑誌が『内モンゴル文学』という誌名で出版を開始した。当

雑誌は内モンゴル初のモンゴル文学の雑誌である。

- 5月23日**：内モンゴル教育庁から民族教育を促進させるため「小中学校のモンゴル族、漢族を分けてそれぞれに学校やクラスを設置する規定の決定」が出された。
- 7月22日**：内モンゴル人民委員から「モンゴル新文字を普及に関する決定」が出され、同時に「モンゴル文字改革組」がつくられ、全自治区にモンゴル新文字普及に関する様々な活動が広がった。
- 12月6~15日**：中国科学院の言語研究所と国家民族庶務所の共催で、全国の民族言語文字に関する学会が北京で開かれた。160人あまりが参加し、民族文字の制定、改良、改革に関する意見交換が行われ、民族言語文字に関する初段階の計画が提出された。

### 1956年

- 2月20~23日**：内モンゴルの教育庁により全自治区の牧畜地域の教育関連の報告会が開かれた。
- 5月22~29日**：中国科学院の民族言語研究所と内モンゴルのモンゴル文字改革組が共催したモンゴル諸言語学術研究会がフフホト市で行われた。当会議に198人が参加し、言語文字の政策を実行促進し、モンゴル文字を改革し、モンゴル新文字を普及させ、モンゴル諸語に含まれる他の言語に関する調査を行い、文字を創出することに関して座談会が行われた。
- 6月4~17日**：教育部と国家民族庶務委員会の共催の第二回民族教育会が北京で開かれ、建国以来の民族教育を総括し、民族教育の今後の方針と責務について議決された。さらに1956年から1967年間の全国の少数民族教育計画について座談会が行われた。
- 10月19日**：内モンゴル自治区の人民委員会から「内モンゴル自治区のモンゴル語文字使用と学習を奨励に関する臨時実行法案の決定」が通達された。

### 1958年

- 3月19日**：内モンゴル自治区人民委員会の第31回全体会議が開かれ、「新モンゴル文字採用を停止し、モンゴル文字を継続使用する決定」を通知した。
- 3月28日~4月16日**：中国科学院と中央民族庶務委員会が共催した全国の民族語文字に関する第二回学会が北京で開催された。
- 5月5日**：モンゴル語文字使用委員会の初回会議が開催され、中央民族庶務委員会の民族語文字に関する第二回学会の内容が伝達され、モンゴル語術語を定め、統一させることを提起し、モンゴル語文字使用の質と量を高めることに関する話し合いが行われた。
- 11月3日**：新疆人民放送局でモンゴル語の放送が開始された。

## 1959年

1月3~14日：内モンゴル自治区の党委員会がモンゴル語文字使用に関する第二回会議をフフホト市で開催した。108人が参加した。

## 1960年

7月1日：新疆のボルタラのモンゴル民族自治州委員会の『ボルタラ新聞』が創刊された。

## 1961年

1月：新疆のバインゴルのモンゴル民族自治州の委員会の『バインゴル新聞』が創刊された。

## 1962年

1月10~23日：内モンゴル自治区の共産党院により内モンゴル自治区の民族の言語文字、民族教育に関する会議がフフホト市で開催された。内モンゴルのモンゴル語文字使用に関する第三回会議で、100人あまりが参加した。

8月4日：内モンゴル自治区人民委員会によるモンゴル語文字を積極的に学習・使用した個人や団体の表彰式が行われ、14の機関と134人の個人が表彰された。

8月29日：内モンゴル人民委員会が「内モンゴル自治区のモンゴル語文字使用に臨時実行条例」（690号公文書）を通達し実行した。

12月：内モンゴル自治区の民族業務に関する会議が開かれ、全自治区に渡る民族業務を調査し、民族の特徴と地域特性の再分析が行われた。

## 1964年

5月24日：内モンゴルのモンゴル語文字の学術研究会がフフホト市で行われ、標準語の発音システムなどに関する研究と談話が行われた。

## 1969年

7月5日：中国共産党中央委員会がフルンボイル盟、ジリム盟、ジョーオド盟、バインノール盟の一部がそれぞれ黒龍江省、吉林省、遼寧省、寧夏、甘肅省に組み入れた。

## 1973年

7月6日：国務院の教育科学所から内モンゴル側が依頼を受け、黒龍江省、吉林省、遼寧省、寧夏、甘肅省、青海省、新疆、内モンゴルなど八の省・自治区の小学校の教科書資料に関する座談会をフフホト市で行った。

11月16日：内モンゴル自治区の革命委員会がウランチャブ盟のダルハンモーミンガン旗

で民族教育の会議を開いた。

#### 1974年

1月9日：国務院が〔1974〕3号内部資料を通達し、内モンゴル自治区革命委員会の「内モンゴル自治区革命委員会のモンゴル語文字使用の強化に関する意見」と「指導組の任務、権限」という2編の使用を承諾したことに関し公的に通達された。

1月18日：国務院の科学教育工作組が〔75〕13号内部通知を出し、八省・自治区の小中学校のモンゴル語教科書に関する意見交換会の報告通知を伝達し、モンゴル語教材の共作組の創立を許可した。

10月1日：寧夏の人民放送局でモンゴル語放送が開始された。

#### 1975年

1月17日：第四期の全国人民代表大会の第一次会議により「中華人民共和国の憲法」の第四項「すべての民族が自分の民族の言語文字を使用する権限がある」と決議された。

5月6~13日：内モンゴル自治区革命委員会により八省・自治区のモンゴル語文字の共同協力の初回会議がフフホト市で開催され、会議では八省・自治区のモンゴル語文字の共同協力組（以下八協）と事務室をつくった。会議では「モンゴル語文字共同協力組の規定」「モンゴル語文字協力の計画項目」「モンゴル語文字の実行意見」などについて議決された。

12月10~26日：モンゴル語文字の業務に関する初回会議がフフホト市で開かれ、一部の用語の統一、外国名や地名の表記方法が決定された。

#### 1976年

2月15日：八省・自治区のモンゴル著書出版の共同協力会議がフフホト市で開かれた。

10月13~20日：八省・自治区のモンゴル語教材の共同協力会議が吉林省の青春市で開かれた。

#### 1977年

11月7日：国務院が〔1977〕138号内部公文書を通達し、八省・自治区のモンゴル語文字の共同協力組の設置と、八省・自治区のモンゴル語文字使用についての共同協力計画の概要などの資料文章を許可していることを表明した。

#### 1978年

1月20日：内モンゴル自治区革命委員会のモンゴル語文字実行室がモンゴル語文字学術共済会をフフホト市で開催し、中国のモンゴル語の方言の区別、標準語の選定に関して

検討を行った。

- 6月1日：八省・自治区のモンゴル語教材の配布に関する座談会がフフホト市で行われた。
- 6月：内モンゴル自治区のモンゴル語文字実行委員会が組織し、シリングル盟ショローン・フフ・ホショーのジャガスタイ・ソムにチャハル方言の調査を行った。
- 11月9日：マルクス、レーニン、毛沢東の著作を少数民族語に翻訳する中央の翻訳局が北京市でつくられた。

#### 1979年

- 5月30日：共産党中央委員会、国務院の規定により、1969年に他の省や自治区に編入された内モンゴル自治区の領土が返還された。
- 9月21~10月4日：新疆ウイグル自治区の首府ウルムチ市で、八協のモンゴル語文字業務工作の第三回会議が開催された。会議では共同工作に関する意見交換が行われ、中国におけるモンゴル語の基準方言、標準方言、モンゴル語のラテン文字転写の試用に関する計画を議決した。中国のモンゴル語文字研究協会をつくった。

#### 1980年

- 3月31日：内モンゴル自治区人民政府が「モンゴル語の基礎方言、標準語の決定とモンゴル語のラテン表記使用に関する報告」を〔1980〕80号内部資料とし通達した。
- 4月：国家教育部により少数民族の文字の教材に関する座談会が北京市で開かれた。
- 10月9日：国家教育部と国家民族庶務委員会が「民族教育を強化する意見」という資料を配布し、少数民族の教育に関する調整、改革、強化を行う方針の実行に関する問題を議論した。

#### 1981年

- 10月：新疆ウイグル自治区の第三回モンゴル語文字の会議で、1982年から1990年の間、新疆のモンゴル人にモンゴル文字を普及させることが決定された。

#### 1984年

- 5月31日：第六期全国人民代表大会の第二次会議により「中華人民共和国民族区域自治法」が決議された。

#### 1985年

- 5月27日：国務院から「教育体制改革の決定」が公表され、民族教育の体制改革についての総方針が定められた。
- 8月5~12日：全国で初めての民族語文字翻訳研究の学術会議がウルムチ市で開かれ

## 1987年

8月1日：内モンゴルテレビ局でモンゴル語の番組が毎日放送されるようになった。

## 1988年

7月5~12日：八協の第6回会議が新疆（ウルムチ市とバヤンゴルモンゴル自治州）で行われた。

8月10日：内モンゴル自治区モンゴル語文字使用委員会、内モンゴル自治区労働者職員局が〔1988〕2号公文書、「幹部調達、職員募集、技術関連学校の学生募集時の民族語文字に関する共産党からの政策に基づき実行する通知」を通達した。

## 1990年

12月12日：内モンゴル自治区直轄機関が1990年の内モンゴル語文字を学習・使用をした優秀な個人や団体を対象とする表彰式がフフホト市で開催された。19の団体と164人の個人が表彰された。

## 1991年

3月4日：青海省の第7期人民代表常務院19回会議により「海西のモンゴル族チベット族自治州のモンゴル語チベット語文字使用条例」が決議された。

12月12日：100万文字を有する「現代モンゴル語文字データ庫」が自治区レベルの鑑定により認定された。

## 1992年

3月15~18日：全国第4回民族教育の会議において、民族教育の改革と発展についての6つの基本原則と3つの義務が明らかにされた。

7月26日：八協の第8回会議が青海省（西寧市と海西のモンゴル・チベット民族自治州）で開かれた。

## 1993年

1月1日：「内モンゴル自治区の郵便通信機関におけるモンゴル語文字使用の暫定実行規則」が施行された。

7月21日：内モンゴル自治区におけるモンゴル語術語作成組により接辞法方で術語をつくることに関する学術弁論会がフフホト市で開かれた。

8月11日：内モンゴル自治区におけるモンゴル語術語作成組により借用語法で術語をつくることに関する学術弁論会がフフホト市で開かれた。

## 1994年

9月26~28日：内モンゴル自治区の都市部におけるモンゴル語文字使用に関する地域会議がボグト市で開かれた。

## 1995年

9月25日：内モンゴル直轄機関が1995年の内モンゴル語文字の学習・使用をした優秀な個人や団体の表彰式がフフホト市で開催された。

## 1996年

4月16日：内モンゴル自治区人民政府の事務庁が「内モンゴル自治区の公的表示においてモンゴル語文字と漢語文字を併用する方法」として〔1996〕32号公文書を通達した。

7月19日：八協の第9回会議が甘粛省の蘭州市で開かれた。

8月：全国の通信技術を標準化する委員会と国家民族庶務委員会の言語文字管理事務による第3回モンゴル文字コードに関する交際会議が北京市で開かれた。

## 1997年

1月1日：内モンゴルのラジオ放送局とテレビ局のモンゴル語漢語放送が衛星放送になり、毎日14時間のモンゴル語の放送が近隣の53カ国で放送されるようになった。

## 1998年

9月16日：八協の第10回会議が河北省の承德市で開かれた。

9月：「八の省自治区のモンゴルテレビ放送の協力作成会」が内モンゴルの東勝市にて創設された。

## 2000年

8月22~25日：八協組首長らの第6回会議と第11回の委員会がフルンボイル盟のハイラル市で開催された。会議関係機関ら60人あまりが参加した。

10月12~14日：内モンゴル自治区の民族庶務委員とモンゴル語文字使用委員により全自治区の市や鎮における公的表示におけるモンゴル文字・漢字の同時使用に関する会議が東勝市で開催された。

モンゴル語の情報通信を改善すべく、「モンゴル文字コードの国際基準」を中国とモンゴル国両国の関連機関により国際基準機構として認定された。

## 2001年

8月21~24日：21世紀の八省・自治区モンゴル語文字の発展に関する研究会や当協カグ



ループの第9回会合が遼寧省阜新市のモンゴル族自治郷で開催された。

**12月20日**：内モンゴル自治区政府が自治区全土のモンゴル語文字学習・使用者を対象とする表彰式がフフホト市で行われ、50の機関と248人の個人が表彰された。

内モンゴル自治区人民政府が「モンゴル語文字学習・使用者の受賞基準に関する内モンゴル自治区人民政府通知」を内モンゴル政府配布[2001]第99号通知通として配布した。

## 2002年

**1月16~17日**：八協事業グループ室、中国モンゴル文学研究協会、内モンゴル民族庶務委員会、内モンゴル文芸者連盟、内モンゴル日報社、内モンゴルラジオ放送局、内モンゴルテレビ局、内モンゴル文化庁などの機構団体共催の全国で初めての「ムンク・テングル」杯モンゴル詩のコンテストが行われた。

**1月23日**：共産党内モンゴル委員と政府により内モンゴル自治区の党や政府機構のモンゴル語翻訳に関する指導グループが結成された。

**4月12~13日**：内モンゴル自治区の教育庁による自治区全土における民族の基礎教育の研究討論会がフフホト市で行われた。

**9月26日**：中国のモンゴル語雑誌の研究会第16回会議が内モンゴルのシリンホト市で開始され、29日のエレンホト市にて閉幕された。

**12月4~3日**：八協組の第12回会議が遼寧省の瀋陽市で開催された。

## 2003年

**8月14~16日**：八省・自治区モンゴル語用語の使用会議と中国のモンゴル語文字の研究協会の第10回会合がフフホト市で行われた。

## 2004年

**10月21~23日**：八協組の首長らによる第7回会議がフフホト市で行われた。

**11月24日**：内モンゴル自治区第10期人民代表大会常務委員会第12回会により「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」が決議された。

**12月8日**：内モンゴル自治区人民政府の新報室主催「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」を発表する新聞公表会が開催された。

## 2005年

**1月6日**：内モンゴル自治区直轄の関連機構がモンゴル語文字学習・使用者を対象にした表彰式が内モンゴル政府の儀式ホールで行われ、20の機関と80人の個人が表彰された。

**5月1日**：フフホト市にある新華広場で「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」公

開する式典が行われた。

**6月 25~26日**：内モンゴル自治区共産党や政府機関のモンゴル語翻訳などについての会合がフフホト市で行われた。自治区全土の 12 の市や盟のモンゴル語翻訳者らの代表たち、民族委員の責任者、自治区管轄の関係機関の責任者ら 160 人あまりが参加した。

**7月 13~16日**：八協組樹立 30 周年の記念式典や同グループの第 13 次委員会が新疆ウイグル自治区のウルムチ市で開催された。

**8月 26~28日**：中国のモンゴル語文字の研究協会と中国の少数民族の二言語教育研究協会によるモンゴル語漢語の二言語研究及び教育に関する国際会議が北京市で開催された。

**11月 18日**：内モンゴル教育出版社による内モンゴルの小中学校モンゴル語と漢語の教材研究協会成立の祝典が開催された。

## 2006 年

**10月 14日~20日**：中国のモンゴル語雑誌研究会第 20 回会議が四川省成都市で行われた。

## 2007 年

**2月 8日**：内モンゴル自治区のモンゴル語文字学習・使用者を対象とする表彰式が内モンゴル政府式典ホールで行われ、8 の機関と 186 人の個人が表彰された。

## 資料 4 : 「内モンゴル自治区モンゴル語文字使用条例」

(2004年11月26日内モンゴル自治区第10期人民代表大会常務委員会

第12回会議により可決された)

### 第一章 総則

#### 第一条

モンゴル語文字の規範化、標準化と学習使用の制度化及びモンゴル語文字の繁栄発展を促進し、モンゴル語文字が社会生活の中で十分な役割を発揮するように、「中華人民共和国憲法」「中華人民共和国民族区域自治法」および国家の関連法律に基づき自治区の実態に応じて本条例を制定する。

#### 第二条

- 1 モンゴル語文字は当自治区の通用言語文字であり、自治権を行使する重要な道具である。
- 2 自治区における各級公的機関が業務執行する際に、モンゴル語、漢語の二種類の言語と文字を併用し、モンゴル語文字を主とする。

#### 第三条

各級政府機関はモンゴル語の標準語とモンゴル語の統一の文字を普及させる。当自治区はショローン・フフ・ホショーを代表としてチャハル方言をモンゴル語の標準語とする。

#### 第四条

各級政府機関はモンゴル民族の人々のモンゴル語文字の学習、使用、研究を發展させる権利を保障し、各民族のモンゴル語文字の学習、使用、研究を發展させることを奨励する。

#### 第五条

旗や県級以上の政府機関はモンゴル語文字使用に必要な経費を財政予算に計上する。

#### 第六条

- 1 旗や県級以上の政府機関のモンゴル語文字関連の機構は、当行政区域内のモンゴル語文字政策の計画、指導、監督を担う。
- 2 旗や県級以上の政府関係機構は各自の責任でモンゴル語文字使用に協力し、それを実行する。

#### 第七条

各級政府機関はモンゴル語文字の学習、使用に優れた成績を収めた個人や団体に奨励金を与える。

## 第二章 学習と教育

### 第八条

各級政府機関はモンゴル語を教授する各級各種教育を優先的に発展させ、それを主に援助し、モンゴル語と漢語の二種類の言語と文字を兼用できる人材を育成する。

### 第九条

当自治区政府はモンゴル語による教育への投資を年々増加する。

### 第十条

各級政府機関はモンゴル語教育学校に優遇政策を実施し、資金補助を行う。モンゴル語学習学生の学費、雑費、教材費を軽減または免除する。同時に、補助金、奨学金制度を実施し、貧困家庭の学生の就学を保障する。

### 第十一条

漢語教育モンゴル族小中学校にモンゴル語の授業科目を設置する。

### 第十二条

モンゴル族の人口が多い盟市はモンゴル語教育中等職業技術学校を創設する。

### 第十三条

各種の高級学校にモンゴル語教育の可能な専門課程を徐々に拡大し、増設する。同時に予備クラスの学生を増やし、主にモンゴル語学習学生を募集する。計画的に学生定員数を増加する。

### 第十四条

各級人民政府は特別政策を制定し、モンゴル語教育を行う高級中級専門学校卒業生の就職の道を広げ、国家機関、団体、企業などはモンゴル語教育高級中級専門学校卒業生を採用する。

### 第十五条

各級人民政府はモンゴル人が集居する地域の牧民、農民に対してモンゴル語による技術育成や訓練をする。同時にその設備を整える。

## 第三章 使用と管理

### 第十六条

各級政府機関、団体は公文書にモンゴル語と漢語の二種類の文字を使用する。内モンゴル自治区に駐在する国家機関、団体は上記の規定に則り業務を行う。

### 第十七条

各級政府機関、団体や企業はモンゴル語、漢語の二種類の言語と文字を使用し、当自治区規定の基準に当てはまる職員にモンゴル語文字使用の手当を与える。具体的な規則は当自治区が制定する。

## 第十八条

- 1 各級政府機関、団体や企業はモンゴル語の翻訳機構と人事棟をつくり、人材を配置する。
- 2 各級政府機関、団体や企業のモンゴル語翻訳の人員はモンゴル語翻訳部署の手当を受ける。
- 3 各級政府機関、団体や企業のモンゴル語翻訳の職に従事する人員は専門技術の資格を取得することにより、他の技術職務の職員と同等の医療保険、住宅費用、交通費などの待遇を受ける。

## 第十九条

各級政府機関、団体や企業は大規模な会合にモンゴル語と漢語の二種類の言語と文字を使う。小規模の会議には参加する人々の構成に応じてモンゴル語と漢語の二種類の言語と文字を使う。

## 第二十条

各級司法機関は司法活動において、各民族のモンゴル語文字を使う権限を保障する。

## 第二十一条

各級投書機関はモンゴル語文字を使用する市民の来信来訪をモンゴル語と文字を用いて処理する。

## 第二十二条

- 1 当自治区行政区域内の社会における表面文字にモンゴル文字と漢字の二種類の文字を併用する。
- 2 社会における表示文字に関する管理方法を自治区政府が規定する。

## 第二十三条

公共サービスや業務を行う事業所はモンゴル語文字を使用する公民に対してモンゴル語文字を使う。

## 第二十四条

各級政府機関、団体や企業はモンゴル語と漢語を兼用できる職員を配置する。

## 第二十五条

各級政府機関、団体や企業は公務員採用、転職、職員招聘、専門技術者の職位進級などのための試験にはモンゴル語の試験問題を提供する。受験者はモンゴル語による面接や試験を受けることができる。同じ条件のもとにおいてモンゴル語と漢語の二言語兼用者を優先的に配慮する。

## 第二十六条

ラジオ、テレビ、映画業界はモンゴル語で運営できる職員により構成し、モンゴル語を豊富に用いた放送内容をつくり、放送時間と回数を増やす。

## 第二十七条

- 1 各級政府機関はモンゴル語の教材、読本、音楽資料や映像資料製作、新聞雑誌の印刷配布、ホームページ作成などの運営を補助する。
- 2 各級政府機関は多くの配布ルートを策定し、提供と販売を行う業者にはモンゴル語の図書雑誌の販売を奨励する。個人や公共のモンゴル語書物を扱う書店の経営を提案すると同時に政府から補助する。
- 3 各級の書店にモンゴル語の図書を配布し、専用のコーナーをつくる。

## 第二八条

各級政府機関はモンゴル語のラジオ、テレビ、映画、新聞雑誌、図書印刷、ホームページなどの投資金や補助金を毎年増やす。

## 第二九条

モンゴル族が集居する地域における文化センター、図書室にモンゴル語の図書、新聞、雑誌を配布し、モンゴル映画作品の観賞を行う。

## 第四章 科学研究と規範、標準化

### 第三〇条

モンゴル語文字の科学的研究には基礎理論と応用理論を同時に展開し、モンゴル語文字の学習使用と発展を促進する。

### 第三一条

- 1 各級政府機関はモンゴル語文字の科学的研究における指導を強化し、中心的研究プロジェクトの統括的配置と管理を行う。さらにそれを当自治区の科学研究計画枠に加え経費を出す。
- 2 モンゴル語文字の学術研究機関や高級学校はモンゴル語文字を学術的研究を行う人員を計画的に育成し、モンゴル語文使用研究棟を拡大させる。

### 第三二条

- 1 当自治区政府のモンゴル語文使用機構はモンゴル語文字の規格化、標準化、情報伝達を強化する。

当自治区政府のモンゴル語文字使用機構はモンゴル語の水準試験を設け、モンゴル語関係の職員に対してモンゴル語標準語の研修と試験を実施する。

### 第三三条

各級政府機関はモンゴル語文字に関する文化遺産の保護、モンゴル語の古書の保護、収集、整理、出版をする。

### 第三四条

各級政府機関はモンゴル語文使用における地域間交流、国際交流を促進する。

## 第五章 法的責任

### 第三十五条

当条例の第十六条に違反した関係機関は責任を負い、関係管理者らに法律に基づき処罰を下す。

### 第三十六条

当条例の二十二条の第一規定に違反した場合、旗や県級以上の政府機関のモンゴル語文字使用に関連する機構に警告し、定期的には正を行う。定めた期限内に改正できない場合、300 人民元以上 2,000 人民元以下の罰金を科す。

### 第三十七条

当条例の他の項目に違反した場合、上級政府機関から勧告し、改正がないものに対して必ず処置を施す。

### 第三十八条

政府機関の職務の執行に当たりモンゴル語文字の使用を怠った、あるいは、人々のモンゴル語文字の使用を妨げ、不慮の結果を招いた場合、関係機関は法律に基づき行政処分を受ける。

### 第三十九条

旗や県級以上の政府機関では、モンゴル語文字使用機関の職員監督責務を法律に則らず、あるいは不法活動の検査を怠った場合、関係機関は責任を負い、関係する人員に法律に基づき罰則を下す。

## 第六章 附則

第四十条 当条例は 2005 年 5 月 1 日から施行する。

## 資料 5 : 甲式「モンゴル語科学習指導要領」

### 一 総目標 :

1. モンゴル語の常用4,000の語及びそれらの文法的変化を標準語で正確に読み、なめらかに正しく書き、意味に合わせて的確に使える。
2. 色々な読解方法を用いて独力で本を読む能力を身につけ、適切な言語感覚を育成し、文章の内容を理解できる。文を読んで楽しむ能力を有する。
3. 日常生活や勉学に必要なとする語文の基礎知識や文章を書く基礎知識を身につける。ことばを正しく表現し、自分の意見を的確かつ明瞭に伝える。
4. 日常のコミュニケーションにおける基礎知識や協力しあう能力を有する。礼儀正しく、互いに意思伝達ができる。簡単な発表を聞いて理解し、皆の前で自分の考えを大胆かつ明確に表現できる。
5. モンゴル語の辞書を使える。また様々方法で情報を検索できる基本的な能力を有する。
6. モンゴル語文を学習する有効な方法を身につけ、図書や生活の中から自主的に学び、その知識を積極的に使える。
7. モンゴル語文の能力を上達させるとともに、母語を用いて考える能力を発展させ、想像力、潜在的思考力を発揮し、情報や認識について科学的に考える方法を身につける。
8. モンゴル語の豊かさを認識し、言語と文化への愛着や伝承への意欲へと発展させる。現在の文化生活を観察しその多様化を尊重し、人類の優れた文化を身につける意識を有する。
9. モンゴル語文の学習とともに、民族文化の育成、民族精神の育成、愛国心の育成、生きる認識、価値観などを徐々に修得し、初段階の言語文化の能力を有する。

### 二 各段階の目標

#### 1・2年次（第一段階）

##### 1) 書き方

1. モンゴル語文のチャガーン・トロガイを覚え、読み書きができる。
2. 母音字・子音字の性、語尾子音字を区別できる。
3. 母音字の語頭形、子音字の語頭中末形、語尾子音の語中末形、母音字子音字の原型を区別し、書ける。活字と手書き文字を区別できる。
4. 文字の節の構成を知り、文字を節に正しく分解できる。
5. 常用1,500から1,800語を正確に読み書きができる。また、性や語末が母音字か子音字かを区別できる。



6. チャガン・トロガイの書き方に沿って5本の線上に正確に書ける。
7. モンゴル文字の学習に関心を持つ。

## 2) 読解

1. 習ったテキストを正確に節読みし、二年前学期から語読みを身につける。
2. 読書に関心を持つ。挿絵入りの本を読み、語句の内容を理解する。また、読書の楽しさを知る。
3. 簡単な詩や物語を読み、背景や物語を想像し、自分のことばで表現できる。
4. 優れた詩を30編覚える。
5. 図書に関心や愛着を持つ。
6. 授業外で読んだ本の文字数が5万字以上である。

## 3) 表現

1. 文字を配列して文をつくることに関心を持つ。
2. 考えたこと、見聞きしたことを文字に書ける。
3. 絵を見て内容を書ける。
4. 表現したい意見や伝えたい内容の口調に合わせて句読点を使える。
5. 簡単な伝言や欠席届を書ける。

## 4) 会話交流

1. 他人の話を中心して聞き、大体的内容を理解できる。
2. 先生や他人の質問に明確に答えられる。
3. 日常の礼儀正しい表現を習い、学習や生活に中で使う習慣をもつ。
4. 口頭表現に自信を持ち、会話に積極的に参加し、物事について自分の意見を言える。
5. 他人から聞いた物語、テレビなどの内容や関心があった部分を指摘できる。
6. 短い物語の内容を暗唱できる。

## 5) 総括学習

1. 自然と社会、生活と学習に関わる様々な疑問について、関心を持って観察し、問題を提案し、皆で討論できる。
2. 自発的に社会活動に参加し、体験したことを発話や文章で表現できる。

## 3・4年次（第二段階）

### 1) ことばの学習

1. さらに1,000から1,200語を習い、常用2,500語を正確に読み書きし、使用できる。
2. 同形文字の意味と読み方や同音異義文字を区別し、対義語を答えられる。
3. 基本的な名詞、動詞を区別し、格助詞、人称所属語尾、名詞複数語尾を正確に使い、表記された文字を正確に読める。

- ことばの学習に関心があり、会話、図書などから語を集め、自分で辞書を引ける。
- 3年次前学期から3本線に文字を綺麗に書ける。4年次からモンゴル文字の習字、いわゆる書道などを選択し履修する。
- コンピューターにモンゴル文字入力ができる。

## 2) 読解

- 習った授業の内容を正確かつ感情を込めて声に出して読める。
- 黙読でき、分からないことについて質問できる。
- 新しい語句について文脈から推測しおおよその意味を理解できる。また、作者の意図や考えを表現する重要な語句を見つけられる。
- 読んだ文章の内容を把握し、作者の論旨を理解できる。
- 文章を読んで内容を説明出来る。文中で関心がある登場人物や豊かな慣用語表現を知り、さらに登場人物の運命、感情を推測し、感想を他人と分かち合える。
- 速読を身につけ、文章の概要を速やかに理解する。
- 優れた詩や散文を朗読し、50編憶える。
- 本や雑誌を読み、またそれを友人同士で交換して読む習慣を身につける。読書や生活の中から豊かな言語表現を資料として収集できる。
- 授業外で読んだ本の字数が40万字以上である。

## 3) 作文練習

- 物事を観察し、それを文章に書く習慣があること。
- 考えたこと、見聞きしことを自由に書ける。更に新鮮な、印象深い、感動したことを文章で表現できる。
- 自分で書いた作文を皆の前で読みあげて分かち合う。
- 簡単な通知、手紙、日記、読書感想文などを書ける。
- 表現の状況に応じて、句読点を使い、句読点の機能を知る。
- 作文を書く時は蓄積した語彙記録を有効に使う。
- 作文の下書きを自分で校正できる。
- 授業時間内での作文を書く練習が1年度に16回以上ある。

## 4) 会話

- 他人の話を集中して聞き、分からないことを質問し、異なる意見などについて話し合える。
- 他人の話の内容を理解し、その内容について簡潔に伝える。
- 見たこと、聞いたことを順序よくはっきりと発言し、自分の考えを分かりやすく伝える。
- 他人と礼儀正しく話す。
- 聞いた物語の内容を完全に把握し、説明できる。

## 5) 総括学習

1. 学習生活の中の問題点を提示し、事例を集めて議論しあえる。
2. 語文学習に関連して自然社会を観察し、感想を書面や口頭で表現できる。
3. 先生の指導のもとで様々なモンゴル語文の活動を行い、その中からモンゴル語文の基礎知識を身につける。
4. 学習した語文の知識を用いて、家庭生活、学校生活の中の簡単な問題について解決を図れる。

## 5・6年次（第三段階）

### 1) ことばの学習

1. さらに800から1,000語を習い、常用3,300字を正しく読み書きができ、使用できる。
2. 自主的に文字を修得する能力や習慣がある。
3. モンゴル語の熟語を150から200を身につけ、会話の中や作文の中で正確に使える。
4. 生活や資料から多義語、感情表現語があることを察知し、これらのことばを状況に応じて使える。
5. 万年筆で、2線の間綺麗に、なめらかに書ける。
6. コンピューターにすばやくモンゴル文字の入力ができる。

### 2) 読解

1. 短時間の準備で、作文を感情込めて読むことができる。
2. 文章を1分間で250から300字の速さで黙読し、文脈や生活の体験から新しい単語の意味を推測できる。
3. 読書する時に文章の内容、作者の意見、展開を把握できる。
4. 説明文の内容を把握できる。
5. 記述文を読むとき粗筋を理解し、記憶に残る場所、人物像や詳細な事柄について簡単に説明できる。羨望、嫌悪、尊敬、同情など自分の感想を表現できる。
6. 韻文を読んでおおよその内容を理解し、比喩表現から状況を想像して作者の意図を理解できる。
7. 速読により必要な情報を集める。
8. 詩などを読むときにリズムに合わせて感情を込めて読める。また、60篇を憶える。
9. 図書館、インターネットを利用し読む能力や読む範囲を広げる。授業外での読書は100万文字以上である。

### 3) 作文練習

1. 文章を書くことには、感情表現、意見交換する目的があることを知っておく。
2. 身の回りの物事を注意深く観察する習慣があり、意識的に多くのものを見たり、聞

いたり、その中で印象的な物事を記録し、作文の資料にできる。

3. 実際の出来事を記述文に書き、内容が正確で、事柄の順序が明確であること。
4. 証明書、感想、総括書を書ける。
5. 必要に応じて常用句読点を使える。
6. 下書きの作文を自分で推敲し、また他人とも交換して改善できる。その時に文の構成、内容が明確で、書いた文字が綺麗である。
7. 授業中に作文を書く練習を1学年で16回行う。また、40分間に300文字以上の速度で作文を書ける。

#### 4) 会話

1. 礼儀正しく交流する習慣をもつ。
2. 生活の中のいかなるテーマについても他人と対話ができ、必要な情報を得ることができる。
3. 簡単な発表を聞いて内容を把握し、その内容を他人に伝える。
4. 会話に積極的に参加し、自分の意見を言える。
5. 話す時に順序よく、一定のリズムがある。
6. 短時間の準備で簡単に意見をまとめることができる。

#### 5) 総括学習

1. 故郷の自然、動植物、生活用品の模型を集め、名称、場所、形、機能などを文字やことばで紹介できる。それを通じて自然生活への理解や愛着を得る。
2. 学習や生活の中での問題について、図書館、インターネットなどから情報を得て自分で整理できる。
3. ラジオ、新聞、テレビなどに流れる時事的な話題について、話を展開し、自分の意見を言える。
4. 校内や社会で小規模な活動を計画し、活動の計画、総括書を書ける。

## 資料6：乙式「モンゴル語科学習指導要領」

### 第二章 授業目標

#### 一 総目標：

1. モンゴル語を用いて聞く、話す、読む、書く基礎能力を身につけ、モンゴル民族の歴史、慣習に関する知識を得る。
2. モンゴル語の常用2,000から2,500語を身につけ、使用できる。更に文法的な変化を正しく修得し、意味を理解し、正確に使用できる。
3. 常用モンゴル語の辞書を使える。また、様々な方法で知識や情報を採集できる初歩的な能力がある。
4. 独力で本を読む能力を身につける。ある程度の言語感覚を身につけ、文章の内容や意味を理解できる。
5. モンゴル語を学習する方法を身につけ、図書や生活の経験から意欲的に学習し、それを積極的に使える。
6. 作文や記述文を書ける。ことばを正しく使い、自分の意見を簡潔に表現できる。
7. 生活の中でことばの交流ができる。礼儀正しく他人と自分の意見を分かちあえる。簡単な発表を聞いて理解できる。また、皆の前で自分の考えを明確に、順序よく文法に則って話せる。
8. 『モンゴル語文』に沿ったモンゴル語を用いて思考する。
9. モンゴル語・文化の豊かさを知り、言語と文化を伝承、繁栄させるために自信を持つ。人類文化の結晶を受け継ぐ意識がある。
10. モンゴル語文を学習するとともに、民族文化の育成、民族精神の育成、愛国心の育成、生きる認識、価値観などを徐々に身につける。

#### 二 各段階目標

##### 1・2年次（第一段階）

##### 1) ことばの知識

1. モンゴル語のチャガン・トルルガイの基本形を知る。
2. モンゴル語のチャガン・トルルガイの3つの変化を知る。
3. 常用200語を身につける。
4. モンゴル文字を5本の線上に書ける。

##### 2) 言語能力

##### 聞く：

1. 習った語句を聞いて理解できる。
2. 授業用語を聞いて理解できる。

**話す：**

1. 習った語句を正しく話す。
2. 授業で使う慣用語や日常の会話における礼儀正しい表現を習い、生活の中で使える。
3. 名前、年齢など簡単な自己紹介ができる。
4. 絵を見て簡単な語句を言える。
5. 3から4曲のモンゴル歌を憶える。

**読む：**

1. 文字の節の性を見分け正しく読む。
2. 習った文章を正確に節読みができる。
3. モンゴル語のチャガン・トルガイを覚える。
4. 常用の文字の節読みができる。

**書き：**

1. モンゴル文字のチャガン・トルガイの三種変化を聞いて書ける。
2. 語尾子音を使い分ける。
3. 習った文字を正確に写せ、聞いて書ける。
4. モンゴル文字を5本の線上に正確に書ける。
5. 文字を書く時の鉛筆の正確な持ち方、正確な座り方を身につける。

**3・4年次（第二段階）**

**1) ことばの知識**

1. 節の男性・女性・中性、語尾子音字を見分ける。
2. 文字を節に分ける。
3. ガリグ・ウスグを習う。
4. 子音字母音字を見分ける。
5. さらに常用300語を習う。
6. 句読点を習い、括弧を知る。
7. 常用辞書を引くことができる。
8. モンゴル文字を3本線に書ける。
9. モンゴル文字の活字を知る。

**2) 言語能力**

**聞く：**

1. 授業用語をさらに身につける。
2. 習った語句を語読みや会話の中から聞いて理解できる。

**話す：**

1. 習った語句を話しことばで表現できる。

2. 授業用語を話せる。
3. 見たこと、聞いたこと、考えたことの概略を話せる。
4. 他人の話を中心して聞き、分からないことを質問できる。
5. ことばを礼儀正しく話せる。
6. 更に3から4曲のモンゴル歌を憶える。

**読む：**

1. 教科書を独力で正確かつはっきりと節読みできると同時に語読みができる。
2. 教科書以外の文章の手書き文字、活字を黙読できる。
3. モンゴル語の辞書を引ける。
4. 図書や雑誌を読み始める。
5. 教科書の中の歌詩、熟語、謎々を憶えて読める。
6. 文章のアクセントを正しく読める。

**書く：**

1. 子音字母音字の3変化、性を見分けて書ける。
2. 見聞き、考えたことを簡単な語句に書ける。
3. コンピューターにモンゴル文字の入力ができる。

**5・6年次（第三段階）**

**1) ことばの知識**

1. 格助詞を習い、文字を並べて、文をつくれる。
2. 名詞複数助詞を習う。
3. 常用対義語、同義語を習う。
4. さらに常用400語を習う。
5. 文字を2本線の間を書ける。

**2) 言語能力**

**聞く：**

1. 生活の中の簡単な会話を聞いて理解できる。
2. 音声資料、ラジオ、テレビなどの簡単な会話を聞いて理解できる。
3. 挿絵付きの物語を聞いて理解できる。

**話す：**

1. 教科書のテキストの語句、段落ごとの内容を説明できる。
2. 短い物語を授業中に発表できる。
3. 生活の中のいかなる問題について簡単に話しあいができる。
4. 会話に積極的に参加し、自分の考えを発言する。
5. さらに2から3曲のモンゴル歌を歌える。

**読む：**

1. 教科書を正確に、流暢に読める。
2. 辞書を使って教材以外の簡単な作文を読み、大まかに理解できる。
3. 読んだ文章、新聞や雑誌を合計し100ページ、10万字を超える。

**書く：**

1. 習った文字を使って文をつくる。
2. 絵を見て文をつくれる。
3. 記憶する必要がある授業の覚書や語の読みを聞いて文字に正確に書ける。
4. 先生の指導のもとで習字を練習する。
5. コンピューターに速いテンポで文字入力できる。



## 資料 7：モンゴル民族の小中学校の『語文指導要領』と『モンゴル語文指導要領』公布通知

内モンゴル自治区教育庁公文：内教民字[2010]5号

各関連省・自治区の教育庁（教育委員）：

教育部の委託により内モンゴル自治区教育庁はモンゴル語文研究者、専門家、各級教育研究者、現任教員や教科書編集者らを組織する。それには、国家の公布した『語文指導要領』に提示した人材育成目標・任務・要求をもとに、モンゴル語文の教育を実状に合わせる。さらに、モンゴル語文協会の八つの省・自治区におけるモンゴル民族小中学校要の『語文指導要領』と『モンゴル語文指導要領』を審査し規定する。さらに、全国のモンゴル教科書査定委員の査定を経て、教育部からの権利を得た上で、公布することになった。

教材を編集する機関はこの二つの『指導要領』に基づき教材を作成すること。各地域の教育行政機関は、現在授業を担当しているモンゴル語文の教員たちの研修や学習を組織し広めること。モンゴル小中学校は教育段階において人材育成する各段階の目標と任務を全面的に実施し、教育や学習の質を高める必要がある。

各地域、各機関は実行段階におけるいかなる問題や提案であれ、ただちに当庁の民族教育所に連絡することを願う。

付録：

1. モンゴル民族の小中学校の『語文指導要領』と『モンゴル語文指導要領』。
2. 教育庁[2010]1号。

2010年5月12日

## 謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々にご指導とご支援を頂いた。心から感謝したい。特に、色々な視点から丁寧にご指導を下された指導教官の中川裕先生に心から御礼を申し上げたい。論文全体の構想から日本語の訂正、さらに様々な形で批判的コメントをいただき、知的に大きな刺激を得ることができた。本当にありがとうございました。また、ユーラシア言語文化論コースの吉田陸先生、田口久善先生、菅野憲司先生、周飛帆先生、児玉香菜子先生には感謝する。

現地調査の段階では、聞き取り調査に協力して下さった現地の長老者、定年退職した元教員や学校関係者、アンケート調査に協力して下さった学生の皆さんにお礼を言いたい。内モンゴル大学のタヤ教授とオルトナスト准教授、フフホト市のモンゴル民族学校の学長グルジェブ先生には数々の助言や情報を承り、深く感謝したい。

私は、タカセ奨学財団（2010年4月から2011年3月）、みずほ国際交流奨学財団（2011年4月から2013年3月）、ロータリー米山記念奨学会（2013年4月から2015年3月）の奨学金を受け、研究に専念することができた。本論文作成に大きな支援と原動力になり、関係の皆さんには心から深く御礼を申し上げたい。

さらに、千葉大学大学院人文社会科学科特別研究員の牧野悠さんには、2014年5月から7月の間、二ヶ月の時間をかけて論文全体にわたり校正していただき、数々のご貴重な意見やコメントをいただいた。お礼申し上げます。